
兄、妹、テンプレ転生。

あんぎゃーす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄、妹、テンプレ転生。

【コード】

N0609N

【作者名】

あんぎゃーす

【あらすじ】

トラックに轢かれて転生…そんなテンプレを経験するのは二人の兄妹！

兄は多くの世界を見るため！

妹は百合ハーレムを作るため！

チート能力を貰った二人が次元世界で暴れ回る…事はないかも？

はじめに（前書き）

新規読者様はお読みください

はじめに

はじめに

この小説は、私の友人、Kが執筆し、私がそれを投稿するという形式で出来ております。

また、作者であるKは素人であり、クオリティに期待は出来ません。

更に、Kも私自身も多忙の身であるため、更新速度は鈍亀です。

それでもよいという強者は、この先をご期待ください。

もうひとつ。

この作品はリイン氏の「とある兄妹の転生物語」に設定がかなり似ている部分があると感じられる方も多いためです。

しかしながら、執筆者のKはリイン氏の作品を読んだこともなく、盗作する気も全く持ってありません。

また、リーン氏の許可も頂いております。

あらためて、この場を借りてリーン氏に感謝を述べておきます。

はじめに(後書き)

よろしく願います

兄。妹。トラックと閻魔。（前書き）

プロローグです。

K「いやあ難しいねやっぱり書くのは」

三本書き溜めている奴が何を言う。

K「難しいものは難しいんだ！クオリティは糞だし…」

そう思うのなら上達するよう努力するんだな…

K「分かってるよ！」

それではプロローグをご覧ください。

兄。妹。トラックと閻魔。

最後に見たのは、二つの光りと迫り来る鉄の塊であった…

プロローグ

<Side兄>

さて、状況を整理してみよう。

自分の体を見る。

…学ラン、ズボン、靴下に靴。

取り合えず、来ていたものは全部ある。

しかし、財布や生徒手帳など、ポケットに入っていた物が根こそぎ見当たらない。

また、持っていた筈の鞆もない。

近くにあるのかと思い、周りを見渡してみ始めて気づく。

……ここはどこだ。

辺りをみても、光、光、光。

そこには現実感なんて物はかけらもなかった。

当然、鞆なんて何処にもない。

…待て、これは一体どういうことだ。

働かない頭を必死に動かして思い出す。

確か今日は少し早めに授業が終わって、教室を出たあと学年が三つ下の妹の元へ…

…ってそうだ妹！

慌てて見回してみると、右手に違和感。

そこには…

「むにゅ…zzz…」

片手で俺の学ランを掴みながら眠りこけている妹。

ガクツと肩が落ちる。

一気に力が抜けた。

…まあ取り合えず無事っぽいからいいか…

また思い出す事に集中する。

そのあとは妹と合流して一緒に帰り道について…

あ。

そこで思い出した。

自分達へ向かって来る巨大な鉄の塊。

鳴り響くクラクション。

…そうか、轢かれたか…

どうみても致命傷だ。

生きてるといふことはあるまい。

といふことは…

「ここは死後の世界…?」

自分でも信じられないし、若干クサイ。

だが、こう考えるのが一番矛盾がないと思う。

「う、うーん……」

ん？

「…ハツ…ここは何処？私は誰？」

どうやら妹が起きたらしい。

「大丈夫か、妹。」

「あれ？お兄ちゃん何でいるの？」

…どうやら寝ぼけているらしい。

取り合えず説明も兼ねてこいつを覚醒させよう…

青年説明中…

「と、いうわけだ……」

呆然としている妹。

そりゃそうだ。いきなりこんな事話されれば誰だって「嘘おーっ！
？」…耳が痛い。

「そんな、私死んじゃったのお！？まだお 僕も最後までプレイしてないし、お気に入り NETT 小説もまだまだ続きが気になるのに！」

…そうだった。妹はこういうやつだった。

妹は、所謂「オタク」、しかも「変態」で「百合好き」という、なんとというか駄目人間の塊であった。

この妹の行動原理はほとんど全てにおいてアニメやゲームなどが優先される。

その気になると飯さえ食べないほどだ。

…取り合えず騒いでいる妹が五月蠅い。

ゴツンッ！！！

「つつつ~~~~つつつ~~~~！！」

「ちよつと五月蠅い…。黙ってる」

「だつて〜っ！」

兄妹言争中…

「ハア…ハア…やめよう。これ以上は不毛だ…」

「う、うん…」

息を整えながら取り合えずこれからどうしたらいいのかを考えようとす。

と、その時、目の前がいきなり発光した。

「うっ…」

眩しさで目を開けていられない。

妹は大丈夫だろうか。手で光を避けながらちらりと妹を見る。

「目があゝ、目があああゝ！」

…ムスカごっこをしながら転がっている。大丈夫らしい。心配して損した。

やがて、光が収まる。

まだムスカごっこをやっている妹は放っておいて、手を退けてみる。

…土下座をしている幼女がそこにいた。

…えっと、どういう状況？

話し掛けますか？

はい
いいえ

…何この選択肢。

なんか頭のなかに浮かんできた。

いや話し掛けるだろう普通。

「あの一…」

「しめんなさい！」

…えっと

「あの一…」

「しめんなさい一…」

…どっしり。

「あの一…」

「しめんなさい一…」

…プチッ

ゴツンッ！

幼女悶絶中…

「取り合えず事情を話してもらえませんか？」

「はい…まず、私は閻魔様です。」

「…OK救急車を呼ぼう。」

「待ってください！取り合えず話を聞いてください！」

「…聞こう。」

「ふう…貴方達は、トラックに轢かれて死にました。これはわかりますか？」

「…ああ、やっぱり死んだのか…」

なんとなく分かってはいたが、あらためて聞くとなかなか来るものがある。

「それですね…えーと…」

歯切れが悪そうにモジモジする幼女。

「…どうした？」

「…ごめんなさい！私が殺しました！」

…何？

「…聞こう」

さっきと同じ台詞だったが、自分でも驚くほどに冷たかった。

「（ビクビク）えーとですね…元々貴方達は死ぬ予定ではなかったのですが、間違って閻魔帳にインクをこぼしてしまって…」

「その結果俺達は死んだと…」

「その通りです…」

「…それで？」

流石にこんな理不尽な殺され方をされて、何も無いでは済まされない。むしろ済まさない。

「（汗）そ、それで、尽きましては貴方達を別の世界に転生させようかと思って…」

「転生！？」

これは俺じゃない。妹だ。

「転生というと、あれ！？チート能力つけて原作ブレイク！？」

「えっと、それについて一人五つまでの願いを…」

「K t k r！ずっと私のターン！」

…妹がしゃべっているのは日本語か？

「そ、それで何処の世界に転生するの！？」

「えっと、確か「魔法少女リリカルなのは」でしたか？そんな名前
の世界です。」

「嘘っ！やったあ！」

魔法少女リリカルなのは…妹に無理矢理見せられたことがある。

一応覚えてはいるが…

「おい幼女。他の選択肢は無いのか？」

「私は閻魔です！それに他の選択肢は無いです…」

「転生しようお兄ちゃん！」

「はあ…」

正直言つて、面倒臭い。

面倒だが…

「畜生しようがねえ…」

「やったあ！じゃあ能力とかはアレとコレと…」

少女塾考中…

「出来た！じゃあ、こんな感じで出来る？」

「…ええ、コレなら可能ですね。それではいってらっしゃい…」

言った瞬間、足元に黒い穴が開く。

当然俺達は…

「うおおおおお！？」

「きゃああああ！」

黒い穴に飲み込まれて行った…

兄。妹。トラックと閻魔。(後書き)

いかがでしたか？

K「もつと頑張る！」

当たり前だ！何だコレ！

K「…コレからに期待？」

(溜息) まあいい…それでは、感想批評誤字報告その他諸々受け付けます。

K「いろいろ書いていただけると嬉しいです！」

それではまた次回にお会いしましょう。

兄。妹。兄の変化。（前書き）

さて、二三オマエに聞きたい事がある。

K「……」

だんまりか。いいだろう。後書きで追求するからな。

それでは第一話をどうぞ！

兄。妹。兄の変化。

第一話

<Side兄?>

「う…」

目を開ける。

太陽の光に驚き、慌てて目を閉じる。

体を起こして目を開けて見れば、そこはコンクリートの町並みであった。

舗装された道路。

行き交う車と大量の人。

コンビニやレストラン。

現代の日本の姿と変わりはない。

そして行き交う人々の話す言葉や、建ててある看板。

これらの情報を元にここは日本だと確定させる。

赤い太陽からして、今は夕暮れ時であろう。

ただ、ここが何処かはわからない。

「う、ううーん……」

どうやら妹が起きるようだ。

思いつつ声の方へと目を向ける。

……

「……誰だオマエ。」

「ふえっ！？酷いよお兄ちゃん！？」

いや、実際一瞬だれかわからなかった。

前世でも中々に美少女だった妹だが（自慢ではなく、客観的に）、
今や完璧に変わってしまったっている。

腰まで伸びた白髪……いや銀髪は無造作に広がり、日の光を反射して
赤く染まっている。

目は紫色で、顔立ちもこの世のものとは思えないほどに整っている。
体つきも15歳とは思えないほどに無駄がなく、抜群のプロポーシ
ョンである。

手足もすらりと伸び、完璧に美少女である。

まあ、妹に何を思うことも無いが。

「いや、かなり容姿が変わっていたからな……驚いた。」

「そつでしょ」

いや、驚いたなんてもんじゃない。
昨日（今日？）まで一緒に暮らしてた妹がいきなり外人の超美少女
になっているのだ。

普通は驚く。

「でも、お兄ちゃんも相当綺麗だよ？」

…ん？

「すまん、ちょっと耳がおかしいようだ。もう一回言ってくれない
か？」

「だから、お兄ちゃんも綺麗だよって」

こういうとき、勘が鋭いと嫌になる。

「綺麗」と言われる可能性がこれしか思い付かない。

外れていてほしいという自分がいる中、多分当たっているだろうな
と諦めている自分もいる。

そして恐る恐る目線を下げ…

「…」

見た。見てしまった。

そこにあったのは、

兄。妹。兄の変化。(後書き)

さて、先ずはこの短さについてだ。

K「これはしょうがないんだ！いいところで切ろうとしたらこの短さになっちゃったんだ！」

…そういうことにしておいてやろう。
では次だ。

リイーン氏の作品に随分と似ているようだが？

K「…それについては不可抗力としか言いようが無い。この場で改めて弁明するが、俺はリイーン氏の作品を見てないし、似ているというのもあんぎゃーすに聞いて初めて知ったんだ！」

…本人もこう言っているのでこれ以上の追求はしません。

それでは、感想批評誤字報告、それに加えて文句も受け付けています。

また、リイーン氏含め、お気に入り登録をしてくださった五人の方。この場を借りて感謝をのべます。
本当にありがとうございます。

あと、よければPV等が表示される場所を教えてください。

投稿に慣れてないもので…

それでは。

兄。妹。現状確認。（前書き）

第二話です。

K「…はい。短くてすいません。」

わかってるならもっと長くしろと…

K「いや、更新スピード遅くなるのいやだから、長さはこのくらいになると思う。」

…はあ、まあお前がそれでいいなら別にいいけどな…

K「というわけで、かなり短いですがご了承ください。」

それでは第二話です。

兄。妹。現状確認。

第二話

<Side兄>

性転換ショックから立ち直り、まずは自分の事を理解しない事には始まらないと気づく。

「で、だ、まずここはリリカルなのは世界なんだな？」

「うん、多分間違いないと思うけど…」

「よし、じゃあ次だ。能力を付けたとか言ったが、あれはなんだ？」

「うん、それはね…」

長くなったのでまとめるところなる。

・よくネットの二次創作小説には、チートのような能力をもらって転生することがよくあり、今回もその類の能力を閻魔様に言っけてもらった。

「…なるほど。じゃあ次だ。そのチート能力と言っるのは何を貰った？」

「えっと確かね…」

少女説明中…

「オマエ馬鹿だな」

「何をー!？」

「というかお前、最後のそれは…」

「勿論、私の計画のためにね!」

「一応聞くがその計画は…」

「リリなのヒロイン百合ハーレム計画!」

はあ、やっぱりダメだこいつは…

この妹は、「変態」で、「百合好き」で、「オタク」で、「腐女子」なのだ。

特にコイツは酷い類の人類である。

コイツの初恋は、「ポケットモンスタースペシャル」「イロー」だ。

初めて漫画のキャラに恋をして以来、オタクの道にドブプリとはま

り、

今では頭が何処かイカれているのではと思うほどである。

というか絶対イカれている。

「…まあいい、で俺にはどんなのを付けたんだよ…」

全く人に了解もとらずに勝手にやりやがって…

少女説明中…

「…成程、チートの意味がよくわかったよ…」

「でしょー!?!?」

「しかし…能力はわかったが、これからどうするんだ?」

「そんなの、勿論なのはちゃんやアリサちゃんに会って…」

「そういうことじゃない。俺が言っているのは、これからどうやって生活をしていくか、だ。」

「え」

固まる妹。

まさか…

「考えてなかったか…」

こいつはいつもこうだ。

基本的に単純で馬鹿なのだ。

真面目にしているときはとても真面目なのに…

「で、どうするんだ？言っておくが金なんて物はないぞ？」

「えっと…」

「戸籍も無いから、バイトも出来ないな。どうする？」

「ううー…」

妹、涙目。全く…

「はあ…しょうがない、そっちの方は何とか出来ると思うから、そっちはなんかやりたいことがあったらそっちに行つてこい…」

「何とかするって…どうやって？」

「さあ…」

まあ、なんとかなるだろう。能力を聞いた限りだが、多分…

「それより、なんかやりたいことは無いのか？」

「んー…」

十秒ほど悩んで、パツと顔を上げる。

「なのはちゃんに会いに行つて来る！今が大体何時ぐらいなのかの確認と！」

「確認と？…いや、言うな。そして涎を垂らすな。」

グへへ…とか聞こえてきそうなので、放置することにする。

「それじゃあ、そういう訳で私はロリなのはちゃんに会いに行つてきます！」

「んじゃあ何処かで待ち合わせだな。だがこの町の事は知らないし…」

「あ、それならいい方法があるよ！」

「あん？」

『ほら、こつこつこつこつ…』

突然、頭の中に直接声が響いてきた。

「何だこれは？」

『念話つていうの。お兄ちゃん知らない？』

「念話…ああ、そういうばアニメの中でそんなものがあつたかな…」

『そ、相手の頭に直接声を届かせる魔法だよ。これがあれば携帯いらず…』

「なるほど、それじゃあお前の用が終わつたら念話だったか？それ

で話し掛けてこい。」

「了解！待っててね口リなのはちゃん！」

今日の予定を決めた俺は、変な決意を口にする妹を見て、大きな溜息をつくのであった…

兄。妹。現状確認。(後書き)

今回はなんだ？

K「今後の行動方針を決めるための話。」

で、能力が一つも明かされていないのはなんで？

K「追い追い明かして行こうかなと。あ、でもここでいくつか発表するわ。」

兄と妹両方共用のチートスキル。

・能力値MAX

身体能力その他諸々の能力値がMAXになる。また、このなかには魔力や体力も含まれている。

・才能

魔法や武術の才能がMAXになる。

練習さえ詰めかさねれば物凄い戦闘力を発揮するようになるらしい…

K「とりあえずこの二つかな。」

ふむ。まあ有りがちだな。しかし、これで一人五つ中の二つずつを使ってしまった訳だが。

K「いや、ちょっと違うんだな。妹は、『一人五つずつ』ではなく、『二人で合計十個』にしたんだ。」

ほうほう。

K「で、その十個の願いのうち、兄と妹共通として一つで二人分の効果が得られた訳だ。」

せいいな。

K「うん、せいよ。」

それでは今回はこの辺で。

K「感想批評誤字報告等お待ちしています。」

それではまた次回。

妹。なのは。初めての邂逅。(前書き)

さて、遅くなった上に随分と文字数が多くなっているようだが？

K「だから、いいところで切ろうとすると(以下略)
それはもういい。」

えーそれでは第三話をご覧ください。

妹。なのは。始めての邂逅。

第三話

<Side 妹>

ふ、ふふふ、ふははははは！

ついに来たよ私の一人称のターン！

今が何時なのかは知らないけれど、ロリなのはちゃんに会えるはず！

なのはちゃんに会ったらその時は…うふふふふ…

ハッ！ダメだダメだ落ち着け私！幼女は汚すものじゃなく、愛でるもの！

一時の衝動に駆られて嫌われてしまっは元も子も無い！

そうよ、手を出すにはまだ時期尚早…

ゆっくりと時間をかけて自分のものに…グフフ…

(この妹は気づいていないが、今の顔はかなり邪悪で不気味な笑顔をしているため、周りの人間が気味悪がって近づいておらず、さながらモーゼの奇跡のようであった。)

さて、とらぬ狸の皮算用はここまでにして、本当にどこにいるんだろっ？

選択肢1、翠屋

あれ？字はこれであってたっけ？

とにかく、今は夕暮れ時だから今は家に帰っていてもおかしくない時間帯だから、翠屋にいてもおかしくないはず。

選択肢2、海鳴臨海公園

なのはちゃんが五歳とかだったらこっちな…。

他の二次創作でも、公園で泣いてるなのはちゃんに話し掛けて関係を得るのはよくある話だし…

うーん…やっぱり公園かなあ…

さつき時計を見たけど夕飯にはまだ結構早い時間だし、もしいなかったら翠屋に直行して、あの（二次創作で）有名なシュークリームを食べる！

これだ！私って天才かも！（そんなことはない）

少女移動中…

「うえ…ヒック…うう…」

いました。なのはちゃん五歳！

これで確定。今は原作四年前で、土郎さんが入院していて、なのはちゃんが泣いている！

よし、正確な時期もわかったところで、いざ…

「大丈夫？」

「ふえ？」

…うつ、お〜！

これが生のなのはちゃん！

ちっちゃくて可愛い〜！

泣いてたからか赤らんでいる頬が涙で濡れていて色っぽい…！

やばい、変な気分…

「お姉ちゃん…だれ？」

首を傾げる＋涙目＋上目遣い＝最強コンボ！

やめて！私のライフはもうゼロよ！

…そんなことはおくびにもださず、笑顔で話を続ける。

「私？私は、ルチア。ルチア・L・クラリーベルって言うの。貴女は？」

「…私、なのは。高町なのはなの。」

うんうん、やっぱりリリなのでは名前を名乗るのは常識よね…

「そっか、なのはちゃんか。今日はどうしたの？もう夕方だから、お父さんやお母さんがきつと心配してるよ？」

しゃがんで目の高さを同じにする。

小さな子供は上から見下ろされると怖いんだよね。

威圧感が与えられるって言うのかな？

「ヒック…お、お父さんが怪我して、入院しちゃって、それで、お母さんもお姉ちゃんも忙しくて、お兄ちゃんは怖くて…」

…知識で知ってたとは言え、あらためて聞くと辛いものがあるな…

土郎さんは何も悪くないけど、残りの家族の皆さんには一回言っ
てやらないと、特に恭也！

「そうだったの。なのはちゃんは強いね…」

「そうなの。なのはは一人で平気なの…」

「そっか、でもなのはちゃんが平気でも、お母さん達はきつと心配
してるよ？」

「大丈夫！お姉ちゃんも一緒に帰ってあげるから！」

「本当！？」

「勿論！」

「それじゃあお家に帰るの！」

「うん、それじゃあレッツゴー！」

少女と幼女移動中…

「ついたの！」

到着、翠屋！よし、場所は覚えたぞ！今度食べに来よう…

「ただいま〜！」

「なのは！？どこに行ったの？心配したのよ？」

若っ！？えっ、ちよっ、これで三児の母とかがありえないでしょ！

…少々取り乱したが、紹介しよう。

高町桃子さん。

高町家の母にして、最強かもしれないお人。

そして、若い。

本当に幾つなんだろうかこの人は。
普通に女子高生で通るんじゃないだろうか。

「ごめんなさいなの…」

「あんまり心配かけないでね…」

しゃがみながら頭を撫でてあげてる桃子さん。
いいないいな！

「なのは、そちらの方は？」

「ルチアお姉ちゃんなの！」

「初めまして。ルチア・L・クラリーベルといいます。公園で偶然なのはちゃんと出会いました…」

「そうでしたか、娘をありがとうございます…」

「それじゃあ私はそろそろお暇しますね？」

「ルチアお姉ちゃん帰っちゃうの…？」

グハッ！またも涙目上目遣い！なのはちゃん…恐ろしい子…！
なんか…ふつふつと罪悪感が…

「大丈夫よ、言ってなかったけど、私今日から海鳴に住むことにな
ってるの。また翠屋に来るから、ね？」

「うん…」

「あと、そういえばお父さんが入院していたよね？明日にでも見舞いに行つてあげて？愛する娘の顔も見れないと、お父さんも悲しむだろうし…」

「…うん！」

「それじゃあまた今度ね？」

「バイバーイ！」

手を振りながら店を出る。

「…可愛い。可愛いなあもうなのはちゃんは！」

頬を赤らめながらクネクネしている謎の外国人。

まあ普通なら関わりたくは無いだろう。

「それはさておき、次は土郎さんの足を治して…」

いきなり普通の顔に戻った妹は、一路海鳴り総合病院へと足を向けるのであった…

少女移動中…

「ついたっ!」

なにかデジャブを感じるが、多分気のせいであろう。

「さて、どうやって入ろうか…」

ここで思案する。

入口はもう開いてないし、窓から忍び込もうとするのも見つかったらアウトだし…

ていうか、こんな時こそ魔法じゃん!

えっと、透明になれる魔法は…

少女思案中…

…よし、これだ!

「術式、ミラージュハイド。起動!」

念のため、病院の窓ガラスで透明になっているかどうかを確かめる。

写ってない。

よし、うまく出来たみたい。

士郎さんの病室に忍び込む前に説明タイム！

今は、閻魔様に貰ったチート能力の一つ、「魔道ノ心得」！

これは、全ての魔法を使うことが出来、尚且つ魔法に関する能力値がMAX（魔力変換効率や魔法資質など）になるという一粒で二度おいしい優れ物のチートスキルなのだ！

今はその魔法の知識の中から透明になれる魔法を使ったというわけ。

といつつ只今士郎さんの病室の前に来ております！

それではお邪魔します…

…寝てますね。

それにしてもお似合いの夫婦だよねえ高町夫妻は…若々しくて…

っと、こんな事考えてる場合じゃなくて。

えっと、足の骨が折れてるんだっけ？

だったら、『治癒』っと。

…くつついてるね？良かったあ…

これでくつついてなかったらどうしようかと思ってたよ…

「う…」

「あれ？」

起きたー！！

「君は…？」

「えーっと…通りすがりの魔法使いさんです？」

「…その通りすがりの魔法使いさんが、僕に何か用かな？僕の命でも取りに来たかい？」

…はい！？

え、なしてそうなる！？

…あ、そういえば殺し屋とかそのような設定があったような無かったような…

…つまりアレ？

私、ヒットマンとか殺し屋とか、そんな人に間違われてる？

「いやいやいやいや、違うから！私ただの一般人だから！…ここに来たのは、貴方のその足を治すためです。…まあもう終わりましたけど。」

「え？…ッ！？」

気づいたららしい。

「足が…君が、これを？」

「通りすがりの魔法使いだと、そう言いましたよ？」

「…礼を言わなければならぬ…」

「いえいえ、礼なんてものはいりませんよ。ただ…」
「ただ？」

「貴方が入院したことで、奥様やお子さん方が色々と不安定になってしましてね？特に恭也君となのはちゃんかね…？明日、なのはちやんたちがお見舞いに来ますから、そこでいつもと変わらない元気な姿を見せてあげてください。ついでに少しばかりお話を…ね？」

勿論 O H A N A S H I ですよ！？

「…そうか、恭也達が…」

「ええ、それでは私はこれで…」

「待ってくれ！…最後に、もう一度礼を言わせてもらおうよ。ありがとう…」

何も言わずに病室から出ていく私。ドアを閉める。

ハイドを唱え、周りから見えなくなる。

…やばい、私、もしかしくなくても目茶苦茶かつこよくなかった！？

2828が止まらないっ！

っと、お兄ちゃんに連絡しなきゃ…

『もしもし、お兄ちゃん？』

『…ん？ああ、これが念話か…どうした馬鹿妹？』

『ちょW馬鹿妹はやめてっばー！…とりあえず、やることは終わったから、連絡しようと思ってさ…』

『終わったか。こっちも終わったから、合流するぞ』

『終わったって…何が？』

『まあ…色々だな。それよか、とっとと来いよ？場所はアニメでフ
イトが使っていたマンションの目の前だ。』

『え、ちょ、それってどういう…』

…切れたし。

何がどうなってんのさー！？

妹。なのは。初めての邂逅。（後書き）

妹って変態度が足りなくなかないか？

K「それはまだなのはちゃん小さいからね。本格的なスタートは九歳からさ！」

九歳も十分幼女だと思うけどな？

K「……………」

それでは、感想批評文句誤字報告その他諸々受付中です。

K「次話もお楽しみに！」

兄。新能力。犯罪確定。（前書き）

第四話です。

K「それにしても、これは酷いな。」

わかっているならもう少し良い案を出せと。

K「俺の頭では無理だあー！」

真相は本編を見てください。

兄。新能力。犯罪確定。

第四話

<Side兄>

…さて、とりあえず妹と別れたが、まずはどうするか…

取り合えず当面の問題は、

- ・ 戸籍
- ・ 金
- ・ 住居

の三つか…

まず、住居は金があればなんとでもなる（はず）だが、戸籍はかなり問題だな…

そういえば、あの馬鹿は「まだ決めてない能力が二つあるから、好きに決めちゃって良いよ」とか言っていたな…

となると、後々にも役に立って、尚且つ現状を打開できる能力…

「くそっ、めんどくさい…」

大体、俺はこんなのどうでもいいのに、何でこんなに悩まなくちゃいけないんだ…

少女思案中…

あえて地の文に突っ込まないとして…こんな能力で良いんじゃないか？

という訳で…

『出てこい、閻魔』

妹がつけた能力で使い方はわかった。

念話で閻魔を呼び出すと、すぐに返事が帰ってくる。

『呼びましたか？』

『妹から聞いた。まだ後二つ能力付与を残しているらしいな』

『確かに残されていますね。』

『そのうち一つを、俺に付与させる能力として使う。』

『わかりました。どのような能力にしますか？』

『ああ、俺が望むのは…』

後々の事を考えると、これぐらいしか思い付かない。

『機械とその中の情報を操作する能力だ。』

『了解しました。能力<情報操作>を付与します。能力についての詳しい説明は？』

『頼む』

『はい、情報操作は、時間さえかければどんな情報でも変えることが出来ます。しかし、世の中を大きく動かしてしまうような情報操作には、それこそ十年二十年という時間が必要です。どの情報操作にどれくらい時間がかかるかは、その情報をいじる前にわかります。』

『…自分で考えておいて何だが、本当に反則的だな…わかった、有難う。』

そういつて念話を閉じようとする。

『…あの一！』

『…ん？』

まだ何かあるのだろうか？

『私が殺してしまった身でありながら、こんな事を言う権利はないのかも知れませんが…』

『…』

『頑張つて、ください。』

…こんな状態で、頑張れという言葉を使うのは、かなり辛いだろう。普通なら、叱責が怖くて何も言えない。

それでも言い切ったのだ。それだけでもかなりのものだ。

『…ああ、ここまで来たら、開き直って頑張ることにするよ。…切るぞ?』

『はい…ッ…』

そういつて念話を閉じる。

…案外、良いやつなのかもしれないな、あいつは。

少女移動中…

…突っ込まねえ。絶対に突っ込んでなんかやらねえ…

ともかく、俺が今貰った能力で何をするか。

それは…

宝くじの当たり番号を操作し、自分の引いたくじの番号を一等大当りにすること。

もう一つは、どこか適当な国のデータベースに入り込み、新たに俺と妹の戸籍を作り上げること。

たったこれだけである。

…自分で考えて言うのも何だが、一つ目についてはあまりにもせこい。そして汚い。

二つ目に関しては、おそらく普通に犯罪だろう…

まあ、こうでもしなければ、暮らしていく事すら出来ないのだから仕方ないと自分に言い聞かせる。

さて、そうと決まれば…

少女暗躍中…

一時間後。

戸籍を作り終え、くじの購入と情報操作をし終え、不動産屋でかなり安めの一軒家を買い、後は妹を待つのみとなった。

はあ、疲れた…

『もしもし、お兄ちゃん？』

『ん？…ああこれが念話か…どうした馬鹿妹？』

『ちょw馬鹿妹はやめてっつてば！…取り合えずやることは終わったから、連絡しようと思ってさ…』

『終わったか。こっちも終わったから、合流するぞ。』

『終わったって…何が？』

『まあ…色々だな。それよか、とつとと来いよ？場所はアニメでフイトが使っていたマンションの目の前だ。』

『え、ちょ、それってどういう…』

一方的に念話を切る。

ああ…疲れた。

兄。新能力。犯罪確定。（後書き）

どうでしたか？酷かったでしょう？

K「うう…」

能力はあるものへの布石です。

…まあ丸わかりですがw

K「前書きでも言ったとおり、俺にはこれ以上のアイデアが出ない！」

という訳で、「こうしてみたらどうだろう？」「みたいな意見を募集したいそうです。

感想批評文句誤字報告その他諸々も受付中です。

よければこいつに手を差し延べてやってください。

兄。妹。設定集？

あんぎゃーす（以下あ）「こんにちわ、この小説の代筆者をやらせてもらってるあんぎゃーすです。」

K「そしてこんにちわ。この小説の作者をやっています、Kと申します。」

ル「そしてそしてこんにちわ！この小説の主人公をやらせてもらっている、ルチア・L・クラリーベルです！」

あ「さて、突発的に始めたキャラ設定だな。」

K「うん。こつから先、凄いでいいけど後々役に立つかもしれない設定があるはずだからね？」

あ「なんだか偉く弱気だな？」

ル「自信持って書かないと、読者がつかないよ？」

K「いや、先の事はまだまだ全然何も書けていないから不安で…。」

ル「でも、大体の道筋は書けているんでしょ？」

あ「だったら、その道筋をなぞって書いていくだけだろう。何も心配する必要は無い。」

K「だったらいいな…まあ辛気臭いことを言っても仕方ないから、

まずは妹から設定を発表しようと思います！ではどうぞー！

ルチア・L・クラリーベル

性別 女

身長 無印開始時157？

体重 (焼け焦げた跡がある。)

スリーサイズ 正確な数字は書けないが、かなりのもの。

年齢 無印開始時15歳(しばらくは変化無し)

魔力光 輝くような銀色

魔導師ランク 測定不能

その他色々な設定

間違いで殺された兄妹の妹。

前世に未練タラタラであったが、リリなの世界に転生できると聞いて手の平を返す。

正直どうでもいいと思っていた兄と一緒に無事転生を果たす。

転生した後、女になっていた兄を見てびっくり。

以後、呼び名が変わる。(詳しくは本編が進んでからになります。)
しかし、二人の時だけは前と同じ「お兄ちゃん」。

オタク、変態、百合好き、というか自身が百合の気がある。

前述の通り百合の気がある事と、頭がイカレている（詳しくは第二話参照）ため、二次元のキャラに恋をすることがよくある。

特に好きな（嫁宣言しているキャラがいる）アニメ・ゲームは「リリカルなのは」「ネギま」「型月作品」「ポケットモンスターペシタル」「恋姫」その他諸々。

転生するに当たって、見た目をかなり変えたが、元々の顔も悪くない。というか鼻屑目無しに美少女だった。また、普通に今も美少女である。

K「こんな感じで良いのかな？」

あ「まあいいんじゃないの。」

ル「そんなに変わった設定は無いようだけど？」

あ「どこがだ。普通はこんな主人公はいない。後もう一つ。」

K「何さ？」

あ「お前リイン氏の作品本当に読んだこと無いのか？正直言ってる限り似ているぞ？」

K「だから読んだことも無いし、読むつもりも無いってば！」

ル「取り合えず、お兄ちゃんの方の設定も見てみよう？そしたら何かわかるかもだし。」

あ「（舌打ち）ほら、早くしろ。」

K「舌打ちとか止めて!…そ、それでは兄の設定をどうぞ!」

リリアーナ・N・クラリーベル

性別 女

身長 無印開始時172?

体重 54kg

スリーサイズ BQBとだけは言っておく。

年齢 無印開始時18歳(しばらくは変化無し)

魔力光 赤混じりの黒(わかる方はBLEACHの一護を想像すればわかりやすいはず)

魔導師ランク 測定不能

その他色々な設定

間違いで殺された兄妹の兄。

特に未練があった訳ではないが、妹に巻き込まれてリリカルなのは世界に入る。

転生後、女になっている自分を見てびっくり。

凹んだのち、割り切る。

大の旅行好き。

長期休みは当然として、日帰りや一泊でもすぐにどこかに出かけていく。

転生後、やる事が無いなどとぼやいていたが、妹からの一言により、次元世界を回りはじめる。(詳しくは次話より書きます。)

また、シューティングゲーム狂。

東 とか首領 とか普通にノーミスでクリアできる。

性格は一言で言えば、自分のやることはちゃんとやる面倒臭がり。

K「どづつ?」

あ「お前、これ適当だろつ。」

ル「これは酷いwww」

K「違うよ!そのうち活きる設定なの!」

あ「いや、だって…旅行好きはまだしも、シューティングゲーム狂とかどう考えたっていらんだろ…」

K「物凄く後に出てくるの!」

あ「というかこの設定集もどき、そのうちまたやるんだろ?」

ル「多分後付け設定を作る気満々だろうからやるだろつね…」

あ「そつちで曝せよこんなどづつでもいいもんは…」

K「どづつでもいいって言うなよ…」

ル「これで苦情が来たらどうするのさ？」

K「いや…多分大丈夫だと思う…多分…」

あ「だったらいいけどな。で、このあとの展開としてはどうなるんだ？」

K「うんと、あと二話ほど書いたら時間飛ばして原作入りかな？」

ル「あ、やっぱり時間は飛ばすんだ？」

K「うん。正直に白状しちゃうと、書くことがあまり無いんだよね？」

あ「まあ確かにそうだな。原作始まってない時の事は殆ど書かれてないからな…」

K「うん。読者の皆様も多分面白くないだろうし…」

ル「そうだねー…」

あ「なんでもいいが、とつとと書けよ？」

K「わかってるよ！それではそろそろ…」

あ「ああ。それでは、感想批評文句誤字報告その他諸々受付中です。

」

ル「それじゃあまた次回！」

兄。妹。新たな拠点。（前書き）

…オイ。

K「…後書きまでは勘弁してください。」

ちっ…しょうがない…

それでは第五話をどうぞ

兄。妹。新たな拠点。

第五話

<Side兄>

フェイトのマンションで落ち合った俺達は、つい先程購入した一軒家へと向かう。

ついでに、さっきまで何をやってたかを聞かれたので答えてやった。

「お兄ちゃん…それ犯罪だし…なんかセコい…」

「元はといえば何も考えていないお前の責任だろうが」

「っ」

全くこいつは…

<Side妹>

お兄ちゃんの悪行(?)を聞いて若干引いたのもつかの間、お兄ち

やんが買ったという一軒家に。

「へえー…結構いい家だね？」

「安かったがな」

でも、これは本当にいい家だ。

赤い屋根に、クリーム色の家の壁。

立派な庭…というよりはガーデンとか言った方がいいのかな…

「庭でいいだろ」

「心読めんの!？」

「声に出てた。」

あう、はずい…

ま、まあそれはともかく…

庭を見ながら（もう庭でいいや）お兄ちゃんについていく。

お兄ちゃんが鍵を開けたらそこは…

「おお…これが私の愛の巣…」

「くだらないこと言ってないで早く来い！」

いや、でも期待以上に中が綺麗でびっくりした。

埃も無いし、床もピカピカだし、家具とかもシンプルで落ち着いてるし…

…って、ちょっと待って。

「なんで一時間前買った家に家具があるの？」

「気にするな」

「いやでも」

「気にするな」

「だって「気にするな」…わかったよっ…」

大方、犯罪紛いの事でもしたんだらうな…と思いつつ。

「…これからどうしようかな…」

「…何がだ？」

「いやだって、今が原作の四年前じゃない？四年前は翠屋にいったり翠屋にいたりして過ごそうと思うんだけど、原作始まったらどうしようかなーと思ってさ。」

「それこそ四年あるんだからその間に考えれば済むことだろうが…むしろ俺がどうするかだよ…」

「え？何で？」

そういうと、お兄ちゃんは溜息を一つ。

…失礼な。

「お前はやりたいたいことがあるからいいだろうけどな、俺にはやりた
いことなんて無いんだよ。」

旅行するにしても、そこまで金に余裕がある訳でも無いしな…」

その言葉を聞いた瞬間、頭にパツと閃くものがあつた。

「旅行してくればいいじゃない！」

「…お前は人の話を聞いていたか？」

「違つてば！ここはリリなのの世界なんだよ？」

だからなんだ…とでもいいたげな顔。

「だから、本当の世界旅行に行つてきなよ！地球じゃなくて、別の
世界とか！」

「ああ…」

ようやく合点がいったようだ。

そう。私が提案したのは、旅行。

それもただの旅行ではなく、世界を…つまり、複数の次元世界を巡
る旅である。

「『魔導ノ心得』の中には次元転送魔法もあるからお金もかからないし、どう?」

お兄ちゃんは少し考えた後、こう言った。

「確かに盲点だったな…それに興味もあることだ…いってみるのも悪くないかもな…」

…よし! k t k r !

当然ながら、旅行には相当時間が必要となる。
世界を飛ぶのだから、尚更。

つまり…

(ハッハッハッハア! 我が世の春が来た!)

やりたい放題である!

四年間の間になのはちゃんに会って、いろいろ関係を持つとう!

そうと決まれば、フッフ…

<Sideモノログ(という名の作者)>

この三日後、兄は次元転送魔法で別の世界へと旅立って行った。

そして、そのことにほくそ笑んだ妹は、これ幸いとばかりに翠屋に通い詰めるのであった…

そして月日はあっという間に流れる。

ルチア・L・クラリーベルと高町なのはの邂逅から四年。

原作開始は、もうすぐそこまで迫っていた…

兄。妹。新たな拠点。（後書き）

で、だ。

先ず一つ目。遅い。

K「原作見直してました。」

次、オチがひどい。

K「あまり読者様を待たせるのもあれかと思ひまして。」

……次からちゃんと書けよ。

K「原作見直し終わったら直ぐに。」

それでは、感想批評文句誤字報告その他諸々受付中です。

K「ではまた次回！」

妹。なのは。原作介入。（前書き）

遅い！どれだけかかってるんだ！

K「…すみません。」

まあいい、それでは、この小説をお読みになる方。

・短い。

・おあずけ。

の要素を含みますので、文句その他は感想にお書きください。

妹。なのは。原作介入。

第六話

<Side妹>

ふ、ふふふ、フハハハハ！

なんか見たことある出だしだけど気にしない！

今私は最高にハイって奴だあ！

昨日の夜、ベッドに入って眠りにつこうとした時に聞こえた、ユノからの『力を貸して』という念話。

そう、いよいよ今日から原作開始なのだ！

これでハイにならなくて何時なる！

昨日の夜は深夜にもかかわらず小躍りしたね、うん。

…まあ、お兄ちゃんにうるさいって殴られたけど。

それはともかく、現在昼。

ちょうど学校でなのはちゃん達が将来の夢について語り合っている頃である。

…あのほっぺつねるのはちょっとやってみたいなあ…

いやいじめとかじゃなくて、可愛い的な意味で。

幻術かなんかで身体年齢下げて、なのはちゃん達と同じ学校に行けばよかったかな…

そしたらその中に混ざれたらどうに…

まあ、過ぎたことを後悔してもしょうがないし、入学したてのなのはちゃんの制服姿を見れたからいいけどね。

あの時は桃子さんとガッチリ手を組んだ。

だって可愛いんだもん！

ひらひらした制服を着てクルリと一回転したときとか…

もうね、鼻血を押さえるのに必死だったよ、うん。

わかりたくないけど、今なら恭矢の気持ちがよくわかる。

あんな可愛い妹を持ったら、そりゃシスコンにもなるわ。

ルチアさんが四年間の思い出（主になのは）を思い出しているの

できれば早くお待ちください。〜

かなり脱線していたようだ。ゴメン。

原作の事だったね。

今夕方だから…うええ!?

妄想だけで三時間以上潰したの!?私!?

ま、まあともかく、今多分ユーノを拾って動物病院へ持って行つて
る頃だろう。

ということとは、魔法少女になるのはちゃんを見れるまで後4〜5
時間ぐらいだろうか。

それにしても…うーんどうやって原作介入するべきか…

今まで完璧に忘れてた…

・偶然出くわした風に装う。

だめだ。これだと私が魔法を使えることがわからなくなる。

自分が魔法使いであることを知らせ、かつ協力的にするには…

そうだ、確かジュエルシードの思念体に襲われるんだったよね？

他のテンプレ物だと、世界の修正力とかなんとかで、なのはちゃんとかが危なくなつて助けるといふのがよくある…

よし、ピンチになつたなのはちゃんを助けて、そのあとにお話ししよう！

…「お話」だよ？「OHANASHI」じゃないよ？

あ、でもピンチにならなかつたらどうしよう…

そしたら…うーん…

…そつだ！ロストロギアの反応があつたから見に来たつて言えば…

やばい、私完璧過ぎる！

そつと決まれば…

4時間経過。

ひ、暇だー…

なのはちゃんの変身シーンをこの目に焼き付けようつと随分前から屋根の上で待機してるけど、正確な時間がわからないから暇だよ…

その時。

『…聞こえますか？僕の声が…聞こえますか？』

…キタ！

ユーノの念話！

ということとは…あと10分くらい…かな？

<Side三人称>

榎原動物病院前、夜も更けた遅い時間。

暗く静かな場所には不釣り合いな、小さな少女がいた。

高町なのはである。

ユーノからの（今はまだ知る由も無いが）広域念話によって、導かれたなのはは、病院の窓からいきなり出てきた異形に息を飲み、ついでジャンプしてきたフェレットを抱き留めた。

そこで告げられた、探し物の事。別世界の事。

そして、（これもまた、まだ知る由も無いが）これからの自分の人生を左右する、魔法のこと。

取り合えず、先の異形を止めることが先決と考えたなのは、「それ」を受け取った。

赤い宝石を。不屈の意志を。

<Side妹>

きた、来た来た来た！

なのはちゃんの初変身！

レイ八さんの声も聞こえた！

でも…これは納得が行かない。

変身シーン、光に包まれちゃって全く見えない！

すごい期待したのに！

ばあかあなああ！

シ、シヨックだ…

期待してたのにいいいい！

妹。なのは。原作介入。（後書き）

K「…言い訳しても？」

何だ。

K「活動報告にも書いたけど、原作を壊さずに書く方法が思い付かなかったんだ。それと、三人称の所はもうちよっと長くするのはずだったんだけど、これ以上待たせるのもあれだし…」

次からは？

K「もつと頑張る！」

という訳で、原作一話分をお送りしました。

原作二話分は次回投稿となります。

感想その他諸々受付中です。

それでは。

K「うう…戦闘って何だよ…」

妹。なのは。魔法との出会い。 (前書き)

何でこんな早いのか？今回。

K「原作見ながら書いてたから。今日暇だったし。」
それじゃ、第七話をどうぞ。

妹。なのは。魔法との出会い。

第七話

<Sideなのは>

「…成功だ…」

あのフェレットさんが言う。けど…

「ふえ？ふええ！？嘘！？…何なのこれ…？」

そのとき、なのはを包んでいたのは、困惑でした。

「—————！」

「ふえー！？」

思わず後ずさりしますが、あのよくわからないモノも近づいてきます。

そして、背中に感じる壁の感触。

「ふえ、ふええ？これ、何！？」

目でフェレットさんに視線を向けたそのとき。

「来ます！」

慌てて視線を前に戻す。

怪物が飛び上がり空中で向きを変え、そしてなのはの方に…えっ!?!?
反射的に手を前に突き出す。

『Protection』

機械の音が響き渡った瞬間、腕に衝撃。

バチバチと音が響く中、必死で堪えます。

そして衝撃と、なにかが壁にぶつかる音がいっぱい。

「え…ふええ…!?!?」

目を開けたらそこには、道路や壁にある沢山の穴と、倒れた電柱…

<Side妹>

ううん、流石レイ八さん。

固いシールドだなあ…

それにしても、どうしてここで私の視点なんだろう…??

やっぱり作者が(メタ発言はダメ!)

…ちっ。

まあいいや。多分今、封印についての説明なんかを受けている頃だろう。

…なのはちゃんが目を閉じた。

そこに猛スピードで迫る思念体。

なのはちゃんに攻撃を加えようとした瞬間、目を開き、杖を構える。

『Protection』

<Sideなのは>

防御の魔法で相手の攻撃が止まり、少し動きが止まる。

今っ！

「リリカル、マジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「…ジュエルシード、封印！」

『Sealing mode, set up』

レイジングハートから光の翼が生える。

そこから出た光が相手を包み…

「……………」

苦しみの声をあげる思念体。額に浮かぶ、XXIの文字。

『stand by ready』

「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル21!…:封印!」

『sealing』

レイジングハートから更に光の帯が伸び、思念体を串刺しにする。

すると、思念体が苦悶の声を上げて光り輝く。

「…あ」

全てが終わったあとそこに残っていたのは、

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

青い宝石が、レイジングハートの中に入る。

『No.21』

その声とともに服が戻り、レイジングハートも宝石から戻ってしま
う。

「あ、あれ…終わったの？」

無我夢中だったからか、実感が殆ど無い。

「はい。あなたのお陰で…ありがとうございます…」

その言葉と一緒に、ふらりと倒れてしまうフェレットさん。

「ちょ、ちよつと、大丈夫？ねえ！」

そこで気づく。

「も、もしかしたら…」

周りの惨状を見て思わず口に出す。

「私、ここにいと大変アレなのでは…」

フェレットさんを抱き上げ。

「と、取り合えずごめんなさい！」

その場から離れることにした。

場所は変わって、フェレットさんと初めて会った公園に。

息を切らせてベンチに座る。

「すみません。」

「あ、起こしちゃった…？ごめんね乱暴で…ケガ…痛くない？」

「ケガは平気です。もう、殆ど治っているから…」

プルプルと体を震わせ、包帯を取るフェレットさん。

「ホントだ…あのあとが殆ど消えてる…すごい…」

「助けてくれたお陰で、魔力を治療に回せました…」

「…よくわかんないけど、そうなんだ。ねえ、自己紹介していい？」

「あ、うん。」

「エヘン。私、高町なのは。小学校三年生。家族とか、仲良しの友達は、なのはって呼ぶよ？」

「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから…ユーノが名前です。」

「ユーノ君か…可愛い名前だね！」

そういつたら、悲しげに目を伏せるユーノ君。

「すみません。貴女を…」

「なのは、だよ。」

「…なのはさんを巻き込んでしまいました。」

「…あ、その…」

すぐさま笑顔になり言う。

「多分、私平気。そうだ、ユーノ君ケガしてるし、ここじゃ落ち着かないよね？取り合えず、私の家に行きましょ？あとの事は、それから。ね？」

そして公園を後にしようとしたとき。

「良い夜ね、なのはちゃん？誰と話してたの？」

聞き慣れた声が、聞こえてきました。

<Side妹>

うーむ、なのはちゃんがユーノに話し掛けるには何時話し掛ければ良いのかわからず、いつの間にか公園に。

こいつはマズイ。

すると、なのはちゃんがユーノを抱き上げて立った。

アレは帰るフラグ、やばい！とにかく話し掛けないと！

「良い夜ね、なのはちゃん？誰と話してたの？」

…露骨すぎたかな？

「ふえ！？ルチアさん！？」

こうなったら…

「ロストロギアの反応を見に来たら既に封印してあって、魔力反応を追ってみたらのなはちゃん。何の偶然かしらね？」

「え？ふえ！？もしかして、ルチアさんも…」

「そ。あなたと同じで、私も魔法使いなの。そのフェレット君は、スクライアかな？」

知ってるけどね！

「はい、ユーノ・スクライアです。あなたは…？」

「私は、ルチア。フリーの、魔導師。」

時報はもういやだあああ！

「まあ取り合えずなのはちゃん、知りたいことも聞きたいことも沢山あるだろうけど、もう遅いから土郎さん達心配したりしてないかしらっ。」

「へ？ああ〜〜〜！」

「…まあ、家まで送ってくわ。口裏合わせてね？」

高町家の引き戸を開けるとそこには、

「お帰り。」

「（ビクッ）お、お兄ちゃん…」

少し怖い顔の恭也さん。

「こんな時間に、どこにお出かけだ？」

「それについては、私からお話させてもらっわ。」

「ルチアさんか。」

「あら可愛い〜！」

なのはちゃんが後ろ手に隠してたユーノを目ざとく見つける。

「あら？何か元気ないね？」

「この子、たまたま散歩していたら見つけまして、もしかしてなのはちゃんかなと思って電話したの。ごめんなさいね、ご迷惑をおかけして。」

「何故なのはだと？」

「夕方見かけましたので。」

「うん、うん……」

「気持ちはわかるが、だからといって内緒でというのはいただけない。」

「うん……」

「まあまあ、いいじゃない。こうして無事に戻ってきてるんだし。それに、なのはいい子だからもうこんな事はしないもんね?」

「うん……その、お兄ちゃん?内緒で出かけて、その、心配かけてごめんなさい。」

「ん」

「はい、これで解決!」

「……それじゃ、夜も遅いですし、そろそろ私は御暇しますね?」

途中から空気だったな……わたし。

「あ、はい。それじゃ。」

「なのはちゃん。今度いっぱいお話しようね?」

しゃがんで頭を撫でながら言う。

「うん！」

「それでは。」

門を開け、高町家を出る。

中からは、「それにしても可愛いわねー」とか聞こえてくる。

…取り合えず、魔法を使えるのはちゃんと初邂逅はすんだから、次は…えっと、確か神社だっけ？

これは明日だけど…

うーん、これは介入する意味ないかな…

ということとは…

あれか、サッカー部のキャプテンだっけ？

その時になのはちゃんと色々話そうかな…

勿論、色々隠すけど。

よーし、頑張るぞー！

妹。なのは。魔法との出会い。（後書き）

殆どなのは視点じゃねえか。

しかも長い。

K「いや、練習ついでにね。」

今後もこれくらいの早さならいいのにな。

K「多分無理。TSUTAYAは高い！」

ああ。

ゲオなら旧作100円だしな。

K「でもゲオにはリリなの置いてない！」

まあそれはいいんだ。

で、次回は？

K「今回出番の無かったリリアーナとルチアの家の中での会話かな？」

また遅くなるんだろうな。

言わないで…

兄妹。自宅。兄の秘密。(前書き)

K「オリジナルな話です。」

やっと暗躍タグの出番か。

K「殆ど無いけどね」

それではどうぞ。

兄妹。自宅。兄の秘密。

第八話

<Side妹>

「たっだいまー！」

元気よく扉を開けて家にかかる。

「おうお帰り馬鹿妹。」

そんな私に声をかけたのは、私の自慢の兄。

まあ今はというか、これからは姉な訳だけど。

「馬鹿って言わないでっばー！」

「馬鹿には馬鹿で十分だ。腹減ってるだろ？」

そういえば、確かに。

夕飯とらずに家を出ていったから、何も食べてない。

「お腹？空いてるよう…。」

「カレー作ってあるから食べ。」

「本当!？」

「嘘言ってどうする。風呂先貰うぞ。」

いつも馬鹿だの阿保だのいうけど、基本的には優しい兄なのだ。

ついでに、親がいない期間が長かった為か、お兄ちゃんの家事スキルはかなりのもの。

勿論私も出来るが、お兄ちゃんは格が違うのだ。

特に料理は絶品の一言である。(多少の身内鼻屑はあるかもしれないが)

そんなことを考えている間にカレーを完食。

「お兄ちゃん、お風呂まだ？」

「そろそろ上がる!」

じゃあ、パジャマと下着を用意して…

<Side兄>

妹に風呂を代わり、そのまま自分の部屋に入る。

そこで自分を出迎えるのは、いろんな機械のパーツ、部品、残骸など。

管理外世界などに旅行に行った際、貰って来るのだ。

流星に地球とは比べものにならないぐらいの技術力の差があるため、かなり役立つ。

…色々と必要になることだしな。

まあともかく、折角の何にも縛られない人生、何もせずに終わるのはなんかダメかな…とおもい、なにかやろうと思ったんだが…

この世界は、当たり前だが前に住んでいた地球とはかなり違う。

となると、起きると分かってる事件…端的に言えば、「魔法少女リカルなのは」に介入するぐらいしかない。

…段々思考が妹によって来た。

開き直るのは、俺としてはよくあることだから良いけど。

思考の海から抜け出し、散らかっている部屋を片付けにかかる。

帰ってくる度に片付けないと、足の踏み場も無いのだ。

「お兄ちゃん上がったよー？」

おっと、部屋の中身を見られるのはまだマズイ。

「今行く！」

そう返し、部屋に鍵を閉めて妹の元へと向かう。

リビングについた途端、牛乳を飲み終えた妹が抱き着いてきた。

「えへへ、今日お兄ちゃんと一緒に寝る！」

こいつは年齢に反して子供っぽいところがある。

俺が旅行から帰ってきたときはいつもこうやって寝に来るのだ。

まあ、妹に何を思うことも無いが。

<Side三人称>

兄と妹が寝静まり、この家に静寂が訪れる。

鍵のかかった兄の部屋。

やはり雑多に物が散らばっているその部屋で、厳重に魔力封印をさ
れている箱がある。

透明なガラスケースのような少し大きな箱の中には…

青い宝石が21個、規則正しく浮いていた。

兄妹。自宅。兄の秘密。（後書き）

伏線を貼るのは良いが、ちゃんと回収しろよ？

K「分かってるよ！」

それではいつもの通り、感想その他諸々受付中です。

K「それでは次回もお楽しみに！」

番外。管理外世界。とある噂。(前書き)

番外編です。

K「今のタイミングで出すのはあれですが、伏線として心の隅に留めていてください。」

お粗末ですけどね。

K「そういう事言わないの!」

番外。管理外世界。とある噂。

番外

「なあなあ、知ってるか？」

「何だ唐突に？」

「この町から北の遠くに、何とかって森があるだろ？」

「ああ、絶対に入っちゃいけないって森か。」

「詳しい名前は忘れたが、そんな感じの奴だ。でな？その森の近くの村で、森の中から物凄い咆哮を聞いたって言う噂が流れてんだ。」

「なんだそりゃ？胡散臭いな。」

「だけど、これが中々信憑性があるんだよ。回数や、聞いた人数がかなりいるんだ。」

「ふーん…」

「それともう一つ！」

「まだあんのか…」

「その声が聞こえる前に、確実に次元空間に通じる穴が開くんだ。」

「次元空間？管理局か？」

「いや、どうやら違うらしいんだ。それで、俺の考えた仮説はこうだ。聞きたいか？」

「言いたいんだっただら言えばいいだろうがめんどくせえ……」

「じゃあ言うぞ？……この世界に住んでいるのかは知らないが、次元空間内で自由に活動できる巨大な生物がいて、よくこの世界に休息をしにくる！どうよこの仮説！」

「まず次元空間内で生物が生息できる訳ねえだろうが。何とち狂ってんだおまえ。」

「いやいや、わかんないよ？まだ人類が発見したことない生物かも知れんし？」

「バカバカしい……」

「言ったな！？よし、俺の仮説がもし合ったら、お前なんか俺に奢れ！」

「間違ってたら？」

「俺がなんか奢ってやるよ！」

「まあ、真相が明らかになるのを待つんだな。」

「当たり前だ！絶対に奢らせてやつからな！」

第九十八管理外世界「スレイク」内のある町にて

備考

この三日後、この世界にいた高魔力の生物が軒並み捕食されていることが発覚する。

捕食方法は、リンカーコアごと食べ、魔力が感じられなくなるとその場に捨て置く、というものだった為、何らかの生物が高魔力目当てに捕食した可能性が高い。

また、第九十六、九十九管理外世界でも同様の現象が起きた為、次元転移または、次元空間内を浮遊もしくは移動出来る可能性がある。近隣の次元空間内を航行する際は十分に注意されたし。

某時空管理局執務官の報告より抜粋

<Side??>

とりあえず何とか上手く行ったみたいだな…

後はタイミングを外さないように使わないと…

あれが時空管理局にばれたら中々まずいことになるし…

まあ、最悪俺の起こしたことだとばれなきゃいいんだけど。

兄。妹。翠屋。（前書き）

K「三話が見れない〜！」

というわけで、短い閑話的なものを投稿。

これの次の話が、原作三話に相当することになります。

K「せめて八月終わるまでには六話辺りまでは行きたいな…。」

まあ頑張ることだな。

何時にもまして短いのでおきをつけを。

ではございませぬ。

兄。妹。翠屋。

第九話

<Side兄>

これは、妹が原作介入を果たす三日前の事。

「は？」

「だから、一緒に翠屋に行こう？」

事の発端はこんな台詞だった。

要約すると、こう。

・翠屋に行った妹。

・その時、弾みで姉がいることを言ってしまう。

・あら、一度お会いしてみたいわ。by桃子さん

「という訳」

「ふざけんな！」

全くこいつは…！

「なのはちゃんも会いたいって言ってたよ?」

「知るか!」

何でこうやってめんどくさい事を次々と…

「そんなに会うのが嫌なの?」

「そういう訳じゃないが…」

「じゃあ何で?」

溜息を一つ。

「人前だと女として振る舞わなきゃならんだろうが…」

妹がずっこける。

「それだけ!?!」

「俺にとっては深刻なんだよ!」

忘れちゃならないことだが、俺は元男だ。

いくら割り切っているとは言え、さすがに抵抗はある。

「でも、もう高町家の人達と約束しちゃったし…」

「はあ!?!」

こいつは…ッ!?

…はあ、しょうがない。腹を括るしか無いか…

「…畜生、わかった、わかった行けばいいんだろ!？」

「やったあ、流石お兄ちゃん!」

くそっ…

<Side妹>

お兄ちゃんが翠屋に行くことになってから五日後。

二日前に念話が来たことを知っていて（主に私のせい）、つまり今日があの日だということもわかっていて、（アニメを見せたのも私）、お兄ちゃんは非常に不機嫌である。

基本面倒事には首を突っ込まないタイプなので尚更である。

（うう、、気まずいよう…）

その時、お兄ちゃんから念話が届く。

『おい、馬鹿妹。』

『馬鹿って言わないでっば！何！？』

『俺を紹介するときは姉として紹介しろよ？いつもみたいにお兄ちゃんとか言ったら殺すぞ？いやマジで』

『わかってるよ！大丈夫だって！』

『だいいが…』

そう言って念話が閉じる。

…というかお兄ちゃん、何気に私より力使いこなしてる気がするよ…

…何か合ったのかな？

旅行してるときとか…

…気のせいだよな、うん。

…それに、もう一つ。

最初のジュエルシードを見たとき、何か違和感？を感じたんだよな。

何だったんだろう？

「おい、妹」

確かに私はチート能力を貰ったが、正直言って殆どまだ使っていない為、能力には慣れていない。

だから確認することはできないけど、やっぱりあのジュエルシードは何か違う気がしたんだよね…

「おい、妹？」

まあ、アニメのものがどんな感じのものかわからないから、結局はただの勘でしかないんだけど。

まあ、取り合えず心に留めておくぐらいのことは」「おい！」

「はひえ！？」

急に声をかけられたもんだから、変な声を出しちゃった。は、はずい…

「いきなり何！？変な声出しちゃったじゃん！」

「お前が何度言っても返事しないからだ全く…」

「え、本当？ごめん…」

「はあ…そろそろつくぞ…」

「あ、本当だ…」

いつのまにかもう駅前である。

そんなに考えすぎてたかな？

「しっかりしろよな…連れ出したのはお前だろうに…」

「わかったって！…しつこいなあもつ！…」

…まあ、心に留めておいても損はない…よね？

兄。妹。翠屋。（後書き）

というわけで、ルチアが異変に気がつき始めました。

K「これからもうこういう違和感がバリバリ挟まって来るので、まさかこういう展開じゃあ……っていうのがあったらメッセージにてお送りください。」

まあ、まだわからないと思いますが。

K「わかったらおかしいよ!」

それではいつものごとく、感想その他諸々受付中です。

K「また次話に!」

兄。妹。翠屋にて。（前書き）

K「とりあえず、原作三話の前半をお送りします。
といつても、殆ど話は進んでませんが…」

明日中には後半も投稿しろよ？

K「まあ何とか頑張ってみるよ…」

ではどうぞ。

兄。妹。翠屋にて。

第九話

<Side 妹>

ここは翠屋の前。

店の中に入って、桃子さんに声をかける。

「桃子さんこんにちわ!」

「あら、ルチアちゃんいらっしやい!」

いきなりお兄ちゃんから念話。

『…若すぎないか?』

『突っ込んだら負けだよお兄ちゃん。突っ込んだじゃダメ。』

「あら、そちらが…」

「あ、はい。姉の…」

「(小さすぎる溜息)…リアーナ・L・クラリーベルです。妹がいつもお世話になってます。」

…え、誰!?

なんか、その辺の学校のマドンナとかよりも女性らしい仕草なんですけどっ!?

い、一体何があったの…

「あら、これは「丁寧」に…」

「そっだ、これお土産に持ってきたのですが…」

「あら、ありがとうございます これは…ケーキですか？」

いつの間にそんなもの作ってたのお兄ちゃん…

なんか袋持ってたと思ったたらそれだったのね…

「ええ、ケーキとは些か失礼な気もしたのですが、味の参考になればと…」

「後で皆と頂きます」

「あ、そっだ、なのはちゃんと土郎さんはどうされたんですか? なんかいいみたいですけど…」

空気になるのは避けたいので、質問してみる。

知ってるけどね!

「ああ、土郎さん達はサッカーの応援です。翠屋JFCの監督兼才

「ナーでして…」

言った瞬間、「私は不機嫌ですオーラ」が横からじわじわと滲み出て来る。

勝手に約束取り付けたのは確かに悪いけど…

でも、今日という日が合っちゃったのは私のせいじゃないと思うんだけど…

「入れ違いかあ…」

「まあ、多分そろそろ帰ってくると思うんですけど…」

「じゃあ、こちらで待っていることにします。注文をいいですか？」

何気なくテラス席の一つに腰を降ろしながら話すお兄ちゃん。

な、なんか気品とか優雅さとか…今度はそういった類のオーラが滲み出てるんだけど…

女のはずの私より女性らしい…

ほづけていると注文をとりはじめたため、慌てて席についてとりあえず紅茶を頼む。お兄ちゃんはコーヒーらしい。

注文をとりおえた桃子さんが去った所で、お兄ちゃんに訪ねる。

「…いったいどうしたの？」

「だから女性のふりをするって言ってただらうが…」

「だからといって…アレはその辺の女性よりもよっぽど女性らしく
ったよ？」

「言っな…」

…まあいいや。

どんなになっても、お兄ちゃんはお兄ちゃんだし！

<Side兄>

しばらく雑談していると、小学生の団体が翠屋に向かってきた。

ユニフォームからして、翠屋JFCだろう。

士郎さんいるし。

三人娘いるし。

「あ、なのはちゃん！」

…少しは静かにしろと。

「あ、ルチアさんこんにちわー！」

「なのは、あの人誰？」

「見たことない人だけ…」

「あ、紹介するね。こちら、結構前から翠屋の常連さんで、ルチアさん！」

「ルチア・L・クラリーベル！なのはちゃんから聞いてるわ。アリサちゃんにすずかちゃんね？よろしく！」

「あ、よろしくお願いします…」

「そちらの方は…？」

「リリアーヌ・L・クラリーベルです。一応この子の姉をやっているの。よろしくね？」

「日本語、お上手ですね〜！」

「そういつてもらえると嬉しいわ。よかったら一緒にどこかしら？」

「あ、ありがとうございます…！」

とまあ、こんな感じで同じテーブルへ。

雑談をしつつ、四人とも午後のティータイムを楽しんだようである。

俺？…疲れた。女のふりは精神的に辛い…

あと、途中でサッカー部キャプテンを確認したが、ちゃんとジュエールシードを持っていた。

まあ、こころへんは原作と相違無いな…

このまま原作通りにいつてくれればいいんだが…

まあ、なんとでもなるだろう。

兄。妹。翠屋にて。（後書き）

K「さて、後半の執筆を開始せねば……」

思ったけど翠屋JFCのキャプテンはクロノに似てる気がするのですがどうでしょう？

感想その他諸々受付中です。

ではまた次回。

K「何となくゼロ魔の小説書きたいな……」

Strikersまで書いてからにしろそんな妄言は。

妹。違和感。お話ししよう。(前書き)

という訳で九話です。

K「今回はルチアがついに……！な話です。」

ではどうぞ。

妹。違和感。お話しよつよ。

第十話

<Side妹>

ジュエルシードが発動した。

したのだが…

「うーん…？」

今、割と高いビルの上にあります。

わざわざ自分に透明化をかけて。

それと、ジュエルシードが発動した瞬間、海鳴市全体に封時結界が発動した。

たぶんお兄ちゃんだと思っただけど、なんか準備いいよね…

…話が逸れた。

前にジュエルシードに感じた違和感。

それと同じ類だけど、これは顕著だ。

…アニメと比べて、どうみても違いすぎる。

たしか、アニメでは結構町中を覆い尽くしていたサイズの筈。

しかし、こちらでは違つ。

確かに巨木だ。

しかし、少ない。

ぐるっと見渡しても、せいぜい四〜五本。

しかも範囲も狭い。

これは一体…

割とテンプレだけど、並行世界の影響って奴なのかな？

と思つてると、知っている魔力。

なのはちゃんの…エリアサーチかな？

とか思つてなのはちゃんの方へ視線を向けると、既にモードチェンジを終えていた。

キタ！

これぞ魔砲少女誕生の瞬間…！（誤字に非ず）

なのはちゃんに魔力が集まる。

そしてそれは…

一条の桃色の閃光となって巨木を貫き、その膨大な魔力を持って封印を施した。

いやー、すごいわ…

魔法始めて数日であんなもの、普通撃てないよねえ…

それだけ才能があったってことだよね、うん。

まあ、それでもまだ九歳。

ちゃんと教育していかないかね…クツクツクツ…

さて、なのはちゃんが変身を解いたし、そろそろ話し掛けるか…

<Side三人称>

自分のせいで街の人に迷惑がかかってしまったことに対して、かなりの責任感を感じているなのは。

ユーノが必死に慰めているが、あまり効果は無いようである。

失意のうちに帰路につこうとするなのはに声をかける者がいた。

「お疲れ様、なのはちゃん？」

ルチア・L・クラリーベルである。

なのはは慌ててごまかそうとするが、彼女も魔導師だとわかると、俯いてしまった。

「何か飲む？」

いつもと変わらない態度で接してきたルチアに安心し、缶ジュースをおごってもらう。

そして、少しずつ吐露しはじめた。

ユーノとの出会い。

初めてのジュエルシードの封印。

ユーノから聞かされた、魔法の事。ジュエルシードの事。

そして今日やってしまった、初めての失敗。

自責の念にかられる彼女を見て、黙って話を聞いていたルチアが、口を開いた。

「大丈夫よ、なのはちゃん。」

人間、生きていれば何回も失敗するわ。そのうち一回が、今日に來ただけ。

それに今大事なのは、失敗したことを公開することじゃ無いよ。大事なのは、今回した反省を次に活かして、こんな失敗を無くすこと。

ね？」

でも、と続けようとするのはの言葉を切って、ルチアはなのはの額に口づけた。

とたんに顔を茹蟯のように赤くするのはに、ルチアは言った。

「いつまでも暗いままなんて、なのはちゃんらしくないよ？ そんな顔じゃ、また土郎さん達を心配させちゃうから、ね？ さ、お家へ帰ろう？」

笑顔で言うルチアに、なのはは赤面しながらも小さく頷いた。

それを見たルチアは、心の中で快哉をあげたのであった…

妹。違和感。お話ししようよ。(後書き)

K「兄妹の能力を一つ公開します。」

・魔性の口づけ

「相思相愛になりたい」と心の中で願いながら顔のどこかに口づけを落とすことで、その人を惚れさせることが出来る。

K「ぶつちやけルチアの百合ハーレムのためですね。」

しかし、兄妹の能力なのか？

ルチアだけでもいいような気がするんだが。

K「その辺うっかりしていたらしくて、自分用の能力にするの忘れてたんだって。でも、あの兄ならばつに大丈夫かと思ってそのまんなんだってさ。」

あっそう。

それでは、感想その他諸々受付中です。

K「また次話でお会いしましょうー！」

少し更新が遅れそうです。

K「TSUTAYAって高いよう…」

兄。妹。叱責。(前書き)

K「なんか後味悪いので、一気に投稿。」

今回おふざけはありませんので、「シリアスなんて嫌いだけ!」という方はスルーを。

K「ではどうぞ!」

兄。妹。叱責。

第十・五話

<Side兄>

妹が帰ってきた。

それも妙に上機嫌に。

こいつ、まさかとは思うが…

「おかえり。随分機嫌が良さそうだが、何かあったか？」

「ただいま！んっふっふっ、あのあとなのはちゃんと会って、色々話をしたの！んで、おまじないって言って、なのはちゃんのおでこにキスしちゃったの！」

キヤー！とか声をあげて、体をくねらせる妹。

…腹がたった。

これまでにないほどに、こいつに対して腹がたった。

こいつは、他人の気持ちを、自分の都合で作り替えたのだ！

許せん。兄として、血縁として、そして一人の人間として！

一つ言っておかないとイケナイナ…

<Side妹>

訳がわからなかった。

私は、家に帰って今日の報告をして、なのはちゃんと話したことをお兄ちゃんにも聞かせてあげていたはず。

なのに、なんで、

私は殴られて壁にぶつかってるんだろう？

「…お前は、最低の事をした。」

聞いたことの無いお兄ちゃんの声。

冷たく、暗い、咎める声。

「お、兄ちゃん…なん、で…?」

頭が混乱する。

わからない、ワカラナイ。

「わからないのか？」

それだけで、背筋が冷える。

体が強張る。

「お前は、やっちゃいけないことをしたんだ。」

わからない、ワカラナイ。

頭が熱い。

息ができない。

そこで、なぜか一カ所だけ冷静な頭が、コレが何かを私に教える。

殺気だ。

元は平凡な中学生な私。殺気なんて受けたことはないけれど、それでも直感する。

殺サレル！

そう思った瞬間、すっと殺気が途切れた。

大きく口を開けて、酸素を肺に取り込む。

頭がぼーっとする。

思考が纏まらない。

「なん、で…」

口に出せたのはそれだけ。

「わからないか…」

そういうと、お兄ちゃんは溜息をつきながら両手をあげた。

反射的に目をつぶる。

次に感じたのは、全身を包む暖かさだった。

「…え？」

もうわけがわからない。

「何で俺がこんなにキレたかわかるか…？」

お兄ちゃんに抱きしめられているんだと理解する。

お兄ちゃんの怒った理由…？

「お前が一体何をしたか、よく思い出してみろ…」

私はただ、なのはちゃんと恋人になりたかっただけで…

それで、「魔性の口づけ」を使ってなのはちゃんを…

「そうだ。お前は高町なのはの、心を歪めたんだ。」

あ…っ!？

理解する。自分が何をやったかを。何をしてしまったのかを。

「他人の心を自分の思うままに操る…そんなもん、ただの洗脳だ。」

頭が一気に冷える。

ワタシハナニヲシタ？

「そんな、私は、ただ…ッ！」

「ああ、そうだな。お前は恋人になりたかったただけだ。…お前の言う恋人は、無理矢理心を捻曲げた、見せかけだけの物じゃ無いだろうっ？」

歯の根があわない。

涙が止まらない。

「わ、わた、し…ッ！」

「まあ、一回すっきりしろ。あとのことは、全部俺がやっておくから。」

そのあとは、もう酷いもんだった。

泣いて、泣いて、謝って、そしてまた泣いて。

ただただ、お兄ちゃんに縋った。

お兄ちゃんはその私の背中を、ずっと優しく撫でていた。

兄。妹。叱責。（後書き）

K「七ツ夜&夜ツ七さん、どうでしたか？」

まあ、お前の技量じゃこんなもんか。

K「うう、文が安定しない…」

それでは、感想その他諸々受付中です。

K「それでは！」

兄。妹の想い。(前書き)

K「徹夜して書き上げたため、かなり酷い。」

朝になってから書き直せばよかったのに…

K「まあ、いいと思っけど…」

ではどいんど。

兄。妹。妹の想い。

第十・七五話

<Side妹>

泣いた。それはもう泣き疲れるほどに泣いた。

あれだけ泣いたのは、昨日含めて二回だけだな…

15歳にもなつて恥ずかしい…

いや精神的には一応19なんだけど、身体的には成長してないし…

まあいいんだ。

そのあと、私はお兄ちゃんの腕の中で寝てしまったらしく、泣いた後の記憶が無い。

しかも、同じベッドで。

昨日の事もあつてか、赤面して動けない私にお兄ちゃんが言った。

「俺は自分のベッドに戻ろうとしたのに、お前が手を離さないから一緒に寝たんだよ」

それを聞いて、さらに赤面。

なんかもう恥ずかし過ぎて動けない。

それでも、どうにかこうにかお兄ちゃんなら手を離すと、苦笑しながら私の頭をくしゃりと撫でて、

「下行って飯作ってるからな」

と行って部屋から出ていった。

…しばらく赤面していた私だったが、どうにか平常心を取り戻す。

…自分自身の愛の形。

そんなものはもう、決まっている。

<Side兄>

朝食の用意をしながら、昨日の事を考える。

多分、アイツは答えを考えて来るだろう。

俺に出来るのはそれを認めることだけなんだがな。

どんな考えを持ってきても、俺はそれを認めるだろう。

考えて結果を出したなら、俺はもう何も言わない。

とか思っていると、妹がリビングに入ってくる。

ちょうど朝飯が出来上がったところだ。

いつもなら妹が話を振って来るはずの朝飯の食卓は、無言。

妹は、こちらをちらちらと見てから目を逸らすといつことを繰り返す。

俺から話を振ることは無いため、無言。

「しゅちそうさま」

朝食を食べ終わり、食器を片付ける。

自室に行こうとしたら、呼び止められる。

「待って！…ちょっと、いい…かな？」

ああ、と短く返し、対面へと座り向かい合う。

「あの、ち…」

「お前自身の愛の形とはなんだ？」

用件なんてわかりきっているので、直球。

妹、硬直。

「見つかったか？」

「…うん…」

これでも十何年と一緒に過ごしてきたのだ。

余計なことは口に出さなくてもわかる。

「私…やっぱりちゃんと恋人を目指すよ。じゃないとなのはちゃん達に失礼だもん…」

「だが、世間では女同士の恋愛は難しいぞ？」

「それでも…私は女同士の恋愛をして、みんな幸福にしてあげたい。」

皆を幸福っていうのも一応エゴなんだが…

まあ、いいか。

「お前がそういう考えなら、俺はもう口を出さない。自分から茨の道を選んだんだからな。」

「じゃあ…」

「自分の選んだ道を進めばいいさ。ただ、道を間違えたならば俺が全力で戻してやるが。」

「そ、それはちょっと勘弁…」

笑い合う。

和やかな雰囲気。

そのとき。

キィーーン…

ジュエルシード。

時間的に早いような気がするが、確か今日は月村家の猫だったか？

「私…行ってくる!」

「ああ、行ってらっしゃい。」

バタバタと家を飛び出していく妹。

…とりあえず一件落着。

あとは無事筋書通りに無印が終わればいいんだが…

兄。妹。妹の想い。(後書き)

K「敢えてここには何も書きません。」

それでは、感想その他諸々受付中です。

K「ではまた次回！」

妹。フェイト。プレシア。(前書き)

えー、大変ご迷惑をおかけしました。

修正しました。

妹。フェイト。プレシア。

第十一話

<Side 妹>

認識障害をかけ透明化をかけ、出来るかぎり早く月村邸に飛んでいく。

いつの間にかお兄ちゃんが張ったと思われる町全体を覆う封時結界。

ユーノが張るものだけでは不十分と判断したんだろう。

「あれ…?」

近くの電柱に乗っている人を発見。

あれってまさか…

「バルディッシュ、フォトンランサー」

『Photon lancer Full auto fire』

漆黒の鎌より放たれた金の閃光が、まっすぐに巨大猫へと向かっていく。

そう！

フェイト「テストロッサちゃん（九歳）！」

はー、やっぱり可愛い…！

九歳の癖にあのぴっちりした体の線が浮き出るような煽情的なあこのバリアジャケットは何なのかと小一時間ほど問い詰めたいね！

今はまだ無表情だけど、もし私にデレてくれたらその時は…

しばらくお待ちください…見せられないよ！

ふと気づくと、フェイトちゃんはいなかった。

「あれ？」

慌てて月村邸へ目を向けると、フェイトちゃんが猫のジュエルシードを封印していた。

「またやっちゃった…」

妄想で時間を潰すのはよくないのに…

それにしてもフェイトちゃんの封印派手だよねー…

まあ、フェイトちゃんの邪魔をする気は無いんだけど。

でも、プレシアだけは許さない！

フェイトちゃんをあんな目にあわせるなんて！

あの鬼ババア…

どうやって後悔させてやろうかな…！

まあ取り合えず、封印終わっちゃったし、なのはちゃんは気絶して
るし、帰ろ…

<Sideプレシア・テストロツサ>

あの人形を第九十七管理外世界へ送り込んでから一日。

さすがにまだ報告もジュエルシードも届いてはいないし、そんなに
早く来るはず無いと分かってはいるが、それでも苛立ちを抑え切れ
ない。

私は早く、あの子を生き返らせないといけないのに！

そして失った時間を取り戻さなければならぬのに！

ジュエルシードさえ集めれば、あんな人形に愛を注ぐことも無い…！

早く、はやく、ハヤク！

と。

「時の庭園」に張り巡らせた結界に反応。

「…侵入者？」

嗅ぎ付けてきた管理局か？

でも、邪魔はさせない。

このプレシア・テストロッサが十年待ったのよ…

あいつらのような分別の無い者に、私の大望を邪魔されてたまるか！

そうと決まれば、お客様には丁寧なおもてなしをしなければいけないわね…

146

<Side妹>

「あれ？鍵掛かってる…」

出掛けるのかな？

「おう、どうした馬鹿妹。」

「馬鹿って言わないでっば！買い物行ってたの？
買物袋を持って現れたお兄ちゃん。」

「ああ、冷蔵庫の中身が心許なかったからな。」

「念話で言ってくればよかったのに…」

「ああ、ちょっと、な…」

…？

「まあいいや。今日のご飯何？」

そう言いながら家の中に入っていく私達。

…お兄ちゃんが一瞬目を逸らしたのは気のせいだよな？

なんかあったのかなあ…

兄妹。温泉。邂逅。(前書き)

K「第五話前編投稿です。」

あんまり話は進みませんが。

K「ではどうぞー」

兄妹。温泉。邂逅。

第十二話

<Side兄>

「お兄ちゃん！温泉に行こう!？」

連休前のある一日、妹がこんな事を言ってきた。

「高町家に誘われたか？」

「うん。この前のケーキのお礼と、今後ともよろしくお願いします、ということまで。」

温泉というと、このタイミングならばフェイトが出てくることきのことである。

正直に言うと、俺はフェイト・なのはには関わるつもりがあまり無いため、放っておいてもいいんだが…

「…まあ、いいか。」

温泉旅行に行きたくないわけではないので、了承する。

「ホント！？さすがあ！」

喜々として翠屋に電話をかける妹。

…ん？

「…レンタカー、借りるか。」

こう見えても既に免許は持っているから安心である。

…車、買おうかな…。

<Side妹>

という訳で、私は今なのはちゃんやすずかちゃん、アリサちゃん達と一緒に海鳴温泉に向かっています！

お兄ちゃんは四人乗りのレンタカーを借りてきて、美由紀さんと一緒に乗っています。

最初は私と二人乗りかと思ったけど、女モード（こう呼ぶことにしました：口には出さないけど。）のお兄ちゃんが、「折角だし、ルチアは土郎さんの車に乗せてもらったら？」と言ったので、あっさり席を譲ってくれた美由紀さんに代わってお邪魔させていただいてます。

温泉が楽しみということもあって話が弾み、山道を通っていざ海鳴温泉へ！

…大型トラックが通ったとき、思わずビクッとしてしまった私は悪くないと思うんだけど、そこんところどうでしょう？

「ついたっ！」

なにかデジャブを感じますがスル！。

たどりついたのは、とても綺麗な日本風の旅館。

中もすごい綺麗です。

流石にこれでも15歳。

大声ではしゃぐことはしない。

それでも…w k t k が止まらないっ！

主に裸を拝む的な意味でっ！

「お兄ちゃん、お風呂行こう!？」

もう待ちきれないよ！

なのはちゃんも行くって行ってたし！

「あゝ…俺は後で入るわ。あと、折角だからユーノ預かるうか？」

「へ…なんで？」

「…ユーノは一応男だろうが…今はまだフェレット状態だが…」

あ…忘れてた！

「なのはちゃんに言うてくるね！ペット禁止っていえば大丈夫なはず！」

という訳でなのはちゃんのところへ行ってユーノを預かり、お兄ちゃんにユーノを預け、皆で一緒に温泉へ。

入浴中…ちよっと待ってね？

嗚呼…何と言う桃源郷！

天国はここにあったのか！

それにしても、なのはちゃん達が可愛いのはそうだけど、忍さんや美由紀さんも結構スタイルいいよね…

私は転生補正でスタイルも容姿もいいけど、忍さん達は素で美人だもんな…

そんなことを思いつつ、皆と部屋に戻る。

と、前から歩いてきたのは紅葉柄の浴衣を着た、犬を思わせる女性。

アルフだね、うん。

アルフはなのは見つけるとニヤリと笑い、声をかけてきた。

「ハーイ、お嬢ちゃん達？君かね？うちの子をアレしてくれちゃってるのは？」

…なんか言い方が卑猥です、アルフさん。

いいつつ、なのはちゃんの顔を覗きこむアルフ。

「あんま賢そうでも強そうでも無いし、ただのガキンちよに見えるんだけどねえ…」

うろたえるなのはに割って入るアリサちゃん。

少々話したあと、アルフが人違いだったと笑う。

皆ほっとして、肩の力を抜く。

と、いきなりなのはちゃんの顔が強張る。

多分、念話でのアルフからの忠告が入ったんだろう。

そのまま、横を通り過ぎていくアルフ。

多少の雑談をして部屋に戻ることに。

「あれ？どうしたの？」

前から歩いてきたのはお兄ちゃん。

「ん？ああ、荷物も片付いたから、温泉にちょっと…ね？」

タオルや洗面用具。

本当にお風呂に入りに行くようだ。

「そうだったんですか。」

「あ、でも気をつけてくださいよ？今多分、お風呂にたちの悪い酔っ払いがいましたから！」

すずかちゃんとアリサちゃんという。

アルフの事なんだろうけど…

「大丈夫よ。じゃあ、また後でね？」

と行って風呂へと歩いていくお兄ちゃん。

…どうしよう。人前でなんて呼ぶか考えといた方がいいよねえ…。

兄妹。フェイト。なのは。（前書き）

今だに妹が原作本格介入をしません。

K「戦闘シーンは短いです。原作でも短いから書くこと無いし。」
ではどうせ。

兄妹。フェイト。なのは。

第十三話

<Side妹>

ジュエルシード発動。

魔力を感知したので、お兄ちゃんと外に行こうとするが、

「面倒臭いし、絡む気が無いからお前が行ってこい。」
だって。

これじゃあ何のために転生したのかわからないじゃん…とも思った
のだが、お兄ちゃんになのはちゃんを取られる心配（元々無いが）
もないし。

まあいいやと思いつ外へ。

川の方まで飛んでいく。

すると、転移魔法の反応。

ユーノがアルフと一緒に飛んだのだろう。

…間に合うかなあ。

といつか今行っても私すること無い気がするなあ…

…今日は見物だけかあ…

となると、あのKYが来る日に本格介入しよう。うん。

(諸事情により、戦闘シーンは三人称でお送りします。)

<Side三人称>

ルチアがこの場についたとき、既に戦闘は始まっていた。

フェイトの放つサンダースマッシュと、なのはの放つディバインバスターがぶつかり合う。

フェイトが驚愕した瞬間均衡が崩れディバインバスターがフェイトを飲み込んだ。

かに見えた。

だが、実際これはしょうがないとも言える。

なのはは元々ただの小学生。

魔法についての才能を持っていたとはいえ、戦いの才能を持っていた訳ではない。

気がついたときには、上空から急降下してきたフェイトに魔力刃を寸止めされていた。

『… Pull out』

レイジングハートが、ジュエルシードを一つ排出する。

「レイジングハート！何を…」

「きつと、主人思いのいい子なんだよ。」

表情を変えずにフェイトが言う。

そしてフェイトが今日二つ目のジュエルシードを確保する。

「あ…！」

ゆっくりと地上に下りる二人。

「…帰ろう、アルフ。」

「んふ。さっすがあたしのご主人様！じゃあね、おちびちゃん」

そっつい、なのはとユーノに背を向けて歩きだす二人。

「待って！」

「出来るなら、もう私達の前に現れないで。もし次に会ったら、今度は止められないかもしれない。」

きっぱりと放たれた拒絶の言葉。

「名前…あなたの名前は!？」

「…フェイト。フェイト・テストロッサ。」

「あ、あたしは…」

なのはの名前は聞かず、森の中に消えていく二人。

なのはは、そこで立ち尽くすのみだった。

<Side妹>

…声をかけられる雰囲気じゃ無いな…

うう、情けないなあ私…

チート能力貰っても、人の心を癒すのは難しい…

ああ、本当にどうしよう…

兄妹。フェイト。なのは。（後書き）

さあ、ルチアの原作介入はいつになるのでしょうか。

ルチア「ちがうもん！私はすぐにも原作介入したいのに、いつもタイミングが合わないんだもん！」

半分以上お前のせいだな。

K「次はプレシアの話になる予定です。」

今日中に投稿するとかほざいてたんで、よろしくです。

ではまた！

プレシア。庭園。???。(前書き)

伏線を張る話です。

K「ではどうぞー！」

プレシア。庭園。???.

第十一話のプレシアSideの続き。

<Sideプレシア>

何だこれは。

一体全体どうなってる？

防衛用の機械人形（MSじゃないよ）も既に大量に破壊され、もう残機も少ない（STGでもないよ）。

…何か電波が届いたような気がしたわ。

そんなことはどうでもいいのよ！

そんな実力を持つてるとなると、執務官とか提督とか、そんなレベルの侵入者となる。

「くっ…」

柄にも無く焦る。

冷や汗が滴る。

正直言って、かなりまずい事態だ。

戦おうにも、この病魔に蝕まれた体では難しい。

逃げようにも、相手の進行スピードが早過ぎて間に合いそうにない。

…出来る限り時間を稼いで、そのあと逃げるしかない。

自身のデバイスに逃亡用の転移魔法を用意するように命令した瞬間、ドアが蹴破られた。

そこにいたのは、黒いフードを被った人間。

管理局の人間ではないらしいが、驚いたのはそこではない。

(単騎でここまで来たというの…っ!?)

傀儡兵だって弱くはない。

強力なものならば、AAAクラスの魔導師とも互角に戦える代物だ。

その中を、たった一人で…っ!?

「成程、転移魔法か…」

そいつが呟いた瞬間、デバイスの中で構築していたはずの転移術式が初期化され、更に消去された。

「はっ!?!」

素っ頓狂な声をあげたが、これは誰だって驚くだろう。

相手にばれない用に展開していた魔法が、一瞬で破壊される。

何の悪夢だ、これは。

苦し紛れに放った電撃は、相手に届く前に掻き消えた。

「AMF：昔のお前ならともかく、そんな身体では貫ける訳が無い。」

アンチ・マギリンク・フィールド…っ！？

たしかに研究はされていたはずだが、現行技術ではまだ再現できず、まだあと最低でも四年はかかると言われているもの…

それを個人で再現するなんて…

「あ、貴方は何なの…！？」

口から出た言葉に重なるのは、恐怖の感情。

そして無意識のうちに放出した、大量の電撃。

とにかく相手に放ちつづける。

来るな、来るな！

だが、現実是非情だった。

電撃は全て掻き消され、魔力切れで倒れ伏す。

「アリ、シア…」

漏らしたのは、最愛の娘の名前。

そのまま、私の意識は闇に飲み込まれて行った。

<Sideフード>

…成る程、思考誘導の魔法でプレシアは狂気に走ったのか…

となると、後で色々話し合わなければなるまいな。

思考誘導の術式を解析。

消去。

完了。

よし、これでプレシアの思考は元に戻ったはず。

あとは、こいつが起きるまで待たなければいけないな。

一応明日の夜まで起きないようにしておこう。

パニックで自殺とかしかねないし。

こうなると、フェイトに対してどんな行動をとるかがわからんな。

まあ、その辺も聞き出すからいいんだが。

それにしても、これも管理局がやったのか。

全く、やっぱり信用ならない組織だったな。

この事を話せば、プレシアはこちらに付くか…？

番外。 兄妹。 模擬戦。 (前書き)

番外編その2です。

K「特に言うことは無いはずなので、そのままお読みください。」

番外。兄妹。模擬戦。

番外編

<Side妹>

そういえば、とふと思う。

私、ほとんどチート能力使ってなくね？

そうである。

折角貰ったのに、使ったのはなのはちゃんに口づけした一回のみ。

戦闘なんてしていないのだ。

これはちょっとまずいかもしれない。

経験っていうのはかなり重要なことだ。

実際、AAAクラスのなのはちゃんとフェイトちゃんはAAクラスのミゼットさんに負けた。

A・sだけだ。

いくらチート能力持っても、戦況によつて的確な判断が出来ずに負けるなんて事は十分ある。

「という訳で魔法の練習しよう!」

「めんどくさい。」

「やっほじ…」

でも、これはお兄ちゃんにも損はないと思うけどな…

「一回だけ、ね?」

「だいたい俺は別に原作に関わら無くてもいいんだよ」

「そこを何とか!」

「しつこいぞ!」

そんなこんなで一時間。

「畜生、わかった、わかったよこの野郎!」

「ありがとうっ!」

さすがに一時間もお願いしたら折れてくれた。

そんなにどうしてもやりたいのかって?

いやいや、私としては中々深刻な問題なのですよ。

KYに負けるとか、そんなのは意地でも嫌だし…

…ちょっとお兄ちゃんには悪いことしちゃったな…

後で何か奢ろう、うん。

今私達は、お兄ちゃんと一緒に次元転送魔法で無人世界に来ています。

強力な結界を（お兄ちゃんが）張り、魔力を嗅ぎ付けて誰かがやって来る心配も無くなった所で、いよいよです！

「さ、お兄ちゃん行くよ！」

「おう。」

最初は色々な魔法を試すことにする。

どんな魔法かかっていうのは知識としてはあるけれど、実際に試してみない事には始まらない。

まずは様子見の誘導弾を12発。

あまり多すぎても始めてでは制御出来ないかなと思ってのこの数。

「シルクシューター、シュート！」

何となく技名付けた方がカッコいいかなと思った。

シルクは私の魔力光の色から来ている。

12発をお兄ちゃんにむけて殺到させるが、飛行魔法で軽々と避けられる。

逃げた方向にむけて魔力弾を追跡させるが、追いつかない。

…なら！

「ホワイトショット！」

誘導弾を半分消し、お兄ちゃんの進行方向に連射する。

が、うまく間を抜けられる。

…なんか、慣れてない？お兄ちゃん。

その後も、直射弾や誘導弾、砲撃、バインド、魔力刃と飛行魔法を使った接近戦など、色々なことを試した。

才能のチートスキルのおかげもあってか、魔法の使い方はぐんぐん頭に入ってくる。

今なら誘導弾を50個位なら操れるようになった。

「うん、こんな感じで良いかな…」

「全く…終わりで良いのか？」

「うん、ありがとうお兄ちゃん！」

「そういえばさあ…」

ん？何だろう。何かあったっけ？

「お前、デバイスどうするんだ？」

…あ。

そうだ、この世界だと、デバイス無しで魔法を使うのはとても難しいんだ。

このままじゃあ…

「怪しい…よね？」

「だろうな。」

わー！まずいでしょう！

元々、魔法を使うのにデバイスがいるのは、脳の容量だけでは魔法を使えないから。

その補助としてデバイスがある訳で、デバイス無しで魔法を使える容量を持つ脳なんて、実験材料にされかねない。

「どっしょいよっ…」

途方に暮れた昼過ぎ

…って歌ってる場合じゃ無いし！

どうしよう頭を抱える。

すると、お兄ちゃんが溜息をつきながら何かを差し出してきた。

その手に乗っているのは、銀色の宝石がはめ込まれたイヤリング。

「何、これ？」

「話の流れでわかれよ…デバイスだデバイス。お前用のインテリジエントデバイス。」

え…？

「うそ！？え、ちょwどうやって作ったの！？」

「どうせお前の事だから何にも考えてないだろうと思ってな。他の世界からパーツを集めて自作した。」

いや、自作したって…そんな簡単に作れるもんなの？

そういって、

「デバイスのパーツさえあれば、その情報をいじって組み上げることは出来る。」

…すごい便利じゃんその能力。

「まあとにかく。名前とか認証とか、その辺ちゃんと済ませておけよ？」

「わかったよう…」

あれ？

「そついえばお兄ちゃんのデバイスは？」

スツと差し出される左腕。

手首に、黒色の宝石がはめ込まれたブレスレット。

なるほどね…

というか、私お兄ちゃんに頭上がらないな…

番外。兄妹。模擬戦。（後書き）

K「六話で詰まってるので息抜き投稿です。」

デバイスの名前も決まってるじゃないんだろ？

K「固有名詞考えるのは本当苦手です…」

なのは。フェイト。夜の街にて。（前書き）

K「リイン氏、ルチアのデバイスの名前を考えていただき、本当にありがとうございます！後書きにて細かい設定を書きます！」

また、今回時間かかった分文章量がとても多くなっています。

K「ではごっぞー！」

なのは。フェイト。夜の街にて。

第十四話

<Side妹>

今日は何としても現場に行かなければならない。

なのはちゃんとフェイトちゃんの三度目の決戦。

見たいという気持ちもあるけど、それ以上にフェイトちゃんが痛い
思いをしてまで封印をするんだ。

フェイトちゃんが苦しむんだったら、私が全部代わりにやってやら
あ！

デバイスも貰ったし、封印のための魔法も覚えた。

後は夜を待つだけ…

…いや、夕方かな。

確か、学校でアリサちゃんがなのはちゃんに怒るんだっただよね。

なのはちゃんの話したく無いっていう気持ちも、わからなくは無
いけど…

公園とかにいるんだっ たかな？

見かけたら声をかけて見ようかな。

夕方。

お兄ちゃんに夜まで戻らないと言っておき、一路公園へ。

やっぱりいた。

ベンチに一人（と一匹？）腰掛け、端から見ても沈んでいるのがわかる。

「こんにちはわ、なのはちゃん。」

笑顔で声をかける。

「ふえ！？ル、ルチアさん！？」

誰か声を掛けるとは思っていなかったらしく、肩をビクッと震わせ、てこつちを見るのはちゃん。

隣に座り、話しかける。

「辛そうな顔してるわ。何かあったのかしら？」

「い、いえ、何でも…」

暫くの沈黙。

そうだった。なのはちゃんって、自分の中に溜め込んでしまっ
た。プの子だった。

となると…

「魔法の事に関して、でしょ？」

こうやって少しずつ殻を剥いていくしかない。

果たしてそれは正解だったようで、なのはちゃんは打ち明けてく
れた。

悩んでいる事を打ち明けられずにアリサちゃんと喧嘩してしまった
こと。

それでも、魔法の事を話すのは躊躇われるんだろう。

でも、だからこそ私は言う。

「友達を、信じる事が出来ない？」

「っ！そうじゃないです…！」

「でしょ？信じているのであれば、全部打ち明けて見れば良い。友
情って、そんなに簡単に壊れるものじゃ無いよ。」

…まあ、なのはちゃんは良くも悪くも頑固だから、これくらいです
ぐに仲直りしてくれるとも思っていないんだけど…

難儀だなあ…

でも、とりあえず聞いてくれはしたので、これからに期待…かな？

できれば、最悪s t sまでに頑固癖を治してくれれば良いんだけど…

なのはちゃんと別れ、一路街へ。

お兄ちゃんに頼まれてた物を買ったり、少し早めの夕飯を食べたり、商店街を冷やかして時間を潰す。

午後七時を少し過ぎた頃。

ビルから立ち上る一筋の光と、強力な魔力。

停電。

雷雲。

街が黒く染められていく。

ギリギリで間に合うユーノの結界。

そして、青い光。

ジュエルシールドだ。

とりあえず魔力感知されないように自身に魔力隠蔽と透明化の魔法を使って、デバイスを起動させる。

「行くよ、ファーネライル！セットアップ！」

『認証。』

イヤリングから電子音声が鳴り、バリアジャケットとデバイスが展開される。

バリアジャケットは、所々装飾の入った黒い長袖ローブと、ローブにくっついてる紫のフード（被らないで後ろに流してる）。

デバイスは杖。

といっても、どちらかと言うとフェイトちゃんに近いかな？

長い金色の棒の両端に銀色の宝石がついている。

この二つの銀の宝石がコア部分で、ここから自由に魔力刃をかたどれるようになってる。

遠距離戦は勿論自分で出来るので、遠近両用デバイスなのだ。

近距離戦が出来るのかって？

そこらへんもぬかり無し！

神様から貰ったチートスキルで完璧だよ！

さて、説明はここまでにして…

既にフェイトちゃんは砲撃による封印を始めようとしている。

なのはちゃんも同様。

二つの閃光がジュエルシードを貫く。

「リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアル14！」

「封印！」

二人の閃光が巨大化する。

光が収まると、そこには浮遊しているジュエルシードが一つ。

そこへ近寄るのはちゃん。たぶん、一年生の時の事を思い出していたのであろう。

ユーノが封印を促すが、割って入るアルフ。

ユーノが障壁で防ぎ、アルフを弾き飛ばす。

障壁が割れた時、目の前にいたのはフェイトちゃんだった。

「この間は自己紹介できなかったけど、私なのは。高町なのは。私立星祥大付属小学校三年生。」

『Scythe Form』

なのはちゃん言葉は聞かず、デバイスを起動させるフェイトちゃん。

それに気づいてデバイスを構える。

風が、二人の髪を揺らす。

<Side三人称>

暗い街に飛び交うのは、桃色と金の閃光。

なのはの後ろに高速で回り込むフェイトだったが、逆に後ろを取られてしまう。

至近距離のデバインシユーターを防御壁で防ぐ。

「フェイトちゃん!」

ビルに反響する声。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!」

その時のフェイトの心には何があるのか。

「闘いあつたり競い合うことになるのは、それは仕方ないのかもしれないけど、だけど、何もわからないままぶつかり合うのは、私、嫌だ！」

フェイトの瞳が揺れる。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の捜し物だから。」

ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君がそれを元通りに集めなおさないといけないから！私は、そのお手伝いで、だ！

お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は、自分の意志でジュエルシードを集めてる！

自分の暮らしている街や、自分の周りの人達に危険が降り懸かったら嫌だから！」

動かないフェイト。

「これが、私の理由！」

「…私は…」

目を伏せ、語ろうとするフェイトに声をかけるアルフ。

「優しくしてくれる人達のところで、ぬくぬく甘ったれて暮らしているようなガキンちゃんになんか、何も教えなくていい！」

愕然とするなのは。

「あたし達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！」

その言葉を聞いて、デバイスを構えるフェイト。

フェイトに気を取られている隙に、一気にジュエルシードへ向かうフェイト。

それをすぐさま追い掛けるのは。

互いのデバイスが、ジュエルシードを挟んでぶつかり合う。

互いのデバイスに入る大きな輝。

瞬間、巨大な魔力が暴走し、爆発した。

巻き起こる小規模の次元震。

レイジングハートに輝が入ったため飛行魔法が不安定になり、地面へと着地するなのは。

バルディッシュも無事ではないため、すぐさま待機モードに戻すフェイト。

後に残ったのは、魔力が不安定になりいつ暴走するかわからない危険物。

決意を込めた瞳でジュエルシードへと向かう。

それを自分の手で掴もうとして…

一条の銀光が遮った。

「!？」

「…っ！封印魔法…！」

いきなりの出来事に混乱するなのはと、即座にジュエルシードから離れるフェイト。

光が収まると、そこにはきっちり封印されたジュエルシード。

「ふう…出るタイミングがちょっとわからなかったけど、こんな感じかな？」

降り立ったのは、金の棒を担ぎ、黒のローブを着込んだ女性。

「ルチアさん!？」

なのはが、驚きの声をあげた。

<Side妹>

ふう。

これで、私も本格的に原作介入かな。

「ん、なのはちゃんこんばんわ。」

びっくりしているなのはちゃんに声をかける。

とりあえず封印処理したこいつはどうしようか…

…やっぱり警戒してるよねえ、フェイトちゃん。

「…誰かは存じ上げませんが、そのジュエルシード、渡していただけませんか。」

他人行儀だなあ…ちょっと（いやかなり）淋しいな…

まあ、少しずつ仲良くなって行ければ良いんだけど…

「…今回はなのはちゃんの負けだからね。いいでしょう。」

「ルチアさん!?!」

なのはちゃんが声を荒げる。

「私は、なのはちゃんとフェイトちゃんの敵じゃ無いよ。私は二人の味方。ちゃんと話し合っつてぶつかり合えば、きっとわかり会える。私はそう思ってるから、今はどちらの味方もするの。」

そういつて、フェイトちゃんにジュエルシードを投げ渡す。

未だ困惑しているフェイトちゃんにむかって笑顔を向け、

「また、会うことになったらよろしくね?その時は、できればちゃ

んとお話したいな。それじゃあね？」

そう言つて、二人に背を向けて飛び去る。

家に変える途中でバリアジャケットを解除し、家へと歩く。

…やっぱりもつと早く介入したかったな…

明日は確か、フェイトちゃんがプレシアのもとへ行く日だ。

そして…

プレシアが鞭でフェイトちゃんを苛める日だ。

あんなかわいい子を道具みたいに扱つて…

絶対に許せない！

今はまだ、プレシアに会いに行くことは出来ないけど、無印ラストで絶対にガツンと言つてやる！

あ。

ビルの上に買ったもの置いてきちゃった…

なのは。フェイト。夜の街にて。（後書き）

デバイス設定

名前 ファーネライル
術式 基本的にミッド式
待機状態 両耳にある銀のイヤリング
使用言語 日本語

その他設定

デバイスを作るのを忘れていた妹に代わって兄が作り出したインテリジェントデバイス。

性格は冷静な秘書タイプ。

主のためとなるならば主に毒を吐くこともある。
だが、基本的に主とリアライズ創作者を敬う。

K「とりあえずはこんな感じですよ。」

リイン氏、重ね重ね本当にありがとうございます。

K「あと、もしわかる方がいれば、妹のバリジャケはドラゴンクエストの「ダーククローブ」という防具を想像していただければ…まあわからないと思いますが…」

管理外世界。アースラ。時の庭園。（前書き）

K「七話中盤＋です。」

次話でクロノ出現です。

K「ではどじごー！」

管理外世界。アースラ。時の庭園。

番外編

「なあなあ、知ってるか？」

「またお前か…今度は何だ？」

「この前、北の森で咆哮が聞こえるっていう話したろ？」

「ああ、次元空間に穴が開くとかいう奴か？」

「そうだよ、それぞれ！」

「で、それがどうした？」

「その話に進展があつたんだよ！その現象が起きた時、巨大な生物…それも龍を見たっていう奴がいるんだ！それも三人！」

「龍ねえ…」

「ああ！中々信憑性が出てきたろ？」

「ちなみにどんぐらいいのでかさなんだ？」

「なんでも、顔の大きさがそこら辺のビルよりでかかって噂だ！」

「…そんなでかさだったらもつと発見報告があるはずだろ…
大方、噂好きの奴が流したホラ話だろ…」

「…これを聞いても、同じ事が言えるか？」

「何だ突然…」

「これは、公にされていない極秘の情報なんだがな…
近頃、ここや近隣世界で高魔力を持つ生物、無機物、果てはロスト
ロギアまでが無くなってるんだ。」

「それは何の関係があるんだ？」

「どうやら、その生物とかは、巨大な何かにリンカーコアや魔力に
よる構成物質を食われている…捕食された跡が見つかったんだ。」

「…なるほど。しかし、その話は信用できるのか？」

「時空管理局にある正式な報告書にあるらしい。名前は知らんが、
どっかの執務官の報告書だ。」

「なんでその内容を知ってるんだ？」

「俺の友達に、時空管理局の時空航行艦のオペレーターやってるや
つがいるんだがな、休暇で戻ってきた時に酔っ払って教えてくれた
んだよ。」

「…」

「かなり信憑性が出てきただろ？」

「たしかにな…」

<Sideアースラ>

次元空間内を、巨大な銀の戦艦が行く。

時空管理局巡航L級8番艦。次元空間航行艦船『アースラ』。

流線型のフォルムが美しい艦船には、今回の任務…『ジュエルシー
ドの確保』を目的とした、多数の人員が配備されている。

そのアースラのブリッジに一人の女性が入ってくる。

「皆どう？今回の旅は順調？」

「はい。現在、第三船速にて航行中です。目標次元には、今からお
よそ160ヘクサ後に到着する予定です。」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが、
二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね。」

緑髪の女性は椅子に座りながら「そう」と短く返す。

「失礼します。リンディ艦長。」

茶髪の女性がブリッジへ入室する。緑髪の女性の前に紅茶を置く。

「ありがとね、エイミィ？」

リンディ・ハラオウン。

若くして時空管理局の提督を勤め、アースラの艦長。

仕事は有能。

自身も有能な魔導師で、この任務の責任者である。

「そうねえ…小規模とはいえ、次元震の発生は…」

紅茶を飲んで喉を潤す。

「ちょっと厄介なものね。危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないと。ね？クロノ？」

彼女が声を掛けたのは、ブリッジに立つコート姿の少年。

「大丈夫。わかってるよ、艦長。ぼくは、そのためにいるんですから。」

クロノ・ハラオウン。

14歳にして、執務官の名を冠する言わばエリート。

リンディの実の息子であり、アースラの切り札でもあるAAA+ランクの魔導師である。

リンディが満足そうに目を細めていると、

「艦長！本局からの通信です！」

エイミーが声を掛けた。

エイミー・リミエッタ。

アースラの通信主任と執務官補佐を兼ねるアースラのNO.3。

「あら、こつちに繋いでくれる？」

「わかりました。」

数秒の操作の後、リンディの前にモニターが表示される。

「こんにちわ、提督。そろそろ第九十七管理外世界に着く頃ですか？」

「こんにちわ、大将。そうですね、もうあまり時間はかからないと思いますよ？」

リンディは思う。

この正体不明の上司の事を。

二年ほど前に突然現れ、たった一年で時空管理局のトップに君臨した。

類い稀なる戦闘力と仕事の早さを誇る完璧超人である。

(でも、名前知らないのよねえ…)

時空管理局の誰もが知っていて、しかし誰もが詳しく知らない謎の人である。

ジュエルシードの確保をアースチームに命令したのも彼だ。彼といっても、声から推測しているに過ぎないが。

「まあ、無事に帰ってくることを祈ってますよ。それではこれで。」

「それはありがたいですわ。失礼します。」

通信が切られる。

ふう、と息を吐くリンディ。

「本当に、何者なのかしらねえ…」

そして、懸念事項がもう一つ。

最近この辺りの管理外世界に出現した、正体が今だ不明の生命体。

「何事も無ければいいんだけど…」

<Side時の庭園>

ビルの屋上から転移してきたフェイトとアルフは、時の庭園の中を歩いていた。

口では大丈夫だと言ってはいるが、それでもまだ9歳の子供。
痛いものは痛いし、怖いものは怖い。

アルフは、フェイトに何かあったらただでは済まさないとかかりに
犬歯を剥き出しにして唸っている。

そして、重厚な作りの扉の前に立つ。

「アルフは、ここで待ってて？」

「駄目だよフェイト！私も行くよ！」

「大丈夫だよ、私は平気。」

と、いきなり扉が開く。

「…お帰りなさい、フェイト。さあ、こっちへいらっしやい？アル
フもよ。」

「あっ…はい。母さん。」

薄い微笑みを浮かべて歩み寄るフェイトと、警戒心剥き出しのアル
フ。

「…ジュエルシードは、いくつ手に入ったの？」

「…四つ、です。」

「そう…」

それだけ呟くと、椅子から立ち上がってフェイトに近づくとプレシア。アルフが威嚇の声をあげるが、それを無視して歩く。

そしてプレシアはフェイトの前に立つと、右手を伸ばしてフェイトの頭を撫でた。

「…え？」

「ありがとう…フェイト。こんな短期間でジュエルシードを四つなんて…母親として鼻が高いわ。」

もしかすれば始めて見るかもしれない、自分の母親の微笑み。

「あ…」

「わざわざ、お土産を買ってきてくれたのね…一緒に食べましょう？アルフ、あなたも来なさい？」

「う、うん…」

目に涙を浮かべながら返事をしたフェイトだったが、それとは対照的にあまり浮かない表情のアルフ。

笑顔で手を握り歩く自分の主とその母親を見ながら、アルフは思う。

（いくらなんだって、数日でこんなに態度を豹変するのはおかしいよ…）

プレシアに何かあったのかい…？)

答えの出ないその思考を顔には出さずに、時の庭園での久方振りの穏やかな雰囲気を感じるアルフであった。

原作との相違点は、今後どのような歪みを作り出すのか。

それは、今だ作者のみぞ知る…

妹。邂逅。執務官。（前書き）

K「原作七話後半分ですね。今日中にも第八話分をあげたいと思います。」

ではどうぞ。

妹。邂逅。執務官。

第十五話

<Side妹>

毎度どうもこんにちわ。

ルチアです！

今は夕方。場所は海鳴臨海公園。

ちょうど今ジュエルシードが発動したところ。

それにしても、あの樹の化け物、いつ見ても不気味だなあ…

なのはちゃんが来て、化け物と相對する。

それと同時に上空から金の弾丸が降り注ぎ、樹の化け物のバリアに阻まれる。

「おー！？生意気に、バリアまで張るのかい。」

「…今までのより、強いね。…それに、あの子もいる。」

なのはちゃんがフェイトちゃんに振り向く。

でも、それはミスだ。

案の定、樹の化け物は地面から根っこを生やしてなのはちゃんを襲う。

ユーノが近くの茂みに身を隠し、なのはちゃんが空中へと飛び上がる。

フェイトちゃんがアークセイバーで根っこを切り飛ばし、そのまま当たって化け物は怯む。

その間に空中でチャージを完了したなのはちゃん。

…何か、凄いコンビネーションが良いよね。

どうなってんだろ？

「撃ち抜いて！ダイバイン！」

『Buster』

しかし、これもバリアに防がれる。

かなり苦しそうにしている化け物を見るや、フェイトちゃんも砲撃準備。

「貫け豪雷！」

『Thunder Smasher』

そして打ち出される黄色い光線。

樹の化け物がバリアで防ぐ。

かなり苦しそうだが、バリアと二本の砲撃は拮抗している。

…拮抗している？

…原作よりもバリアが強い！？

だったら！

「ファーネライル！砲撃つよ！」

『了解しました。』

事前にセツトアップしてたファーネライルに言う。

宝石の片方を正面に突き出すと、浮き出る円形の魔法陣。

「バーストストリーム！」

『発射！』

言うと同時にファーネライルを引き、もう片方の宝石で魔法陣をぶつ叩く。

私の放った砲撃は寸分違わずに化け物に命中。

それに気づいた二人が封印の準備を開始する。

私？ここに来る前から準備済みさ！

『Seeling mode・set up』

『Seeling Form・set up』

「ジュエルシード、シリアル7！」

「封印！」

私の台詞？ありませんよそんなもん…グス。

それはともかくとして、

「無事にジュエルシードは封印完了…と。」

「…ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ。」

「うん。タベみたいなことになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だもんね…」

「だけど…譲れないから。」

そういつてデバイスを構える。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

こちらもデバイスを構える。

互いに負けられないから、まずは戦う。

でも…

「フェイトちゃん。もしも今から戦って…なのはちゃんかただの甘ったれた子供じゃないってわかったら、この子の話を聞いてあげてくれないかな。」

「…」

無言のフェイト。

だが、確かに頷いた。

「それじゃあジュエルシードは今私が預かっておくよ。二人とも、頑張ってるね。」

まあ、あいつが来るのは知ってるけどね！

<Side三人称>

ルチアがその場から少し離れて、フェイトとなのはが真正面から向き合う。

同時に飛び出し、互いのデバイスがぶつかり合う瞬間。

突如青い光が溢れ、レイジングハートがつかみ取られ、バルディッシュが何かに止められた。

「ストップだ！」

突然の乱入者に啞然とする二人。

「ここでの戦闘は危険過ぎる。」

現れたのは、黒いコートを着た子供。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

KY執務官（ルチア談）こと、クロノ・ハラオウンがそこにいた。

妹。邂逅。執務官。（後書き）

K「今日の夜にもう一話投稿…出来たら良いなあ…」

まあがんばりな。

妹。KY。リンディ。（前書き）

K「ほんとうごめんなさい。遅くなりました！」

全くだ。前回の意気込みはどこ行ったんだ…

K「しかもクオリティも低い。ぐわ、死にてえ…」

書いてから死ね。

ではどうぞ。

妹。KY。リンディ。

第十六話

<Sideアースラ>

「現地では、既に三者による戦闘が開始されている模様です。」

「中心となっているロストロギアのクラスはA+。動作不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せています。」

二人のオペレーターが言う。

「：回収を急がないといけないわね。クロノ・ハラウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定は出来てます。命令があればいつでも。」

「それじゃクロノ。これより、現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収。三名からの事情聴取を。」

「了解です、艦長。」

そういつて転移ポートへと向かうクロノ。

「気をつけてね。」

白いハンカチで見送る。

若干呆れながらも転移魔法を発動するクロノ。

クロノが消えると同時に、またもあの人からの通信が届く。

「こんにちは提督。今はクロノ執務官が三人の戦闘を止めに行った辺りかな？」

「…なんでもお見通しですね…。そうですね。」

「何、先程の通信と速度と距離を計算すれば誰だっかわかることさ。それより…」

少々言葉を濁す大将。

「君のことだ。黒い子はともかく、白い子ともう一人の紫の子を利用しようとしてるんじゃないのかな？」

ドキリと心臓が跳ねた。

あの子達と協力してジュエルシードを回収しようとは考えていた。

でも、利用するだなんて…

「大将、お言葉ですが、それはどついう意味でしょうか？」

「なに、言葉通りの意味だよ。」

一拍おいて、彼は話しはじめる。

「あの白い子…高町なのは良くも悪くも真つすぐだ。責任感も強い。そして、自分で解決できるとわかれば周りを頼ることをしない。」

「…」

「君は、そこに付け込もうとしようと思ったことはないかい？かなり前から、モニターなどで彼女達の行動を見ていただろう？」

「…」

「まあ、あの紫の子は難しいだろうけど…さて、返答を聞こうか？」

…この人は凄い。

まさかここまで読まれるとは…

「…確かに、少しはそういう思いはありました。しかし、今は誠意をもって彼女達に接し、協力を頼む所存です。」

「ならいいんだ。それじゃあ、そっちはよろしく頼むよ。時々通信は入れるけどね。」

「了解しました。」

「じゃ、健闘を祈ってるよ。」

そう言って通信が切られる。

はあ、情けない。

こんなことを考えた自分にヘドが出る。

でも、そんなそぶりを他のスタッフに見せて不安を煽るようなことにはしてはいけない。

さっきまでの自分は忘れなさい。

今はあちらの状況を確認しなければ…

そう思いつつ、私はモニターに目を向けた。

<Side 地球>

「時空…管理局？」

ユーノが零す。

「まずは二人とも武器を引くんだ！その女性もだ！」

二人の武器を掴んだまま降下し、それについてくるのはとフェイト。

「このまま戦闘行為を続けるなら…」

クロノが言いかけた瞬間、オレンジ色の魔力弾が降り注ぐ。

とっさに反応し、青色のシールドで弾き返す。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

新たに魔力弾を精製しながら言うのは狼形態のアルフ。

「っ！」

そこに更に、アルフとは比べものにならない量の銀色の魔力弾が降り注ぐ。

まともに受けてはまずいと空中に逃げるクロノと、呆然としているなのは。

しかし、レイジングハートが飛行魔法で空へと逃がす。

「今のうちに二人とも逃げて！」

魔法弾を放ちながら言うルチア。

フェイトとアルフは飛行魔法と多重転移を使い、一気にその場から離れる。

クロノがルチアの攻撃をかわしながら青い魔法弾を撃つも、届かない。

思わず歯がみする。

そこにデバイスを構えて突進するルチア。

「ファーネライル、ランスのモード1!」

『ハルバードモード!』

彼女が手にしたのは斧槍。

「くっ、シールド!」

クロノは青いシールドで勢いを殺し、自身のデバイス、S2Uでルチアの攻撃を受ける。

「こんの、KYがつ!」

刃を返し空中へと打ち上げ、すかさず直射弾で追撃する。

なおもシールドで防ぐが一撃が重く、苦しい表情のクロノ。

ルチアは、好機とばかりにハルバードで切り掛かる。

クロノの首に魔力刃を突き付ける。

「降参、するかしら?」

「くそっ…!」

渋々手を挙げるクロノ。

と、空間にモニターが出現する。

「少し待ってもらえませんか？」

はたして、そこに現れたのはリンディ・ハラオウンであった。

「ようやく出てきた…何の用なの？」

「とりあえず自己紹介をするわ。私はリンディ・ハラオウン。時空管理局の提督で、次元航行船『アースラ』の艦長を勤めています。」

「時空管理局？それは何なの？」

「な…魔導師をやっているのに管理局を知らないはずが…っ！」

いきなり口を挟んできたクロノに、更に魔力刃を近付けるルチア。

「今私はこの人と話をしているの。KYには聞いてない。それで？」

「…私達は、ロストログア『ジュエルシード』の回収をするためにここへ来ました。できればこちらに来てもらって話をしたいのだけれど…」

「なぜ、まだ信用していない相手の所へ赴かないといけないのか理由を説明してほしいのだけれど？」

「管理局は正義の組織だ！」

うざそうに眉をひそめるルチア。

「クロノ…少し静かにしていなさい。話が進まないわ。」

「ぐっ…はい、艦長。」

クロノ哀れ。

「貴女が言っているのは、「それは私達が欲しいから渡せ」と言っているのと同じ事。」

「その事について話したいから、こちらに来てほしいと言っているのですが…」

「はあ…なのはちゃんはどうする?」

「ふ、ふえ、私!？」

いきなり話を向けられ、困惑するのは。

「え、えっと、私はまだわからないこともあるから、お話聞きたいんだけど…」

「…そう、ならいいよ。そっちに行ってあげるから案内してくれない?」

「ええ、わかったわ。クロノ、案内して?」

「わかりました、艦長。」

転移術式を発動するクロノ。

はたして、アースラの中ではどんな話が行われるのか…

妹。アイスラ。協力体制。
(前書き)

K「話が進まない！」

それはお前の実力不足だな。

K「そして短い！」

まあ頑張りな。

ではどうぞ。

妹。アースラ。協力体制。

第十七話

<Sideアースラ>

三人が案内されたのは、アースラ内の一室であった。

ここに来るまでにユーノが人型に戻り、なのはと一騒動あったのだがあまり関係ないので割愛しよう。

なのはとルチアが部屋に入って最初に目に入ったのは、盆栽、茶室、ししおどし。

綺麗な正座を組んで座っているリンディのこともあり、違和感が半端ではなかった。

「お疲れ様。まあ三人ともどうぞどうぞ。楽にして？」

困惑するのは。

そんななのはを見やるユーノ。

リンディに視線を向けるルチア。

反応は三者三様であったが、とりあえず三人とも座る。

「どござ。」

差し出される羊羹と緑茶。

「あ…は、はい。」

事情聴取として、ユーノから話されたジュエルシードについての事。

「そう…ジュエルシードを発掘したのは貴方だったの。」

「はい…だから、僕が回収しよう」と…」

「立派だわ。」

「だけど、同時に無謀でもある。」

やはり空気を壊すクロノ。

ユーノが俯いてしまい、話が途切れる。

「あの、ロストロギアって、何なんですか？」

話を変えるべくなのはが切り出す。

ジュエルシードの説明をするハラオウン親子。

緑茶に砂糖。

「あつ」

なのはが小さく声を漏らす。

その砂糖入り緑茶を飲むリンディ。

それを、信じられない物を見るような目で見る。

「それで、あのロストロギア、ジュエルシードについての事なんだけど…あれを回収するのに、出来れば協力してほしいのだけれど…」

「…どういうことですか？」

それまで黙っていたルチアが切り出す。

「ロストロギア相手…しかもランクA+となると、こちらとしても手が多いに越したことはないわ。それに、今貴女達に「今から私達が引き継ぐから出ていけ」なんて言ったら確実にこちらが悪者だし…なにより、こちらが止めても最後まで手伝うでしょう？」

二の句が継げないのは達。

「それに、こちらとしても一人でも多く人が欲しいのは事実。…でも、無理にとは言わないわ。そちらにはそちらの生活もあるでしょうし、恐らく危険も伴う。今夜一晩じっくり考えて、お家の人ともよく話し合って、それでももし手伝いたいというのなら、私達は貴女達を歓迎するわ。」

「はい…わかりました。」

二人は返事をしたが、ルチアの心の中には疑念。

(原作よりも誠意がこもってるし、何よりあちらから協力を申し出てきた…ここは申し出を受けるべきだけど…うーん？まあいいか。)

「とりあえず、外まで送るわ。貴女達のデバイスにこちらの端末の番号を送るわ。連絡をとるときはデバイスを通じてここにかけよう дай。」

そういうと、レイジングハートとファアーネライルの中に情報が認識される。

「外まで送るわ。クロノ、お願いね？」

「はい、艦長。」

「それじゃあまた。もう一度言うけど、無理強いはしないわ。自分の意思で決めてちょうだいね？」

手を振って見送るリンディ。

なのはは少々迷いながら。

ルチアは何かを考えながら。

ユーノは決意を込めながら。

三人は地球に戻ってきた。

<Sideクラリーベル邸>

なのは達と別れたルチアは、家に到着した。

「ただいまー！」

「おう、お帰り馬鹿妹。で、アースラに行くのか？
いきなりズバリと聞いて来る。」

「馬鹿って言わないでよ！ていうか、何で知っているの？」

「理由なんてどうでもいいだろ。とにかくあちら様に迷惑かけんじやねえぞ。」

「大丈夫だよ！それくらい弁えるって！とりあえず明日から何日かアースラに行くから。」

「了解了解。というかお前、俺の事は外でなんて呼ぶつもりなんだ？」

「え、？えつとー…お姉ちゃん…じゃないな。姉上…これも違う。
姉貴…論外。姉者…でもない。えつと…」

言いつらそつに口をつぐむルチア。

「姉様…じゃだめかな？」

リリアー又がルチアの頭をガツと掴む。

「いだだだだだだだ！」

そのままアイアンクロー。

「何でよりもよってそんな呼び方なんだよ……」

「だ、だって他の呼び方が似合わないんだもん痛い痛い！」

その後10分間アイアンクローを喰らいつづけぐったりとしているルチアに、渋々「姉様」呼びを承諾したリリアー又であった。

妹。アースラ。協力体制。 (後書き)

K「ちよつとアンケートをば…」

前回の番外編で豹変したプレシア。

どうしてそうなったかを見たい！という方がいたら感想板にお書きください。

K「ただし！無印編ラスト辺りの壮絶なるネタバレになります！」

それでも読みたいならお書きください。

ちなみに「読みたくない」に傾いた場合、無印編が終わってA'sに入る前に書くこととなります。

アースラ。妹。合力。（前書き）

K「遅くなりました！もう本当にすいませんでした！」

四日か。全く…

K「代わりとっては何ですが、いつもより文量がかなり多くなっていますのでお許しください…」

ではどうぞー。

アースラ。妹。合力。

第十八話

<Sideアースラ>

アースラ内の管制室。

その巨大なモニターに、先のジュエルシードの時の映像が流れている。

「すごいや、どっちもAAAクラスの魔導師だよ！」

声をあげたのはエイミィ。

先程の戦闘からデータをとっている最中である。

「ああ……」

声を漏らしたのは、先程よりもラフな恰好のクロノ。

「こっちの白い服の子は、クロノ君の好みっぽい可愛い子だし？」

「エイミィ…そんなことはどうでもいいんだよ！」

旧知の仲である二人は、割と気を許し合っている部分も多そうだ。

「魔力の平均値を見ても、この子で1270000。黒い服の子で

1430000。最大発揮値はさらにその三倍以上！クロノ君より、魔力だけなら上回っちゃってるね？」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況にあわせた応用力と、的確に使用できる判断力だよ。」

「とか言つて、もう一人の紫の人に手も足も出なかった癖に……」

「五月蠅いな！」

「でもこの人、データ解析をしようとしてもなぜかアンノウンがエラーになっちゃうんだよねえ……」

「何だつて？」

「ほら、これ見て？」

映し出されたのは、思念体にむけて砲撃を打ち出したところ。

「ここで魔力を測定しようとしても、エラーが出ちゃうんだよね……」

確かに赤文字でエラーの表示。

首を傾げる二人。

「まあでも、クロノ君を信頼していかないわけじゃないよ？アースラの切り札だもん、クロノ君は！」

「むう……」

無然とした表情のクロノ。

そこに、リンディが入室する。

「あ、艦長？」

「まあ、三人のデータね？」

「はい。」

「…確かに、凄い子達ね。」

「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれば、次元震が起こるのも頷ける…」

「あの子達、なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めている理由はわかったけど、こっちの黒い服の子は何でなのかしらね？」

「ずいぶんと、必死な様子だった…なにか、余程強い目的があるのか？」

「目的…ね。」

映像では、ちょうどフェイトの戦闘が流れている。

「まだ小さな子よね。普通に育ってれば、まだ母親に甘えていた年頃でしょうに…それに紫の人、ルチアさんもジュエルシードが目的で集めているわけでもなさそうだし…」

「艦長。」

クロノがリンディに引き直って言う。

「さっきは黙っていましたが、僕はあの子達をこの事件に関わらせるのは反対です。」

「あら、どうして?」

「この事件は時空管理局で全権を持ち、あの子達には元の世界で過ごす方が得策です。次元干渉に関わる事件ですよ? 民間人に介入してもらうレベルの話じゃない。」

「それを決めるのは貴方じゃないわ、クロノ。」

と、突然モニターが開く。

『クロノ執務官? さっきまでの話は聞いていたよ?』

「た、大将!？」

「あわわ、お疲れ様です!」

慌てて姿勢を正すクロノとエイミー。

『そんなに畏まらないでいいよ。楽にして構わない。急な通信すまないね、リンディ提督。』

「いえ、大丈夫です。それで、どうされましたか?」

『なに、そっちの執務官君が頑固なもんだからついね? それで、ク

ロノ執務官？さつきリンディ提督が言った通り決めるのは君ではなく、この事件の担当者であるリンディ提督か私だ。わかったかい？」

「…はい、すみませんでした。」

『なに、責めている訳じゃないさ。君のとうとうとした判断は、間違っている訳じゃないからね？少々短いけど、これにて失礼するよ。』

そういつて通信が切られる。

「…嵐のような人ね。」

ぼつりとリンディが零す。

「でも、一体何者何でしょうか？」

クロノが呟く。

確かに、管理局内にはいきなり出てきて重要なポストに収まった彼を快く思っていない人も多い。

しかも彼は姿を見せることもほとんどないため、情報が少ないのだ。

「さあ、私にはわからないけれど…」

そこで一旦言葉を切るリンディ。

「おそらく、敵に回してはいけない種類の人なんでしょうね。」

< Side 妹 >

時刻は夜。

海鳴臨海公園でなのはちゃんを待つ。

お兄ちゃんも来てみたら？って言ったんだけど、

「めんどくさいし、また旅行行きたいから却下。」

とのこと。

なんだかんだで、お兄ちゃんもこの世界を満喫しているようです。

とそこへ…

「こんばんわ、なのはちゃん。」

「ルチアさん！？は、早いですね…」

「ただの勘。さ、行きましょ。」

フアーネライルの通信回線を開く。

「こんばんはリンディ艦長。」

『あら、早いわね。…決心が付いた、と考えても？』

「ええ。」

『それじゃあ、転送ポートをそちらに作るわ。それに乗ってこちらに来てちょうだい。』

言うが早いが、すぐさま魔法陣が現れる。

「それじゃあ、行く？なのはちゃん。」

「うん！」

ちよつと不安そうだったなのはちゃん（主にルチアの主観）に手を差し出すと、若干頬を染めながら（主にルチアの主観）それでも嬉しそうに（主にルチアの主観）手を握ってきた。

もうね！小さくてプニプニした手の感触とか最高の訳ですよ！

アースラ内の会議室。

「という訳で、本件に於いては特例として、問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら。」

「は、はい。ユーノ・スクライアです。」

「それから、彼の協力者である現地の魔導師さん。」

「た、高町なのはです。」

「ルチア・L・クラリーベルです。」

「以上三名が現地の協力者として、事態にあたってください。」

「「よろしくお願いします。」」

さすがに私だつてこついうところじゃあ礼儀を弁える。

…意外だと思つた奴、ちよつと来なさい。

とりあえず原作とは違い（私のおかげかな？）、身元は管理局の預かりにならず、あくまでも現地協力者となる。

そのため、リンディさんが間違っていると思えば、自分の意思で行動することができる。

これでラスト6個の時に自由に行動できる訳だ。

なのはちゃんと目を合わせて微笑みかけると笑顔を返してくれた。

ああもう可愛い！

ほんと可愛い！

<Side三人称>

ユーノの放ったチェインバインドが鳥のような思念体を縛り上げる。ちょうど今、三箇目のジュエルシードを捕獲するところである。

「捕まえた、なのは！」

「うん！」

苦しそうななきをあげる金色の鳥に封印魔法をぶつける。

光が周囲にほとばしり、封印が完了した。

そのジュエルシードをレイジングハートが回収。

「状況終了です。ジュエルシードNo.8、無事確保。お疲れ様、なのはちゃん、ユーノ君。」

アースラスタッフの一人が通信でねぎらい、それに答えるなのは。

「んー、二人ともなかなか優秀だわ。このままうちに欲しいくらい。」

ちなみにルチアはなのはを迎えに行ったためここにはいない。

そこに通信。

「またも、時空管理局大将かららしい。」

『やあ提督。調子はどうか？といっても、全部わかってるんだけ』

』

「こんにちは。全く人が悪いですわね。状況は見ての通り。こちらが回収できたのは3つで、あちらに出し抜かれたのが2つ。残りの6個はどこにあるのか…というところですよ。」

『あつちが6個でこちらには9個か。中々順調…とも言えないか。悪い訳ではないけど。』

「そうですね。」

難しい顔をするリンディ。

『ああそれと、あの黒い子の事なんだがね。あの子とプレシア・テスタロッサに何か関係があるかも、ということ位は掴んでいるだろう？』

「それくらいなら、まあ…」

『詳しく調べると面白いことが出てくるかもしれないと私は睨んでいるからね。そしてもう一つ。近頃第九十七管理外世界付近で見かける謎の生物についてだ。』

「もし出てきたら厄介ですが…」

『もしジュエルシートを複数個発動されたならば、確実に姿を現すだろうね。面白いことにこいつは、第五十四管理外世界のとある生物にそっくりなんだ。』

「…と申されますと？」

『その生物は、大気中にある魔力を呼吸とともに少しずつ吸い込んで大きく育っていくらしい。まあ人間よりはかなり成長スピードが遅いから、割とすぐに外敵に捕食されるらしいんだけど。でももし、それが運よく何百年とかの時間を生きながらえたら…と考えると？』
リンディはなるほど、と頷く。

保証や確証など何一つ無いが、つじつまは合う。

『まあ、発動なんてさせずに全部確保しちゃうのが一番いいんだけどね。多分結界使って最大まで押さえても7個以上は絶対に隠しきれないだろうから、十分に気をつけること。いいね？』

「了解しました。」

画面にむけて敬礼をするリンディ。

通信が切られ、椅子に座り込む。

「本当に、何事も起きないのが一番よね…」

アイスラ。妹。合力。（後書き）

さて、説明が入ったな。

K「うん。最後にはまさかの展開をこ用意してますのでご期待を！」

する人がいるのかねえ…

妹。なのは。六個の種。（前書き）

K「という訳で原作9話分を投稿。」

クロノが空気化していますので注意してください。

ではごうげ。

妹。なのは。六個の種。

第十九話

<Sideなのは>

エマージェンシーの音が鳴り響く。
走ってブリッジに向かう私。

「フェイトちゃん！」

巨大なモニターに映し出されていたのは、波と風と竜巻に今にも飲み込まれそうなフェイトちゃんだった。

「あの、私急いで現場に！」

「その必要は無いよ。放っておけばあの子は自滅する。」

一瞬息を飲んだ。

クロノ君、何を言ってるの…!?

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所を叩けばいい。」

「でも…!」

「今のうちに捕獲の準備を。」

「了解。」

背筋が冷えた。

なんて酷い判断を下すんだろう。

一瞬、この人達人間に見えなくなったほどだった。

「私たちは、常に最善の選択をとらないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実。」

「でも…」

リンディさんの顔は確かに優れなかった。

だけど…！

『なのはちゃん。』

思わずハッとする。

ルチアさん！？

振り返ると、ルチアさんが立っていた。

『行くところ？なのはちゃん。フェイトちゃんの所に。』

『なのは、行って。』

ルチアさんの隣にいたユーノ君からも念話が届く。

『僕がゲートを開くから。』

『私と一緒にいこう？なのはちゃん。』

でも…！

『迷ってる時間はあんまり無いわ、なのはちゃん。ユーノ、お願い。』

ユーノ君がゲートを作動させる。

「っ！君は！」

脇目もふらずゲートへ走る。

ユーノ君が、ここから先へは行かせないとばかりに手を広げた。

「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとりま
す！」

「あの子の結界内に、転送！」

同時に浮遊感を体が包んだ。

<Side三人称>

「さ、私達も行くよユーノ。」

「はい！」

アースラのブリッジ。

なのはが転送され、そしてすぐにユーノとルチアも転送して消え去った。

「くっ、艦長！」

「ええ、クロノ、すぐに追って！」

「っ！待ってください！」

クロノが転送ポートに走ろうとするが、スタッフに呼び止められる。

「何だ！？」

「彼女達が転移したと同時に黒衣の魔導師の結界の外側に、誰のものかは不明ですがもう一つ結界が発生！」

「な！？」

「中の座標の特定に時間がかかります！」

「くっ、急げ！」

「はい！」

そのまま解析作業に入るスタッフ達。

しかし、かなりの綿密さを持つ結界らしく、座標どころか中の状況さえわからない。

歯噛みするクロノ。

そこに入る、お馴染みの通信。

『やあ提督。調子はどうだい？といっても、全部知っているけど。』

「こんにちわ大将。全く人が悪いですね。」

『どこかで聞いたことのあるやり取りだね？まあ、とりあえず今はあの子達を行かせてあげなさい。元々彼女達は民間協力者だろう。君に行動を制限する権限は無いよ。』

「……」

『まあ君の考えを否定する気は無いけど、少しくらいはあの子達の事も考えてあげなさいな。』

「…はい。」

『とりあえず今はジュエルシートの回収をする。何が起きるかはわからないけど、くれぐれも油断しないで最後までやり切ること。結果がどうでも怒りはしないからさ。じゃ、よろしくね。』

プツンと通信が切れる。

「はあ…、あの子達にとっては私達はこの事件に必要なのかもしれないわね。」

無論そんなことは無いのだが、ここまでの流れやなのは達の事を見ていると、どうしてもそんな考えが浮かんできてしまつリンディであった。

海上。

(まずい…魔力がもうない…！)

降り注ぐ雷と荒れ狂う高波を必死にかわしながら、フェイトは考える。

(どうやってジュエルシードの封印を…クッ！こうしている間にも魔力が…！)

考えながら魔法を放ちつづけ、それでも妙案は出ず、悪戯に魔力を消費し続ける。

完全なる悪循環。

それでもフェイトは諦めない。

母の為に。

そして何より、温かな生活の為に。

(…っ！？)

瞬間感知した、強大な魔力。

何日か前に知った、白い女の子の魔力。

黒い雲を裂いた光。

現れたのは、足に桃色の羽を生やした白い魔導師。

「フェイトの邪魔を、するなあああ！」

雷の拘束を力付くで破り、なのはへと飛び掛かるアルフ。

しかし、それはユーノの防壁に阻まれた。

「違う、僕達は戦いに来たんじゃない！」

「とりあえず、まずはジュエルシードの停止が先決。このままだとまずいことになるよ。」

ユーノに続けて、既にバリアジャケットを展開し終えたルチアが言う。

「だから今は、封印のサポートを！」

そういつてユーノが打ち出した、幾条もの緑の鎖。

それは竜巻へと巻き付き、動きを制限する。

「「フェイトちゃん!」」

その間にフェイトへと近づく二人。

「手伝って!」

「三人で一緒に、あれを止めよう?」

なのはトルチアから行われるデイバイドエナジー。

『Power charge』

『Supplying complete』

『魔力譲渡、完了しました。』

「ん、ありがとう、ファーネライル!」

『当然の事をしたまです。』

「主のお礼くらい素直に受け取りなさい。」

『礼など欲しいとは言っておりません。私はやる事をやっただけすから。』

「…生意気ねえ。」

『一字一句全く同じ言葉を主に返したいのですが、許可をいただけますか?』

「出す訳無いでしょ!?!」

横で呆けるなのはとフェイト。

それを見て慌ててその場を取り繕う。

「…見苦しいところを見せちゃったね。」

『誰のせいとお思いで?』

「あんたのせいだろがっ!とにかく、そっちとこっちで半分こ!いいね?」

一方ユーノの方では。

更に抵抗を増す竜巻達。

「くっ…!」

必死で押し止めるユーノだが、気を抜くと吹き飛ばされてしまったろう。

「…!」

横から伸びる燈色の鎖。

狼形態のアルフが、ユーノと同じくチェーンバインドで竜巻の抵抗を押し止める。

それを見たなのは。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる！だから、今のうち！」

「三人でせーので、一気に封印！」

『Shooting mode』

なのはのデバイスが変形する。

そのまま雷を避けつつ、空中に魔法陣を展開して飛び乗る。

『Seeling form set up』

動かない主に代わり、バルディッシュがフォームを移行する。

「バルディッシュ……」

寡黙なるデバイスは喋らない。

しかしそのコアの輝きが、全てを物語っていた。

「ファーネライル。」

『砲撃準備、既に八割整っております。』

「流石ね。」

『光栄です。』

銀の魔法陣に乗ったルチア。

その表情は、今だに余裕。

「デイベインバスター、フルパワー。…行けるね？」

『All right, my master』

レイジングハートを構えるのは。

足元の魔法陣が巨大化する。

「ファーネライル。」

『万事完了しました。』

銀の魔法陣がルチアの前に展開される。

ルチアは自身のデバイスを後ろに引く。

フェイトも魔法陣を展開し、バルディッシュを上に向ける。

なのはのデバイスの周りに発生する、幾条もの環状魔法陣。

ルチアの魔法陣の前に発生する、魔力を圧縮した小さな魔法球。

フェイトの魔法陣からほとばしる、多量の電撃。

「せー…」

「のー」

合図。

「サンダー……」

「デイバイーン……」

「バースト……」

魔力が一気に増幅する。

そして。

「レイジーッッッ！」

「バスターッッッ！」

「ストリームッッッ！」

金の雷光、桃の砲撃、銀の閃光。

三つの砲撃が、ジュエルシールドを一気に封印した。

雨はまだ降っているが、すぐに止むだろう。

自然発生したものではなく、強大な魔力によって引き起こされた事だからだ。

そして、その元凶が目の前にある。

青く輝く、六個のジュエルシード。

「それじゃさっき言った通り、はいフェイトちゃん。」

ルチアの手によって、ジュエルシード三個がフェイトに渡される。

「…友達に、なりたいんだ。」

唐突になのはの口から漏れた言葉。

フェイトの目が見開かれる。

雲はやはりすぐに晴れて行き、輝く光が三人を照らしていた。

ようやく中の様子を確認できるようになったアースラ。

封印した六個のジュエルシードと、三人＋一人と一匹が映し出される。

しかし。

「っ！次元干渉!？」

休む隙もなく唐突に鳴り響くアラート。

「別次元から、本艦および戦闘区域に魔力攻撃来ます!あ、あと六秒!？」

「え!？」

別次元から、紫色の雷が襲い掛かる。

「うわあああああ!！」

シヨック体制をとる隙もなく、アースラに直撃する。

はたしてそれは、なのは達のいる海域にも降り注いだ。

「あ、母さん？」

フェイトがぼつりと零す。

そこにピンポイントで降り注ぐ雷。

フェイトは動けない。

「させ、るかあああ!！」

そこにルチアが割り込み、広域シールドを展開して防ぐ。

しかし、急拵えのシールドではかなりきつかった。

「アルフツ！フェイトちゃんを早くっ!！」

「言われなくても!！」

アルフが人型へと戻り、呆然としたままのフェイトを抱き抱え、ジ

ユエルシールド三つを持ち去っていった。

「っあ！」

何とか耐えきったルチアはシールドを解除する。

額に汗が滲む。

「ルチアさん！」

慌てて飛んできたのはに笑顔を向ける。

「どうやら、お話できるのはまた今度になっちゃいそうだね…」

一方、アースラ。

「逃走するわ、捕捉を！」

「駄目です！幾つかの機能が停止！」

「くっ…」

「機能回復まで、あと25秒！追い切れません！」

「…機能回復まで、対魔力防御。第二波に備えて。」

「はい…」

「それから、なのはさんとユーノ君。ルチアさんを回収します。」

妹。なのは。一時帰宅。(前書き)

K「うっ…日常会話は上手く書けないよう…」

精進あるのみ、だな。

無印編もあと少しで終わりなんだから、頑張れ頑張れ。

ではどしどし。

妹。なのは。一時帰宅。

第二十話

<Sideリンディ>

三人を帰艦させ、会議室へ。

中にいるのは私とクロノ、なのはさん、ユーノ君にルチアさんだ。

「あなたたちは民間協力者であるため、私から罰などを与えることはしません。しかし勝手な判断や行動で、あなたたちだけでなく周囲の人たちをも危険に巻き込んだかもしれないということをお知らせしてください。」

それがわかるのなら、今回の事については不問とします。いくら民間協力者だといっても、好き勝手になんでもやっていいという訳ではありませんからね？」

「はい。」

これで今回の事はおしまい。

それよりも…

「さて、問題はこれからね。クロノ。事件の大元について、なにか心当たりは？…まあ、私にも大方予想はついていますが。」

「恐らく艦長の考えている通りだと思います。エイミー、モニターに。」

「はいはい。」

長テーブルの真ん中より映像が映し出される。

その顔を見た瞬間、ルチアさんの顔がピクリと動いた。

…なにか知ってそうな顔ね。

まあいいわ。

とりあえずは…

「大方予想通りね。プレシア・テストロッサ…」

「はい。僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究の事故によって、放逐された人物です。」

モニターに映し出されたのは、全体的に暗色系の妙齡の女性。

「登録データと先の攻撃の魔力反応が一致しています。そしてあの少女、フェイトは恐らく…」

「フェイトちゃん、あの時…」

「母さんって呼んだね…」

なのはさんとルチアさんが続けて漏らす。

ということはやはり…

「親子…ね。」

「あ、その…」

なのはさんが怖ず怖ずと言う。

「驚いてたつて言うよりは…」

「怖がつてた…が正しいかな。」

ルチアさんが引き継ぐ。

…ふむ。

あの歳頃の女の子の反応なら、普通は驚く。

勿論、驚きの感情も少なからずあったのだろう。

しかし、恐怖の感情が強い…となると…。

「エイミー！プレシア女史について、もう少し詳しいデータを出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他何でも。」

「はいはい。すぐ探します。」

と喋って忙しなく指を動かす。

程なくして、エイミイの説明が始まる。

26年前の「ヒュウドラ」の事件。その後の顛末。

「家族との、行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは、綺麗さっぱり抹消されちゃってますね。今、本局に問い合わせ調べてもらっていますので…」

…事件の事はともかく、家族関係のデータが消えているというのは気になるわね。

「時間はどれくらい？」

「一両日中には。」

…材料が足りないわね。

あと二つか三つですべてのピースがはまりそうなのだけんど…

「とりあえずプレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した直後ではそうそう動きも取れないでしょう。」

また、こちらとしてもシステムの復旧や足取りを追うことに時間を割かなければいけないし…丁度いいわね。

三人には、一時帰宅を許可します。なのはちゃんには学校だってあるし、何よりご家族の方々に心配をかけすぎるのもよくないわ。」

「で、でも…」

なのはちゃんが言い淀むが、

「なのはちゃん、リンディさんの言う通りだよ。ここにいっても私たちがやることはあんまり無いし、ね?」

「うん…」

ルチアさんが諭してくれていた。

…本当、こういう所では頭が上がらないわね。

「それじゃあ昼ご飯はこちらで食べて、そしてから帰宅するといいわ。送りますよ。」

それまでは…そうね、適当に時間を潰してくれて構わないわ。」

「はい!ありがとうございます!」

「それじゃあ、失礼します。」

そう言っただけで会議室から出ていく三人。

さあ…やることは山積みだわ。

相手が稀代の大魔導師ともなれば、もしかしたら私も現場に出なければいけないかもしれないわね。

はあ…。

そこに入る通信。

相手はやはり…

『やあ提督。』

「こんにちわ大将。こちらの状況の説明はいりますか？」

『アースラに攻撃が来て、その犯人がプレシア・テスタロッサだということとは聞き及んでいるよ。…時空管理局の大将として君に命じておこう。情報が集まったら、任務をプレシア・テスタロッサの縛に変更せよ。いいね？』

「了解であります。…貴方は証拠を全て握っているでしょうに、回りくどいことをしますね。」

無論、彼はそんなことは一言も言っていない。

しかし、何となくそんな気がしたのだ。

『これは君達と、特にあの二人の女の子ともう一人の女性で解決しなければならぬものだからね。僕は口を出さないよ。』

「貴方がおっしゃるのであれば、私が反論する事などありませんわ。」

『そうか…健闘を祈っているよ。』

そういつて通信が切られる。

「とにかく、今は出来ることを一つずつこなしていくしかないのね

…」

<Side妹>

なのはちゃんの家でのリンディさんの話している内容に（嘘的な意味で）ビックリしつつ、次は私の家に。

念話をしてみた所、もう家にいるらしい。

「あらそうなの。ルチアさんのお姉さんも魔導師？」

「そうですよ。私、姉様には一回も勝ったこと無いんですよ…」

「…それは、凄いわね…」

すでに初日のクロノと何日かの戦闘で私の実力は実証済みなので（かなり加減はしているがそれでも相当な実力らしい）、かなり興味を持ったようだ。

そんな雑談をしていると家に到着。

意外と翠屋から近いのだ。

遠慮せずに扉を開ける。

「ただいま！」

「お邪魔しますわ。」

靴を脱いでるうちにお兄ちゃん…ここでは姉様で統一しよう。
姉様が玄関に迎えに来る。

「あらようこそいらっしやいました。妹から話は聞いています。何分急だった物で大したものはお出しできませんが…」

「あらお構いなく。突然押しかけたこちらが悪いのですし…」
そういつて笑いあう二人。

…何と言うか、もう慣れました。

リビングに通されるリンディさんにお茶と砂糖とミルクを出す姉様。

「あらありがとうございます。」

「用件に関しては存じ上げております。妹が何か粗相でもしでかしましたか？」

「いえいえそんな！ルチアさんはとても優秀な魔導師ですし、こちらとしてもとても助かっていますわ。」

当たり障りの無い話。

と、一瞬リンディさんの顔が強張った。

なんだろう？

しかし、その顔はやはりすぐに元に戻ってしまった。

「…それじゃあ、私はそろそろお暇します。」

「あらそうですか？またお会いできるといいですね。」

「ええ。じゃ、ルチアちゃん。また後で会いましょう？」

玄関にてかわされる、これまた当たり障りの無い会話。

そのまま帰路につくリンディさん。

「ふう、あー面倒臭い…」

見えなくなるなり素の口調に戻すお兄ちゃん。

「全くもう、リンディさんに何言ったの？一瞬顔強張ってたよ？」

「あー…念話でちよつとな。気にするな。」

「そんなこと言われたら余計に気になるよ！」

話しつつ、家の中へと入る。

…明日は、無印編のラストバトルの日。

絶対に、プレシアにはガツンと言ってやるんだから！

決闘。星光。時の庭園。（前書き）

K「もはや、語るまい……！」

ではどうぞ。

後書きにて、ファーネライルの機能の簡単な説明が入ります。

決闘。星光。時の庭園。

第二十一話

<Sideアルフ>

時の庭園に、海上で貰ったジュエルシールドを合わせた計9個のジュエルシールドを持ってきた。

そんなフェイトを、やはりプレシアは労った。

前回の態度を見れば、確かにおかしくは無い。

前回は優しい母親だったからだ。

しかし、それではあまりにも不自然だ。

あたし達がこの世界に来る前のプレシアは、本当に親とも言えないようなそれは酷い人間だった。

それこそフェイトを物みたいに扱うぐらいに。

だから。

フェイトが自分の部屋に戻って、寝静まる。

それを見計らって、私はプレシアの部屋へと忍び込む。

プレシアの部屋の奥の方。

石像と枯れた木が置かれた謎の部屋。

そこであいつは佇んでいた。

「たった9つ…これでも次元震は起こせるけど、これじゃ足りない…最低でもあと5個…あの使えないお人形…」

…今、何て言った？

「もうあまり時間が無いわ、私には…やはり、あんなのに任せるより私自身で行った方がまだよかつたわ…」

その声が聞こえた瞬間、私は物影から一気に飛び出した。

「うあああああつ！」

一気に胸倉を掴みあげる。

「やっぱりそんな考えを持ってたのか！？あなたは母親で！あの娘はあなたの娘だろ！あんなに頑張ってる子に嘘までついて！あの娘に何も思わないのかよ！」

そこで気づいた。

プレシアの眼に。

私を見てない…！？

一瞬その眼に呑まれた。

そして、プレシアの手が私の腹に添えられる。

衝撃。

「っ…あ！」

体に力が入らない。

足が震え、口の中に酸っぱいものが混じりはじめる。

顔を上げると、そこにはプレシア。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね…余分な感情が多すぎる。」

「あの娘は…あんたのために必死で…つく！」

プレシアがデバイスを起動する。

「邪魔よ…消えなさい！」

「っ！」

咄嗟に転移術式を発動させる。

攻撃が当たる寸前、ランダム転移。

ギリギリだったけど、何とか逃げられた。

ごめんフェイト…！

少しだけ待ってて…！

<Side妹>

昨日、アリサちゃんがアルフを拾ったと連絡があった。

…今日プレシア戦だと思ってたから、なんだか肩透かし。

と、とにかく明日の午前5時50分くらいかな？

海鳴臨海公園でジュエルシードを賭けてフェイトちゃんと決闘をするそうさ。

フェイトちゃんはジュエルシードを更に集めないといけない訳だから、絶対に来る。

そしたら、あの有名な決闘シーンだ！

私は期待感と決意を胸に込め、眠りにつくのであった。

朝5時。

凄い快適な目覚めだった。

流石にお兄ちゃんは寝てるかなと思ったけど、普通に起きて朝ご飯の準備してた。

「おう、起きたか馬鹿妹。そこにサンドイッチ置いてあるから食ってけ。」

「…もういいや。有り難くいただきます。」

…うん、おいしい。

「今日は無印の最終日だったか？」

「ん？そつだよ。あのババアにはビシッと一言言ってやらないと気が済まないからね！」

そついうとお兄ちゃんは溜息を一つ。

「一つだけ言うておくが…ハーレムを作るとか言っただったら、どんな結果になるうともあの娘の傍にいてやれ。絶対にだ。」

「そんなの当たり前だよ！フェイトちゃんもなのはちゃんも、絶対に見捨てたりなんかしない！私は皆好きだもん！」

言つと、もうひとつ溜息。

「ならいいや。適当に頑張つて来い。」

「言われなくても！」

私が着いた時、もう決闘は始まる寸前だった。

地上でレイジングハートを構えるのはちゃんと、空中でバルディッシュを構えるフェイトちゃん。

「や、二人とも。」

「ルチアさん！」

「ごめんね、ちょっと遅れちゃった。で、フェイトちゃん。」

フェイトちゃんは無言。

「私は手を出さないよ。ただ見届けに来ただけ……」

二人から離れ、デバイスを待機状態に戻す。

「二人とも、どうぞ?」

<Side三人称>

言った瞬間二人が空中に飛び出し、互いのデバイスをぶつけ合った。

両者ともに離れ、射撃魔法を展開する。

「ファイアッ！」

「シュートッ！」

互いの攻撃が交差し、相手へ飛んでいく。

なのはの誘導弾を避けられないと判断したフェイトは、シールドでそれを防ぐ。

一瞬の閃光とともにバリアが壊れる。

しかし、目に映ったのは新たに射撃魔法を展開するなのは。

「シュートッ！」

新たにフェイトへと向かう計五個の魔法弾。

『Scythe Form』

一タシールドで防くと魔力が足りなくなると考えたフェイトは、魔力刃で誘導弾を切り裂きながら一気に突進。

『Round Shield』

フェイトの速さに驚いたなのはは、すぐさまシールドを展開。

鎌の先端と円盾の面が激突する。

拮抗。

フェイトの後ろからなのはの魔力弾が迫って来る。

さっき撃った時に、一発を空中で待機させておき、それを誘導して時間差で攻撃を仕掛けたのだ。

それに気づいたフェイトが、防御魔法で受ける。

それに気を取られている隙に、なのはが視界から消える。

「せえええええっ!!!」

さっきのフェイトと同じように、上空からの突撃。

互いのデバイスがまたもぶつかり、火花が飛び散る。

魔力爆発。

辺りが光に包まれ、一瞬なのはは周りが見えなくなる。

その間に上空へ回り込み、鎌を振り下ろすフェイト。

レイジングハートが飛行魔法でなのはの体をずらし直撃を避けた。

リボンの一部が切り飛ばされる。

なのはが距離をとろうとするが、振り返った所には魔力弾。

「つく！」

『Fire』

バルディツシユの掛け声とともに発射される多数の雷。

シールドで直撃する物だけを何とか反らし、堪えるのは。

距離が離れる。。

二人とも苦しそくに肩で息をする。

しかし、これはある意味当然といえよう。

いくらなのは才能があるといってもいくらフェイトが訓練を受けたといっても、所詮彼女達は9歳の体。

まだ体力もそこまでついてはいないし、体を鍛えている訳でも無い。

まして、魔法を使うときにもまだまだ無駄が多い。

こう言うてはなんだが、悪戯に魔力と体力を使っているだけなのだ。睨み合う二人。

このままでは危ないと踏んだフェイトが、儀式魔法の準備を始めた。

杖を構えたフェイトの足元に巨大な魔法陣。

そして、空中にも大量の魔法陣が現れては消えて行く。

『Phalanx Shift』

その声と同時、フェイトの周りに浮かぶ桁違いの数の魔力弾。

咄嗟に離れようとするのはだったが、四肢を拘束されてしまう。

『まずいよ、フェイトは本気だ!』

『なのは!今サポートを!』

「だめだよユーノ!」

その念話を止めたのはルチア。

「アルフもユーノも、手を出しちゃダメ。」

『そうだよ、これは全力全開の一騎打ちだから。私とフェイトちゃんの勝負だから!』

『でも、フェイトのそれはホントにまずいんだよ!』

『平気!』

「心配するのも良いけど、少しはなのはちゃんを信じてみなさい。」

その言葉を聞いて口をつぐむ二人。

「アルカス、クルタス、エイギアス…」

フェイトの詠唱が響き、雷球が輝く。

「フォトンランサーフランクスシフト…ッ!」

フェイトが手を掲げると、いっそう魔法弾の輝きが増加する。

「打ち砕け！ファイアツツ！」

掛け声と同時に、雷球が速度と破壊力をもってなのはに向けて打ち出される。

その数は余裕で二桁を越える。

打ち出した後からすぐさま次弾が装填され、また打ち出される。

それらは、すべてなのはに向かった。

爆音、炸裂、衝撃。

なのはの姿は煙で全く見えない。

残り数発となった弾を一カ所に収縮し、とどめの準備を完了する。

しかし、フェイトにも余裕は無い。

息は荒れ、体力も無く、既に限界に近い。

煙が晴れる。

「たはー…撃ち終わると、バインドっていうのも解けちゃうんだね。」

そこにいたのは、デバイスをシューティングモードに変えたなのは。

しかも、あまり目だった外傷は見られない。

驚愕するフェイト。

当然だ。あれは自分の魔法の中でも最大級の威力を誇る。

それをノーダメージで耐え切るなんて…

「今度はこっちの…番だよ！」

『Divine buster』

強大な魔力をもってこちらへと打ち出される砲撃。

「う、あああああっ！」

無我夢中で手の中のスフィアで迎撃を試みるも、そんなもので止められる物ではない。

即効で破壊され、フェイトへと襲い掛かる。

最後の力を使ってシールドを作り出す。

激突。

気を抜けば吹っ飛んでしまうような衝撃がフェイトを襲う。

(くっ…重い…！でも、耐えて見せる…あの子だって耐えたんだから…)

衝撃で服と手袋が破れる。

時間にして数秒、しかしフェイトにとっては数分にも感じられたその砲撃が途切れる。

もう飛行魔法だけで精一杯の魔力しか残っていない。

そこに降り懸かる桃色の光。

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション…！」

『Starlight breaker』

フェイトの物よりも、更に巨大な魔法陣。

周囲から魔力が収束する。

当然フェイトは残った魔力で逃げ出そうと思うが、

「っ！？バインド…！？」

さっき自分がやった事。

バインドで四肢を縛られ、身動きが取れなくなる。

「これが私の、全力全開っ！」

デバイスをフェイトに向ける。

「スターライト…ブレイカーッ…！」

放たれたのは、後に管理局で最高レベルの砲撃。

空中からの巨大砲撃は、動けないままのフェイトを貫いた。

レイジングハートが溜まった熱を排出する。

魔力の限界が近いのか、飛行魔法も消えかけ。

そして、

「っ！フェイトちゃん！」

魔力ダメージで気絶したフェイトが落下する。

それを追おうとしたのはだが、

「よっ、と。」

ルチアが途中でフェイトを抱え上げた。

勿論というか何と言うか、お姫様抱っこである。

抱えられた衝撃でフェイトが目を覚ました。

ルチアがなのはの近くまで飛んで来る。

「気がついたね。」

「ごめんね…大丈夫？」

「…うん…」

「私の…勝ちだよな。」

「そう…みたいだね。」

『P u t o u t』

バルディッシュユがジュエルシードを排出する。

「…飛べるかな？」

「…はい。」

ルチアにことわり、空に浮くフェイト。

若干名残惜しそうなルチアであるが。

クロノから念話が届く。

『よし、なのは、ルチアさん、ジュエルシードを確保して。それから彼女を…』

『いや…来た!』

空に渦ができ、そこから紫色の雷が降り注ぐ。

「だから、やらせないってえの!」

『サークルプロテクト!』

ルチアが防御魔法で雷を防ぐが、防御で手一杯。

その間にジュエルシードを持ち去られてしまう。

<Side三人称、アースラ側>

「ビンゴ!尻尾掴んだ!」

コンソールを高速で叩くエイミー。

「よし、座標を!」

「もう割り出して、送ってるよ!」

対してアースラブリッジ。

「武装局員!転送ポートから出動!任務は、プレシア・テストアロツサの身柄確保です!」

《ハッ!》

そういつて、約30人の局員が時の庭園内に転移する。

「第一部隊、転送完了!」

「第一小隊、侵入開始!」

ブリッジに、なのはとルチア、ユーノ、アルフ、そして白い病人服のような服を着て、手錠をかけられたフェイトが入ってきた。

「お疲れ様。それから…フェイトさん。始めまして。」

フェイトは俯いたまま答えない。

『…母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。なのはさん、ルチアさん。彼女をどこか別の部屋へ。』

『あ、は、はい。』

「フェイトちゃん、よかつたら私の部屋…」

言い終わる前に前へと踏み出すフェイト。

「総員、玉座の間に侵入、目標を発見！」

武装局員の一人が言う。

「プレシア・テストロツサ！時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で貴女を逮捕します！」

「武装を解除して、こちらへ。」

プレシアは動かない。

デバイスを構えたままプレシアを取り囲み、一部の武装局員は玉座の裏へ回る。

「なんだ？なにかあるぞ！」

そこにあっただのは隠し扉のような物。

デバイスを使って電子錠を解除する。

「こ、これは…。」

「え…！？」

ブリッジでも、なのはとフェイト、ユーノとアルフが声をあげる。

そこは、おそらく実験室だろう。

所々に蔦が生え、かなり古いものだとわかる。

そこにあっただのは、

「フェイト、ちゃん…？」

一際大きなポッドに入った、液体内に漂う小さな少女であった。

決闘。星光。時の庭園。（後書き）

フアーネライル

機能

モード1・2・3がある。

1・2・3ともに更に更に武器のモードに別れる。

・モード1

取り回しがよく、扱いやすい武装となっている。

・ハルバード（所謂斧槍。斬ってよし、振ってよし、突いてよし。）

・ツインセイバー（両端のコア両方から刃が出る。一対多にも一対一にも使える武器。）

・燕月刀（片方のコアからサーベルのような魔力刃が出る。ハルバードよりも早さ優先。）

モード2

フアーネライルを2本にわけ、二刀流にする。

また、持ち手の部分が縮まる。

・剣（つまりは二刀流。両刃の剣なので、手数が多い。）

・ダガー（ティアナと似ている。）

モード3

未だ不明。

K「そのうち詳しく書くかもです。」

真実。激怒。抱擁。(前書き)

K「ちやかちやか投稿。タイトル間違っていたので修正しました。」

それではどうぞー

真実。激怒。抱擁。

第二十二話

<Side 三人称>

「ぐわあっ!」

隠し部屋の生体ポッドに近づいた武装局員が吹き飛ばされる。

いつの間にかポッドの前に立っていたプレシアの仕業であった。

「私のアリシアに…近寄らないで!」

憎しみを込めた目で睨むプレシア。

「う…撃てーっ!」

武装局員達の砲撃魔法が一斉にプレシアに放たれるが、障壁によって完璧に阻まれてしまう。

「うるさいわ…」

「危ない、防いで!」

リンディの言葉が放たれた瞬間、プレシアの大魔法で吹き飛ばされる。

嘲笑をあげるプレシア。

リンディが局員達の送還を命じる。

「アリ…シア…？」

フェイトが呟いた名前。

夢の中で母が呼んだ名前。

「もう駄目ね…時間が無いわ。たった九個のロストロギアでは、アルハザードに辿り着けるかどうかはわからないけど…」

自分を見ているであろう管理局と、フェイトに向けてプレシアは喋る。

「もういいわ。終わりにする。…この子を亡くしてからの暗鬱な時間を、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも。」

アースラにいるのはとフェイトの目が見開かれる。

「聞いていて？あなたの事よフェイト。」

プレシアは喋る。その言葉に狂気を滲ませながら。

「折角アリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない、私のお人形。」

エイミィが辛そうに目を伏せる。

「…最初の事故の時にね、プレシアは実の娘…アリシア・テストロツサを亡くしているの。」

エイミイがプレシアの事を調べていくうちにわかった残酷な事実。

「彼女が最後に行っていた研究は、「使い魔とは異なる使い魔を越える人造生命の精製」…そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は、当時彼女の研究につけられた開発コードなの。」

その時のフェイトの心境は如何なものであっただろうか。

嘘だ、否定してほしい、私は母さんの娘だ！

こう叫んで、それが本当の事だったらどれだけよかっただろうか。

「よく調べたわねえ。そうよ、その通り。」

その希望は、一瞬であっさりと砕け散ってしまったが。

「けれど駄目ね。ちっとも上手く行かなかった…。作り物の命は所詮作り物…失った物の代わりにはならないわ…。」

愛できるようにアリシアの入ったポッドを撫でる。

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。」

「やめて…。」

掠れた声で懇願するなのは。

「アリシアは…いつでも私に優しくかった…」

耳を貸さずに続ける。

「フェイト…やっぱりあなたは、アリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった。」

「やめて…やめてよ！」

殆ど泣いたような声でなのはが言う。

「アリシアを蘇らせる間に、私が慰みに使っただけのお人形。だからあなたはもういらないわ。何処へなりとも消えなさい！」

「お願い！もうやめて！」

「あはは…あはははは！良いことを教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してからずっとね…私はあなたが…大嫌いだったのよ！」

フェイトの目から光が消え、バルディッシュが砕ける。

力の入らなくなった体を支えたのは、今まで一言も喋らなかったルチア。

同時に、局員の回収が完了。

そして、時の庭園内に大量の傀儡兵が起動する。

「プレシア・テストロツサ…一体何をするつもり!？」

「私たちの旅を…邪魔されたくないのよ。」

玉座の間へと出てきたプレシアは、ジュエルシード9個を発動させる。

「私たちは旅立つのよ!忘れられた都…アルハザードへ!」

画面に背を向け、顔は見えない。

しかし、言葉から狂気が見え隠れする。

「この力で旅だって、私たちは取り戻すのよ!全てを!!!」

「ふざけるなあっ!!!」

次元震が発動し、リンディとアースラススタッフが指示をこなす。

その中で、ルチアが声をあげた。

「プレシア・テストロツサッ!

貴女がアルハザードへ行くのも、失われた過去を取り戻そうとするのも勝手だ!

だけど!そんなことは一人でやれ!

周りを巻き込むな!

そして…そんなことのためだけに、フェイトちゃんを使っなッ!」

「何度も言っているでしょう!？」

その子は所詮お人形、どうなるうが私の勝手よ!」

「冗談じゃないっ！
生まれがどうであっても、自分で腹を痛めて産んだ子で無くとも！
フェイトちゃんの親はあんたなんだっ！
愛情を注いであげるのはあんたなんだっ！」

「フェイトは所詮アリシアの代わり！
コピー！偽者！
そんなものに愛情を注ぐ必要なんて無い！」

「違う！
フェイトちゃんはアリシアのコピーじゃない！
例えアリシアを元にして生まれた子供であろうとも、ここにいるの
は「フェイト・テスタロツサ」という一人の人間だっ！」

「貴女の問答に付き合うヒマはないわ。
一刻も早くアリシアに会わなければいけないのよ…！」

「過去を捨てなさい！
現実を見なさいっ！
死者蘇生は神にしか許されない事柄！
例えアルハザードに行っただとところで、貴女の求めるものは何も無い
！」

「あなたに何がわかるというの！」

「わかる訳が無い！
私はあなたではないもの！」

「だったら放っておけば良いでしょうに！」

「放つては置けないわ！」

「フェイトちゃんのためにも、あなたを止める！」

「来たいのなら来れば良い！」

「止められるものなら止めてみなさい！」

プレシアに背を向けフェイトを抱き上げ、なのはとルチア達は走る。

まずはフェイトをどうにかしないと、この事件の本当の終わりは見えないからだ。

途中、クロノと鉢合わせる。

「クロノ君、どこへ？」

「現地に向かう。元凶を叩かないと。」

「私も行く！」

「…僕も」

「私はフェイトちゃんを少し見てから行くわ。すぐに向かうから先に行つてなさい。」

「…わかった。」

その時、リンディから念話が届く。

『皆さん、私も現地に出ます。あなたたちはプレシア・テストロッツ

サの逮捕を！」

『『『了解！』』』

アースラ内の医務室。

ベッドには、表情を無くしたフェイトが横たわり、その横にルチアがいる。

アルフは、なのはを手伝いに出て行った。

また、元の優しいフェイトを見せてほしいと言い残して。

沈黙する部屋。

「…ねえ、フェイトちゃん。」

ルチアが話し掛けるが、反応は無し。

「ちゃんとした自己紹介、したこと無かったね。私は、ルチア・L・クラリーベル。フリーの魔導師をやってるわ。

うちには、口うるさいけど優しい姉様がいて、二人暮らし。」

ルチアの話は続くが、やはりフェイトは返さない。

「…愚痴なら、聞いてあげるよ?。」

ベッドに横たわるフェイトを己の胸に抱きしめる。

「今なら、私しかないから。自分の中に溜め込むと、いつか爆発しちゃうよ。」

「…母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった。」

ポツリと、言葉を漏らす。

一度流れてしまえば、後は止まらない。

「私が生きていたって思ったのも、母さんに認めてほしかったから。」

どんなに足りないと言われても、どんなに酷いことをされても。

…だけど。笑ってほしかった。

あんなにはつきりと捨てられた今でも、私、まだ母さんにすがりついている。」

無意識にであろつ。

温もりを求めるようにルチアの服の袖を握るフェイト。

そんなフェイトを深く、されど優しく抱きしめて背中をさするルチア。

今のルチアには、フラグだの好感度だのという考えは微塵も無い。

一人の人間として、フェイトを抱きしめているのであった。

「アルフには、ずっと我が儘を言ってきた。そんな私を、多分悲しんだ。」

知らず知らずの内に、服を握る手に力が籠る。

「何度もぶつかつたあの白い子…ちゃんと私と向き合ってくれた子…何度も出会つて戦つて…何度も私の名前を呼んでくれた。」

そしてあなた…はつきりと、私の味方だと言ってくれた。いつでも笑顔を向けてくれた。

多分私の為に…母さんに怒ってくれた。」

「うん…その通りだよ。」

「生きていたいと思つたのは、母さんに認めてもらいたいからだつた。」

…それ以外に、生きる意味なんか無いと思つてた。

それが出来なきゃ、生きていけないんだと思つてた。」

いつの間にかフェイトの目からは涙がこぼれ落ち、ルチアの服に染みを作っていた。

「捨てれば良いって訳じゃない。」

逃げれば良いって訳じゃ、もつと無い。」

フェイトが顔をあげる。

前と変わらない、微笑み。

ルチアが抱きしめていた腕を離す。

ポロポロのバルディッシュを手に取る。

「私の…私達の全ては、まだ始まってもない…」

バルディッシュを杖の状態へ。

「…そうなのかな…っ、バルディッシュ…！ルチアさん…っ！」

震える声。

「私、まだ始まってもいなかったのかな…っ！」

『…Get set』

ギシギシと嫌な音を立ててバルディッシュが答える。

「始まっていないんだったら…始めに行こう？フェイトちゃんを。」

バルディッシュを胸に抱くフェイトを、また後ろから抱きしめる。

小さな軀を壊さないように。

包み込むように優しく。

「おまえも、このまま終わるなんて嫌だよね…っ！」

『Yes Ser』

バルディッシュのコアが煌めく。

ルチアがそっと離れる。

「上手く出来るかわからないけど…一緒に頑張ろう。」

バルディツシユが光に包まれ、元の姿を取り戻す。

後の「金の死神」の異名となる、黒い戦斧へと。

『Recovery』

「フアーネライル。」

『了解いたしました。』

ルチアのイヤリングも、杖へと変化する。

二人がバリアジャケットを纏う。

「さ、行こう？フェイトちゃん。本当のあなたを始めるために。今までのあなたを終わらせるために。」

足元に、ルチアの銀の魔法陣が展開される。

「…はい。」

決意の籠ったフェイトの言葉と同時。

部屋から二人が消えて行った。

目指すは時の庭園。

一方。

時の庭園からはかなりの距離がある、第九十二管理外世界周辺の次元空間。

とある存在が振り向いた。

複数のロストログアによる、大量の魔力。

そしてそれを増幅させている何か。

こんな餌を見逃すのは惜しい。

そう考えたそれは、第九十二管理外世界から離れ高速でその場所…時の庭園に向かった。

第九十二管理外世界。

そこではちょうど今日、魔力の含有量の多い鉱石の発掘される山が丸ごと無くなるという事件が起こったばかりである。

突入。合流。駆動炉へ。（前書き）

後書きで聞こうか？

K「だが断る。」

しかし答えは聞いてない。

K「なん…だと…」

ではどうせ。

突入。合流。駆動炉へ。

第二十三話

ルチアとフェイト、アルフが医務室に向かった時。

なのは、クロノ、ユーノの三人は時の庭園の正面玄関にいた。

雷鳴轟くこの場所には、ざっと見て20体あまりの傀儡兵が集結していた。

剣と盾を持つもの、巨大な斧を担ぐもの、空を飛び槍を構えるものと様々である。

「い、いっぱいいるね…」

「まだ入口だ、中にはもっというよ。」

少々圧倒されたユーノに冷静に答える。

「クロノ君、この子達って…」

「近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械だよ。」

先頭の傀儡兵が一步踏み出すもどこ吹く風。

「そっか、なら安心だ。」

「…この程度の相手に、無駄玉は必要無いよ。」

その口調は、この程度は障害にならないと物語っている。

『Stinger Sniper』

クロノの持つストレージデバイスから出たのは、多少大きめではあるがたった一発の魔力弾。

通常、こういう殲滅戦ならば砲撃魔法を使うのが一般的…というか、殆どの魔導師がそうする。

それは単純な威力の問題だし、一機に一発ずつ撃つなんて単に時間の無駄だからである。

しかし…どこにでも必ず例外というものがある。

クロノが放った一発の魔力弾は迫る傀儡兵を尽く打ち砕き、勢いを落とさないままに空中へと上がる。

「スナイプショットオっ！」

驚くなのは達を尻目に、魔力弾は傀儡兵を一気に破壊していく。

とてつもなく繊細で、無駄が無い。

勿論、これがただの犯罪者相手なら、クロノでも砲撃魔法を撃つただろう。

しかし、今回の相手は大魔導師プレシア・テストロッサ。

しかも、まだまだ傀儡兵も大量に残っているはず。

出来る限り少ない魔力で、出来る限り多く倒す。

それがこの場面での最良である。

最後に控えた巨大な傀儡兵が魔法弾を耐えたのを見たクロノは跳躍。

『 Brake Impulse 』

振り下ろされた斧をかわし、振動破砕で打ち砕いた。

「ボーツとしてないで、行くよ！」

「う、うん！」

「アースラの切り札」の名に相応しい実力を見せ付けられて呆然と
していたのは達だったが、気を取り直して内部へと進入する。
内部の回廊には所々穴が開き、白と黒の空間が覗き込んでいる。

「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて！」

「え？」

「虚数空間！あらゆる魔法が、一切発動しなくなる空間なんだ！飛行魔法もデリートされる。落ちたら重力に引き込まれて落下する！二度と上がってこれないよ！」

「き、気をつける！」

虚数空間に落ちて魔導師が行方不明になってしまふことは時たまにある。

それらの殆どは空戦魔導師だ。

空戦魔導師は移動に魔法を使うことが多く、穴に落ちた時に咄嗟に地面に捕まるなどということが出来ないのだ。

クロノが扉を蹴破る。

そこにいたのは、入口とは比べものにならない量の傀儡兵。

「ここから二手に別れる。君達は最上階にある駆動炉の封印を！」

「クロノ君は？」

「プレシアの元へ行く。それが僕の仕事だからね。…今道を作るから、そしたら！」

「うん！」

クロノがデバイスを構え、なのはがユーノを抱き抱える。

『blaze cannon』

クロノの砲撃が傀儡兵を吹き飛ばす。

「クロノ君！気をつけてね！」

その言葉に笑顔を浮かべるクロノ。

…ちょっとクロノ後で来い。

アルフが合流したなのは達は、駆動炉を目指し上へと向かう。

しかし…

「くっ…数が多い！」

アルフが吠える。

駆動炉はプレシアの目的の大事な歯車の一つ。

それだけに、途中に配置されている傀儡兵もかなりの数が揃えてあった。

「何とかしないと…」

チエーンバインドで四機の傀儡兵を押さえていたユーノだったが抵抗に負けて鎖が引きちぎられ、四機がなのはの元へと殺到する。

「なのはっ！」

なのはが気づいた時には斧や槍を振りかぶった傀儡兵がすぐそこまで迫っていた。

これまでかと目をつぶるなのは。

『Thunder Raise』

『Flush Lay』

金と銀が降り注ぐ。

四機の兵は、抵抗できずに撃ち落とされた。

『Get set』

『装填』

「サンダー…レイジーッッッ！」

「フラッシュレイッッッ！」

金の雷と銀の弾丸が降り注ぎ、全ての傀儡兵を爆破させる。

二人がなのはの前におりる。

三人がいい雰囲気になった所で現れる、褐色の巨大な傀儡兵。

クロノほどではないがこいつも大概KYである。

「大型だね。バリアが強い。」

「うん…それにあの背中…」

ルチアとなのはが冷静な分析を口に出す。

傀儡兵が背中の三門の砲塔にエネルギーを充填する。

「…だけど。三人でなら。」

「…っ！うん、うんうん！」

「そうだね。それじゃあすぐに終わらせようか！」

笑みを零すのはトルチア。

「行くよ、バルディツシュ！」

『Get set』

「こつちもだよ、レイジングハート！」

『Stand by Ready』

「ファーネライル？」

『万事完了しております。』

フェイトが魔法陣を前面に展開する。

なのはのレイジングハートを環状魔法陣が包む。

ルチアが魔法球にむけてデバイスを振りかぶる。

「サンダー…バスターツツツ！」

「デイベイーン…バスターツツツ！」

「ラファール…バスターツツツ！」

バリアによって阻まれるが、それも一瞬。

「…「セー…のっ！」」

三人の全力の砲撃は、時の庭園の二画を吹き飛ばした。

三人のデバイスから蒸気が排出される。

「フェイトちゃん、ルチアさん！」

「フェイト、フェイト、フェイト！」

なのはとアルフが駆け寄って来る。

「…心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ。本当の私を…」

駆動炉に続く扉を吹き飛ばし、傀儡兵と相対する5人。

「あそこのエレベーターから、駆動炉に向かえる。」

「うん、ありがとう…！…フェイトちゃんは、お母さんのところだ？」

「…うん。」

「私…その、上手く言えないけど。」

固く握られた拳に自分の手を重ね合わせるなのは。

「…頑張つて。」

ルチアも、その上から手を重ねる。

「言いたいこと。はっきりと伝えてきなさい?」

「…ありがとう。」

「今、クロノが一人で向かってる。急がないと間に合わないよ、早く行きなさい。すぐに合流するから。」

「うん。」

フェイトとアルフと別れ、エレベーターに乗り駆動炉へ。

「うわ…」

思わず嫌そうな声を出してしまったルチアを責めることは出来ないだろう。

ぱっと見で100体前後の傀儡兵。

ぶっちゃけやる気が失せる数だ。

「まあ言ってもしょうがないか…」

「防御は僕達がやる。なのはは封印に集中して。」

「うん。…いつも通りだよ。いつも私と一緒にいて、守っててくれたよね…。」

「今度はそれに私もいる。大丈夫だよ。一機も通さない。」

「はいっ!」

『Sealing mode』

「今の私にはユーノ君もルチアさんもいる…大丈夫…!」
生み出される計四つの魔力弾。

しかし、封印用のそれは籠る魔力が段違いであった。

「行くよ! デイバインシューター、フルパワーっ!」

<Sideリンディ>

「…私も出ます。庭園内でディストーションシールドを展開して、次元震の進行を押さえます!」

…状況は良くも悪くも無いといったところだろう。

クロノは順調に下層へと向かっているし、なのはさん達も駆動炉で

戦闘を開始している。

このペースでいけば、ジュエルシードの被害を拡散させる前に到着できるだろう。

しかし…

（これだけの高魔力が流れ出した…そしてまだあれがこの世界周辺にいるとしたら…）

あれが来る前に確実にジュエルシードを確保しなければならない。

でなければ…

「エイミー！あれの反応はある！？」

「…周辺世界付近の次元海には反応ありません！大丈夫…行けるよ。」

「ああ！すぐに終わらせるさー！」

我が息子の頼りがいのある返事。

私も頑張らないと行けないわね。

「出るわ。エイミー、本艦の守りは任せます。」

「了解！」

転移魔法で時の庭園に移動する。

反応を感知して傀儡兵が襲って来るが、この程度は物の数ではない。
すぐに破壊し、念話でプレシアに話し掛ける。

『プレシア・テストロッサ、終わりです。』

突入。合流。駆動炉へ。（後書き）

で、なんで遅くなったんだ？

K「学校関係で色々…」

他は？

K「アニメが見れなかった…」

ああ、TSUTAYAか。

K「うん。見る時間が最近ガリガリと削られてて…」

凄い微妙な所で切っちゃってごめんなさい。次回でちゃんと終わらせます！」

ではまた。

イレギュラー。(前書き)

…

K「ごめんなさい。」

遅すぎるな。何やってたんだ？

K「いや、何やってたとかじゃなくて…純粋にアニメが見れなくて…」

それとかなり短くないか？

K「ぶっちゃけた話、あんまり話を長くする必要が無いんだよね。続きは後書きで…」

ではごいじょう。

イレギュラー。

第二十四話

「終わりです。次元震は、私が押さえています。」

時の庭園上層部。

残骸になった傀儡兵の中心で魔法陣を作りだし、背中から四枚の羽を模した魔力を放出しているリンディ。

提督の名に恥じぬ実力をもって、被害を押さえている。

「駆動炉もじき封印。貴女の元へは、執務官が向かっています。」

語りかけるのは、庭園深部にいるプレシア。

「忘れられし都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、只の伝説です。」

言い切るリンディ。

しかし、そんな言葉一つで止まるなら、こんな事件は起きていない。

「違うわ…アルハザードは道は次元の狭間にある。時間と空間が現れた時、その狭間に存在する輝き…道は確かに、そこにある！」

「ずいぶんと分の悪い賭けだわ。…貴女はそこに行って、何をする

の？失われた時間を、侵した過ちを取り戻すの？」

既に駆動炉の封印は完了し、庭園内の全員がプレシアの元へと向かっている。

「…そう。私は取り戻す。私とアリシアの、過去と未来を…！」

ふとリンデイが違和感を感じた。

彼女が放つ言葉には、確かに狂気や決意、悲壮感が感じられる、それは間違いない。

しかし、それだけでは無いような気がした。

あくまでもただの勘ではあるが。

「取り戻すのよ…こんな筈じゃなかった…世界の凡てを！」

爆音。

プレシアは目を向けずに、アリシアの入った生体ポッドへ縋り付く。

爆音の元は、額から血を流し、それでもまだまだ正義に満ち溢れた目をした少年。

「世界は、いつだって「こんな筈じゃ無い」ことばかりだよ！
ずっと昔から…いつだって誰だってそうなんだ！

こんな筈じゃ無い現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！」

さらに下層へと下りて来る影が二つ。

フェイトとアルフだ。

「だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！」

すごいいいことを言っているが、ぶっちゃけルチアがアースラ内で言った内容と余り変わらないという。

クロノ…マジ哀れ。

「うっ…ゴホッ、ゴホッ！」

体に限界が来たのか。咳込むプレシア。

「っ、母さん！」

「何をしに来たの…！」

駆け寄ろうとするフェイトの方は向かず声を荒げるプレシアに、思わず立ち止まってしまふフェイト。

「消えなさい…もうあなたに用はないわ。」

相変わらず、その口から出るのは冷たい言葉。

しかし、フェイトも今までのフェイトではない。

「…あなたに、言いたい事があってきました。」

心配そうな目を向けるアルフに、目線で大丈夫と告げると。

「私は…私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかも知れません。」

駆動炉は既に封印され、リンディのお陰もあつて次元震は収束に向かつてている。

ルチア、なのは、ユーノは、下層へと急いでいる。

このまま行けば、フェイトの独白が終わる前には到着するだろう。

「だけど…私はフェイト・テスタロッサ。あなたに生み出してもらつて、育ててもらつた、あなたの娘です！」

「フッフ…ハ、アハハハハ…だから何？あなたを娘と思えというの？」

「あなたが、それを望むなら…それを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る。私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが…私の母さんだから！」

そういつて手を差し延べるフェイト。

そこに、ルチア達が下りて来る。

「プレシア。…この子の覚悟は本物なのよ。」

「プレシアさん…フェイトちゃんの事を考えたことは、本当に一度

も無いの…?」

二人が声をかけるが、プレシアはこちらの方を向かない。

プレシアが、突然杖で地面を叩く。

巨大な魔法陣が構築され、次元震の規模が膨らむ。

「くっ、まずい!」

『艦長! 駄目です、庭園が崩れます、戻ってください! この規模の崩壊なら、次元断層は起こりませんから! クロノ君達も脱出して! 崩壊まで、もう時間が…何これ!?』

『どっしたのエイミー!?』

「まさか…」

一度始まった次元震が収束していき、エイミー、リンディ、クロノの顔が青くなっていく。

『超高魔力熱源体接近! 時の庭園到着まで、あと三十秒!』

「くっ、仕方ない! 脱出を最優先する! フェイト・テストロッサ! 高町なのは! ルチア・L・クラリーベル! ユーノ・スクライア! アルフ! 早く脱出を! …三人とも!」

アルフ・ユーノは聞き入れたが、フェイトは答えない。

なのははフェイトを説得している。

そして、ルチアは…

(…超高魔力熱源体？一体どういうこと？少なくとも原作ではプレシアは虚数空間に消えたはず…)

原作との大きな差異に困惑していた。

そんなとき、プレシアが。

「ああ…だめね、フェイト。ここまで我慢していたのに…」

漏らした言葉を、フェイト達は聞き逃さなかった。

「…え？」

三人がプレシアを見やる。

振り返ったプレシアの顔は。

目からは涙を流し、口からは血が流れてはいるが、今まで見たことが無いぐらいに清々しい笑顔だった。

「フェイト…幸せにおなりなさい…」

それが、プレシアの最後の言葉だった。

『接触します！お願い、早く脱出して！』

エイミイの通信が届くと同時。

突如として外壁が崩れ、そこから飛び出してきたのは龍の顎^{あぎと}。

想定外の事態に一瞬思考が停止する面々。

「母さん！」

いち早く復帰し、プレシアへと駆け寄るフェイト。

それを嘲笑うかの如く、その顎は、

ジュエルシールド9個を食した。

隣にあったアリシアの生体ポッドと、プレシア・テストアロツサごと。

またもや想定外の事態。

完全に理解不能の事態。

…いや、この事態を理解できたのは、アースラのメンバーだけである。

(間に合わなかった…間に合わなかったっ！)

唇を噛み締めるリンディ。

『お願い皆！脱出急いで！』

しかし。

「う、うあああああっ！」

『Thunder raise』

フェイトが砲撃を放つも、全くもって効く様子が無い。

そのままその顎は、元の穴から出ていこうとする。

「待てっ！母さんを…母さんを返せええええっ！」

フランクスシフトを発動する。

1000発を越える魔法弾が打ち出されるも、意に介さずに出ていく。

穴から見えたのは、「巨大」としか言えない大きさの黒い龍。

かなりの早さで、次元の海へと消えて行った。

あとに残されたのは、茫然自失のフェイトに、困惑するルチア達。

「くっ！とにかく脱出するしかない！フェイトちゃん！」

アースラ内。

「庭園崩壊は現存。次元震停止します。」

「断層発生はありません。」

「…了解。」

「第三船速で離脱。巡航航路に戻ります。」

報告を聞き、艦長席へと座り込む。

「…あの生物は？」

「ジュエルシード9つとプレシア・テストロッサを飲み込み、一気に離脱。第八十管理外世界方面へと消えて行きましたが、流星にそこから追いきれませんか…」

「姿を写した写真がありますので、報告書とともに提出予定です。」

「そう…」

提出予定の写真を見る。

「本当に何なのかしらね、あの生物は…」

そこには、東洋龍に翼竜の翼を生やしたような、漆黒で巨大な生物が映し出されていた。

イレギュラー。(後書き)

K「あとは13話分と番外編を書けば無印編は終わりかな。あとこめんなさい。

なにぶん学生の身なので、これからは週一話くらいの投稿ペースになりそうです。」

もう私一人でもう一作品投稿するわ。

ちよっと前から書き溜めてて、いざ投稿しようとしたらネタ被りした奴。

許可取れたら投稿します。

それと、私自身は学生ではないので悪しからず。

兄妹の設定集（見た目や使用魔法などについて。）

K「どうも！Kです！いやあすっかり書くのを忘れてた（＾－＾；イメージが持てれば幸いです。ではどうぞ！」

ルチア

長い銀髪に、紫色パッチリとした目。

どちらかと言うと「綺麗」よりも「可愛い」という印象。まだ熟れてはいないが、十分に成長した体を持つ。

私服は、自分で縫ったいろんなキャラの衣装を着ている。

お気に入りには冬のロンドやポケモン、各ギャルゲー。

指定が無い場合は各自脳内補完でもおk。

バリアジャケットは黒いローブ。

胸にブローチ。

ブローチは金のハートマーク、中心に小さい翠色の宝石が埋め込まれている。

∴ どのような意味のブローチかまるわかりである。

紫色のフードがついているが、基本的に被らない。

耳には銀のイヤリング。

デバイスの待機状態である。

首には、ネックレスが四つ。

シンプルな銀の鎖のネックレスだが、それぞれ星、月、太陽、ハ

トの小さなアクセサリーがついている。

使用魔法

・シルクシューター

銀色の誘導弾。

なのはのアクセセルシューターよりも弾速、威力は高いが、少々操作が荒い。

・ホワイトシヨット

銀色の直射弾。

シルクシューターよりも弾速・威力が優秀。

また、誘導弾よりも使っている脳の容量がすくないため、数をかなり多めに出せる。

ルチアが遠距離でよく使う魔法の一つ。

・バーストストリーム

銀色の砲撃魔法。

前面に小さな魔法陣を展開し、それをファーネイルのフルスイングでぶっ叩く事によって打ち出す。

元ネタは某社長の嫁より。

なのはのデイバインバスターよりも威力は少々高め。

しかし燃費がなのはよりも悪いため、五十歩百歩。

そこはチートでカバー。

・シュートバインド

見た目は普通の魔法弾だが、シールドで防がれたり、ヒットすると対象を縛る。

他の魔法弾と組んで打ち出されると少し厄介だが、弾速が遅いので判断は出来る。

また、魔法弾で相殺できてしまう。

リリアーヌ

肩まである薄い金髪に、少し細い目。

瞳の色は赤。

ルチアとは違い、「綺麗」という印象である。

演技によっては「妖艶」とも言えるほど。

女性の服がよくわからない、というかどうでもいいので、服は同じものをいつも着ている。

…別に全く同じものではない。

同じものを何着も持っているだけである。

着ている服は、白い長袖のセーター（暑いときはサマーセーター）やタートルネックに、紫色のロングスカート。
ぶっちゃん、月姫のアルクェイドと同じ服。

バリアジャケット、使用魔法は秘密。

デバイスは、左手首に巻いてある腕輪。

真っ白な飾り気の無い腕輪に、黒い宝石がはめ込まれている。

名称、能力共に不明だが、二種類の使い方、モードが存在する。

K「いかがでしたか？」

兄については、A'sから少しずつ出ていく予定です。
「でわでわ！」

終結。ともだち。そして…。(前書き)

さっ、と…

K「待って！言い訳は後書きに！」

聞く耳持つとでも？

K「思ってる！今回すごい長いので注意！逃っ！」

逃がすか！

終結。ともだち。そして…。

第二十五話

アースラ内の医務室。

そこでは、先の戦いで傷ついたクロノやなのはにユーノ、武装局員が傷の手当をしていた。

ルチアも、腕に出来た切り傷に包帯を巻き付けている。

傀儡兵を吹き飛ばした際破片が飛び、傷がついたのである。

「…フェイトちゃんは？」

黙ってしまっているなのはに代わり、ルチアが問い掛ける。

「アルフと一緒に護送室だ。彼女はこの事件の重要参考人だからね。申し訳ないが、しばらく隔離になる…。」

「そんな！っ、痛つつ…」

「なのは、じっとして…」

…ユーノ、そこちょっと代われ。

そんなルチアの呟きが聞こえてきそうである。

「今回の事件は、一歩間違えれば次元断層さえ巻き起こしかねなかった、重大な事件なんだ。時空管理局としても、関係者の処遇には慎重にならざるを得ない…
それはわかるね。」

顔を伏せるなのは。

考え込むルチア。

(…意図せずして原作ブレイクになっちゃったけど…
アレは一体何だったんだろう？STSまでもあんなのはいなかったし…
…フェイトちゃんに会いたい。会って、とりあえず少し話をしたいけど…)

現状、それが無理なのはわかっている。

チート能力を持っていようが、無理なものは無理なのである。

数日後。

「今回の事件解決について、大きな功績があつたものとして、ここに略式ではありますが、その功績を讃え、表彰いたします。
高町なのはさん、ルチア・L・クラリーベルさん、ユーノ・スクラ
イア君。
ありがとう。」

アースラの会議室で大人数に見守られながら、なのはは賞状を受け取った。

途端に、わつとあがる拍手。

三人とも、満更ではなさそうである。

しかし…

会議室を出て廊下を歩いている途中、ふとなのはが足を止める。

「クロノ君…フェイトちゃんはこれからどうなるの？」

なのはが口を開く。

ついで、ルチア。

「確かにフェイトちゃんが次元犯罪の一端を担っていたのは事実…でも、ただ母親のためだけに自分を捨ててまで動いたあの子を、刑務所に叩き落とす気じゃ無いよね？」

ルチアの目は、そんなことをしたらただじゃおかないとばかりに光っている。

「…通常なら、数百年以上の幽閉が普通なんだが…」

「っ、そんな！」

「なんだが！」

声をあげてなのはを遮るクロノ。

「状況が特殊だし、彼女が自らの意思では次元犯罪に加担していなかった事もはっきりしている。

あとは、偉い人達にその事実をどう理解させるかなんだけど、その辺りには自信がある。

もちろんリンディ艦長だっているし、僕らの直接の上司だって理解してくれるはずだ。

心配しなくていいよ。」

「クロノ君…」

「時空管理局は冷徹な集団じゃないからね。

少し時間はかかるかもしれないけど、大丈夫。ちゃんと無罪にして見せるさ。」

「それならいいのよ。だから、安心して待っていよう？なのはちゃん。」

「うん！」

少し目に涙を浮かべたなのはの頭を撫でるルチア。

…二人とも満足そうでは何よりである。

男二人、どんまい。

食堂には、リンディとルチア達が集まっていた。

クロノはエイミィを起こしに行っている。

「次元震の余波は、もうすぐおさまるわ。

ここからなのはさん達の世界になら、明日には戻れると思う。」

「よかった!」

「ようやく家に帰れるのか…何か勿体ない気もするな…」

喜ぶのはと感慨深げなルチア。

「ただ、ミッドチルダ方面の航路は、空間が安定しないの。

しばらく時間がかかるみたい。」

「そうなんですか…」

次元断層が起きなかったとはいえ、近隣世界に揺れが来るほどに大きな次元震だったのだ。

むしろ空間が安定している方が異常である。

「数ヶ月か半年か…安全な航行が出来るまで、それくらいはかかりそうね。」

「そうですか…その、まあうちの部族は遺跡を探して流浪している人ばかりですから、急いで帰る必要も無いといえは無いんですが…でもその間、ここにずっとお世話になる訳にもいかないし…」

「じゃあ、家にいればいいよ！今まで通りに！」

なのはが提案する。

しかし、ルチアは渋面。

「なのはちゃん、羞恥心なさすぎだよ…一応ユーノだって男なんだから流石にそれは…」

「でも、アースラと私の家以外で何かあるの？」

「一応家でも大丈夫だと思うけど…」

ユーノだって、流石なのはちゃんの家で元の姿になる訳にも行かないだろうし…」

「でも、ルチアさんってお姉さんと二人暮らしじゃあ…」

「姉様はあまり家にいないし、大丈夫よ。」

真に、女の嫉妬(?)は恐ろしいものである。

まあ、結局なのはの家に行くことになったのだが。

そんな時に、クロノとエイミーが入ってくる。

エイミーは連日の徹夜の影響か、今だに目が半開きであったが。

場が六人になったところで、話は今回の事件の話に。

「あの人が目指していたアルハザードって場所、ユーノ君とルチア

さんは知ってるわよね。」

「はい、聞いたことはあります。」

旧暦以前、前世紀に存在していた空間でしたよね。」

「今はもう失われた秘術がいくつも封印されている場所だったと思うけど。」

「だけど、とつくの昔に次元断層に落ちて滅んだと言われている。」

「あらゆる魔法がその究極の姿にたどり着く。その力を持ってすれば、叶わぬ物は何も無いとさえ言われていたわ。」

アルハザードの秘術：時間と空間を遡り、過去さえ書き換える魔法。失われた命をもう一度蘇らせる魔法…

彼女はそれを求めたのね。」

「でも、魔法を学ぶものなら誰もが知っている。」

過去を遡ることも、死者を蘇らせることも、決してできないって。

だから、その両方を望んだ彼女はお伽話に等しいような伝承にしか頼れなかった。頼らざるを得なかったんだ。」

リンデイ、クロノが言う。

…彼女らも父、クライド・ハラオウンを亡くしているため、プレシアの気持ちかわからない訳ではなかった。

「でも、あれだけの大魔導師が自分の命さえ賭けて探してたのだから、彼女はもしかして、本当に見つけたのかもしれないわ。アルハザードの道を…」

今となっては、わからないけどね。」

「あ、と…」

声をあげたのはルチア。

「話を变えて悪いけど…プレシアとジュエルシードを飲み込んだあの生物は何だったんですか？」

そういうと、やはりというか何と言っか、皆の顔が曇る。

口火を切ったのはリンディだった。

「一応極秘情報なのだけど…既に関わってしまった以上、隠していても意味は無いわね…」

あの生物は、ここ一年程前からこの世界の近くで観測されていた生物なの。

特徴としては、魔力を持った物を有機物無機物問わずに捕食するということがあげられるわ。」

「艦長が言ったとおり、目撃されたのはごく最近。

しかも、初めて目撃された時からあれくらいの大きさだったよ。」

「幸いなことに、あれが直接人間を襲った事例は今の所ないから、いまだに混乱は起きていない。

まあ、管理局が情報を規制している、というのもあるけど。」

エイミィ、クロノが続けて言う。

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」

「いや、それは違う。」

ルチアが漏らした呟きに返したのはクロノ。

「そうね。」

今回の場合だと、プレシア女史は巻き込まれた、と言っているの正しいわ。」

「え、えと、巻き込まれた、って…?」

頭がこんがらがってきたらしいのは。

「ええ。」

恐らくただあの生物は、ロストロギア…ジュエルシードを捕食しに来たんだと思うわ。」

「『ロストロギアを!?!?!』」

この言葉には流石に驚きを隠せなかった三人。

ロストロギアというのは前に説明された通り、かなりの危険物である場合が殆ど。

それを食べるなんて…というのが彼女達の心の声だろう。

「ええ。」

それも、ジュエルシードのような高魔力を持ったロストロギアを、既に幾つか捕食されているとの報告も数件あがっているわ。」

なのは達は開いた口がふさがらなかった。

特にルチアは、あまりにも違う原作との差異に困惑している。

勿論そんなことはリンディ達にはわからないが。

「そ、それで…あの生物は今後どうなるんですか？」
いち早く復帰したユーノが問う。

「勿論、管理局が全力を賭けて追うわ。

いつロストロギアが暴走するかわからないもの。

あれだけの量のロストロギアが暴走したら、次元断層どころでは済まないかも知れないわ。」

そこで、思い出したようにスプーンを取る。

「ごめんなさい。食事中に長話してしまっただわね。」

既に机に置かれている料理は冷めてしまっていた。

そのあとの食事は和気藹々とした物だった。

クロノは弄られ続けていたが。

やはりクロノはそういう運命なのだろう。

帰宅当日。

転送ポートには、なのは、ルチア、フェレット状態のユーノ。

「それじゃあ、今回は本当にありがとう。」

「協力に感謝する。」

なのははクロノと、ルチアはリンディと握手。

「フェイトの処遇は、決まり次第連絡する。

大丈夫だ、けして悪いようにはしない。」

「うん、ありがとう…。」

「ユーノ君も、帰りたくなったら連絡してね。

ゲートを使わせてあげるから。」

「はい。ありがとうございます。」

頼むからユーノ、フェレット状態でしゃべるな。

違和感しかない。

「それから、ルチアさん。

お姉さんによろしくね?。」

「はい。また会うことになれば、よろしくお願いします。」

笑顔のリンディに笑顔で返すルチア。

ルチアの言葉が確信めいているのを知るものはこの中にはいない。

「じゃあ、そろそろいいかな？」

座標を特定。場所は海鳴臨海公園。

「はい！」

「それじゃあ、」

「うん。またね、クロノ君、エイミィさん、リンディさん。」

「縁があったらまた会うことでしょう。」

その時まで、さようなら。」

お互いに手をふりあうのは達。

地球時間で午前6時25分。

海鳴臨海公園に、三人が降り立った。

「さ、帰ろっか、なのはちゃん。」

「うん！」

二人は手を繋いで、高町家までの道を駆け出した。

高町家。

「ただいまー！」

扉をガラツと開けて、元気よく叫んだ。

「なのは！お帰りー！」

帰ってきたなのはに抱き着く美由紀。

それを微笑んで見つめる恭矢。

桃子と士郎もリビングから歩いて来る。

「お帰りなさい、なのは。」

「うん！ただいま！」

笑顔溢れる高町家の面々。

「ルチアさんも、なのはをありがとうございます。」

「いえいえ、なのはちゃんはいいい子ですから、一緒にいて楽しかったですよ。」

笑い合うルチア達。

なのはは少し縮こまっていたが。

高町家からお暇し、自分の家に行くルチア。

先程まで頭の中ではフェイトの事やあの謎の生物の事を考えてはいたが。

フェイトにはまたすぐに会えるだろうし（A'sのこと）、謎の生物についても、このままもつ会うことが無いとはとても思えなかったのだ。

「縁」や「運命」などは以外に馬鹿にしていないうるちアであった。

さて、家に到着、したはいいのだが…

「開いてないし…」

鍵が掛かっていた。

ということは…

「また旅行中かな？ま、いいか…ただいまーっど。」

鍵を開けて中に入る。

勿論中には誰もいなかったが、テーブルの上に置き手紙。

それを拾って読んでみると…

『また旅行に行く。半月後には帰る。』

「もうちょっと何かしら書いておいてよ…

いや、まあ、いいんだけどね…」

なんだか最近順応してきた兄に呆れつつ、明日の無印最終イベントに思いを馳せるルチアであった。

さして当面の問題は…

「A's どうしようかな…」

既になのは達と一緒に闘ったため、ヴォルケンリッターの仲間として戦うわけにはいかない。

「となると、やっぱりなのはちゃん達と一緒にヴォルケンリッターと闘って…あんまり原作ブレイクにはなりそうにないね。だったら一番の問題はリインフォースなんだけど…」

正直に言って何も思いつかなかつたりする。

彼女のチートスキルではリインフォースを治す方法が思いつかないのだ。

ここで、彼女のチートスキルをあげていこうと思う。

・超直感

ここぞというところでの決断がほぼ必ず成功する。

・才能

時間をかければどんなものでも扱えるようになる。

・魔導ノ心得

魔法系スキルがMAXになる

また、多種多様な魔法を使えるようになる。

- ・ 武器使用

色々な武器を扱えるようになる。

- ・ 魔性の口づけ

「両思いになりたい」と思いながら口づけをすることで、相手を自分に惚れさせることが出来る。
ただし、今は使用を控えている。

- ・ 幸せな未来

自分と、自分と両思いになっている人間全てに最低限の幸せが訪れる。

また、少し寿命が長くなる。

- ・ 特別な身体

他の人間よりも基礎身体能力やその他諸々が高い。

- ・ 別世界

色々な世界の魔法を使うことが出来る。
所謂ネタとして使う物。

- ・ 転生者

自分以外の転生者が新しく来ないようにする。

二つほど気になるのが、まあスルーしよう。

そして最後のはこの作品の中だけの話で、コラボについては募集中
…メタ発言はダメですかそうですか。

「あーだめだ！全然思いつかない！
まだ一応半年以上はあるし、ちゃんと考えないとなあ…」

数日後。

早朝6時に目が覚めたルチアが朝食の支度をしていると、家の電話が鳴った。

「もしもし!？」

まさかと思い出てみれば、案の定。

『はい、ルチアさん。元気にしているかしら?』

「ど、どうしましたリンディさん?」

冷静になるために一呼吸入れる。

『実は、今日フェイトさんの処遇が正式に決まったのよ。』

フェイトさんの身柄はこれから本局に移動、そのあと事情聴取と裁判が行われるわ。

フェイトちゃんは殆ど無罪が決まったようなものよ。
クロノも随分頑張ってくれたし。』

「うん…ありがとうございます。」

『聴取と裁判その他諸々は、茶番だとしても流石にちょっと時間がかかるわ。』

で、その前に一度、フェイトさんがもう一度なのはさんとルチアさんに会いたって言ってるのよ。』

「本当ですか！」

心の中で喝采をあげた。

原作イベントに立ち会えるというのもそうだが、フェイトが名指しで自分を呼んでくれたことに関してまだ。

『ええ。場所は海鳴臨海公園。』

クロノが微弱な魔力を放っているから、正確な場所もわかるはずよ。もうそろそろアースラは出発してしまうから、会えるのは短いけど

…』

「すぐ行きます！」

大急ぎで着替えて、ルチアは家を飛び出したのであった。

公園内の一角にいたクロノ達を見つけるには時間は掛からなかった。

既になのはも到着していた。

「あんまり時間は無いんだが、しばらく話すといい。僕達は向こうにいるから…」

「ありがとう…」

空気を読んだクロノ。

非常に珍しいシーンである。

クロノ、アルフ、ユーノが離れていく。

ここからは三人の空間だとばかりに。

風が頬を撫で、髪を撫でる。

少しの間、彼女達は無言であった。

「なんだが、一杯話したいことあったのに…」

「こうして改めて向き合おうと…なんだか不思議な感じだね…」

フェイトにあつたら何を言おうか色々考えていたルチアであったが、そんなものはフェイトとあつた瞬間に一発で吹き飛んでいた。

「私は…そうだね、私も上手く言葉に出来ない。

…だけど嬉しかった。」

「え？」

海に顔を向けていたなのはがフェイトを見る。

「真っすぐ向き合ってくれて…」

そして、私を信じてくれて…」

「うん！友達になれたらいいなって、思ったの！」

「少なくとも私は、小さな女の子が一人で泣いてるのを見て放って置けるほど、狭量じゃないよ。」

二人とも笑顔で返すが、少しなのは顔が曇る。

「…でも、今日は、もうこれから出かけちゃうんだよね…」

「…そうだね。少し長い旅になる。」

「また、会えるんだよね!？」

言葉を返さずとも、確かにフェイトは頷いた。

「少し悲しいけど、完全にお母さんを諦めたわけじゃ無いけど…やつと本当の自分を始められるから。」

なのはの顔が輝く。

「…来てもらったのは、返事をするため。」

「え？」

戸惑いの声をあげるなのはだが、ルチアは微笑んだまま。

照れ臭いのだろう、少し頬を赤らめたフェイトが続ける。

「二人が言ってくれた言葉…友達になりたいって…」

「っ！うん、うん！」

なのは少し目に涙を浮かべ。

ルチアは見た目こそ落ち着いているが、心の中では喜びやら感動やら何やらでプチパニックになっていた。

「私に出来るなら…私でいいならって…」

「けど私、どうしていいかわからない…」

「だから教えてほしいんだ、どうしたら友達になれるのか…」

そう言ったフェイトの顔は少し暗く。

なのはは心配そうに見つめる。

「…簡単だよ、そんなこと。」

二人が顔をあげる。

そこには、相変わらず微笑んだままのルチア。

「友達になることなんて、物凄く簡単な一つのことです。」

なのはの顔がまたも輝いた。

そして二人は、タイミングも計らず、事前に打ち合わせをしていた訳でも無く、極自然にその言葉を放った。

「「なまえをよんで」「

「始めはそれだけで良い。
簡単なこと。」

「君とかあなたとかそういうのじゃ無くて、ちゃんと相手の目を見て、はつきり相手の名前を呼ぶの！
わたし、高町なのは！
なのはだよ！」

「なの、は……」

「うん！そう！」

「ルチア……さん……」

何も言わずに首を縦にふる。

「なの……なの、は……！」

「……うん……」

「ル……チア……さん……ルチアさん……」

フェイトの左手を握るなのは。

フェイトの右手を握るルチア。

柔らかな風が吹き抜ける。

まるで彼女達を包むかのように、優しく、優しく。

「ありがとう…なのは…ルチアさん…」

「うん…！」

なのはの声はもう掠れている。

「なのは…」

涙を隠すことも出来ない。

「君の手は暖かいね…なのは…」

そして…ルチアさんの手はとても優しい…」

なのはの目からこぼれ落ちた雫。

感極まって目を擦るなのは。

そこに、優しく手を添え、雫を掬いとる。

「少しわかったことがある。

友達が泣いていると、同じように自分も悲しいんだ…」

「フエイトちゃん…！」

抱き着くなのはを、丁寧に受け止める。

その上からルチアが二人を包み込んだ。

「ありがとう…なのは…ルチアさん…」

今は離れてしまふけど…きつとまた会える。

そうしたら、また二人の名前を呼んでも良い…？」

「うん…うん…！」

「友達の名前を呼ぶのに…許可なんかいらないよ…」

「会いたくなったら、きつと名前を呼ぶ。」

…だから、なのはも、ルチアさんも、私を呼んで。

なのはに困ったことがあったら、ルチアさんに怖いことがあったら、今度はきつと、私が二人を助けるから…」

二人の目からは涙が止まらない。

その二人を抱きしめるルチアもまた、微笑みながらも涙を流していた。

いくら原作で展開を知っていようと、いきら何度も見たことがあっても、そんなことは関係が無いのだ。

声をあげて嗚咽を漏らすのはと、それを抱きしめ泣くフェイト。

それに、二人を抱きしめ涙を流すルチア。

その姿は、まるで一枚の絵画のようであった。

「あんたの所の子も…ルチアって奴も…本当にいい子だねえ…！」
もらい泣きするアルフ。

「フェイトが、あんなに笑ってるよ…！」

アルフが見たことのあるフェイトはあそこまで笑顔にはならなかったのだらう。

しかし、そろそろ時間も迫っていた。

クロノが立ち上がり、三人の元へと歩いていく。

「時間だ。そろそろいいか？」

「…うん。」

名残惜しそうに、けれどしっかりとフェイトは頷いた。

「フェイトちゃん…！」

不意に、なのはがリボンを解く。

「思い出に出来るもの、こんなしかないんだけど…！」

「…じゃあ、私も…！」

そういつて、フェイトも自身のリボンを外す。

なのはの白いリボンは黒に。フヘイト

フヘイトの黒いリボンは白に。なのは

お互いが、お互いのリボンを受けとった。

「それじゃあ、私からは……」

そういうと、首の後ろに手を回す。

「これかな。」

差し出したのは、小さな月のアクセサリーがついた、飾り気の無いネックレス。

「え、でも……私……」

「いいから、受けとって？私には、フヘイトちゃんにこれを付けていてほしいの。」

ネックレスを首につける。

「…はい。」

遠慮がちなながらも、しっかりとその手で握りしめた。

魔法陣が展開される。

その上に乗った、クロノ、アルフ、そしてフェイト。
言葉なんていらなかった。

フェイトが手を小さくふる。

二人はそれに向かって、手をふりかえず。

魔法陣の光が大きくなり、三人が消え去る寸前。

「「「またね」「」」

ごく自然に、当たり前のように、三人はそう呟いた。

「あれが、プロジェクトFの作品かい？」

「…その呼び方は好きじゃ無いわ。

あの子は　　だもの。」

「いやいやこれは失礼した、
時に彼女が言うには、次は半年後だと聞いたが？」

「それについてはそこまで問題じゃ無いわ。
あれを回収できるかどうかは知ったことでは無いし。」

「彼女なら確実に持ってくるだろうがね。

フフフ…闇の書…いや、夜天の魔導書の管制人格と、そのシステム
の核…

実に興味深い存在だね。」

「本来の目的をわかっているんでしょうね？」

「勿論だとも。これでも色々手回しはしているのだよ？」

運命の歯車はは、ルチアの知らない所で、既に廻り始めているのか
もしれない……

終結。ともだち。そして…。（後書き）

さあ、ほら、キリキリ吐け。

K「中間テストの勉強が…」

おまえ元からそこそことれてるだろうに。

K「いやあの、アニメ見る時間が…」

夜中に深夜アニメ見てたでしょ？

K「ふぐっ！…怒らない？」

内容による。

K「いやあの…今回って、原作で言う13話分の話しを全部詰めたんだけど…」

途中で切れば良いものを…

K「いや、なんかタイミング掴め無くて…

で、原作が余りにも神だったから、目茶苦茶書きづらくて…」

どっちにしるクオリティ高くないが。

K「…ふえっ」

さて、では無印編はこれにて終了。

番外編であるプレシア編を書き、いくつかの小話を書いたらA'sに移ります。

期待されてている方がもしもいらっしやるのであれば、これから末永くこの作品を読んでいただければ幸いです。

では。

プレシア。番外。前。（前書き）

K「番外編です。タイトル通り、プレシア中心のお話。」

ではどうぞー。

プレシア。番外。前。

<Sideプレシア>

夢を見ていた。

長い夢を。

私自身の事を。

元々「ヒュウドラ」は、ゆっくりと時間をかけて。

それこそ、何年という時間をかけてやるプロジェクトであるはずなのだ。

それを無駄にしたのは、現場の苦勞を知らない無能な上司と、勝手なことをして反省をしない無能な部下のお陰だ。

人のせいにするつもりはない。

しかし、あの環境はあまりにもひどかった。

繰り返し何度も短くなる期限。

失敗したらやめるだけで、後始末をしない部下。

それでも、やるしか無かった。

研究の為にアリシアという時間すら削って。

それしか方法が無かった。

自分を誇示する訳ではないが、優秀だった私を嫌うものは多かった。

もう疲れていたのだ。

精神的にも肉体的にも。

だからこのプロジェクトを終わらせたら、アリシアと一緒にゆっくりと暮らす筈だった。

そう、はずだった。

私の主な仕事は研究で、それを基にヒュウドラの製作は進んでいたのだが、遅々として進まない製作に業を煮やしたのか、製作をする研究員に私には教えずに違法の素材を使わせた。

当然、それで私の理論通りに動く訳が無い。

結果、暴走。

そして、アリシアの命を奪った。

死因は、一瞬で体内の酸素を奪われた事による窒息死。

自宅の中で悲しみにくれる私。

「アリシア…アリシアア…ッ！」

いくら泣けども娘は帰ってこない。

そんなことはわかってはいるのだ。

数日後に今回の暴走事故の後始末をするそうだ。

恐らく、私は責任をなすりつけられて僻地へ飛ばされるか、拒めば裁判で刑務所だろう。

私が何をしたというのだろうか。

そんなとき家の呼び鈴が鳴り、何人かの男達が…え？

こんな記憶…私には無い。

無かった筈だ。

映像は流れていく。

男達に何かの魔法をかけられ狂った目をした自分を見て、背筋が冷える。

そこからの映像は早送りで進んでいく。

管理局から大金をもぎ取ったあと、時の庭園でアリシアを甦らせるための人造生命の研究を始めた。

人造生命の研究は、人道的に問題があるとされて禁止されている。

しかし、映像の中の私はそんなことはお構いなしとばかりに研究にのめり込んだ。

何年もかけてついにそれを形にする。

…しかし、それはアリシアであってアリシアではなかった。

当然だ。

記憶をコピーしたとて、全く同じ人間が出来るわけが無い。

しかし。

記憶の中の私はそれに失望した。

必要以上に辛く当たり、使い魔とともに道具のように扱い、あまつさえはロストログアを使ってアルハザードへ行くなどという世迷い事を言い出す始末。

体を壊してもアリシアを追い求め、作り出したコピー…フェイトを、何も告げずに第九十七管理外世界へと送り出す。

イライラする私の前に、黒いフードの人物が現れる。

時の庭園の防衛システムを易々と乗り越えて。

こちらの放った電撃を掻き消して。

そこで、この記憶は途切れた…。

「っは!?!」

ベッドから跳ね起きる。

いやに鮮明で、現実感がありすぎる夢だった。

…ああ、それにしても。

さっきの夢ほどではないが、やはり辛いものは辛い。

ああ、アリシア…

そのとき、部屋のドアが開いた。

「起きたか、プレシア・テストロッサ。」

…入ってきたのは、夢の中で出てきたあの黒いフードであった。

「…はあ?」

思わずこんな声を出してしまった私は悪くないはずだ。

「…何故そんな鳩が手榴弾喰らったような顔をしてるんだ。」

「え、いやだって、あれは夢で、え?」

恥ずかしいくらいにおたおたと慌てる私。

端から見ればさぞかし滑稽だろう。

しかし、私からすればかなり問題だ。

「ああ、夢で見たのか…話そう。私の知ってる全てを。」

<Side 三人称>

曰く、夢の事は全て現実で起きたことである。

曰く、私は思考誘導の魔法が使われて凶行に走ったとのこと。

曰く、フェイトに辛く当たったのも本当で、フェイトはプレシアに褒められたいが為に身を粉にして頑張っているとの事。

「何と言つことをしてしまったの…!」

「思考誘導の魔法が使われたとはいえやったのはあなただから、その罪は消えないぞ。」

「私が何をしたというのよ…っ!」

「既に管理局が動き出しているから、フェイトが捕まれば当然あなたとの関連性を見出だす。そうなれば、確実にあの子には救いは無いな。」

…何が悪いのかと問われれば、あの科学者が悪かったとしか言いよ

うが無い。

しかし当時の科学者は殆どいなくなっているだろうし、いたとしても管理局は取り合わないだろう。

なぜなら思考誘導を使ったのは管理局の高官だし、科学者もまた管理局の傘下の科学者だ。

なにより真実を話したとて、相手側が白を切ってしまうえば終わりのだ。

更に、既に「プレシア・テストロッサ」は次元犯罪者として指名手配されている。

訴えに行きでもしたら、喜々として捕まえるのは想像に難くない。

八方塞がり。

どうしようもない。

「で、どうする？プレシア・テストロッサ。」

「…こうなったらもう逃げてもしようがないわ。私の身体にもガタが来ている。それに…」

「それに？」

「…私が生きていると、あの子には不都合なもの。」

プレシアは自分を捨て、自分の娘…フェイト・テストロッサを生か

すことを選んだ。

フェイトは、自分の利益のためにジュエルシードを集めている訳ではない。

言い方は悪いが、プレシアに「使われている」だけなのだ。

今のところフェイトが犯罪者ではあるが、プレシアとの関係が公になりプレシアが死んだとなると、フェイトは「母親に使われていただけのかわいそうな娘」となる。

流石に無罪とはならないだろうが、それでもほぼ罪は無くなる。

対してプレシアが生きていた場合はどうか。

フェイトの立場は変わらない。

しかし、広域指名手配されているプレシアと一緒に捕まったとなれば、確実にフェイトも罪に問われる。

事実がどうであれ、世間が許しはしないだろう。

そうになると、フェイトに幸せが舞い降りることは完璧に無くなる。

自分に幸せは絶対に来ないが、それに娘を巻き込むことは絶対にいやだったのであろう。

…まあ既に巻き込まれている訳だが。

「後悔はしないな？」

「ええ。…出来る限り非道な母親だと思われるように。出来る限りあの娘が被害者だと思われるように。」

「…私は狂った母親を演じるわ。」

そう言った彼女の目には、悲哀と決意が溢れていた。

「…そうか。それなら一つ提案があるのだが…」

黒フードが提案したのは、驚くべき内容であった。

「本当に…そんなことを？」

「ああ。希代の大魔導師にして最高の研究者…このまま死ぬには惜しいからな。」

「…ふふ。大それた事を考えるわ、本当に…いいでしょう。その提案、乗ることにするわ。」

あいつらに一泡吹かせないと気が収まらないもの。」

「はっはっは、一泡どころではなく吹かせてやるさ。」

では…よろしく頼むぞ、プレシア・テストロッサ。」

「ええ。こちらこそよろしくお願いするわ？」

プレシアと黒フードが手を強く握りあった。

新暦65年4月。

後の大事件の、小さな火種となる出来事であった。

プレシア。番外。前。（後書き）

K「後半に続きますー。珍しく明日には投稿できそう…」

プレシア。番外。後。（前書き）

K「連投連投…」

次の話はまた遅くなりそうです。

K「期末テスト…早いよ…」

プレシア。番外。後。

<Sideプレシア>

庭園内に魔力転移の反応。

フェイトとアルフだ。

…今日は、多分あの子に対する最初で最後の愛情。

不甲斐無い母親でごめんなさい…。

「…お帰りなさい、フェイト。さあ、こっちへいらっしゃい？アルフもよ。」

「あつ…はい。母さん。」

…何で笑えているんだろう、この子は。

どう考えても私が好かれる要素なんてなかったのに。

どうしてこんなにも私を信じられるのだろう。

…考えたら泣きそうになる。

耐えて。耐えなさい、プレシア！

ここで泣いたら全部が台無しに…

「…ジュエルシードは、いくつ手に入ったの？」

「…四つ、です。」

「そう…」

椅子から立ち上がる。

たったこれだけの期間でロストロギアを4つ。

しかも完璧な封印処理まで行っている。

時空管理局の執務官と比べても遜色の無い、紛れも無い功績だ。

手をあげると、反射的にフェイトが目を閉じる。

…そうよね。あれだけのことをしたんだもの。

だから今だけは…

「…え？」

「ありがとう…フェイト。こんな短期間でジュエルシードを四つなんて…母親としても鼻が高いわ。」

フェイトの髪を撫でる。

昔アリシアによくしてあげたように。

…その手触りはアリシアと同じで、フェイトがアリシアのクローンだということを確認させてくれる。

手に持ったケーキの箱に目が行く。

「わざわざお土産を買ってきてくれたのね…一緒に食べましょう？
…アルフ、あなたも来なさい？」

「う、うん！」

…流石にアルフは疑いの目を向けている。

しかし、これは私の疑い用も無い^{まこと}真実の思いだ。

絶対に、誰にも言うことは出来ないが…

…ちゃんと、笑えているだろうか。

フェイトは、操られていた頃の私の記憶から見ても、とても聡い子だ。

…もしかしたら、上手く隠せていないかもしれない…

…ごめんね、フェイト。

ケーキは大変美味だった。

更に数日後。

「…なんとまあ呆れた無茶をする子だわ。」

某提督が同じ言葉を放ったことをプレシアは知らない。

「あれを止めに入るのが親としての役目でしょうけど…」

海上を映した水晶球には、フェイトとアルフに協力しようとする三人の人間が映った。

「私は覚悟を決めた…ごめんなさい、フェイト。」

何度目かわからない謝罪。

海上ではジュエルシードを封印し終えたところ。

と、プレシアが席を立つ。

「…次元干渉…」

『Count down 9、8…』

次元海にいる管理局の航行艦船と、海上の五人にむけて。

「…発射」

『 - - 』

狙い通りに艦船に当たったが、フェイトの方は黒いローブ姿の女性に防がれた。

…まあ、その方がプレシアにとっては心が痛くならなかったが。

「…もうすぐあの子が帰ってくる…」

ここからが正念場だと、気を引き締めた。

あの子が帰ってきた。

辛い、部屋で休ませる。

…そして、私は奥の部屋へ。

魔力反応でアルフが私を見ていることなど丸わかりである。

…そして、私は言う。

アルフに聞こえるように。

あの子との決別への布石の言葉を。

「たった9つ…これでも次元震は起こせるけど、これじゃ足りない

…最低でもあと5個…あの使えないお人形…」

背後で気配が膨れ上がる。

…でも、もう私は止まらない、止まらない。

「もうあまり時間が無いわ、私には…やっぱり、あんなのに任せるより自分自身で行った方がよかつたわ…」

言って振り向くと、飛び出してきたアルフ。

「うあああああつ！」

…これがフェイトだったらどうしようかと思っていたが、杞憂だったか。

アルフが胸倉を掴みあげる。

「やっぱりそんな考えを持っていたのか！あんたは母親で！あの子
はあんたの娘だろ！あんなに頑張っている子に対して嘘までついて！
あの娘に対して何も思わないのかよ！…」

ああ、やはり。

自分で招いたこととはいえ、やはりこの叱責はつらいものがある。

その叱責から逃げるように、アルフの腹に手を当てる。

衝撃。

「っ…あ！」

腹を抱えるアルフの目前まで歩いていく。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね…余分な感情が多すぎる。」

「あの娘は…あんたの為に必死で…っく！」

避けなさいよ、アルフ…

「邪魔よ…消えなさい！」

当たる寸前、光が見えた。

転移で逃げたようだ。

…安心した。

手加減はしたが、流石に当たればかなり厳しかっただろう。

私の見立てだとどう先延ばしにしても、あと五日ほどで決着は着く。

「願わくば、あの子の未来に少しでも多くの幸があらんことを…」

翌日。

フェイトとあの白い子の決闘が行われている。

…恐らく、あの子は負ける。

なぜだかわからないが、そんな気がするのだ。

だとしたら、後はもう私の描いたシナリオ通りにいくだろう。

あの人に聞いたが、今回出張って来ているのはリンディ・ハラオウらしい。

…なんだかんだ言っても、無意識の内に甘いところがあるものね、リンディは。

そんなことを思っている間に、決闘が終わる。

やはり、フェイトは撃墜。

…とりあえずあの白い子、たった9歳で出せる砲撃じゃないわよね
え…

でも…

「次元干渉…」

『Count down 9、8、7…』

あの黒いローブがいるから大丈夫でしょう…きっと、多分…

「…発射」

『 - - 』

…やはり、防いだ。

あの黒い娘、かなり強力な魔導師ね…

ジュエルシード9個を回収。

わざわざばれるようにゆっくりと移動させているのだから、ちゃんと補足しなさい？

アースラからの転移魔法で武装局員が飛んで来る。

時の庭園の防衛機能はストップさせているので、特に苦もなく玉座の間へとたどり着く。

「プレシア・テストロッサ！時空管理局法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で、貴女を逮捕します！」

「武装を解除して、こちらへ。」

さあ、ここからは。

プレシア・テストロッサ。一世一大の大芝居。

「なんだ？なにかあるぞ！」

隠し部屋に気づいたようだ。

「う、これは…」

『え…!?!』

「私のアリシアに…近寄らないで!」

転移、そして雷撃。

いくら私の体調が悪くなっているからと言って、一般局員程度はいくらいようが相手にはならない。

「う…撃てーっ!」

集団で砲撃を撃ってくるがそんなもので破られるほどじゃわない。

「うるさいわ…」

『危ない、防いで!』

間に合うはずも無い。

更に威力をあげた雷を喰らい、武装局員は戦闘不能に。

ここからの私は…狂気に身を委ねる。

完璧な悪を…演じてやる。

『プレシア・テストロッサ。終わりです。次元震は、私が押さえています。』

やはり、執務官やあの白い子達相手では傀儡兵は分が悪いか。

『駆動炉もじき封印。貴女の元へは、執務官が向かっています。』

確かに端から見れば詰みだろう、この状況は。

『忘れられた都、アルハザード。そしてそこにある秘術は、存在するかどうかも曖昧な、只の伝説です。』

「違うわ…アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が現れた時、その狭間にある輝き…道は確かに、そこにある！」

『ずいぶんと分の悪い賭けだわ。…貴女はそこへ行って、何をすつもりなの？失われた時間を、侵してしまった過ちを取り戻すの？』

「…そう。私は取り戻す。私とアリシアの、過去と未来を…！」

庭園の崩壊が進む。

そろそろここも限界か？

できることなら、ここにあの子フヘイトが来ないように…

「取り戻すのよ…こんなはずじゃなかった…世界の凡てを！」

背後で爆音がした。

「世界は、いつだって「こんな筈じゃない事」ばっかりだよ！
ずっと昔から…いつだって誰だってそうなんだ！

こんな筈じゃない現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは個
人の自由だ！」

…見知った魔力反応。

できれば、来ては、欲しくなかったんだけどね…

「だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間まで巻き込んでい
い権利は、どこの誰にもありはしない！」

…来てしまったのなら、仕方が無い。

徹底的に拒絶の態度を見せるだけよ…っ！？

「うっ…、ゴホッ、ゴホッ！」

「っ、母さん！」

「何をしにきたの…！」

フェイトの歩みが止まる。

そっだ、それでいい。

私の事は恨んで構わないから。

私の事は憎んで良いから…

「消えなさい…もうあなたに用はないわ。」

「…あなたに、言いたい事があつてきました。」

…罵倒か、怨嗟か、それとも自首をすすめにでもきたか。

念話が届く。

『プレシア。魔力反応があつた。もうまもなくそつちにあれが来る。もしも言うことがあるのであれば、用意だけはしておけ。』

『…ええ。』

…フェイトの独白が始まる。

「私は…私は、アリシア・テストロッサではありません。」

ええ…わかつてるわ。

あなたはあなたよ、フェイト。

「あなたが作った、ただの人形なのかもしれません。」

…少なくとも、「私」はそんなことを思ったことは一度たりともありはしないわ。

それを言うことができれば、どれほど楽なことか。

「…だけど…私はフェイト・テストロッサ。あなたに生み出してもらつて、育ててもらつた、あなたの娘です！」

…ああ。

なんという事なのだろう。

ここまでずっとあなたを虐げておいて、それでも私を気にするか…

…でも。それじゃあ駄目なのよ。

「フッフ…ハ、アハハハハ…だから何？あなたを娘と思えというの？」

こんな事が言いたいわけじゃない。

その申し出に素直に甘えたい。

「あなたが…それを望むなら…」

…本気なのね。

「それを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る。私があるあなたの娘だからじゃない。あなたが…私の母さんだから！」

…ああ。

駄目だ。

こんな事を言われてしまったのは。

杖で残り少ない地面を叩く。

次元震の増大。

「くっ、まずい！」

これだけの魔力が流れ出したなら…

『超高魔力熱源体接近！時の庭園到着まであと三十秒！』

「くっ、仕方ない、脱出を最優先する！」

…あの人は、言いたい事があれば言うっておけと。

なら、一言だけ。言葉を残す分には構わないと思うけど？

「ああ…駄目ね、フェイト。ここまで我慢してきたのに…」

「…え？」

これは、私の偽り無き本心。

「フェイト…幸せにおなりなさい…」

爆音とともに、一度私の意識は途切れた。

プレシア。番外。後。（後書き）

それで、次は何書くの？

K「いよいよ第二部突入、かな。」

その前触れ、か。

K「ではでは次回もお楽しみに！」

闇の書の復活、騎士の思い。(前書き)

K「守護騎士Sideです。かなり駆け足、ちょっとした妄想、変な所で持ち越しです。」

ではどうぞー。

闇の書の復活、騎士の思い。

6月。

とある一人の女の子が9歳の誕生日を迎えた。

それと同時に、その女の子の元で一冊の魔導書とその守護騎士4騎が産声をあげた。

自分の主の願いを叶えるために。

しかし、彼女はそれを望まなかった。

願いを叶えるための行動が、破壊や、他人に迷惑となる行為に繋がると知って、それならばそのような力はいらないと。

勿論、守護騎士達は訝しがった。

歴代の主は皆が皆、自分の濁った欲望に身を賣っていたから。

何か企んでいるのかと、一瞬彼女を訝った。

しかし、そんな考えは次の一言で吹き飛んだ。

「とりあえず皆の衣食住の面倒を見なあかな〜…」

「主…？本当によろしいのですか？闇の書の力を使えば自分の思いのままに…」

「まだよくわからへんし、そんなものはいらん。私は、皆が一緒にいてくれればそれで十分や。」ああ、今代の主は違うのだと。

この幼い少女は、本当に家族が欲しいだけなのだ。

かなり簡略化したが、これが八神一家の始まりである。

守護騎士達は、それはもう平穩に日々を過ごしていた。

暖かな空気に、笑い合う自分達。

どれも、過去に一度として手に入れたことのなかったことだ。

最初は戸惑ったりもした。

しかし幾日か過ぎす間に、お互いにどんどんと距離を縮めていった。

孤独だった少女は家族を得、感情の無い機械だった守護騎士は安らぎを得た。

この時の彼女達はまだ、この後起きる、そして当事者となる事件を知らない。

しかし願わくば、彼女達に少しでも多くの幸のあらん事を…

<Sideシグナム>

闇の書の守護騎士の一人、烈火の将。

それが私だ。

愛剣であるレヴァンティンと共に、時には主の盾として、時には主の剣として、数多の戦場を駆け抜けてきた。

…しかし今度の生において、この剣が奮われることは無いだろう。
主はやては優しいお人だ。

幼き頃に両親を亡くしたこの小さな主は、人を傷つけることを好まない。

力などいらず、ただ共にあってくれとの願いに、我らは答えなければならぬ。

それが主の望みであり、それが主の幸せであるならば…

勿論、私自身としても平和に越したことはない。

この優しい主と共に、穏やかな生を実感できる。

それは、とても素晴らしいことなのだろう。

「今日は炒め物にでもしよかー」

「はい、主はやて」

「それじゃあ、野菜とお肉を買ってきましょう」

食事の楽しみを知ったのも、主はやてに出会ってからだ。

親しい者達と一緒に食事することが、こんなにも暖かいものだとは思っていなかった。

「じゃあシグナムはあっちでお肉買ってきてな」

「わかりました。シヤマル？」

「私ははやてちゃんと一緒にお野菜を見てきまーす」

「うん！よろしくなーシヤマル！」

「はいはいー」

…シヤマルにも、笑顔が増えた。

それも主はやてのおかげなのだろう。

本当にあの人には、どれだけ救われたか知れない…

そんなことを考えつつ、主から言われた物をとっていくと。

「む」

「あら」

最後の一パックで手がぶつかってしまった。

「と、す、すまない！」

「あら、」丁寧にも。」

咄嗟に謝罪して顔をあげると。

そこには、一人の女性がいた。

薄い金髪に白滋のようなきめ細かい肌。

しかし何より私の目を引いたのは、その赤い目だった。

薄く細められたその目の奥はとても深く。

一瞬その目に吞まれた。

と、不意に女性がクスリと笑う。

「そんなに穴が空くほど見つめられたのは初めてね。」

「へ？あ、いや、その、すまない！」

「怒っている訳じゃ無いわ。」

なぜだろうか、いつもの自分が維持できない…

どうもペースを崩されてしまう。

「それよりも、はい。」

渡されたのは、最後の一パック。

「…いいのか？」

「別にいい。持って行きなさい。」

「…有り難くいただきます。」

少し遠くから私を呼ぶ声。

主とシャマルも買うものを買ったのだらう。

「では、改めてありがとう。」

「別にいいのよ。じゃあね？」

そのまま優雅に歩き去って行った。

なぜだか、そんな動作も全てが似合っている。

背を向けて主とシャマルの元へ歩こうとして。

『主をちゃんと守れたらいいわね、ヴォルケンリッター、シグナム』
『？』

そんな声が頭の中で響き。

弾かれたように振り向くが、そこにはもうあの女性はいなかった。

「どしたん、シグナムー？」

「あ、い、いえ…」

動揺はしたがそれを表に出す訳にもいかず、慌てて取り繕う。

「ほんならええけど…あれ？」

売場の方を見遣る主。

「最後の一個やったんかー、取れてよかったなーシグナム」

「え？あ、いやその…」

不思議そうにこちらを見る。

「さっき同じ物を取ろうとした女性と手がぶつかってしまい、譲ってもらったのです。」

「ほんと？シグナム？」

「優しい人もおるんやなー ちゃんとお礼は言っただの？」

「勿論です。」

「そか、ならええよ。ほな行こかー。」

「はい」

再び車椅子を押しはじめるシャマル。

…あの女性は、一体何者だったのだろうか。

<Side三人称>

束の間の平穩、短い幸福。

守護騎士達が現れた時から少しずつ、はやての容態は悪化していった。

直感が働き、シグナムは闇の書を調べた。

悪い予感程よく当たるものである。

いつまでも蒐集を始めない主に業を煮やしたのか、闇の書ははやての身体を蝕みはじめた。

最初は足から、徐々に上にあがっていく身体の麻痺。

元々はやての小さいときから側にあった闇の書は、はやてと密接に繋がっていた。

小さい頃から闇の書の魔力が少しずつ未成熟なリンカーコアと身体を蝕み、生命活動さえ阻害した。

そして、主の魔力で活動する守護騎士が現れたことでそれは加速。

守護騎士達がまずしたのは、暖かい空気に染まりすぎて主の異常を察知出来なかった自分達を責め苛むこと。

そして、次に取った行動は…

深夜、海鳴市内の某ビルの上。

「主の身体を蝕んでいるのは、闇の書の呪い。」

「はやてちゃんが闇の書の主として、真の覚醒を得れば…」

「我等が主の病は消える…少なくとも、進みは止まる！」

「はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない…だけど、それ以外なら、何だってする！」

全員が覚悟を決める。

「申し訳ありません、我等が主…ただ一度だけ、あなたの誓いを破ります！」

シグナムは、ある星の綺麗な夜を思い出していた。

主を抱き上げ、庭へと出る。

「うわあ、綺麗！」

そこで私は、何度目かの質問を出した。

「…主はやて、本当によいのですか？」

「…何が？」

「闇の書の事です。あなたの命あれば、我々はすぐにも闇の書のページを蒐集し、あなたは大きいなる力を得ることが出来ます。

…この足も、治るはずですよ。」

我ながら卑怯とは思いが、主の動かぬ足を引き合いに出した。

この足のせいで主がとても不自由な生活を送り、他の同年代の子供とは違う環境にいることも知っている。

「あかんで。闇の書のページを集めるには、いろんな人にご迷惑をせなあかんねやろ。」

しかし主は即答した。

自分の足を治すよりも、他の人間に害を及ぼすことを嫌った。

「そんなんはあかん。自分の身勝手に、人に迷惑をかけるんはよくない…あたしは、今のままでも十分幸せや。」

天の川のかかる広く暗い空を見上げ、はやては呟く。

「父さん母さんはもうお星様やけど、遺産の管理とかはおじさんがちゃんとしてくれる。」

「御父上のご友人、でしたか。」

「うん…おかげで生活に困ることも無いし、それに何より！今は、皆がおるからな。」

甘えるように抱き着いて来る。

…同年代の子供と比べて達観しているとは言え、やはり主は寂しかったのだろう。

「はやてー！」

「ん？どないしたん、ヴィータ？」

「はやて、冷凍庫のアイス食べていい？」

「お前、夕食をあれだけ食べてまだ食うのか？」

「うるせーな、育ち盛りなんだよ！はやてのご飯はギガウマだしな」

「しゃあないな。ちよつとだけやで？」

「おー！」

駆けていくヴィータを二人で苦笑しつつ見送る。

夏とはいえ冷えてきたので中に入ろうと思った時。

「シグナム。」

「はい？」

「シグナムは皆のリーダーやから、約束してな？」

主の真剣な言葉に思わず身を引き締める。

「現マスター八神はやては、闇の書にはなんも望み無い。あたしがマスターでいる間は、闇の書の事は忘れてて？皆のお仕事は、家で仲良く暮らすこと。それだけや。∴約束できる？」

∴願ってもない言葉だ。

「誓います。騎士の剣に賭けて。」

そういうと、主は幸せそうに笑うのだった。

今、その誓いをこの身で破ろうとしている。

しかし。これから先、ずっと主と過ごすためにも…

ベルカ式の三角形の魔法陣を二つ重ねたような、大きな魔法陣が出現する。

全員が騎士甲冑を纏う。

主が自分達のために考えた、騎士としての服を。

「我等の不義理を、お許してください！」

光に包まれ、皆が皆別の世界へと飛んで行った。

…アニメを見ているのであれば、騎士としての誓いを立てたこのシーンで途切れるのだろう。

しかし、こっちではそうはいかない。

とある無人世界にシグナムが降り立つ…

<Sideシグナム>

個人転移で来たこの無人世界は、広大な森と海で出来た、とても綺麗な世界だった。

所々に巨大な生物も見受けられる。

「これは少し期待が出来そうだな…」

そう一人ごち、探索を始めた。

だが…

「一体どういうことだ…?」

魔力を持った生物がほとんどいない。

いることはいるのだが、1頁どころか四分の一あればいいと思えるほどの微弱な物があるだけ。

「しかしなぜだ?」

この大地には魔力が通っている。

もしここに人が住んでいれば、確実に魔法分化の起こるほどにだ。

にも関わらず、生物には魔力が殆ど籠っていない。

考えられる可能性としては…

「絶滅…あるいは天敵による捕喰…しかしここまで…」

考えを巡らせながら探知範囲を広げると。

「…む?」

海の方に少し大きめの魔力反応。

しかしこれは…

「リンカーコア…人間がいるのか？」

…まあいい。

どちらにせよ、やることは一緒だ。

「その御仁。こんな辺境で何をしているかは知らぬが、主のため、貴様の魔力を頂こう。」

女は…体つきや後ろ姿、服などから察した…海の方を向いているままだ。

しかしこの女性、どこかで見たことのあるような…

「釣れたか…」

「何？」

釣竿を持たずに釣りでもしてたのか？

「そろそろ始まるかと思って今日から張ってみたら…見事に釣り上げた。ねえ、シグナム？」

そういつてこちらを振り向く。

「な!？」

その顔は、何度か見かけたあの金髪の女性であった。

闇の書の復活、騎士の思い。(後書き)

K「うー…次回戦闘シーン書く気なんだけど、難しいよう…」

また、今回はルチアも暗躍します。

途中から原作？何それおいしいの状态になりますのでお気をつけを。
ではまた。

ベルカの騎士、転生者の兄。(前書き)

K「うはー…戦闘って難しい…」

オリジナル書けないとか…

K「言わないで!」

ベルカの騎士、転生者の兄。

<Sideシグナム>

海の方へと飛び出るような陸地が波に削れた、天然の岬。（刑事ド
ラマなんかで海に身投げするような場所、といえばなんとなくわか
ると思いますby作者。）

その一番端つこに、私に背を向けるように座っていた彼女は、今は
真正面から見据えている。

特に気を張る訳でも無く、腕を組んで私を見続けている。

しかし、私は動けずにいた。

表面にこそ出さないが、完全に気圧されていた。

（感じる…素人ならばわからないだろうが…圧倒的な達人の気配を
…！）

「…で？」

不意に発した一言に、思わず体を震わせる。

そんな不甲斐無い自分を恥ながら、それでもしっかりと目を合わせ
つづける。

- 目を離したら、その瞬間に自分の首は飛ぶ -

そんな考えさえ頭に浮かばせた。

「闇の書の頁の蒐集に来たんでしょう？」

その問いには答えずに、剣を構える。

どうせ全て分かって言っているであろう。

ならば、反論しようがしまいが同じだ。

「…ただで取られる気は無いし、ほら、来なさい？」

「武器どころか甲冑もつけぬ奴を一方的に痛め付けるほど、私は誇りを捨てていない。」

「そういう言葉は相手の実力を把握してから言いなさい。」

「……」

反論が出来ない。

確かにこのプレッシャーから見るに、かなりの実力者だと用意に想像が出来る。

しかし…それでも私は騎士なのだ。

「…はあ…」

溜息をつく。

「仕方ないわね。ガルーダ。」

『はい。』

彼女のデバイスなのだろう、機械音声の音が響いた瞬間、彼女は拳銃を握っていた。

また、バリアジャケットは纏っていないが、腰には黒いベルト。

ベルトには少し大きめの何かのカードホルダーがついていた。

「銃型…ミッド式か。1対1でベルカの騎士に勝てるかも?」

「そんなに御託が好きなら政治家にでもなりなさい。そうでなければ…」

かかってきなさい。

そう言われた瞬間、私は弾けるように飛び出した。

<Side三人称>

「はあああつ!」

烈昂の気合いと共に振り抜いた筈の一撃は、しかし右手に持った銃で止められた。

力で押すシグナムだが、その力を利用し空に飛び出す。

そのまま空中に作った魔法陣に飛び乗り、3発。

「舐めるな！」

自身に飛んで来る魔法弾を叩き落とし、シグナムも空中へ。

「ブレード。」

『gun blade』

手の中の銃が変形し、所謂銃剣の形に。

それをトンファーのように逆手に持ち、シグナムの剣を受け止める。

- - - 斬斬斬斬ッ！

- - - 避弾弾避ッ！

シグナムの嵐のように苛烈な攻撃を、時に銃剣で弾き、時に避ける。

不規則な金属音がステップのように響き渡る。

時折魔法陣を作って飛び乗り、剣を捌く。

シグナムは攻めあぐね、女性は攻撃を仕掛けない。

(これでは千日手が…なら！)

「レヴァンティン！」

ガシユン、という音と共に葉莖が排出され、魔力が膨れ上がる。

「紫電…一閃！」

シグナムの異名、「烈火」の代名詞とも言える炎を剣に纏わせ、振り抜く。

今までよりもかなり早いその一撃を銃剣で受け止めた瞬間。

辺りは一気に爆炎に包まれた。

(今のはかなりの手応え…咄嗟に障壁を張ったとしても、かなりのダメージが入っている筈。煙が晴れたら…一気に落とす！)

『Schlange form!』

連結刃に変え、魔力を練っていく。

そのまま、煙を中心にして何重にも取り巻いていく。

魔力は煙の中心から感じている。

この近距離の全包围攻撃は避けられない！

そう思っていた時だった。

- - ゾクツツツ！

背中に強烈に冷たい悪寒が走り抜け、一気に飛びすさる。

直後、シグナムのいた場所に何本もの砲撃 - - 避けるのに必死で数はわからなかったが、正確には16本 - - が多方向から飛んできた。見れば、先程まで彼女が足場に使っていた魔法陣から魔力が漏れだし、全てがシグナムに照準を合わせていた。

(…まさか、あれは全て攻撃用…！？)

その時大きな風が吹き、煙が一気に晴れる。

中にあっただのは、大型の魔力スフィア。

勿論、かの女性はどこにもおらず。

- - 嵌められた！

そう思った時には遅かった。

シグナムの周囲で魔法陣が一定の距離を持って旋回しつづける。

その魔法陣の数、計16。

魔法陣からは魔法弾が連射されつづけ、中央に閉じ込められたシグナムに向かって殺到する。

圧倒的な物量に中から脱出も出来ず、迫り来る弾幕を捌きつづけるが…

「くっ…はっ…はっ…!!」

息はあがり、身体はどんどん重くなっていく。

終わりの見えない無限弾幕地獄。

勿論、これはゲームのような「魅せる弾幕」でもなければ「避ける弾幕」でもない。

それでも逢えてゲーム風に言えば純粹に「殺す弾幕」なのだろう。

「はぁーっ…!!」

詰まっていた息を一気に吐き出して酸素を取ろうとする。

しかし、それが決め手になってしまった。

一瞬だけシグナムから死角となった場所には、一発の魔力弾。

しかし、それで十分。

「つく…!？」

シグナムの背中に一発だけ当たった弾。

たいした威力ではなかったが、息を吐いたのと同時にぶつかっただけ、一瞬動きが止まる。

しかし、その一瞬が命取り。

今まで魔法陣から連射されていた弾が、いきなり速度も数も段違いになった。

「っ何!？」

慌てて障壁を張るが、全方向から迫る弾幕には意味を成さず。

避けられないと悟ったシグナムは、耐え切るためにバリアジャケットを強化した。

だが、それは下策。

…というか、既に詰んでいるので策も糞もないのだが。

大量の魔力弾は、シグナムに当たった瞬間に炸裂。

100を超える魔力弾の直撃による爆風と衝撃に曝される。

圧倒的過ぎる火力。

身体もバリアジャケットもボロボロに、なす術も無く海に墮とされた。

<Sideシグナム>

闇に沈んでいた意識が浮かび上がって来る。

確か私は…

闇の書の呪いを察知して…

ヴィータ、シャマル、ザフィーラ達と蒐集行為を始めようとして…

それからどうなった？

何処かの無人世界に飛んで…

そうだ、私は…

あの女性に墜とされたのか…

なら、寝てる場合ではない。

一刻も早く目覚めねば…

頭では思っているても、瞼はとても重い。

精神力をかなり使って、ようやく瞼を開けて体を起こす。

「起きたみたいね。」

声がかげられる。

周囲を見るに、この世界の海岸線なのだろう。

天上には数え切れぬほどの星、波は静か。

人の手の入っていない、ある意味自然の「楽園」のようなものか。

改めて私に声をかけた人間を見る。

「…私は、負けたのだな。」

「そうね。」

スパッと言ってくれる。

遠慮なんて微塵も無い。

「ああ、一応レヴァンティンは預かっているわ。」

「…だろうな、私は敗者だ。武器を取り上げるのは当然か…」

何度も会ったことはあるが、改めてこの女性を観察すると、やはり底知れない。

「…で？闇の書の騎士が何の用？」

「…さつき自分で言っていただろうに…主のための、魔力蒐集だ。それ以外には、今の私に使命はない。」

「…主はやてと、ずっと一緒に暮らしていれば良いじゃない。」

「っ！！？」

体のたるさなど忘れ、一気に跳ね起きた。

「なぜ…その事を知っている！？」

「調べただけよ。勿論あなたの主が置かれている状況も知っている。」

「…だつたらわかるだろう！私がなぜ蒐集行為を始めたか！！」

「そうね。わかるわ。そしてだからこそ言つ。」

そこで彼女は一度息を吐き、言った。

「貴女達では、八神はやてを救えない。」

ギリ、と唇を噛み締める。

「なぜそんな事がわかる！何の関係も無い貴様に、そんな事を言わ

れる筋合いは無い！」

「信じないなら…その先は破滅のみ…。
ま、信じてもらえるとも思っていないけど。」

こちらの言葉などどこ吹く風と受け流す。

「…我等のやることは変わらない。
我等が主の為、闇の書を完成させるのみ！」

「…まあ、私にはどうでもいい事だけどね。
返すわ。」

投げられたのは私の相棒。

しっかりと受け止める。

「名は？」

「リリアーヌ、よ。好きに呼べば良いわ。」

「…次は勝たせてもらう。」

「言ってなさい。」

主はやてを待たせるのはまずい。

急いで帰らなければ…

夜空に輝く綺麗な星が、今は少し疎ましい。

心の中には、得体の知れない黒いものが渦巻いていた。

<Side 三人称>

「あー、やっと行ったか。」

シグナムが飛び去ってから、リリアー又は呟いた。

「予想以上にめんどくさかったが、まあいい暇潰しに…なればいいけどな。」

女口調は肩が凝る…」

とんとんと肩を叩いて立ち上がったのは転生者の兄、リリアー・L・クラリーベル。

3日程前から、この辺りの無人世界でヴォルケンリッターを待伏せていたのだ。

なぜそんな事をしているか？話は数日前に遡る…

ベルカの騎士、転生者の兄。（後書き）

K「という訳で、シグナムVSリリアーヌをお送りしました！」

リリア「いや、あれは戦闘って言えるのか？」

K「あれ、どしたの？あんぎゃーすは？」

リリア「なんだか電波を受信したらしくてな。
プロット作ってたぞ。」

K「へえー…と、今回の戦闘どうでしたか？
意見とか頂けると泣いて喜びます！」

リリア「お前が泣いても気持ち悪いからいらん。
じゃあまた。」

K「酷くない!?!」

鶴の一声、妹の画策。(前書き)

K「ね、眠い…」

明日日曜なんだからとっとと寝てきなさいな。

K「そっします…」

鶴の一声、妹の画策。

<Side三人称>

それは、三日前、10月24日の昼。

涼しくなってきたので冬服の用意をしながら、ルチアはふう…と溜息を漏らした。

「A's…どうしようかなあ…」

今だにそんな事で悩んでいるのであった。

ルチアとしては闇の書を直すために行動したいのだが、そうするとシグナム達と行動せざるを得なくなる。

それはつまりなのはやフェイトと敵対する、ということの意味する。それは無い！と即座に却下したが、そうなるとなのは側につく事になる。

その場合は闇の書を解析するなど持ったのほか、時間があまりにも足りない。

リインフォースは消滅する事になる。

どちらについても最善にならない。

「ぶぐう…」

ぶっちゃけ考え無しに行動するからだ。

「お兄ちゃんに相談してみよ…」

ルチアがとつたのは、兄に相談してみるくらいであった。

「お兄ちゃん？」

昼飯を作り終えた兄に声をかける。

「どうしたいきなり？」

「A'sでどういう立ち位置についたらいいかわからない…」

といつつ机に突っ伏すルチア。

これでもかなり悩んでいるようだ。

「何で俺に聞くんだそんなこと…」

「なんか良い案出ないかなーと。」

「はあ…」

溜息をつきつつ昼飯を運んで来る。

今日の昼飯は炒飯と簡単な中華スープだ。

「…で？何なんだ？」

「その返答は酷くないですか姉様…」

兄、無言でアイアンクロー。

チートボディだろうが痛みは残る。

ルチア、絶叫。

「…で？##」

「そんな怒らないでよう…で、立ち位置っていうのは…」

闇の書Sideについていたら闇の書の異常を少しづつ調べて、直す方法が見つかるかもしれない。

でも、その場合なのはちゃん達と敵対することになるから却下。」

兄、無言。

ルチアは話を続ける。

「で、なのはちゃんSideについてたら、多分原作に近い形で終わっちゃう…」

そうなるとリインフォースを助けられない…」

「別に良いんじゃないの、助けられないんだっいたら助けられないで。」

「

「良くない！…確かにこの世界に転生して浮かれてたけど。

なのはちゃんと出会ってフェイトちゃんに出会って。」

それで！私は……」

「……はあ……ようするに、全員幸せにする！とかクサイ事考えてんだろ？」

必死で言うルチアにスパッと核心をつく姉。

「う……まあ……そういう事だけ……」

「だったら、まず何が最善の状況なのかを考えて、そうなる為の障害を一つずつ上げていって、それを解決する。ほら、これでいいだろ。」

「そつか……ごめんお兄ちゃん、アドバイスありがと！ご馳走様！」

「お粗末さん。」

自分の部屋へと駆け上がっていくルチアを、食器を片付けながら見送る兄であった。

<Sideルチア>

とりあえず整理しよう。

最善は、簡単に言えばヴォルケンスとなのはちゃん達の和解＋リインフォース生存。

そして、はやてちゃんの足の完治。

和解については原作でもしていたから、イレギュラーが無い限りは大丈夫。

はやてちゃんの足も、闇の書が夜天の書として正式に稼動すれば問題無い。

ただ、リインフォースだけは原作と違ってどうにかするしかない。

そもそも、リインフォースが消えたのは何故？

闇の書の闇が修復不可能だったから。

それは何故？

あまりにも壊れすぎていると言うのと、時間が足りないから。

「うーん…」

なんか駄目っぽい。

自問自答を繰り返すとどんどん駄目っぽくなっていく。

「あれ？でも待てよ…」

アプローチを変えてみる。

そもそも、何ではやてちゃんはリインフォースが消える事を知らなかったんだっけ？

リインフォースが教え無かったから？

違う。

話す時間が余りにも少なかったんだ。

もっと時間があれば、リインフォースと話してもっと覚悟が持てていた…と考えたら？

つまり…

「はやてちゃんとリインフォースを、もっと早く会わせる…」

でも、どうやって…

確か、はやてちゃんとリインフォースの初邂逅は闇の書のページを集め終えて、防衛プログラムが起動したあと…

それ以外だと、SSO2だったよね…

「あ。確か漫画版で…」

シグナムとシャマルが闇の書について話し合ってた…

そうだ、思い出した！

「400ページ蒐集による管制プログラムの起動！」

となれば、いくつか壁はあるけど…

「全てが上手く行けば、皆助けられるかも!!」

そうと決めれば、早速お兄ちゃんと作戦会議だっ!

「お兄ちゃん?」

「どしたー。」

読書をしていたらしい。

机にはお茶と、分厚い本が一冊開いて置いてあった。

「ちょっと思い付いたことがあるんだけど…」

「で?」

「もしもお兄ちゃんが協力してくれて、本当に全てが上手く行けば、はやてちゃんもリインフォースも、皆助けることが出来る。」

お兄ちゃんは私を見ながら無言。

「だから、お願い!

ちよつとだけでいいから、手伝って欲しい!」

「いいぞ。」

「…あ?」

「んで？話してみる。」

ちよwwwwwwおまwww

「返答早いよ！」

面倒だからパスとか言われたらどうしようかとか色々考えてた私が馬鹿みたいじゃん！」

「近隣の世界はあらかた行ったからな。」

丁度暇だったんだ。」

悪びれもしないし…

「…はあ…」

「いいから早く話せ面倒臭い。」

「わかった、わかったよう！」

それでいくつか質問なんだけど、まず一つ目。

お兄ちゃんよく買い物に行くけど、はやてちゃんか守護騎士にあった事ある？」

「あ…：どんな奴だったけ？」

「見た目だけだと、車椅子に乗った茶髪の女の子がはやてちゃん、ピンク色のポニーテールの巨乳がシグナム、金髪でイヤリングと指輪付けた女の人がシャマル、赤い髪でうさぎ持つてる女の子がヴィータ、蒼い犬がザフィーラ。」

「ああ、確かに何度か会ったな。」

よくあうのは八神はやたとシグナム、シャマルだな。」

よっし、オッケー！

ええと、次は…

「それじゃあ次…お兄ちゃんって、確か情報を操る的な能力貰ったんだよね？」

「ん、そうだな。どっかの馬鹿のせいだな。」

「それはもう言わないでよー…
で、もしかして、それで闇の書のデータ改変って出来ない？」

「あー…出来ないことも無いだろうが、今のところらわからないな。
せめて闇の書を調べられればわかるが。」

「そっか…

じゃあ、最後。

お兄ちゃん、管理局に知り合っていない？
リンディさん達以外で…」

「いるぞ。何人か。」

「本当っ！？」

駄目元で聞いたんだけど…

まさかいるとは思わなかった。

その知り合いによつてはこれで一気に楽になるかも…

「因みにその知り合いって…」

「管理局のTOP。」

思わず吹き出してしまった私は悪くないと思う。

「正確に言えば、時空管理局本部大将兼総督だな。」

立ち位置で考えると、丁度リンディ＝ハラウン達時空管理局提督
全員の直属の上司だ。」

開いた口が塞がらない。

「なんでそんな超お偉いさんと知り合いなの…」

「旅行中にプライベートだったらしくてな、知り合った。」

突っ込んだら負けなのかな…

と、そんなことより…

「それで、その総督さんに連絡取れる？」

「あー…出来ないことも無いだろうが。」

…大方読めてきたぞ、管理局の誰かに連絡取らせるつもりか？」

「うん…ギル・グレアム提督…」

今回の闇の書を封印する為に裏で色々と動いているはずんだけど…」

グレアムの企みを話す。

氷結の杖、デュランダルの超広範囲の凍結による永久封印。

「でもそれをやったとしても、闇の書は必ず数年で復活しちゃう。言い方悪いけど、グレアム提督のやっている事は全部無駄になる。」

「なるほど。」

まあ、わかった。

とりあえずそのグレアム提督とやらはこっちから頼んでみるが、いいな?」

「もし出来れば直接話したいんだけど…」

まあ、流石にそこまでは良いかな。

ありがとう、お兄ちゃん!」

とりあえず条件は大体クリアー!

「後は蒐集活動が順調に進めば、タイミングを計って私が色々やるから大丈夫!」

「蒐集?」

とと、お兄ちゃんは知らないのか…

「ごめんごめん、蒐集って言うのは…」

元々闇の書は、夜天の書って言う一つのデバイスだったのは言ったよね?」

「過去に改悪されたあの言ってたな?」

「うん。」

その夜天の書の本来の機能として備わっているのが蒐集プログラム。元々は色々な魔導師の魔力を蒐集して、その色々な魔法を使えるようにするのが夜天の書。

闇の書は、色々な魔法生物からも魔力を蒐集して、何が何でもペー
ジを集めようとするけどね。」

「なるほど…だとしたらちよつとまずいんじゃないのか？」

「へ？」

何かあったっけ？

守護騎士も強いし、そんな簡単には負けないと思うけど…

「最近この辺りに出現している巨大生物。」

噂話だが、かなり信憑性高いぞ？」

…プレシアとジュエルシードを飲み込んだあれか。

「多分、それ見たことある…」

「なら話が早い。」

その生物の特徴知ってるか？」

「確かにリンデイさんが言ってた…」

えつと…あ！？」

確か、あれが捕食してるのは…

「その生物の好物は、高魔力の生命体や無機物…」

「もしかしたら、周辺世界のものは皆食われちゃってるかも…」

「まあ、流石に全世界ではないだろうし、蒐集が全く出来ない訳じゃ無いだろうが…」

「蒐集速度は落ちるかな…多分…」

まあ、介入するまではいいか…

その時までどうするか…

「とりあえず、周辺世界で少し張ってて欲しい。

守護騎士にであつたら少し戦闘をして、はやてちゃんが主だということを知っている様に話す。

ついでに、守護騎士だけでははやてちゃんを救うことが出来ない、って言うておいてほしいんだ。」

「はいはい、全く面倒臭い…お前は何するんだ？」

「お兄ちゃんの妹として、一回はやてちゃんに会ってみる。

その方が後々都合が良いし…」

まあ、とりあえずやることはやって、勝負は12月の中頃かな？

「それじゃ、お兄ちゃんよろしくね?。」

「はいはい…」

見てなさいよ。

私が皆幸せにしてやるんだから！

八神はやてとの邂逅、原作突入。(前書き)

.....

K「無言で睨まないでください怖いです。」

いや、遅くない？

K「ドイツ語とかわからない。

あと、アニメ見る時間無い。」

他は？

K「宿題が終わらない……orz」

それは自分の勉強不足でしょ。

K「……ではどござー！」

逃げるな……

八神はやてとの邂逅、原作突入。

<Side三人称>

リリアー又VSシグナムの戦いが起こり、リリアー又が帰宅した。

「お帰りお兄ちゃん、明日一緒に海鳴総合病院行ってくれない？」

「…」

アイアンクロー、炸裂。

「痛い痛い痛い!？」

「もう少し状況を詳しく説明してみろ。」

「うう…はやてちゃんの所に行こうと思ったんだけどね？よく考えたら私ってはやてちゃんと面識無いから、いきなり会いに行っても怪訝に思われるだろうし…」

「それで、面識がある俺と一緒になら大丈夫って？」

「そういうこと。…駄目？」

「まあ、暇だし別に構わんが。」

「ありがと！」

じゃあ、明日の午前中にも行こうかな…あ、そういえば今日誰かと会った？」

「ああ、ピンクのポニーテール…シグナムだったか？」

「本当！？ちゃんと私の言ったことシグナムに言った！？」

「ま、適当にな。何だか随分怒っていたけどな。」

「うん、大丈夫！大体予想通りだよ！

お兄ちゃんありがとうっ！」

手をあげて喜ぶルチア。

さしずめ、「計画通り…」と言った所か。

「それじゃあ、次は明日の病院だー！」

『すみません、少々よろしいですか？』

ルチアを遮ったのはファーネライル。

「何？どしたのファーネライル？」

『今はマスターではなく、マイスター、貴女にお願いがありました』

…』

「あんだねえ…#」

「で、何だいきなり…」

ルチアをスルーし、ファーネライルが続ける。

『確か、ベルカ式のデバイスにはカートリッジシステムなるものがありましたよね?』

「そうなのか?」

やはり知らないリリアヌ。

「うん。カートリッジシステムって言うのは簡単に言うと…一時的に魔力をブーストするために、予め魔力を込めた弾丸をセットしておいて、カートリッジをロードするだけで瞬間魔力量を増やす事が出来るもの。」

多分シグナムも使ってたと思うけど…」

「…ああ、あつたなそんなもの。それで?」

『私に、そのカートリッジシステムを組み込んで貰いたいのです。』

原作で、レイジングハートとバルディッシュも言っていたこと。

『私は、常にマスターの為にある。』

なればこそ、私は常にマスターの最善となりたいのです。』

「ファアーネライル…」

憎まれ口を叩いたり毒を吐き合ったりしていても、やはりファアーネライルは最高のデバイスだと再認識したルチア。

「だよ。どうする?」

「…うん。私はいいいよ。ファアーネライルたつての頼みだし、私も使

「つてみたいし！」

「あつそ。まあ、まずはカートリッジシステムがどんな構造でどう組み込むかわからないから、つけるにしてもやるまで時間かかるけどな。」

「勿論OKだよ！」

翌日の昼頃。

「つきましたっ！」

「五月蠅い……」

海鳴総合病院前には、ルチアとリリアー又がいた。

「さあいざゆかん、はやてちゃんのに！」

ゴスッ

「つ~~~~つ！」

「いちいち五月蠅い……」

何かと騒ぐルチアを殴り、病院内へと入っていく。

八神はやての病室は、四階の景色の見える部屋だった。

リリアーヌがドアをノックする。

「はい、大丈夫ですよ。」

…一瞬ルチアが身を震わせたが、見なかったことにしよう。

ガラリと扉を開けると、病院らしい簡素な部屋に真っ白いベッド、花瓶には花が飾ってある。

「あ、リリアーヌさんやー どないしたんですか？」

「ん、入院したって聞いてね。見舞いに来ようかと思ったら、妹が勝手について来たのよ。」

「はじめましてはやてちゃん。私はルチア・L・クラリーベル。よろしくね？」

「はじめまして、八神はやていいますー。」

「初対面だけど何回かお見舞いに来るから、仲良くしようね？」

「ありがとうございます。病院じゃあ娯楽は少ないし、嬉しいです。」

いまだ何も知らぬ幼い娘と、その娘を助けんと動く兄妹。

間違った方法と知らずにただ主を助けるためだけに動く騎士達と、友との再開に心を馳せる二人。

四つの道が交わる日は、そう遠くはない。

そして交わった後の大きな道を作り上げていくのは、外ならぬ兄妹なのだろう。

12月2日、夜7時頃。

めっきりと冷え込んできた中を人々が行き交い、あと少しで訪れるクリスマスに思いを馳せる頃。

「どうだヴィータ、見つかりそうか？」

「いるような、いないような……」

空中に浮かんでいるのは赤いゴスロリ衣装を纏ったヴィータと呼ばれた女の子と、ザフィーラと呼ばれた蒼い体毛の狼。

「この間から時々出てくる、妙に巨大な魔力反応……あいつが捕まれば、一気に20ページ位は行きそうなんだけど……」

「別れて探そう。闇の書は預ける。」

「オツケーザフィーラ。あんたもしっかり探してよ。」

「心得ている。」

狼は空を駆け出していく。

ハンマーを持ったヴィータがそれを構えると、足元に魔法陣…ミッド式の円形のものではなく、三角形の頂点に小さな丸がついた別式の陣が出現する。

「封鎖領域、展開。」

『Gefangnis der magic（魔力封鎖）』

海鳴の全域に、急速に広がっていく結界。

魔力を持たぬ人間や生物は、結界には何の影響も及ぼさず。

「魔力反応、大物見つけ！」

高い魔力を持った者だけ在中に取り残す。

「行くよ、グラーファイゼン。」

『Jawohl（了解）』

ヴィータは飛ぶ。自らの相棒と共に。

大きな魔力反応…高町なのはの元へ。

今、真に新しい物語が幕を開ける。

その先に待つのは救いか、それとも絶望か…

八神はやてとの邂逅、原作突入。（後書き）

ほれほれちゃっちやと続き書く。

K「あんぎゃーすは書かないの？」

暇を見つけて書いてるけど、中々進まないのよね。

では今回はこの辺で。

砕かれた勇気、少女の友情（前書き）

K「短いです。」

本編1話後半だけだしね。

K「急いで2話の文を書かなきゃな……」

いや、テスト勉強しなさいよ。

K「しっふっ」

砕かれた勇気、少女の友情

<Side三人称>

『Caution, Emergency(警告、緊急事態です。)(

「え?...結界!？」

海鳴全域に張られた結界に、なのはは反応した。

PT事件も終わって、いきなりこつこついう事に巻き込まれるとは思っていなかったのだろう。

『It approaches at a high speed
(対象、高速で接近中。)]

「近づいてきてる...こつこつに!？」

とあるビルの屋上。

なのはは周りを見渡して警戒する。

『It comes(来ます)』

なのはが身構える。

飛んできたのは、赤く光る魔力弾。

「っ!?!?」

『Homing bullet (誘導弾です)』

ならば避けても無駄だと思い、手を突き出して障壁を張る。

衝撃。

フェイトの攻撃とは比べものにならない威力を、どうにか受け止める。

「っあっ!?!?」

「デートリヒシュラークッ!」

反対側から強襲してきたヴィータのハンマーを、やはり障壁で受け止める。

二つの攻撃を真ん中で受け止めた為、威力は増幅。

爆発。

大きく吹き飛ばされ、ビルの谷間へと落下していく。

それに追撃をかけるべく突撃するヴィータ。

しかし…

「レイジングハート、お願い！」

『Standby ready setup』

なのはが桃色の光に包まれる。

『Schwalbeシュヴァルベフリーゲンfliegen』

ウィータが鉄球を取り出す。

投げ上げ、

「ふっ！」

ハンマーでぶっ叩く。

高速で飛んで行った鉄球はなのはを纏う光にぶつかり、爆発。

巻き起こった煙に向かって突進するも、避けられる。

「いきなり襲い掛かれる覚えは無いんだけど！
どこの子？一体何でこんな事するの！」

それには答えずに、手に鉄球を出現させる。

「教えてくれなきゃ、わからないってば！」

「っ？あっ！」

なのはが手を振ると、煙に紛れて出しておいた魔力だん2発が背後

から飛来する。

一発を避け、もう一発を防御する。

「このやるー！」

『Flush move』

またも突進してきたヴィータを、急加速してかわす。

『Shooting mode』

「話を！」

モードを変え、一気に魔力をチャージする。

『Divine』

「聞いてってばっ！」

『buster』

巨大な魔力砲がヴィータを襲う。

間一髪避けたものの、余波によって帽子が飛ばされていく。

ヴィータの目の色が変わり、なのはを睨みつける。

「グラーファイゼン！カートリッジロード！」

『Explosion』

弾丸が消費された瞬間、爆発的に魔力が膨れ上がる。

『Raketenform』

ハンマーが形を変え、ドリルとロケットエンジンが装着される。

「ええっ!?!」

「ラケーテン!」

ハンマーのロケットエンジンが噴出され、一気に回転する。

驚異的な速度で一気に迫る。

「うおおおおおっ!」

なのはが慌てて障壁を張るが、所詮急ごしらえ。

即効で破られ、レイジングハートに突き刺さる。

「ハンマーツツツ!」

レイジングハートの至る所に輝が入り、吹き飛ばされる。

ビルの窓を破壊して中へと飛び込む。

そこへ追撃をかけるヴィータ。

「でええええい！」

「っ！」

『Protection』

魔力防壁が、迫る凶器を押し止めるが…

「ぶちぬけーっっ！」

『Jawohl(了解)』

バリアが粉々に砕ける。

それでも切っ先は止まらない。

咄嗟にかわしたものの、バリアジャケットの上着が破壊される。

更に、衝撃で壁に叩き付けられた。

息をあげるヴィータ。

グラーフアイゼンから大量の蒸気が吹出し、空薬莢が排出される。

(…痛みで動けない…魔力を練れない…)

息も絶え絶えに、それでもヴィータにボロボロのレイジングハートを突き付ける。

しかしその手はふらふらで、目も霞んでいる。

ヴィータがハンマーを振り上げる。

（こんなので…終わり…？

…嫌だ…ユーノ君…クロノ君…フェイトちゃん…ルチアさん…！）

恐怖から目をつぶるなのは。

振り下ろされる切っ先。

ガキーン、と鳴った金属音。

訝しげに顔をあげると。

輝くような金髪に、黒いマントを羽織った少女が、手に持つ戦斧でハンマーを受け止めていた。

「ごめんなのは、遅くなった。」

「ユーノ…君…」

後ろから優しく声をかけたのは、人間状態のユーノ。

「…仲間か…！」

一旦距離をとるヴィータ。

『Scythe form』

戦斧を構え直すフエイト。

なのはを守るように立ち塞がり、言い放った。

「…友達だ。」

それは、新たな彼女の心からの一言であった。

騎士との戦い、魔力蒐集。(前書き)

K「…大丈夫？」

あんに心配されなくても大丈夫だっての…

K「…ではどうぞ。」

騎士との戦い、魔力蒐集。

<Side三人称>

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ。」

「あんだ、てめえ…管理局の魔導師か？」

口が悪すぎると思いますヴィータさん。

「時空管理局囑託魔導師：フェイト・テストロッサ。」

一歩前に踏み出してフェイトは言う。

「抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。
同意するなら、武装を解除して。」

「誰がするかよ！」

そう吐き捨て、ビルの外へと飛ぶ。

「ユーノ、なのはをお願い！」

「うん！」

フェイトも、外へと飛び出す。

「ユーノ君……」

一つ頷いて、治療魔法をかける。

やはり補助魔法のエキスパートだけあって、なのはは痛みが薄れていくのを感じた。

「フェイトの裁判が終わって、みんなでなのはに連絡しようと思ったんだ。

そしたら通信は繋がらないし、局の方で調べたら広域結界が出来てるし……

だから、慌てて僕たちが来たんだよ。

……まあ、一応はリンディさんの上司さんの直接の指示……というか、その人からの半ば命令みたいな物だったんだけどね。

『折角彼女の裁判が終わったんだ。休暇みたいな感じで、第九十七管理外世界へ行ってきなさい』、って。」

「そっか……ごめんね……ありがとう。」

「……あれは誰？何でなのはを……」

なのははヴィータのことを、名前どころか見たことも無い人だったのだ、不思議にも思うだろう。

「わかんない……急に襲ってきた……」

ユーノ安心させるような優しいが笑顔を浮かべる。

「でも、もう大丈夫。」

「フェイトもいるし、アルフもいるから。」

「アルフさんも？」

「バルディッシュュ！」

『Ark saber』

魔法陣の上に乗ったヴィータに向かい、魔力刃を投げつける。

「グラーフアイゼン！」

『Schwalbefliegen』

ヴィータが投げ上げた四つの鉄球は魔力刃を無視してフェイトに殺到する。

「障壁！」

『panzerhindernis』

ヴィータと愛染が作り出した障壁には輝も入らず、刃は霧散する。

フェイトも襲い掛かる鉄球を高速機動でかわすものの、誘導力も速度も威力もあるために反撃に移れない。

ヴィータが鉄球の速度を上げようとする寸前。

「バリア…ブレイクッ！」

真下から飛んできたアルフの攻撃を、障壁で防ぐ。

そのお陰で誘導弾の操作が甘くなり、誘爆によって弾を消される。

また、張った障壁はアルフの防御破壊能力で粉々に。

「このおっ！」

アルフに向かって振り下ろされたハンマーを障壁で止めるが、反動で吹き飛ぶ。

「っ！」

『P h e r d e』

デバイスの機転で、背後から切り掛かったフェイトをかわし、アルフのバインドも不発。

しかしかわした隙にまたもフェイトが切り掛かる。

火花を上げてぶつかり合う二人のデバイス。

（くそおっ…ぶっ潰すだけなら簡単なんだけど…それじゃ意味ねえんだ…）

そう、彼女達は魔力の蒐集を行わなければならない。

この時において、今だに集まった魔力は150ページちょっと。

原作よりも更に遅いその蒐集速度は、更に守護騎士を焦らせる。

(カートリッジ残り2発…やれつか…?)

…いや、やるんだ！やんなきゃなんねえんだ！

はやての為にも…！)

しかし、現実是非情。

1対2ではあるが、この場は確かに拮抗していた。

響く金属音。

弾ける火花。

「このおおおっ！」

焦れてヴィータが突っ込む。

しかし、それは畏。

「!？」

「よしっ…!!」

アルフの張った設置型のバインドに引っ掛かり、手足を拘束されてしまう。

必死でもがくが、そう簡単に外れるものではない。

「終わりだね。」

名前と出身世界。目的を教えてもらっよ。」

「…っ！」

殺気が漏れだす。

「な、なんかやばいよ！」

アルフが身構えようと思ったその刹那。

真下という、死角からの一閃がフェイトを襲う。

なんとかギリギリで防いだものの、また距離を開けられた。

アルフも、三人目の男の攻撃を受ける。

「…シグナム？」

「レヴァンティン、カートリッジロード。」

『Explosion』

弾丸が装填され、剣を巨大な炎が包む。

「紫電一閃…！はああっ！」

「っ！」

高速で近づき、振り下ろす。

咄嗟にバルディッシュで防ぐが、両断されてしまう。

怯んだ所に、2撃目。

『Defensar』

バルディッシュが主の危機を察し、障壁を張る。

しかし、その一閃は障壁ごと吹き飛ばす。

「フェイトオッ！」

思い切り叩き付けられ煙をあげるビルにアルフが助けに向かおうとするが、ザフィーラが間に立ち塞がった。

「このおっ…！」

「フェイトちゃん…アルフさん…！」

「まずい、助けなきゃ…
対魔の響き、光となれ…」

なのはの足元に、緑色の魔法陣が展開される。

「癒しの円のその内に、鋼の守りを与え給え。」

なのはを包むように、緑色のドームが出現した。

「回復と防御の結界魔法。」

なのはは、絶対ここから出ないでね。」

「うん…」

なのはが頷いたのを確認したユーノは、ビルを足場に戦場へと向かって行った。

「どうしたヴィータ、油断でもしたか？」

「うるせーよ！こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか？それは邪魔したな、すまなかった。」

シグナムがヴィータにかけられていたバインドを破壊する。

「だがあんまり、無茶はするな？」

お前が怪我でもしたら、我等が主も心配する。」

「わーってるよ…。」

そっぽを向くヴィータ。

「…それから、落とし物だ。」

頭の上に置かれたのは、なのはに吹き飛ばされたお気に入りの帽子。

「破損は直しておいたぞ。」

「…ありがとう、シグナム」

眼下では、青と燈がぶつかりあっている。

「状況は、実質3対3。」

…1対1なら、我等ベルかの騎士に…」

「負けはねえ！…って言いたい所んだけどな、シグナム…」

「どうした？」

珍しく歯切れの悪いヴィータ。

「…いや、初日でいきなり負けてきたシグナムが言おうとしても、ちよっと説得力がな…」

「…」

二人を包む微妙な空気。

「…あれは、純粹に勝負をした訳ではなくてだな…」

「畏にかけられたからって言い訳すんなよ…」

「…」

「…」

「…行くか」

「…おう。」

その時、念話が入る。

『シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、聞こえる?』

「…シヤマルか?どうした?」

『とりあえず戦闘に集中できるように、闇の書を送ってほしいんだけど…』

今持つてるのはヴィータちゃんよね?』

「ん、そうだけど…」

『あの白い子から確実に魔力を蒐集して、とりあえず今日は撤退…はやてちゃんも、料理作って待っていてくれるから…』』

「ならば、早めに帰らねばな。ヴィータ、」

「わかってるっての!」

ヴィータが取り出した闇の書が消え去る。

転送魔法でシヤマルが持って行ったのだ。

「じゃあ、皆はあの黒い子と緑の子と、オレンジ色の使い魔をお願い。

私は転送と、蒐集の準備を始めるから…」

『頼んだ。』

念話が途切れる。

「早めに帰るって約束をしたけど…

早く、そして正確に。

導いて、クラーヴイント。」

『Ja』

シヤマルの二つの指輪から、嵌められていた宝石が空中に浮く。

『Pendelform』

魔力で出来た糸が、指輪と宝石を繋いだ。

跳ねる、跳ねる。

金紫緑赤燈蒼。

幾度となくぶつかるその光は、しかし騎士達が優勢であった。

「助けなきや…っ!」

痛みに耐えるも、やはり厳しい。

しかし、それでも一歩ずつ、足を前へ運んでいく。

「私が…皆を…助けなきゃ…っ！」

『Master』

声をかけたのは、唯一無二の愛機。

『Shootingmode, acceleration』

「レイジングハート…？」

桃色の巨大な翼をはためかせた、不屈の心を冠する相棒。

『Let's shoot it, Starlight Breaker』

「そんな…無理だよ、そんな状態じゃ…」

『I can be shot』

「あんな負担のかかる魔法…レイジングハートが壊れちゃうよ…っ！」

『I believe master』

自らの壊れる可能性など気にも止めず、レイジングハートは言う。

『Trust me, my master.』

「…レイジングハートが、私を信じてくれるなら。」

迷いに迷い、しかしてその結論に迷いは無かった。

「私も信じるよ。」

張ってあったユーノの結界が消え、構えたレイジングハートから巨大な魔法陣が出現する。

『フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん。』

私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を!』

『なのは…!』

『なのは、大丈夫なのかい…?』

すぐさまアルフとユーノから念話が入る。

フェイトも、いやフェイトが一番心配していた。

『大丈夫…スターライトブレイカーで撃ち抜くから!』

「レイジングハート…カウントを!」

『All light.』

巨大な魔法球が出現し、周囲の魔力をかき集めていく。

カウントが進み、魔力値はどんどん上昇。

勿論騎士達も気づいた。

しかしフェイト達が邪魔をし、なのはへと近づけない。

順調にカウントが進み、発射体制を整える。

しかし残り3カウントという所で、レイジングハートの電子音声にノイズが混じりはじめる。

「レイジングハート…大丈夫？」

『…No problem・count…』

なのはの声に答えるレイジングハートの声には、ノイズは混じっていないかった。

しかし、ただのプログラムであるはずのレイジングハートのAIは、確固たる意志を持ち始めていた。

愛しき主の為にこの一撃は、この一撃だけは、絶対に壊れるわけにはいかない。

フレームはガタガタ、コアもボロボロ、しかしレイジングハートは自分がどうなってもよかった。

ただ、主の為に。ただ、この一撃の為に……

カウントが残り1を刻む。

なのはがレイジングハートを振りかぶる。

合図さえあれば、いつでも撃ち出せるように。

ドクン、と身体に衝撃。

ついで、身体を中心に鋭い痛み。

そして息苦しさ、脱力感。

思わず倒れそうになる身体を、どっにか踏ん張る。

息が漏れ、思わずレイジングハートを手から離しそうになる。

目を下に向ける。

簡潔に一言で言っなら。

胸から手が生えてきた。

それだけの事であり、それだけの事態である。

「なのはあぁっ！」

急いでなのはの元へと飛ぶフェイト。

しかし、その間に立ち塞がるシグナム。

さっきとは逆の構図。

シグナム達としては、ここでの大量蒐集を逃すわけにはいかないのだ。

一度手が引き、また刺さる。

一回目と違い、その手には桃色の光が輝いていた。

その手が桃色の光を握り込むと、どんどん輝きを失っていく。

それでもものは倒れず。

レイジングハートを振りかぶった。

『count , zero』

「スター…ライトオ…」

一気に振り下ろす。

「ブレイカー…ツツツ!!!」

溜まりに溜まった巨大な魔力は、一筋の柱へと。

桃色の柱は直進。

その暴力的なまでの魔力で、結界を粉々に粉碎した。

なのはの手からレイジングハートが離れ、軽い金属音をたてて転がる。

なのはの胸にあつた光は姿を消し、なのは自身も身体に力が入らず。

意識を失い、ビルの屋上に倒れ伏した。

フェイト達が、急いで駆け付ける。

抱き起こして肩を揺らすも、反応は無い。

ユーノの治療魔法の光がなのはを包む。

しかし目を覚ます気配は、全くと言って良いほど無かった。

騎士との戦い、魔力蒐集。(後書き)

K「…次はどう書こうかな？
ではおらばっ！」

管理局本局と、グレアムの苦悩。(前書き)

K「原作3話分です。

話が進まないなあ…」

量も少ないしな。

管理局本局と、グレアムの苦悩。

時空管理局本局。

中に一つの町を持つ程の巨大な「艦船」で、時空管理局の一大拠点。アースラは一度ここに帰り、また第九十七管理外世界へと行き、そしてもう一度ここに戻ってきた。

流石にそろそろパーツその他が劣化してきたので、点検と検査と、ついでに交換をしておく手筈になっている。

丁度ドック内ではその作業が行われている最中。

巨大な艦に巨大なアームや小さな人等が取り付き、着々と作業を進めている。

476

「検査の結果、怪我はたいしたことないようです。

…ただ魔導師の魔力の源、リンカーコアが異様なほど小さくなっているんです。」

「そう…」

エレベーター内で話すのはリンディとエイミィ。

先の闘いで重傷を負ったのはについてだ。

「じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね。」

「はい、間違いないみたいです。」

「休暇は延期ですかねえ…流れ的に、うちの担当になっちゃいそう
ですし。」

「仕方ないわ、そういうお仕事だもの。」

「あは…」

『いやあすまないねえ。』

いきなり通信回線が開き、誰かが話しかけてきた。

「わ、わわっ、大将!？」

『…なんか、大将だと馬鹿にされているような気がしてきたよ。』

総督の方が語呂が良いかな?』

「私に聞かないで下さいな…」

通信をかけてきたのは我等が大将改め、時空管理局総督。

『…今度からは総督って呼ばせよう。』

で、ごめんねー。今回の事件は君達が担当になります。

一応直接関わっちゃったから、しょうがないっちゃしょうがないん
だけどね。』

「はあ、やっぱりですか…」

がつくりと肩を落とすエイミィ。

まあ、休暇が潰れたのだから仕方ないか。

「まあ、覚悟はしてましたが…」

『勿論、手当て無しという訳じゃない。』

片が付いたら本当に休暇にしてもらって構わないよ。
一月だ。』

「一月!？」

驚いた声をあげるエイミィ。

それほどに長期休暇は魅力的なのだ。

『うん、そうだよ。』

どうにか手配しておくから、「事件が終わったら」、「休暇を楽しんできてくれ。」

年末までに片が付いたら御の字だ。』

「…それはつまり、「方法によっては一ヶ月もかからない」、「という事ですか?」

ククツ、と含み笑いを起こす提督。

『聴いねリンディ提督。』

その通りさ、今回の主は特別だからね。
いつもなら何ヶ月もかかるものだけど、今回は条件が揃いすぎだ。』

「また、全てを知って…それでも、教えてくれないんですね。本当に狙いは何なんだか…」

『はっはっは、悪いねえ。』

でも、この事件もやっぱりあの子達と君達で解決するべき事だからね。

では、頑張ってくれたまえ。』

ブツン、と通信が途切れる。

「…本当、何考えてるんでしょうねえ。」

「私達には、まだわからないことなんですよけど…」

P T事件の時も、何もかもを知っていたような口ぶりだったし…」

始めから何もかもを知っていたのかもね。それこそ、事件が始まる以前から。

リンディは、そう冗談めかして締めくくった。

なのはの身体に医師が機械をあてる。

「…うん、流石若いね。」

もうリンカーコアの回復が始まっている。

ただししばらくは魔法が殆ど使えないから、気をつけるんだよ。」

「あっ…はい！ありがとうございます！」

ドアが開き、クロノとフェイトが入って来る。

「ああ、ハラOWN執務官。

…ちよっとよろしいでしょうか？」

「はい、何でしょう？」

「こちらへ。実は…」

医師とクロノが退室し、部屋にはフェイトとなのはだけが残される。

お互い無言。

「フェイトちゃん…」

「なのは…」

口火を切ったのはなのは。

困ったように笑うなのはを見て、つられてフェイトも笑う。

「あ、あの…ごめんね、折角の再会がこんなで…怪我、大丈夫？」

「あ、うん…。こんなの、全然…

それより、なのはが…」

「わたしもへーき。フェイトちゃん達のお陰だよ。元氣元氣！

…フェイトちゃん？」

笑顔を向けるなのはとは対称的に、辛そうに顔を俯かせるフェイト。

「フェイトちゃ…あっ!」

「っなのは!?!」

ベッドから起き上がるうとしたなのははまだ体調が戻ってないのか、少しふらつく。

慌てて支えるフェイト。

「…ごめんね、まだちょっとふらふら…」

「…」

お互いの顔を見る。

「…助けってくれてありがとう。フェイトちゃん…。それから、また会えて凄く嬉しいよ」

「…うん。私も。」

なのはに会えて、嬉しい…」

目を閉じ、固く抱きしめあう二人。

「…本当の事言つと、できればルチアさんにも会いたかったけど…」

「…うん。実は、私も…」

二人が思い出すのは、あの優しくして強い女の人。

「大丈夫だよ。ルチアさんだって海鳴に住んでるんだし、またすぐ会えるよ。」

大丈夫…」

「うん…。そう、だよね。」

また、すぐに会える…」

自分に言い聞かせるように二人は言った。

ここには無い温もりを求めるように…。

<Sideギル・グラム>

クロノが退室した後、私は息を吐きながらソファーに腰掛けた。

「闇の書、か…」

思い出すのは、今度の主である小さな女の子。

あの子の命はもう長くない。

だからこそ、せめてその短い命を幸せに生きてほしいと願い、私に出来るせめてもの償いとして彼女に資金面での援助をした。

顔を見た事も無い、彼女の父の友人を名乗って。

確かに心苦しい。

本当にこれでいいのか。

他に方法は無かったのかと、悩んだ事も少くない。

…しかし、私は小さな一つの命よりも、大多数の命を取った。

もう迷っている時間は無いのだ。

凍結魔法による闇の書の永久封印…絶対に成功させて見せる。

『ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピッ』

…通信？

『やあ、グレアム提督。』

「…総督でしたか。何のご用でしょうか？」

『いや何、今日はそちらに私の友達とその妹が行く日だからね、ちやんと予定はわかっているかな、とね？』

「ええ、その辺りは把握しています。

安心してください。」

『あっはっは、そうか、ならいいんだよ。

…なあ、グレアム提督。』

声音が変わる。

『今日来る人達の話をよく聞きなさい。
そして、自分が何をしようとしていたのかをよく考えなさい。』

「？」

「一体それはどういう…」

『言葉通りの意味さ。』

『そら、来たようだよ。』

呼び鈴が鳴る。

面会の時間のようだ。

『最良の結果になるよう、君も尽力する事だ。』

そうか最後に一言だけ漏らして、提督は通信を切った。

…言われるまでも無い。

そう一言心中で呟いて、部屋のドアを開ける。

「よく来たね、初めまして。

時空管理局提督、ギル・グレアムだ。」

「初めまして、私はルチア・L・クラリーベルと言います。」

「姉のリリアーナ・L・クラリーベルです。

総督の紹介とはいえ、ご招待いただきましてありがとうございます。」

「

「いやいや、構わないよ。」

私も歳だからな、そろそろ受ける任務も少なくなってきたのだよ。
…それで、用件は何かな？」

「ええと、はい。率直に私が言いたいのは…」

そうルチアさんは言うと、私を見据えて言った。

「一言で言うなら。」

グレアム提督、あなたに闇の書への干渉をやめていただきたい。」

管理局本局と、グレアムの苦悩。(後書き)

K「ルチアSideは次回予定です。」

ではではー。

ルチアの企み、仮面の…？（前書き）

K「交渉とか書けない。無理。」

そのお陰で出来がヒドイ物になっていますが、ご容赦を。

ルチアの企み、仮面の…？

<Side三人称>

「…何？」

「私は11年前のクライド・ハラオウンの事件を知っている。その上で、この話をしに来ました。」

ギル・グレアムの顔が強張り、目が見開かれた。

言葉が出せず、どう対応していいかわからない。

まあそれは致し方ないことも言える。

クロノの父であり、リンディの夫であるクライド・ハラオウンの死から10年以上もの間温めてきた計画を、あっさりと看破されたのだ。

しかも、ロストロギアの封印をやめろという暴挙。

…しかして、ルチアの目は真剣であった。

切り捨てようとしたグレアムはその目を見て、考えを改める。

「…この際、何故私が行おうとしていた事を知っていたか。そして、なぜ事情を知っているのかは置いておくでしょう。」

椅子に座りなおし、手を組む。

「理由を、聞かせてもらっていいかね？」

「はい。」

「私は、はやてちゃんを助けるために動いています。」

「はやてちゃんだけじゃない。」

闇の「いや、夜天の書の守護騎士達も、夜天の書自体も、その全てを助けるために動いています。」

「…不可能だ、そんな事は。」

闇の書のシステムは知っているのだろうか？」

「勿論です。馬鹿な奴らにいいように改悪され、救いようがなくなつてしまった悲しき魔導書…」

しかし、と言葉を区切る。」

「ほぼ確実に、はやてちゃん達全員を救う方法があります。」

「といつても100%では無いですが…」

しかし、少なくとも永久凍結よりは確実に成功します。」

「…方法を、聞こうか。」

「はい。」

そう言うと、空中にモニターが出現する。

「一言で説明すると、アルカンシエルによるコアの直接破壊です。」

「…話にならないな。」

そんな物は既に試している。」

クライド君の時にこな…」

「誰が闇の書をそのまま破壊するといいましたか。私が破壊しようとしているのは闇の書の闇です。」

「何…?」

説明を始めるルチア。

「まず、闇の書に400ページを蒐集させます。

そしてはやてちゃんに事情を話し、夜天の書の管制人格を起動。

その後残り266ページを蒐集しはやてちゃんを真のマスターとして覚醒させ、

マスター権限を使い防衛プログラムと無限再生プログラム、及びその他改変されたプログラムを切り離します。

切り離された防衛プログラムは暴走、その外殻を破壊し、宇宙空間に転送。

最後はアルカンシエルによる砲撃で破壊…

大まかな段取りはこんな感じです。」

「…蒐集完了したら主と騎士は闇の書に取り込まれる。

そうなれば脱出は出来ないだろう。

真のマスターになる事は出来ず、暴走が始まる。」

「その為の私達です。

高ランク魔導師数人でプログラムを抑える。

そして管制プログラムによるサポートがあれば、それは絶対に成功する。」

言い終え、息を吐くルチア。

グラムは目を閉じ、考え込んだ。

頭の中でその状況をシミュレーションする。

「…なるほど、確かに全てが上手く行けば成功するだろうな。」

「じゃあ!」

「しかし、それは全てが本当に上手くいった場合の話だ。

一つでも誤れば、恐らくこの案は失敗するだろう。

そうなれば八神はやてだけではなく、君の世界にいる人間にも多大な被害が出る。

いやもしかすれば、他の次元世界にまでその被害は及ぶかもしれない。

それでも、たった一人の少女とその騎士4人のためだけにその案を実行するのか？」

「はい。

失敗させる気など毛頭無いし、そのために色々動いてますし。

何より…守りたいと思った人を守るのは当たり前だと思うんです。」

その言葉を聞いたグラムは虚をつかれたように目を見開き、そして苦笑した。

「…もしここで、君が少しでも逡巡したら私は君の提案を却下し、永久封印を推し進めるつもりだった。

だが…君の決意は本物のようだ…

はやくて君を…頼んでもいいかね？」

「っ…はい！ありがとうございます…！」

ここに交渉は成立。

これがリンディやグレアム以外の他の提督ならば、こつ簡単には行かなかつただろう。

グレアムの聡明さと正義感、そして過去の出来事。

ルチアの原作知識と計算、そして正直な心。

全ての要素が混ざり合い、今ここにルチアの計画は本格的に始まった。

<Sideルチア>

グレアムさんとの話を終えた私達は、局を出てとある場所に向かっていた。

「はあ…何とかなったあ…！」

「割とあっさり決まったよつな気がするが？」

「そつでもないよ。」

…グレアムさん、真剣だったし。」

「…ま、関係ないけどな。」

え？本局まではどうやって来たかって？

それも、今から行く場所でわかるよ。

「よし、とりあえずは魔力の蒐集かなあ。

どうにかして200ページ分は集めたいし、お兄ちゃん、何かいい所ある？」

「：魔力の含有量が多い土地や、大気中の魔力濃度の高い所なら魔力の高い生物も多いだろうしな…

ネクロ、検索できるか？」

『勿論です！少々お待ちください…』

「できれば無人世界がいいんだけど、そんなに都合のいい所あるかな？」

今喋ったのは、お兄ちゃんのデバイスの「ネクロファンタジア」。

名前が思い付かなかったから東方の曲名にしたんだって。

ネクロファンタジア、通称ネクロは戦闘用ではなくて、その他諸々の補助の為のデバイス。

『検索結果、該当件数は7件。そのうち、時空管理局本局から1番近いのはこの世界になります。』

補助専門だけあって、その能力は目を見張るものがある。

「うし、そこ行くか。」

「賛成っ！待ってなさいよ、魔力持ち生物どもっ！」

「ちょっと黙れ五月蠅えな……」

到着したのは、艦船や貨物船等が出入りする次元港。

じつは、お兄ちゃんが個人所有している次元航行船がここに停泊しているのだ。

最も、艦船とかじゃなくて……地球で言う飛行機みたいなものだけ。

それでも中の広さは十分。

何となくスターウォーズっぽいかな？

それに次元航行にはかなりの時間がかかるので、ホテルみたいな生活スペースもある。

それも30人分。

風呂まであるのだから驚きだ。

「ネクロ、航海は頼んだ。」

『了解です。トラブルが無ければ、凡そ4時間程で到着します。』

最大の特徴が、その早さ。

普通の時空管理局艦船なら本局から地球まで10日以上かかるけど、

この船ならわずか1日足らずで到着できる。

「よし、出せ。」

『All light.』

わずかな衝撃と共に、船は動き出した。

さて、ともかくにもはやてちゃんを救えなければ元も子も無い。

「正念場だなあ……」

そう一人ごちて、仮眠をとるためにベッドに潜り込んだ。

<Side三人称>

ルチアがグレアムと交渉をした3日後。

つまり、フェイト達が海鳴に越してきた2日後の夜。

武装局員がヴィータとザフィーラを囲み、クロノが襲撃。

そして、なのはとフェイトが新しいデバイスを使ってヴィータとシグナムと戦う。

その間にクロノとユーノが闇の書のマスターか騎士の残りの一人…
シヤマルを探すという作戦。

ここまでは原作と何ら変わりはなかった。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するなら、武装の解除を。」

何とかシグナム達を助けようと逡巡するシャマルにデバイスを突き付けるクロノ。

アースラにいるエイミィやリンディも喝采をあげる。

これで終わると、そう考えて油断するのも無理は無いだらう。

突如クロノが感じた悪寒。

そして、突如現れた巨大な魔力。

デバイスを突き付けるのをやめて空中に飛び出す。

一瞬後、シャマルの後ろ、つまりクロノがいた場所を一筋の砲撃が飛んだ。

舞い上がる土煙。

晴れたそこには、黒色のマントとフードを被った女がいた。

身長はシャマルよりも少し高いくらい。

白い仮面をつけており、顔は見えない。

マントの下に着ている服は、黒のジーンズに真っ黒のYシャツ。

Yシャツの下に着込んでいるTシャツまで真っ黒だった。

夜ということもあって、明かりが無ければ真っ白な仮面だけが宙に浮いているようにも見える。

「貴方は…?」

シヤマルの問い掛け。

全く知らぬ人がいきなり現れたのだ、結果として自分を助けたという事になっても警戒を強めるのも無理は無い。

「…八神はやてを、助けに動く者。」

「つつつ!!!??」

そして、その警戒心はこの一言で最大限に膨れ上がった。

何故本当の主を知っているのかという疑問。

「今からあそこの結界を破壊し、あちらの執務官を押さえる。その間に脱出しろ。」

「え?ええ?」

「…スペルカード発動。」

「やらせるかっ!」

困惑するシャマルと、指示する仮面の女。

そして、攻撃を仕掛けるクロノ。

しかしその攻撃は、シールドであっさりと弾かれる。

「…神霊『夢想封印』」

『結界が壊れる！今すぐ脱出を！』

『『『え？』』』

仮面の女の攻撃宣言とシャマルの念話は同時だった。

続いてヴォルケンリッターの疑問の声、そして仮面の女のカードから七色の巨大な魔力弾が七つ出現する。

それらは天へと上り、一つ一つ結界にぶつかっていく。

一つぶつかる度に結界に衝撃が走り、輝が入り。

「貴女は、一体…どうして…」

「…そのうち、わかるさ。」

そら、行くといい。」

「…礼を、言っておきます。」

七つ目の魔力弾の直撃で、結界は粉々に砕け散った。

闇の書を持ち、高速でその場を離れるシャマル。

「ま、待てっ！」

追おうとするクロノの前に仮面の女が立ち塞がる。

「くそっ……」

『ごめん、クロノ君…高速連続転移…追いきれなかった…っ！』

エイミイから通信が入り、守護騎士達を取り逃した旨が伝えられる。

「…いや、この女性だけでも捕まえるさ。」

「デイバイン……」

「プラズマ……」

後ろでは、なのはとフェイトが既に砲撃準備が終えていた。

「バスターツツ！」

「スマツシャーツツ！」

桃色の魔力砲撃と、黄金の雷撃が仮面の女を襲う。

しかしその砲撃は、後ろを見ないまま張った障壁にいと簡単に防がれた。

「えっ!?!」

「嘘っ!?!」

戸惑いながらも、クロノの方へと飛んでくるのは達。

「貴様…名を名乗れ!」

「…時を待て。」

クロノの質問には答えず、謎の言葉。

「今は時を待て。」

来るべき時が来れば、いずれわかるようになる…」

「っ!?!それはどういう…」

「『百万鬼夜行』」

いつの間にか持っていた2枚目のカードを発動させる。

カードが光り、なのはのシューターと同サイズの魔力弾が、仮面の女を中心に円を描きつつ大量に飛んでいく。

「わわわっ、数が多い!?!」

「だが、速度は速くない…フェイト!」

「うん!」

慌てるのはだが、クロノとフェイトが弾を避けながら接近する。

「…くっ!？」

「密度が濃い…しかもどんどん弾数が増えていく…」

しかし、広がる弾幕は近くに行けば行くほど密度が濃くなっていく。そして赤と青の楕円の弾が追加され、全く近づけなくなってしまった。

「なのはっ!砲撃を!」

「撃ちたいんだけど…防ぐのと避けるので精一杯っ!」

なのはの砲撃は足を止めねばならない為、撃つ事はおろかチャージもできない。

…しかし、その弾幕は唐突に途切れる。

「…あれ？」

「弾が…止んだ？」

慌てて弾の出所である女の場所を見たが、そこには誰もいない。

「逃げられたか…？」

「…みたいだね。」

「…あの女の人、一体誰だったんだろう…」

皆の心には疑問がつもり、とりあえずは情報を纏めるためにフェイトの家へと戻っていった。

一方こちらは守護騎士達。

「全員いるな？」

「おつよー！」

「問題は無い。」

シグナムの号令に返事をするヴィータとザフィーラ。

しかし、シャマルだけが返事をしない。

「、シャマル？」

「どうしたー、シャマル？」

シャマルは、闇の書を開いたまま動かない。

「闇の書のページが、増えてる…:~?」

「「え?」「」

思わず聞き返すヴィータとシグナム。

「嘘じゃない…さっきの戦闘の前よりも、50ページも増えてる…」

「お、おい、それってどういう…?」

「わからない…わからないけど、とにかくページが…」

戸惑い、うるたえる。

しかし。

「落ち着け、シヤマル。

過程がどうであれ、ページが増えた事はマイナスにはならない。
今何ページだ?」

「えっと…300ページくらい…」

「ならば、後半分と少し…」

原因の究明は、主はやてを助けた後でも遅くはない。
今はただ…主はやてを助ける為に。」

一方、こちらはさらに別世界。

「ふう、何とか撒けたかな?」

森の中に姿を現したのは、仮面の女。

「ま、とりあえずやる事は全部やったし、次は…あ、シグナムVS
フェイトちゃんか。」

仮面をとると、出てきたのはルチアだった。

「んー…とりあえずアースラに気づかれないように何とか…
今回あげた分の三倍集めればいいんだし、何とか間に合うかな？」

胸の前でキュッと手を握る。

「…後、2週間。

絶対、助ける。」

ルチアの企み、仮面の…？（後書き）

K「グレラムとの話はあっさり終わります。
グレラムとの話は…ですが。」

とりあえず、お前は明日テストだろう…

K「う」

ほら、頑張る頑張る。

魔力蒐集、猫の藪蛇。(前書き)

K「駄目だ、筆が進まない。

なのはを出したい…フェイトを出したい…」

次で書け馬鹿。

ではごっごー。

魔力蒐集、猫の藪蛇。

<Side三人称>

「……………」

とある無人世界の海の上。

海上に浮遊するルチアは、自身のデバイスであるファーンネイルを手に持ち、目を閉じていた。

「ファーンネイル、モード2のダブルセイバー。」

『了解です。』

一本の棒の柄が縮み、2つに分かれる。

そして宝石からは、約80cm程の両刃の魔力刃。

『来ます』

「了解っ！」

突如海中から、大口を開けて何かが姿を現した。

一言で言うなら、巨大な海蛇。

それも、数十mを越す大きさのもの。

「よし、行くよ！」

『了解です。』

噛み付きをかわし、無防備な首筋に右手の剣を突き刺す。

グオオオオオオオ……と、海蛇が鳴く。

「雷電っ！」

『魔力変換”雷”』

唱えると、チリッ、という音が鳴る。

そして、轟音と共に雷撃が海蛇の身体を走り抜ける。

「ギヤオオオオオオツツツ！」

「とと、やばっ」

海蛇の体がグラリと揺れ、そのままプカアと海に浮かぶ。

剣を引き抜いて空中に浮かぶルチアは、ほっと一息。

「ちょっとぶつつけ本番だったけど、まあ上手くいったかな？」

『当然ですね、私ですから。』

「…そこは私を褒める所だと思っただけだな？」

『さて、早く魔力を蒐集してください。時間があまり無いと言ったのはマスターではありませんか。』

「無視!?!…何か納得行かないけど、まあ今は良いよ。私は寛容だからね。」

『……………』

「何とか言いなさいよ!」

『何とか』

「ベタすぎるよ!…ああもう!魔力蒐集開始!」

『了解。』

ファーンライルのコアが輝き、海蛇の体内から光の球体が現れる。

ふわふわと飛んできたそれをルチアは掴み取った。

「お兄ちゃん、送るよー?」

『はいはい…』

ルチアの目の前に小さな穴が開き、そこに光を放り込む。

穴の中には、同じような光がいくつも浮いていた。

穴が閉じると、ルチアもデバイスを待機状態に戻す。

「んじゃお兄ちゃん、一旦そつちに戻るよ？」

『とつとと帰って来いよー』

「はいはい！」

ルチア達は、とある管理外世界において魔力蒐集を行っている。

クリスマスイブまでは約2週間。

その間に可能な限り魔力を蒐集し、矢天の書に備える…というのが、彼女の言い分。

いや、ルチア自身はそうなのだが、リリアーナは別の目的もあった。

「カートリッジシステムと魔力変換、調子はどうだ？」

「それはもう絶好調だよ！」

よく考えたね、あんなの…」

「思いついたから試しただけだ。気にするな。」

魔力変換機能付き破裂型カートリッジシステム。

通常のカートリッジのように弾丸を一発一発込めるものとは全く違う、リリアーナが独自に作り上げたものである。

筒状の蓋付きの容器に魔力を込めると、その魔力は球状の固体となる。

カートリッジを使う度にその球が割れ、魔力を放出するのだ。

また炎熱の魔力変換資質を持つ者が魔力を込めれば砕いた時に炎が、雷の魔力変換資質なら雷が発生する。

ルチアとリリアー又は基本の属性魔力ならば使えるので、こうしてカートリッジに込めて使っている。

といってもまだ試作段階のため、こうしてテストを行っているのだが。

「ねえねえネクロ、今何ページ分くらい溜まってるか分かる？」

『夜天の書のページに換算して、39と半ページです。』

「およそ40ページくらい…うん、このペースで行けばどうにか間に合うかな？」

「ありがとう、ネクロ。」

『お気になさらず。』

「じゃあ私はもうちょっと魔力を蒐集してくるけど、お兄ちゃんどうする？」

「…寝てるか、特にする事は無いし。

3時間位たったら戻って来いよー。」

「了解！」

そう言って、ルチアは再び転送ポートから管理外世界へ飛んだ。

「…さて、寝るかあ…」

誰に聞かせるでも無くそう呟き、船内の宿泊スペースへと歩いて行った。

それから大体1時間後。

白い仮面に白い服の、二人組の男。

髪は青色で、殆ど素肌が露出していない。

…これだけでも、恐らく読者の皆様には正体の予想はついただろう。

そう、ギル・グレアムの使い魔である、猫姉妹ことリーゼアリアとリーゼロットである。

なぜこの二人がここにいて、そして何をしようとしているのか。

それはグレアムとクラリーベル姉妹の対話の少し後…

「お父様っ！それって一体…」

「いきなり言われたって…」

グレアムの部屋で、猫姉妹が詰め寄った。

丁度リーゼ達はクロノ達との話を終えた所。

表では協力するそぶりを見せ、裏では闇の書の凍結封印への道筋を作っていた所にグレアムから呼ばれ、闇の書への接触の禁止を言い渡された。

あまりにも急過ぎる方向性の転換に、リーゼ姉妹は戸惑っていた。

「彼女は本気で、全てを助けると言っていた。

…そして彼女が言っていた方法なら、確かにそれは可能だ。」

「だからって！

いきなり出てきて一方的に喋って、そんな奴にA級ロストロギアを任せるなんて…！」

「今回を逃せば次のチャンスがいつ来るかわからない…

クライド君の敵を討てるのは、今回が最後かもしれない…
それをわかってるの!？」

「ああ、わかっているぞ。

しかし私としても、何の被害も出さず、全員を救えるなら、勿論その方がいい。

はやて君が憎くてやっている訳じゃあないんだ。
それは分かるだろう?」

「そ、それはそうだけど…でも…」

「すまないな、こんな情けない主人で…

私は…」

グレアムが話し始めるも、リーゼ姉妹は既に聞こえていなかった。

(…こんな事じゃあ、クライド君が救われぬ…
ロツテ、)

(分かってる。

こうなったら、私達だけで計画を進める。
クライド君の仇は、私達が取る！)

元捜査官でもあるリーゼ達の手にかかれば、その日に誰がどういう
経緯でグレアムに会いに来たかは分かる。

「ルチア・L・クラリーベル…」

「どうやら、クロノの知り合いみたいね。
半年前のPT事件にも関わったみたい。」

「クロスケの知り合い？
何だってそんなのが、いきなりこっちに来るんだ？」

訝しげな声をあげるロツテ。

「わからないけど…
とにかく、行方を追いましょう。」

本局内での無断の個人転移は禁止されているから、恐らくは次元航
行船による正式入港…」

「魔力の残留と逆探知で、尻尾掴んでやる！」

といった経緯で、リーゼ姉妹はリアーヌの船に忍び込んでいる。

「この船があいつらの足、これに乗っ取りさえすれば大きな行動はできなくなる…」

「すぐに終わらせて、闇の書の方に取り掛からなきゃ…
デュランダルだって、もう少し調整しなきゃいけないし…」

そう言いながら、操縦席に向かって進む二人。

一本道なので、道に迷う心配も無い。

労せずしてたどり着き、メインコンピュータにハッキングをしかける。

「ま、ここまで来れば簡単なものよね。」

「ああ、戦闘になることも懸念していたが…杞憂だったな。
はい、終わりだ。」

トン、と電子画面を叩くと、『Complete』の文字が表示される。

そう、表示されたのだが。

『警告します。警告します。』

「な、何!？」

「ハッキングは成功したはずじゃあ…くっ!」

慌てて目の前の電子画面から船をコントロールしようとするのだが、ハッキングしたはずの画面は『Complete』の文字を出したまま動かない。

「くそっ、嵌められたか？」

「仕方ない、一度転移で逃げて体制を立て直すしか…」

『隔壁降下。魔力結合解除。』

「っ!」

入口に壁が出来、魔力を練っていた二人の力が抜ける。

魔法が使えないため、変身魔法も解除されてしまう。

『侵入者の拘束を行います。』

地面から赤い糸が現れ、姉妹の手と足を縛る。

「くそつ、固い…」

「いきなりミスったかな…？」

「あれ、お兄ちゃん何かあった？
散らかつてるけど…」

「どっかから野良猫が紛れ込んでたみたいだな。
暴れに暴れてこれだよ。」

「へー…大変だねえ。
その猫は？」

「外の世界に放り出しておいたよ。」

魔力蒐集、猫の藪蛇。(後書き)

K「ああ駄目だ…全然うまく書けない…
鬱だ氏のう…」

阿呆か全く…

K「A・S本編さえ終わればなあ…
いろいろ書きたいことが書けるのに…」

鉄槌の思いと、闇の中。(前書き)

K「おかしい…予定では昨日でA・S編が終わっていた筈なんだけど…」

あんたが期限守れないのなんて知ってるよ。

そんなことより、今PVとユニークアクセスどのくらいだと思う？

K「え？えーと…」

PV15万、ユニーク2万くらい？」

答えは後書きで…

鉄槌の思いと、闇の中。

「くそっ…」

砂漠。

砂の、山。

「はやてに貰った騎士甲冑を、こんなにグチャボロにしやがって…」

赤い少女は、歩く、歩く。

自らの足跡を地面に残し、自らの相棒を引きずりながら。

「ま、騎士服は直るし、そこそこページを稼げたから、いいけど…
わっ…」

靴の留め金が外れ、砂の中に頭から突っ込む。

真上で輝く太陽のおかげで散々熱せられた砂は、ヴィータの顔を容赦無く焼いていく。

「痛く…無いっ!」

闇の書を抱え、飛び起きる。

「痛くない…!…こんなちつとも痛くない!」

思い出すのは、自らの主の小さな少女。

「昔とはもう…違うんだ…」

相棒であるグラーフアイゼンを杖がわりにして立ち上がる。

「帰ったらきつと…あったかいお風呂と…はやてのご飯が待ってんだ…」

今まで一度として得る事の無かった、そしてとうの昔に諦めていた、暖かい家庭。

ヴィータがはしゃぎ、シグナムが諫め、シャマルが笑い、ザフィーラが困り、そして主が微笑む。

そんな、少し違えどどこにでもある家庭。

「優しいはやてが、ニコニコ待っていてくれるんだ！」
闇を生きてきた守護騎士達には眩しかった今度の主。

しかし光は闇を照らした。

「そうだよ…あたしは、すっげえ幸せなんだ…！」

守護騎士達が掴んだ、紛れも無い幸福。

一度幸せを知ってしまったから、手に入らなかった物が手に入ったから、もう戻りはしない。

「だから！」

砂漠から突如として現れた、巨大なワーム。

「こんなの、全然、痛くねえーっ！っ！」

辛くもヴィータはワームを仕留め、家にちゃんと帰る。

その際怪我をしていたヴィータと心配するはやてで一悶着あったが、わざわざ記すようなことではない。

日付は変わり、はやての通院日。

この日は少し大掛かりで、大きな機械を使って少し長い時間をかけて行われる。

しかもその間、はやては寝っ転がりっぱなし。

いくら大人びているといっても、まだ9歳。

眠気に襲われるのも、無理は無かった。

そして、その夢の中で見た、闇の書の過去。

決意を新たに、「守護騎士達と平穏に暮らし、幸せにする」と心に決めたはやて。

そして…

「ふえ？なんや、体が光って…」

「目を覚まし始めているようです。」

…お別れですね。」

「うー…もっと話したいことあるのに…」

「私もです。」

暗闇の中、唯一輝くはやての体。

それは、まるで闇の書を照らす太陽のようで。

「私は貴女の事、もっと知らなあかんに…」

「どうか、あまりお気になさらず…」

「それに、名前もつけたげなあかん。」

「えっ…?」

不思議そうな声を漏らす管制人格。

「闇の書は、貴女の本当の名前とちゃうし、夜天の魔導書って呼ぶんもなんや違うし…」

綺麗な瞳と髪によく似合う、優しくて強い名前。あたし考えてあげなあかんと思って。」

「…ありがとうございます。」

お心だけ、何よりありがたくいただいております。」

管制人格の声が震える。

「ふふっ、ほんなら、また会おうな。」

「お気をつけて…どうか、お体をお大事に…」

「うん、貴女もな。」

自らの身を案じる管制人格に、笑顔で返す。

「はい。」

…騎士達を、よろしくお願いします。」

「うん。きっと…」

光が強くなり、はやてが掻き消える。

後に残されたのは、闇。

「はぁ…行ってしまわれたか。」

管制人格の口から漏れた溜息。

「私はまた、一人だな。」

自嘲するような笑みを浮かべる。

何も無いこの場所に、ポツン、と響いた音。

「え…?」

ポツン、ポツン。

「ああ…これは、涙か。」

自らの目から零れる涙を拭いもせず、落ちた涙を見つめる。

「久しく忘れていた…私はまだ、泣けるのだな。」

自覚すると同時。

溢れる涙は増し、顔が歪む。

笑顔を泣き顔に変え、嗚咽を漏らす。

「つく、つう…っ!」

立っていられず膝を折り、自身の身体を掻き抱く。

はやてにはわからない。

何気なく言った、「名前を考える」という言葉で、どれほど管制人格が救われたかを。

「^{こたひ}今度の主は、一体どれほど暖かく、」

思い返すは、戦いの日々。

「どれほどおおらかで、」

人の持つ欲望の為だけに「道具」として使われた日々。

「どれほど心優しいのか。」

数多の命を奪い、何も救えず、全てが絶望に染まっていた日々。

「主は目を覚ませば、今の仰せも、私の事も、我等の過去も、全て忘れてしまわれる。」

ただただ人の醜い部分を見せられてきた騎士達にとって、はやてはあまりにも眩しくて。

「夢の外で、私を思い出される事は無いだろう。それは構わない。」

皆が惹かれた。その暖かな太陽に。それは、管制人格も例外では無かった。

「だが：それゆえに、遠からず訪れる破滅を救う術が。私には何も無い。」

しかし、だからこそ。

もう慣れたと思っていた絶望が、限りなく怖い。

「夜天の光も：闇に墮ちた。

私は主を救うことも、騎士達を止めることも、何も出来ない……」

騎士達はまだいい。

転生時にある程度の記憶を消去されるから、本当の絶望を覚えていない。

しかし、管制プログラムは別だ。

長きにわたる記憶を持っているため。

何よりも…その絶望は深い。

「何処の誰でもいい…！」

夜天の象徴、白銀の髪を持つ少女。

「どんな手段でもいい…！」

先の見通せぬ闇の中、少女の慟哭の叫びがこだまする。

「この絶望の輪廻を、断ち切っては貰えないか…！」

それは、プログラムとして生まれた筈の彼女の心からの願い。

「あの優しい主と…一途な騎士達だけでいい…！」

救っては貰えないか…！」

とめどなく涙を流し、髪を振り乱す。

「烈火の将…！風の癒し手…！蒼き狼…！紅の鉄騎…！」

愛しい騎士達の幸せを思い描き。

「そして…我が主、八神はやて…！」

愛しい主の幸せを思い描き。

「神でもいい！悪魔でもいい！」

少女は叫ぶ。心の何処かで、救われぬと思いつつも。

「どうか…あの子らを救ってくれ…！」

止まらぬ涙。止まらぬ気持ち。

「…！」「…！」「…！」

<Side 管制人格>

どれほど泣いたか。

時間にすれば、5分も経っていないだろう。

しかし、体感時間は遥かに長かった。

主の様子を見ると、病院での検査が終わって帰ろうとしている所だ。

あの石田という医師には悪いが、普通の方法では主の脚は治らない。

しかし、原因がわからずとも最善を尽くそうとするその姿勢はとて

も素晴らしいものだと思は思う。

「私にとっては、係わり合いの無い事だが…な。」

そうして闇の書に意識を落とそうとしたときだった。

「…なん、だ？」

微かな違和感。

身体の中に、ナニカが入り込むような。

「闇の書への…アクセス？」

いや、主は何もしていない…」

しかし、いる。何かが、闇の書の中に。

そして。

「…誰だ？」

二人分の足音。

片方は男の、片方は女の。

「君が夜天の魔導書の管制人格か。」

「随分と綿密で複雑なプログラムだったけれど…入ってしまえばた
いしたことないのね。」

振り返ると、そこには白衣を着た男女二人組。

「…名を名乗つたらどうだ？」

「今は君も名前が無いだろう？」

「だったら名乗る必要は無いと思うがね？」

クククツ、と笑う男。

「…なぜだか、酷く不愉快だ。」

「…謝るから、その手を引っ込めてくれないかな？」

「あ」

いつの間にか、魔力の籠った拳を引いていた。

無意識のうちにまた殺人を繰り返すところだったか…

「…それで、私に何か用か？」

「貴女の言葉…聞いたわ。」

「神でも悪魔でもいいから、あの子達を救いたい…」

「…だから、どうした。」

「その言葉に嘘偽りは無いわね？」

言った瞬間、私は女の胸倉を掴みあげていた。

「…一体、何が言いたいんだ。」

「そうね、簡潔に言おうかしら。」

殺気をぶつけても全く怯まないその女性に、若干訝しがる。

そして私は、咳ばらいを一つついた女と男が続けた言葉に、嫌が応でも驚愕させられる事になる。

「貴女の主と守護騎士、全員救ってあげる、と言っただらどうする？」

「返答によつては、君自身も救ってあげよう。」

「…なに？」

鉄槌の思いと、闇の中。(後書き)

ばばん。(12月26日18時50分現在)

PV294427

ユニーク33644

K「え」

馬鹿だな。お前は自分の思っているよりも期待されてるんだ。

K「う、嬉しすぎる…」

クラリーベル家でお食事を。(前書き)

K「本当に遅くなりました！ごめんなさい！そしてあけましておめでとございます！」

ああもうコイツは…

こんな駄目作者ですが、これからもよろしくお願いします。

クラリーベル家でお食事を。

「……シヤマル。」

「ううー……」

それは、ある冬の日の出来事だった。

<Sideザフィーラ>

事の始まりは、主とシヤマル達が交わした一連の会話であった。

「ちょっと今日はすずかちゃんのお家に行く予定があるんやけど……シヤマル、夜ご飯作れる？」

「はい お任せください」

「そか！じゃあ、すずかちゃんのお家には……シグナム、ヴィータ、お迎えに来てくれる？」

「おうー！」

「了解しました、主はやて。」

「夜までは自由にしててええからなー」

これが一連の会話である。

勘のいい皆様ならもうお気づきだろうが、話を進めよう。

朝から出かけた主を確認し、我等四人は蒐集に走った。

そこそこの頁を手に入れ、日が暮れる頃には家に戻る。

ヴィータとシグナムは主を迎えに行き、シャマルは料理を作りはじめる。

「折角だから、ちょっと豪勢にしてみようかな」とはシャマルの言だ。

我は日課となりつつある散歩に出かける。

この時家に残っていれば、多少なりとも結果は違っていただろうが…

我が家に戻る途中に主達と合流し、帰路に着く。

すずか殿から欲しい本を借りることが出来、主は御満悦のようだ。

脚の不自由な主はその分読書が楽しみであり、家にも色んな本を置いている。

その不自由な脚の原因を作り出したのが我等だと思つとやるせなくなるが…

いや、余計な考えは捨てよう。

今はただ、主に真の覚醒を…

ともかく家についた我等は、居間の方から良い匂いが漂ってくるのを感じた。

「シヤマルの料理か？美味しそうな香りやー」

「どつやら豪勢にすると行っていましたが…」

「シヤマルがか？」

「食材全部使い切る気じゃねーだろーな…」

等と口々に言いながら、居間へと入る。

テーブルには、いつもよりも多めの食事が用意されていた。

「あ、お帰りなさいはやてちゃん！

今日は腕によりをかけて作りましたからねー」

「ほんまか？ありがとうなーシヤマル」

「いえいえ」

確かにテーブルの上の料理は美味しそうだ。

見た目の彩りもよく、確かに絶品だろう。

しかし何故だろう？

何か、嫌な予感がするのだ…

「それじゃあ、いただきますー！」

「「「いただきます！」「」」

手を洗いうがいを終えて全員席につく。

主の号令で、皆一斉に料理を口へと運んだ。

(一人を除いて)時間が、止まった。

シャマル以外の全員が、箸を口に入れたまま微動だにしない。

本人は喜々として自分で作った料理を頬張っている。

しかし…

「な、なあシャマル…」

「どうしたのヴィータちゃん？おいしいでしょ？」

息も絶え絶えにヴィータが言う。

シャマルよ、様子がおかしいことに何故気づかん。

「…なあシグナム、これ、正直に言っちゃってええんやろか？」

「…構わないかと。流石にこれは…」

「え？」

シャマルが不思議そうに首を捻る。

それを見て一つ溜息を零し、言い放つ。

「…何だか変な味がする。」

「え」

「シャマルはもうちょいお料理勉強してからの方がよかったかもなあ…」

…シャマルよ、我に目を向けられても困るのだが。

目を逸らすと、シャマルはガツクリとうなだれる。

…いや、確実に自分の料理の腕のせいだろうに…

「しかし…どうしましょうか？」

「とりあえずシャマルの料理はラップに包んで冷蔵庫に入れておく

とっつて…」

「はやて！食材が無い！」

ヴィータが叫ぶ。

主とシグナムとヴィータが焦ったように冷蔵庫を覗き込むと。

「うわホントや…」

「あれだけあつた食材をどう使ったんだ…」

「うっつ…ごめんなさい…」

「あ、謝る事なんて無いよーシヤマル。

今日はそのほら、ちょこつと失敗してもーただけやし…」

主はやてがフォローに入るが、あまり効果はあげられないようだ。

「しかしどうしますか主？」

食材が無ければ、作る物も作れません…」

「んーせやなー…どこかに食べに行く程のお金も無いやろし…」

ピピピピ、ピピピピ、と電子音。

「ん？メール…ルチアさんから？」

どうやら主の友達(?)のようだ。

「えーと何々…」

メールでこんばんわ。
ルチアです。

突然ですが、今日は家族でお食事でしょうか？
もし予定が決まっていないのであれば、私の家でちょっと豪華に夕食など如何でしょうか。

あ、勿論家族での食事を邪魔する気なんて無いので、嫌ならスパッと断ってしまって構いません（笑）

…やって」

「「「「「………」」」」」

そこからの我等の行動は、早かった。

<Side三人称>

ピンポーン、とクラリーベル家のチャイムが鳴る。

「あ、はやてちゃんいらっしやーい。

シグナムさん達も上がって上がってー。」

「「「「「おじゃましまー（す！」「」「」「」

用意してあったスリッパを履き、ルチアの案内でリビングへ。

「「「おおー……」「」」

「あっはっは…まあ座って座って！。
好きなとこでいいから。」

「おおきにー」。

ほな、座るかー。」

「うまそー！

…で、でもはやての料理が一番だからな！」

「ヴィータ…御馳走させて貰う立場なのだ、それなりの態度をとるべきだろう…」

「うう…ごめんなさい…」

「……」

六人掛けのテーブルにそれぞれが座っていく。

というかザフィーラ、喋れよ。折角人型なんだから。

テーブルの上の料理は、それぞれがとてもいい香りを放っている。

大皿に盛られたパスタ、こんがり焼き上がったピザ、湯気をたてるスープ。

「何と言うか…手がかかってそうやなあ…」

このピザとか、凄い本格的やん…」

「見た目と味はね。作り方は凄く簡単だよ？
まあ流石に本場イタリアとかには及ばないけど…」

「…レシピ教えてもろても？」

「いいよー。まあそれは後でね。
それじゃあ…」

「……いただきます！」「……」

六人ともちゃんと手を合わせ、綺麗に切り分けたピザに手を伸ばした。

(一人を除いて)時間が、止まった。

「ん？舌に合わなかったかな？」

そこでようやく動き出し、一言。

「……美味しいっ！」「……」

「あはは、ありがとはやてちゃん、シャマル、ヴィータ。」

「うむ、確かにこの実力は本物だ…」

「

「いやいやそれほどでもー…」

和気藹々とした空気のまま、突発的なお食事は進んでいくのであった。

少なくとも、表面上は。

「そういえば、いや嬉しいんだけど、何で自宅で食べない事になったの?」

「…ちょっと、シャマルがな…」(目を逸らす)

「…」

「…今度、料理の勉強します?」

クラリーベル家でお食事を。
(後書き)

K「次回は戦闘。

また長くなるんだろうなー。」

苦手なくせに書くなよ……

食後の運動には少し重い。(前書き)

K「うーん、どうしても戦闘が入るとちょっと長くなる……
ちょっとした独自設定があります。」

ではどうでしょう。

食後の運動には少し重い。

<Side三人称>

突発的なお食事は、もう夜遅いという事でお開きに。

はやて達を送り出したルチアは、食器を洗い、風呂を入れる。

食材減ったなあと思いつつ、冷蔵庫を確認。

チーズとジャガイモが切れたのを確認し、翌日の買い物予定をたてる。

それも終わったら、食後の一服の珈琲を入れる。

静かな家。

転生してから4年と少し。

二人では少々広いような気がしたこの家も、もう慣れた。

意外にも長かった、穏やかな4年。

そして一気に通り過ぎた気がする、無印編とその後の半年。

それらの記憶を思い出しながら、ルチアは待つ。

そして。

「…やっぱり、来た。」

庭に出る。

冬の冷たい風が吹き、ルチアの銀の髪を揺らす。

「出て来たら？」

誰もいない筈の庭に、問い掛ける。

「…気づいていたか。」

木の影から姿を現したのは、ついさっき別れたはずの守護騎士達。

さっきと違うのはシャマルがいない事と、三人が騎士甲冑を纏っている事。

シャマルは家ではやと一緒か、別のところにいるのか。

…騎士甲冑から察するに、後者だろう。

「気づいていた、というより…わかっていた、かな。

そのために魔力をさらけ出していたんだし。

シグナム達の目的を考えれば、絶対私のところに来る、って思ってたから。」

「…そうか。ならば話は早い。」

シグナムとヴィータが武器を構え、ザフィーラは手甲と脚甲を装着する。

「怨みはねえけど……」

「我等が主が為に……」

「その魔力、貰い受ける！」

三人が翔け、一気にルチアに接近する。

「フアーネライル、セットアップ。」

『了解』

ルチアが光に包まれる。

金属音。

「まあここは狭いからさ、上でやるぞ。
答えは聞いてない。」

言うや否や武器を弾き、上空へと飛ぶ。

すぐさまシグナム達も空へと上がる。

空中で、一人と三人が向かい合う。

ルチアは笑みを浮かべてはいるが、目は鋭く光っている。

騎士達の目にも決意が宿り、それぞれの得物に力を込める。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

『javoull!』

「アイゼン、カートリッジロード！」

『javoull!』

「ファーネライル、モード1、ツインセイバー。」

『展開。』

準備は、整った。

数秒の睨み合い、そして最初に動いたのはヴィータだった。

「うおりゃあああああっ！」

ドリル状にしたアイゼンからジェットをふかし、一気にルチアに突撃する。

続くザフィーラとシグナム。

驚異的な速度を持った致命的な凶器が振り下ろされ…

「でも直線的だからかわしやすiyね。」

軽く身体を捻ってかわし、手に持つ両剣でザフィーラの拳とシグナ

ムの剣を受け止める。

「くっ…」

「ぬうつ…」

「まあまあ焦らない焦らない。時間はたっぷりあるんだから、さ！
武器を弾いて距離を取る。」

「シルクシューター！」

『発射』

銀色に輝く、約20個の魔力弾。

一つ一つが複雑な軌道を描きながら飛んでいく。

「この数を制御しきるか…だが！」

迫り来る白銀を切り捨て、一気に接近。

「紫電…一閃っ！」

「やっぱり止められないよねっ！カートリッジロード…」

ガゴン、と音がして、ルチアの魔力が増大する。

「カートリッジシステムだと!？」

「金剛牙断！」

炎を纏ったシグナムの剣と、輝きを増したルチアの両剣がぶつかりあい、すぐさま離れる。

「燕月刀！」

『了解』

すぐさま形を変えるルチアのデバイス。

幾度とぶつかりあい、火花を散らす。

「くっ…なるほど、魔力刃に流れる魔力の密度をあげたか！」

「…名答！さあどんどん行…っと！」

打ち合っているルチアに、空中からの踵落とし。

「ザフィーラかつ！やりづらいなあもう！」

いいつつ、二人のラッシュを捌いていく。

捌きつつ、ルチアは気づく。

「ヴィータがない…？」

後方で、不自然な魔力の増大。

「やばっ！？」

「今だヴィーター!!」

「おう!」

一直線に離脱する。

ルチアが振り向いた先には、巨大なハンマーを振り上げるヴィータ。

「豪天爆砕!ギガントシユラーークツツツ!」

「ちよ、これはまず」

己が最強と自負する攻撃をヴィータは容赦なく振り下ろす。

確かな手応えと共に、炸裂音と爆風が広がった。

「よっしゃあ!これなら...」

快哉をあげるヴィータの近くに飛んでくる二人。

「殺したら魔力が蒐集できん。わかっているのだろうな?」

「そんならいわかってるってのザフィーラ。あたしを誰だと思っ
んだ?」

「む...」

軽口をたたき合う二人とは対照的に、シグナムは厳しい表情。

「シグナム？どうしたんだよそんな顔して？」

ヴィータの問いに晴れない煙を見ながら、シグナムが眉を寄せる。

「…初日に、私が負けて帰ってきた時があるだろう？」

「…あつたな、どうかしたか？」

「あの時も、こんな状況だった…そして私は油断し、墮とされた…嫌な予感がするのだ。あの時と同じ…何か、仕掛けて来る。」

一時も目を離さず、シグナムは話す。

ヴィータは訝しげだが、根が真面目なザフィーラは煙の方に目を向ける。

「…っ！なるほどな…！」

「ん？どうしたんだよザフィーラ…！」

言い終わらぬ内に、幾条もの銀の閃光が三人に向かって殺到する。

「盾の守護獣ザフィーラ、通させはしないっ！」

ザフィーラの張った何重もの障壁に阻まれ、銀の砲撃は通らない。

しかし、ザフィーラの顔には苦悶。

「お、おい！大丈夫かよザフィーラ！」

「…少々厳しいが、問題は無いっ！」

風が吹き、煙が晴れる。

そこには、傷一つついてないルチアの姿。

ルチアの回りには大型スフィアが6個。

「なっ…あいつ、あたしのギガントで傷一つ無しかよ！」

「くっ、これは流石に予想外だな…いったん引いて体制を立て直すか？」

『シグナム！』

撤退も考えに入れはじめたシグナムに、シャマルからの念話が届く。

『丁度ルチアちゃんは足を止めてる…』

今が蒐集のチャンスだと思っの。

もし出来るなら、あと30秒だけ動きを止めてほしい！

それだけあれば出来る…いえ、やってみせる！』

「…聞いたな？ヴィータ、ザフィーラ。」

「「おう！」」

ザフィーラが障壁を解除すると同時に散開する。

全ては、魔力蒐集のために。

<Side シャマル>

空ではルチアちゃんの砲撃を避けつつ、時折近づくシグナム達が見える。

「まだ350ページ…ここで失敗するわけには行かない！」

そのためにも…導いてね、クラールヴィント！

『目的の座標を特定』

「旅の鏡展開…リンカーコア、蒐集っ！」

<Side 三人称>

ルチアの胸から手が突き出される。

「よっしやあー！」

「シャマル…よくやってくれた。」

これで終わりだと思い、弛緩した空気が流れる。

しかし、様子がおかしい。

リンカーコアも摘出されていてあとはそれを掴むだけの筈なのに、

シャマルの手が動かない。

怪訝に思っ近づぐ。

突如、三人にバインドがかけられてしまう。

「っ何だ!？」

「くっ…」

「このバインド…かてえ…っ!」

急いで解除しようと試みるも、まるで破壊できない。

「ギリギリだけど…どうにか上手く行ったかな？
対策取ってなきゃ危なかった…」

ルチアの胸から生えたシャマルの手が、ビクビクと痙攣を起こす。

「シャマル!？くそっ、てめえシャマルに何したんだよ!」

もがきながらヴィータが叫ぶが、ルチアはニコニコと笑ったまま。

まるで謎を解いてみる、というように。

(…リンカーコアを抽出するところまでは全く問題は無かった。
シャマルの手が震えはじめたのは、奴のリンカーコアを抜き出した
後…

…カマをかけてみるか?)

「…自らの魔力をシャマルに流し、体内で暴走させたか？」

「ありゃ、凄いなシグナム。こんな早くばれるとは思わなかった…」

その言葉にシグナムは、思わず出そうになる舌打ちを抑える。

通常、他人の魔力は体に毒である。

これは血液みたいにタイプがあわないという訳ではなく、遺伝子などの問題になる。

その違いが如実に現れるのが魔力光の色だろう。

実の親子や兄弟であればまだ魔力譲渡が出来るかもしれないが、完璧に他人となると難しい。

では、なのはのディバイドエナジーのような魔力譲渡の魔法はどうしているか。

AからBに魔力を渡したい時は、まずAの魔力をデバイスを介して無色の状態にし、それをBのデバイスに移す。

そしてデバイス内でBの魔力と同質のものに変換し、それをBが吸収することによって完了する。

簡単そうに見えるが、ある程度繊細に魔力を移動させないと譲渡中にすぐに霧散してしまう為、実際かなりの難易度となる。

では、他人の魔力をそのまま流したらどうなるか。

当然、流し込まれた方の魔力は体内で拒否反応を起こし…

<Sideシグナム>

「シャルー！」

「ぬう…」

ルチアの胸から生えたシャルの手が、ダラリと垂れ下がる。

「一応どうにかなった…」

私は絶対に蒐集されるわけにはいかないからね。」

バインドが解除される。

ヴィータはルチアを今にも殺してやりそうな目で見ているが、手を出そうとはしない。

今ルチアに攻撃をかけると、シャルにも被害が行くことがわかっているのだろう。

「全く…油断してかかったらすぐこれだよ。」

本当はこんな攻撃使いたくなかったんだけどさ。

本当ならもつといい方法あった筈んだけど、全くままならないよ…」

「使いたくなかった…だと？」

それが意味することは…

「…戦う意志が無かったとでも言うのか？」

それを聞くと、少し苦笑するルチア。

「ちよつと違う…かな？」

はやてちゃんと知り合ったら、そのうち絶対に戦うことになるだろうな、とは思ってた。

戦わずに全てを丸くおさめられたら、それに越したことは無かったけどね。

…ねえ、ヴォルケンリッター。」

私の方を見たルチアの瞳は、何故か、あの金の女性を思い出した。

「あなた達だけでは、はやてちゃんは救えない。」

その口から出たのは、やはりあの女性とほぼ同じ言葉。

「何だよてめえ…てめえに何がわかんだよ！」

あたし達は闇の書の騎士だ！あたし達が一番闇の書の事を知ってるんだ！」

「残念だけど、それは違う。」

本当の意味で「闇の書」を知っているのは、貴女達の管制人格だけ。それ以外で、本当の意味で「闇の書」を知っている者はいない。

もう一度言うよ？あなた達だけでは、絶対にはやてちゃんを救えない。」

「…」の野郎…！」

「よせヴィータ。」

飛び出そうとするヴィータを手で制す。

「シグナム…！何で止めんだよ！」

ヴィータの気持ちは痛いほどわかる。

私だって、主はやてを助けたいという気持ちは大きいのだ。

「それでも、聞かなければならないことがある。」

改めてルチアに向き直る。

「この際どうしてそんなことが断言できるか、そして何が目的なんて事はどうでもいい。」

「どうでもいいんだ…」

苦笑するルチアに構わず、話を進める。

「ただ一つ。お前はリリアー又殿の血縁か？」

「…おお」

思わず口から漏れた、というような声。

「まさかそれもバレるとは…シグナム凄いな…」

「確信には至っていないかったがな。」

しかし…そうだな、目が似ていた。そして、裏がありそうなその言

動も。」

それを聞くと、クククツと喉を鳴らす。

「姉様、それを聞いたら溜息をつきながら否定するんだろうな…
すぐくその光景が想像できる…」

あのリリアーナの事だ。確かに妹…ルチアと似てるなど心底嫌だろ
う。

「そんな事はいい。…引こつ、ヴィータ、ザフィーラ。」

「シグナム！なんでだよ！」

「蒐集ははまだ足りていない事には変わらない。
なればこそ、この機会を逃すわけには行かぬ…」

ヴィータとザフィーラは、やはり諦めないか。

しかし…私は将だ。

「カートリッジも大分消費したし、これ以上やってもじり貧になる
だけだ。

それにどうやったのかは知らないが、ヴィータのギガントを喰らっ
ても無傷。

そして、実質的にシャマルを人質に取られている。

…潮時だ。」

…何よりもこの姉妹の目的が一緒なのであれば、今ここで戦いつ

づける事に意味はない。

引くのが、最良だろうな…。

「…くそっ！次会ったら、絶対ぶつつぶしてやるからな！」

「（次会った時には、恐らく皆と敵対してないよ。）

シヤマルは放しておくから、あとはそっちでよろしくー。」

「ああ…。」

それだけ残して、私達は夜空に飛び立った。

いくつもの謎と、疑念を残して。

<Side妹>

「行っちゃったかあ…」

ヴォルケンリッターが短期決戦を仕掛けてきたのは、確信があったけど同時に僥倖でもあった。

シグナム達には時間が多くある訳じゃない。

だから、速攻で大技を当てて一気に蒐集。

自分達の方が数の優位があるのだから、ヴィータのギガントかシグナムのファルケンを当てに来るだろうと、そう思ってた。

実際それは大当りして、それを防いで反撃したら撤退するのかなー
と思ってたんだけど。

「流石に、そんなに甘くなかったな…」

まさか、いつ私が機動を始めるかわからない状況で、魔力蒐集を強
引に行くなんて思ってなかった。

もう少し堅実に戦うかと思ってたんだけど…

「それだけ、必死なんだなあ…それは当たり前なんだけど。」

さて、それはともかく…

「折角いれたし汗かいたし、風呂に入ってこなくちゃね。
ああ寒い寒い…」

忘れてはいけないが、今（12月15日）は真冬なのだ。

外にいつまでもいたら、風邪を引いてしまう。

「風邪引いて最終決戦に出れないとか、どうしようもない阿呆だか
らね。」

汗もかいたし、さっぱりしようかな。」

それにしても…

「リインフォースどうしよー…」

クリスマススイブまであと9日。

リインフォースの救済方法がどうしても思い付かないルチアでした。

食後の運動には少し重い。(後書き)

K「次回はどこを書くか悩んでいるので、少し遅くなるかもです。
ごめんなさい。」

水面下と、仲裁。(前書き)

K (逃亡中)

…書き置き…

『遅くなつてすみません！これには色々』

(グシヤリ)

…ではでは、ごうごう。

水面下と、仲裁。

<Sidelerチア>

…視線があるなあ。

そう思い、窓の外を見る。

雲一つ無い綺麗な青空。

しかし何処からか私を睨みつける、粘着質な視線がある。

「まあ可能性と言ったら、キモいストーカー？」

転生前に私が決めたのだ、美人じゃない訳が無い。

他の可能性は…

「猫姉妹？こつちの方が有力かな。」

大方、グレアム提督から話は聞いたけど納得は出来ないっていう感じだろう。

「面倒臭いけど、でも自分で撒いた種だしね。夜にでも、行ってみようか。」

魔力探知で場所はわかるだろうし。」

え？何でのんびりしてるんだって？

実は、もう既に闇の書の魔力にして170ページ分を蒐集し終えているのだ。
まだクリスマスイブにはまだ時間があるので、かなりのんびりできる。

…フェイトちゃんからも、実は蒐集する気にいる。

闇の書の闇との戦いで、蒐集していないと不都合が起こる気がするんだよね。

…ただの、杞憂であればそれでいいんだけどさ。

『所で、』

「どしたのファーネライル？」

『無人世界にて、AAAクラスの魔力が二つ激突中です。
また別の世界でもAAAクラス二つが邂逅しようとしています。』

「早く言ってよそれ！」

ちよ、こうしちゃられない！

「なのはちゃんが砲撃を撃ったら、猫姉妹の…アリアか。アリアが来て防いでバインドかけて…だから。

なのはちゃんが砲撃つ前にバインドかけて、ヴィータちゃん逃がして、すぐさまフェイトちゃんとシグナムの所へ急行！
こんな所かな？

よし、行くよファーネライル！」

『了解、独り言が長いです。』

「ほっといてよー!」

… 転移魔法で、どうにか間に合っはず!

< Side 三人称 >

同時刻。

時空管理局本局の一室には、リンディ・ハラウンとギル・グレラムが向かい合っている。

また隣には、何も無い電子画面が映し出されていた。

「久しぶりだね、リンディ提督。」

「ええ…」

「闇の書の事件、進展はどうだい?」

リンディは苦笑。

「中々難しいですが、上手くやります。」

紅茶を啜るリンディに、眩くようにグレラムが語る。

「…君は優秀だ。私の時のような失態はしないと信じているよ。」

「…夫の葬儀の時、申し上げましたが…
あれは提督の失敗ではありません。」

紅茶を置き、真つすぐと顔を合わせて言う。

「あんな事態を予測できる指揮官なんて、いませんから。」

「…」

グレアムは無言。

そして目を閉じて、諦めたように溜息をつく。

『溜息をつくとき幸せが逃げるぞ？グレアム提督』

いきなり通信画面に人影があらわれ、唐突に話しはじめた。

「あら総督、こんにちわ。

いきなりどうされましたか？」

『何、リンディ提督…君には、立場的にはちゃんと知っておくべき
事だろうからな。』

なあ、グレアム提督？』

「…そうですね。」

あの事を今ここで、包み隠さず話せと、そういうのですね？」

言われた瞬間、全てを悟ったかのように目を閉じる。

当然、リンディには何の事だかわからない。

「…一体、二人は何を話しているのです？」

「…今から、語ろう。私の考えていた、愚かな計画の全てを…」

『ついでに、今水面下で動いている二人の話もな。色々と滑稽な話だが、まあ聞いてやれ』

「よし、ここまで離せば攻撃もこねえ…っ！」

閃光と音による空間攻撃でなのはから距離を取り、転移魔法を発動させる。

しかし…

「…?!」

…まさか、撃つのか!? あんな遠くから!？」

デバイスを砲撃用のモードに変えたのはを見て血の気が引いた。

既にチャージは殆どを終えて…

「デバーーーン…バスターツツ！」

「っ嘘!!」

放たれた砲撃は全く威力を落とさずに、ヴィータに直撃。

誰がどう見ても、即死だった。

「いや殺してないよっ!？」

『Master?』

「あ、ごめんレイジングハート……」

にははと笑ってごまかすのは。

しかし少し不安になったのか、レイジングハートに聞いてみる。

「ちょっと……やり過ぎた？」

『Don't worry』

……しかし、煙が晴れてみれば。

「……あっ!？」

ヴィータは驚いた顔をしているも、無傷。

そしてそのヴィータの前には、庇うように障壁を張ったいつぞやの女性が。

「あの人って、あの時の!？」

『Master!』

「っ！うっつ！バ、バインド…！？」

黒フードの女性はなのはを一瞥もせず、超遠距離からのバインドをかけた。

「あんな遠距離から、こんなに早く、しかも正確にバインドをかけるなんて…」

しかも、くうっ…このバインド、固すぎる…っ！」

当然、並程度の魔導師では出来るはずも無い。

それどころか、バインドの得意なクロノや、結界魔導師であるユーノでさえも難しい。

それを軽々とやってのけたフードの女性は、一体どれほどの力量を持っているのだろうか。

しかしヴィータはこの女性を知らないし、協力を打診したことも無い。

「あなたは…？」

「…行くといい…」

ヴィータの質問には答えず、フードの女性は呟く。

「お前の今すべき事は、一体なんだ…？」

思わずハツとした表情になり、思い直す。

そつだ、自分の今とるべき事は…

『シヤマル！あたしはいつたん撤退する！』

『ヴィ、ヴィータちゃん！？』

『ここであの白いのを倒しても、あたしには何の得もねえ…
別世界の方で魔力蒐集してた方が、万倍有益だ。
わざわざ戦ってやる必要もねえし…』

『でも、ヴィータちゃん…』

『シグナムがああ黒いから蒐集出来れば、収穫としては十分過ぎるだろ…』

わざわざ無駄な事してる暇はねえんだ！

…管理局にマークされてるかもしれない。

シヤマル、サポート頼む。』

『…ううん、ヴィータちゃんの言うことは正しいもの。
とりあえず近い世界から数回転移で、どうにか撒ける筈…』

「オツケー…」

ヴィータの足元に魔法陣が出現する。

「次元転送…！」

ヴィータの姿が掻き消え、それにあわせて魔法陣も収束していく。

「くっ…っくっくっ…！」

いくらやってもバインドは解けず、ただヴィータと仮面の女が消えていくのを見ている事しか出来ないのはだった。

余談だが、このバインドが解けたのはこの10分も後だった。

そして、こちらでもまた激しいぶつかり合いが行われていた。

「はああああああああっっっ！…！」

「せやああああああああっっっ！…！」

金属製の物がぶつかり合う音が断続的に響く。

超高速での戦闘は、お互いの体力と集中力を削り続けていた。

かんかん照り付ける日差しが、さらにそれを加速させていく。

お互いに傷は少ないものの、肩で息をしている。

目はキラキラと輝き武器を持つ手にも力は込められているが、それでも疲労は全く隠せていない。

(ここにきて、尚早い……目で追えない攻撃が出て来た……
早めに決めないと、まずいな……)

(……強い。)

クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ……
今はスピードでごまかしているだけ……まともにくらったら、叩き潰される！)

二人とも思考は似たようなものだった。

確かに地力の面ではシグナムが圧倒している。

長きにわたる戦いの経験も、それを更に強化していた。

しかし、スピード。その一点においては、フェイトはシグナムを圧倒していた。

一撃一撃は脅威では無いが、正直ギリギリで反応して受け止めるのが精一杯だった。

かといってフェイトが優位という訳ではない。

フェイトは、その機動力のかわりに装甲を犠牲にしている。

自分で思っているように、一撃でもくればまず耐えられないだろう。

(シュツルムファルケン…当てられるか?)

(ソニックフォーム…やるしか無いかな…)

故に狙うは、お互い切り札を使つての短期決戦。

一撃打ち合い、距離を離しての一撃必殺。

「「つつつ！！」」

合図は無い。

しかし、お互い同時に駆け出した。

金色の戦斧と炎の魔剣がぶつかり合う寸前。

「なっ！」

「えっ？」

割って入った人影が一つ。

そこにいたのは、やはりあの仮面の女であった。

両手にシールドを一枚ずつ張り、双方の攻撃を受け止めている。

しかも、ただのシールドではなかった。

ホールディングシールド
(拘束盾！？そんな、動かない！？)

(接近戦の少ないミッドチルダ式の魔導師で拘束盾を…しかもここ
まで高レベルのものを…！)

ホールディング・シールド。

拘束盾の名の通り、相手の武器を防御と同時に搦め捕り、拘束する
魔法。

一歩間違えれば自分に直撃するというリスクもあり、使う魔導師は余りいない。

「…双方、引いてはくれないか？」

「「な…っ!？」」

突然現れて何を言い出す？

二人を包むのは疑問と警戒だった。

「二人ともわかってきているのだろうか？」

このままではじり貧。

自分も切り札を切らねばならない。

しかし、少しでも隙を見せた瞬間に墮とされる…。

だったら、ここは引いて仕切直し、というのは？」

「何を馬鹿な…っ!」

フェイトはバルディツシュを外そうと試みるが、疲労の大きなフェイトでは外す事は叶わない。

対して、シグナムは冷静だった。

(…今ここでこの盾を外すのはかなりの労力がある。

外せたとしても、それでは戦闘を続けるほどの魔力も体力もまず残ってはいない…

くそっ、不甲斐無い…!)

「…いいだろう、ここは引いてやる。
決着はまた今度付けよう……すまん、テストロッサ」

「っ待つて、シグナム！」

シグナムが撤退すると言った瞬間に拘束盾は外れ、シグナムは解放された。

愛剣を鞘へと戻し、二人に向ける。

(ザフィーラ)

(…シグナムか、どうした?)

(邪魔が入った。私は一度撤退するが、どうする?)

(…ならば我がここで闘っても、得るものはなさそうだな。引くでしょう)

(ああ)

ザフィーラに軽く念話で話し、次元転送の魔法を発動させる。

「シグナム！」

フェイトが声をかけても取り合わない。

足元に魔法陣を発動させ、そのまま消えていった。

「…もういいか。ほら、そっちも」

拘束盾を解除し、ふうと息を吐く。

「…何か、不満そうだな？」

「私は…貴女がわからない。

貴女は、何を目的として動いてるんですか？

闇の書は危険なものなんです！」

油断なく武器を構えて仮面の女を睨みつける。

「…貴女に言う必要は無いのだけれど。

まあ、すぐにわかる」

「何を言ってるっ！」

フェイトにバインドがかけられる。

「追ってこられると厄介だから…ごめんね、蒐集させてもらっつよ」

「っあ…っ!？」

突如、フェイトのリンカーコアが抜き取られる。

胸から突き出た手、急激なショックで動けないフェイト。

「っ…あ、あああああっ！」

麻痺していた痛みが訪れ、その衝撃で気絶してしまう。

「…ごめんね、フェイトちゃん」

フェイトは薄れ行く意識の中で、聞き慣れた声を聞いた気がした。

水面下と、仲裁。(後書き)

次回は皆さんお待ちかね、猫フルボッコタイムらしいです。

ではではー。

真夜中の襲撃、仮面と仮面。(前書き)

脱衣麻雀終わったのでKが持ってきたのを書き上げ。

K「うつ…まさか負けるとは…あんぎゃーすをトバして裸にしてみ
たかったのに…」

まあ元氣出せ。

K「私から6枚中3枚飛ばしたのあんぎゃーすだよねえ!？」

ではどつぞー。

K「人の話聞け〜!」

真夜中の襲撃、仮面と仮面。

<Sidelerチア>

フエイトちゃんから魔力を奪ってから数時間。

既に夜の帳は落ち、町も寝静まった頃。

「…二人一組の同質の魔力反応。
多分、これだね」

『二人の魔力、98%で一致。間違いないでしょうね』

「二人で話し合いしてるのかな？一カ所から動いてないけど…
…まあ、丁度いいかな？行こうか、ファーネライル」

『了解しました…主』

「その間は何さ!?!」

『いえ、あなたをどう呼ぶかいまだに迷っています…』

「なんだ、そんな事。別に呼びたい名前で呼べばいいじゃない」

『わかりました。とっとと行くぞクズ』

「ぶっ壊してやるつか!?!」

『冗談です。ほら、早く行きますよ主』

「…いいけどさあ…」

…何だか、出撃前から凄い疲れた気がする…

…ま、いいや。とにかく行こう。

折角私が丸く納めようとしている所で邪魔をする魂胆なんだ。

「ただで済むと思うなよ…！」

『八つ当たりですね、わかります』

「九割あんたのせいでしょうが！」

<Side 三人称>

とある山中。

誰も近づかないような場所で、鏡写しのようにそっくりな二人の女性が向かい合っていた。

「…やっぱりあのルチアって子、私たちが出ていこうとするタイミングにすっかり重ねて来てる…」

こちらが出る時をわかっているとしか思えないわね…」

「近頃現れてるデカブツのせいで、闇の書のページ蒐集もかなり遅い…」

フエイトちゃんまで30、守護騎士全員で100としても、まだ150ページ位足りない…

ああもう、チャンスは少ないってのに、どうしてこう…!」

頭を抱える片方の女を見て溜息をつく。

リーゼロッテとリーゼアリア。

ギル・グレアムの使い魔である双子の猫。

近距離戦のロッテと遠距離戦のアリアのコンビは管理局でも有名で、実力は勿論捜査官としても一流の二人である。

そんな二人が今こんな所で一体何をしているのか。

「早くしないともう八神はやては限界だし…でも、一気に蒐集出来るあても無いし…」

「ルチアって子から魔力蒐集出来れば大分楽になるんだけど…難しいかしらね。私達の視線に気づいたそぶりも見せてたし…」

二人は、永久凍結による闇の書の永久封印を目標としている。

元々は闇の書絡みの事件で亡くなったクライド・ハラオウンの仇を取るために、ギル・グレアムと三人で始めたことだった。

しかしグレアムはルチアと話し合い、既に闇の書への干渉をやめている。

数年掛かりで進めていた計画を、たった一人の言葉ですぐに変わる

訳が無い。

そう考えた彼女達はルチアを訝しんでいる。

だから二人は独断先行に走る。

このままでは、クライド・ハラウンが報われない。

今更やめると言い出すことなんて出来ない。

しかし、やると決めた以上失敗は出来ない。

そもそも失敗させる気などなかったのではあるが。

「どうにかして、闇の書のページを600位まで埋めたいんだけど…
近隣世界の魔力持ちは結構闇の書に呑まれたから、二回転移くらい
で行く世界じゃなきゃ無理かな…」

587

「クロ助達を手伝いながらじゃ、流石に厳しいかな…」

ああもー…それも全部あのルチアって子がいなきゃあ…!」

ロツテが立ち上がって壁を殴りつける。

そんな時、いきなり声が響いた。

「私を、呼んだ？」

「えっ…なあつくつ!？」

「…ロツテ?ロツテエツツ!」

突如背後から手が突き出され、リーゼロッテの胸に突き刺さった。

悲鳴をあげるアリア。

呆然とするロッテの後ろの空間がぐにやりと歪んでいく。

闇の中から漏れ出るように姿を表したのは、バリアジャケットを着たルチアだった。

「呼ばれたから出て来てあげたよ、猫姉妹？」

「このっ、よくも姉様を…っ!？」

アリアにバインドがかけられる。

「動かないですよ？もし動いたら、こっちの方がどうなっても知らないよ……」

「くっ……」

これみよがしにロッテの胸から突き出た腕をちらつかせると、アリアは動きを止める。

「このっ、いい加減に…あぐうっ!？」

「動くな、と言っているよ。」

何度も同じ事を言わせないでほしいんだけど?。」

ロッテが反撃を試みるも、一瞬魔力を流され痛みに顔をしかめる。

一瞬にして、ルチアがこの場を支配していた。

「…まあ、何をしようともやめる気なんて無いんだけどさ」

「えっ…あ、ああああああっっっ!？」

「ロツ、テ?ロツテえっ!！」

ルチアが掌を握ると、真っ白な光が溢れ出す。

ロツテは突如体中を駆け巡った痛みに、全身を硬直させて悲鳴をあげた。

胸から突き出された手、相手の魔力への干渉…

それが意味することはつまり。

「ぐああああああっ!！」

一際大きな悲鳴と共に、ロツテの体から力が抜ける。

気を失ってはいないものの、すぐには動けるようにはならないだろう。

そして、ルチアが握っていた掌を開く。

「あ、ああ…私の、魔力…!！」

「自分がフェイトちゃん達にしようとした事でしょう?？」

それはつまり、自分もやられる事があるとわかったの行動…
それとも自分は圧倒的な強者であって、誰も自分の邪魔は出来ないとでも思ってたの？」

その言葉を聞いて、ルチアをキツと睨みつけるアリア。

しかし、見てしまった。

自分を見るルチアの瞳を。

まるで硝子のような。まるで氷のような。

温度の無い、冷たく厳しい視線がアリアを見つめていた。

そこでようやく理解する。

ルチアにとって、自分達はただの邪魔者。

害悪しか生まない、消してしまいたい程の存在なのだ。

「…私は、はやてちゃんを助け、夜天の書を助ける。

今はそのためだけに動いている。

その算段も殆ど出来ている。

…お前達の勝手な都合で、助けられるものを助けられないだなんて、どうかしてる」

リンカーコアを掴んだ手を引き抜くことも無く、独白は続く。

「我が儘だと罵れば良い。

傲慢だと訴えても良い。

自分達の方がより多くの人間を救えると言われても良い。
…今の私にとっては、そんな言葉に意味なんて無いから」

「何を、言って……」

「今は、はやてちゃんを闇の書の呪縛から解く。

夜天の書を、闇の書の呪いから解く。

ただ、それだけ。

邪魔するなら…容赦はしない」

「あぐ…っ!」

ようやくロツテの胸から手が引き抜かれる。

倒れ込んだロツテは気絶してしまったようだ。

「いいよ、別に。それでも邪魔をするなら、掛かってくればいい。

はやてちゃんも騎士達もなのはちゃんもフェイトちゃんも…そして、
未来に関わる事になる子達も。

私がいる限り、絶対に不幸になんかさせない。

私は私の信じた道に行く。

…貴女は私の敵になるの?」

『モード1、ハルバード』

デバイスの刃を向けられ、殺されるという単語が頭を過ぎった。

しかし、それでもアリアの頭は妙に冷静であった。

(…この子の覚悟は本物…ここで逆らったら、本気で殺されてしま

うでしようね。

…だったら信じて任せてしまうのも、一興かもしれない。

失敗したらこの子の責任な訳だし…卑怯な考えだけど、仕方ないか…)

「…わかった。ここで抵抗しても、良い結果にはならなそうだし…私の名に誓って、闇の書…いや、夜天の魔導書には一切の手を出さない事を誓うわ…」

「…そう、ありがとう。」

そして、手荒な真似をして本当にごめん。

…絶対に、成功させて見せるから」

デバイスを解除して、お互いに笑いあう。

一歩間違えば殺しあいにもで発展しそうになった状況でこうなったのは、ルチアにとっても僥倖であった。

「正直言って、舐めてたわ。」

色々動いていたのは知っていたけど、まさかここまで覚悟を決めているとは思わなかった。

…我が儘だけど、嫌いじゃ無いよ。そーいう考え…」

「あはは…」

苦笑するルチア。

その気持ちもわからないではないが。

「という訳で、私達は父様の所に戻る…」。

あなた自身も言っただけで、失敗なんてしたら絶対に許さない。
あれだけの大言を吐いたんだもの、成功しか無いでしょう?」

「勿論!…プライドかなぐり捨ててでも、成功させてみせるよ!」

<Sideアリア>

…ルチアは行った、か。

「…っ!ハアツ、ハアハア…っ!」

眼で見えなくなつて、魔力探知で反応が遠くに行つたことがわかる。
それをわかつた瞬間、全身の毛穴という毛穴から一斉に汗が吹き出
した。

歯の根は合わず、力が抜け、勝手に体が震える。

眩暈と吐き気を、何とか堪える。

「…あの眼は、容赦無く人を殺せる眼だった。

…ロツテを起こさなくて正解だったね。

不意打ちでもしようものなら、間違いなく殺されていたのは私達だ
つた…」

感じたのは恐怖だった。

恥も外聞も捨てて泣き喚き、尻尾をふって相手の靴を舐めてでも許

しを請う。

…一歩間違えれば、そういう状況になってもおかしくなかったのだ。

それは私の、純粹すぎる恐怖だった。

「あの子…一体何なの…？」

<Side三人称>

「うーん…」

『どうされましたか、主？』

「いやちょっと脅したとはいえ、あっさり決まっちゃったなあって
なっ。」

『…ちよっと？』

「ん？どうかした？」

『…いえ、別に何でもありませんけど』

「…ふうん、変なの？」

『（何かおかしいですね？）』

そういえば、マイスターが主に何かを渡していたような…

…まあ、どうでもいいか。』

じいじと、冬の日の夜は過ぎていく…。

真夜中の襲撃、仮面と仮面。 (後書き)

因みに活動報告の方にいくつかに分けて書いてあったりします。

ご希望ありましたら一局目から経過を全て書きますよ？

K「やめて！私と友人のライフはもうゼロよ！」

騎士達の覚悟、満場一致。(前書き)

K：待っていてくださった方がいらっしやるかどうかはわかりませんが、お待たせしてすいません！

あ：やっとの投稿か。ボリュームもそんなにある訳でも無いのに、どうしてこんなに掛かったんだか。まあいいけどな。

K：ではどうぞー！

騎士達の覚悟、満場一致。

「はやてちゃんが、闇の書の主…」

日はとうに沈み、町の明かりも落ち着いてきた時間。

とあるビルの上、そこには四人の人間が向かいあっていた。

二人の女の子と、二人の女性。

言うまでもなく高町なのはとフェイト・テストロッサ、シグナムとシヤマルだ。

「このまま順調に行きさえすれば、悲願は後わずかで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも…！」

シヤマルとシグナムの目には、一点の歪みも無い決意がみなぎっている。

…しかしそれ故、決意は人の目を曇らせることもある。

「待つて！ちょっと待つて！話を聞いてください！」

駄目なんです！闇の書が完成したら、はやてちゃんは…！」

なのはの言っていることは正しい。

これは事実だ。

しかしいきなり自分達が壊れていると言われて、誰が信じる？何が信じる？

「りゃあっ!」

「つう!?!あああっ!」

上空からのヴィータの奇襲で吹き飛ばされ、金網に激突する。

「なのはっ!っ!?!」

「おおおおおっ!」

フェイトが気を逸らした隙に切り掛かる。

それをどうにかかわし、デバイスを手に取る。

「管理局に我等が主の事を伝えられては、困るんだ……」

「私の通信防御範囲から、出す訳には行かない……」

固く握られた拳。

俯き見えない表情。

それだけでも、騎士達の覚悟が窺える。

「ヴィータ…ちゃん…」

バリアジャケットに身を包む。

「邪魔…すんなよ…」

もうあと少して助けられるんだ…！

はやてが元気になって、あたし達のところへ帰ってくるんだ…！」「

ヴィータの瞳から、無意識の内にこぼれ出る涙。

「必死に頑張つて来たんだ…」

もうあとちょっとなんだから……っ！」「

辛さを押さえ込むように、唇を噛み締める。

「邪魔すんなああああっ！」「

「っ！」「

爆発。轟音。そして炎。

ビルの一角が吹き飛び、濛々と火をあげる。

何かを吹っ切ろうとするかのように息を荒げるヴィータ。

しかし。

「悪魔め…っ！」「

「悪魔で…いいよ…」

炎の中から姿を現したのは、バリアジャケットを展開し、全くの無傷なのは。

顔を悲しげに俯かせ、しかし一瞬後には気丈とした顔つきでヴィータを見据える。

『アクセルモード、ドライブイグニッション』

「悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらっから!」

「…シヤマル。」

お前は離れて、通信妨害に集中している」

「うん…」

数歩下がったシヤマルが、騎士服を展開する。

「闇の書は、悪意ある改変を受けて壊れてしまってる…。今の状態で完成させたら、はやては……!」

「我々はある意味で、闇の書の一部だ」

フェイトの言葉を遮り、シグナムが剣を突き付ける。

「だから当たり前だ!あたし達が一番闇の書のことを知ってたんだ!」
上空でなのはとぶつかるヴィータも吠える。

「じゃあ、どうしてっ!」

『アクセルシューター』

「どうして、闇の書なんて呼ぶの！」

…なんで、本当の名前で呼ばないの…！」

「本当の、名前…？」

なのはの言葉に心が揺れるヴィータ。

しかし、その話し声はシグナム達には聞こえない。

フェイトがバルディッシュを構える。

『バリアジャケット、ソニックフォーム』

フェイトがデバイスを展開し、バリアジャケットをその身に纏う。

しかしそれは今までのような、マントにアンダースーツという出で立ちでは無かった。

マントは無く、体にピタリと張り付いたノースリーブのアンダーウェア。

そして、手足から生えた小さな雷の翼。

『ハーケン』

ガチャリ、と鋭く構えたバルディッシュから、一際大きな刃が現れる。

「…薄い装甲を、更に薄くしたか」

「その分、早く動けます」

「緩い攻撃でも…当たれば死ぬぞ？」

「正気か？テストアロツサ…」

「…貴女に、勝つためです。」

「強い貴女に立ち向かうには、これしか無いと思ったから」

それはフェイトの中で生まれた、勝利への渴望。

敵として。また、無意識の内に好敵手として。

勝ちたい。その思いが、その思いこそが、フェイトを動かした。

防御を完全に捨てての、超高速 + 超攻撃型の形態。それが、ソニックフォーム。

…シグナムが、唇を噛み締める。

何かを堪えるように、その身を炎に包ませる。

シグナムを覆った紫の炎が弾け、バリアジャケットを展開したシグナムが剣を構える。

「…こんな出会いをしていなければ、私とお前は、一体どれほどの友に慣れただろうか…」

それはありえぬEifの話。

共に武を磨き合う好敵手として。共に闘う戦友として。
そして、互いに笑い合う親友として。

「…まだ、間に合います！」

「止まれん…！」

つづ…と、流れ落ちる一筋の雫。

ガチャリと音をたててカートリッジをロードする。

足元に生まれるベルカ式魔法陣と、膨大な魔力。

「我等守護騎士、主の笑顔のためなら騎士の誇りさえ捨てると決めた。

…もう、止まれんだ！」

溢れ出て止まらない涙を拭いもせず、シグナムが叫ぶ。

「…止めます。私と、バルディッシュが！」

『イエス、サー』

「…本当の名前が、あったでしょう…？」

「本当の…名前…」

記憶の一部がスッポリと抜け落ちたような感覚。

何か大事なことを、思い出せない。

ヴィータが顔を伏せた、その時だった。

「あ…!?!」

なのはのまわりに突如浮かんだ、銀色のバインド。

「っあ!?!バインド…また…っ!?!」

あっさりと捕らえられ、動けなくなる。

「なのはっ!?!くっ!?!」

シグナムとの鏝ぜり合いを一旦弾き、後ろに下がる。

シグナムもヴィータもシャマルも、突然の攻撃にあたりを見回す。

しかし。

「あっ!?!」

「なっ…!?!」

「っあ…っ!?!」

「ぎゃ…っ!?!」

一瞬で四人全員にバインドがかけられる。

しかも、前回同様かなりの強度。

「まったく……いくらなんでも簡単にかかりすぎだと思っただよね、そこんとこどう思う？」

「知るか阿呆、面倒なんだからとっとと終わらせろ、全く……」

「「っ、誰だ!?!」」

いつの間にか、隣のビルの上に二人の仮面の女が立っていた。

身長差こそあるものの、全く同じ格好に仮面。

「…相変わらず私には口悪いよね。
いや別にいいんだけどさ……」

「貴様…名を名乗れ!」

話を聞かない仮面女に、シグナムが吠える。

「名乗る必要は無いと思うよ?だって……」

『バリアジャケット、展開』

『バリアジャケット、展開します』

二つの電子音声がり、二人の体が光に包まれる。

光がとけると……

「やあやあ皆さんお久しぶり。
ルチアさんの登場だよっ！」

「…（殴ってもいいんだがそれすらも面倒臭い…はあ）」

「……ルチア（さん）にリリアーナ（さん）！？」「……」

バリアジャケットを展開し終え、自身のデバイスを持つ二人であった。

「ど、どうして二人がここに……」

「いやーごめんね、なのはちゃんフェイトちゃん。
でもとりあえずはやることを……ていつ！」

ルチアの横に出現する、大きめの魔法陣。

「っ、転移魔法だと！？？」

「正解。何が出るかな？」

といいつつその口ぶりは、何が出るのかが自分でわかっているよう。

はたして光の中から出現したのは…

「……え？はやてちゃん（はやて）（主はやて）？」「……」

「シグナム、ヴィータ、シャマル…あつちで、ちょおおおおつとお話しよか？」

後ろに黒いオーラを纏った、八神はやてその人だった。

「えーと…どういう状況？」

今なのは達の目の前ではシグナム達3人と後から来たザフィーラが、はやてに説教を食らっていた。

「うん、まあなのはちゃん達もいきなりの事で何がなんだかだろうし、ちよつと説明しよつか」

そう前置き、ルチアは話し始めた。

少し前から八神はやてが夜天の書の主だとは知っていたこと。

はやてを助けたが為に、いろいろと裏で動いていたこと。

そして、壊れてしまっている夜天の書を修復するということ。

「「ええ!？」」

「しゅ、修復つて、そんな事が出来るんですか!？」

「私じゃ無理だけど、姉様なら出来ると思うよ？」

方法は知らないけど、どうにか出来る方法はあるって言ってたし」

フエイトが叫ぶが、どこ吹く風。

「さて、あっちのお説教も終わったみたいだし…」

ピピピッ、ピピピッ、と通信の音。

『なのは、フエイト！僕だ、クロノだ。』

ようやく通信妨害が途切れたが、大丈夫か！？」

「…本当、空気読めないねクロノ」

『なっ、その声はルチア・シ・クラリーベル！？
なんでそこに！？』

「あー…苗字で良いよ、毎回フルネームで呼ばれるのは面倒だし。
私は少し前から、夜天の書を直すために動いていたの。
今からその方法を説明するから、ついて来て。」

この方法は、なのはちゃん達とはやてちゃんと守護騎士達、全員の
力が無いと無理だからね」

首を傾げるなのは達を連れ、はやて達の方へと向かう。

「はやてちゃん、終わった？」

「あ、ルチアさん。」

ええと、こっちはもう終わりましたけど…」

はあ…ルチアさんから聞いたけど、なのはちゃん達、本当に魔法
使っちゃったんやな…」

何故照れる、幼女二人。

「さて揃ったし、とりあえず説明しよつか。
夜天の書とはやてちゃん、その全てを救うための方法を……」

騎士達の覚悟、満場一致。(後書き)

K: はい、短くてすいません。次回からはオリ展開に入るの、少しは早く投稿できるかもです。

あと、私は二つの作品を同時に書くというのは無理なので、どちらかが滞ったらもう片方を書くことにします。

それと、A・S終了後に小話をいくつか書く予定です。

今の所決まっているのは、

- ・各キャラの兄妹に対するアンケート
- ・新年三泊四日の二本です。

ほかに見たいものがあれば言ってください。

ルチアの策、闇との戦闘。(前書き)

K：投稿)。完全シリアスは苦手。

あ：頑張れ頑張れ、あと何話シリアスやるか知らないけど。

ルチアの策、闇との戦闘。

<Sideシグナム>

程無くザフィーラが合流すると、車椅子に座った主はやてが私達を見上げながら話しはじめる。

「ルチアさんから、全部聞いた。

シグナム達が約束を破って蒐集をしているということも、私の命が残り少ないということも。

そして、それは全部闇の書のせいということも。

それでも私は、あえて聞く。

シグナム、どうして約束を破ったん？」

無垢な主の瞳が、私の瞳を見つめてくる。

嘘をつく理由はない。そもそも、主に対して隠し事など、騎士のすることではない。

…まあその騎士の誇りも、捨ててしまったのではあるが、な。

「…私は、いえ私達は。

第一に主の事を考える、騎士です。

主の命の危機とわかっていて、動かないという選択は無かったのです」

「じゃあ、どうしてまず私には話さなかったんか、説明して？」

「闇の書による魔力の蒐集は、管理局にとっては犯罪行為…」

もし我々が捕まったとしても、主が罪に問われないようにと……」

そか。と一言。

「せやけど、それは私が望んだことやない。

それはわかつてるやろ？」

「…はい」

それは、わかっている。

主は優しいお方だから、自分の都合で誰かが傷つく事を嫌う。

それでも。

「それでも、私達は主を助けたかったです。

たった9歳の小さな子が…そんな事で死ぬのは間違っている」

「あたしも……はやてが死ぬのなんて嫌だ！

だったら、怒られてもいい！それでも、はやてを助けたいんだ！」

「はやてちゃん、お願い……」

私達は、はやてちゃんに救われたの……」

「我等守護騎士一同の総意…わかつてはもらえませんか」

正直、主の目を直視出来ない。

それほどまでに、主の願いを破った罪は大きいのだ。

「…それは、シグナム達の自己満足や。
シグナム達自身が私と一緒にいたいという、ただそれだけの感情…。
そこに、私の意志は入ってない…」

…返ってきたのは、辛辣な言葉だった。

自己満足というのも、心のどこかで理解はしていた。

「でも、その自己満足こそが。

…私にはうれしい。

私を助けようとしたんやろ？

それは、素直にありがとう。

…だからこそ、犯した罪を償うことを忘れちゃいけないんや。

ルチアさんのお陰で、私は私を知る事が出来た。

せやから、私は生きる。

生きて、闇の書の罪を償う。

それが皆のマスターとしての、私の使命や。

…だから、私と一緒に生きよう？」

…嗚呼。

無意識に、流れ出る涙を止められない。

やはり。

我等が主は、本当に心優しいお方だ…っ！

「はやて…はやてえっ！」

「お、ヴィータどないしたん…？」

私の自慢の鉄槌の騎士は、そんな事で泣く子やないよ……」

抱き着くヴィータを抱き帰り、背中と頭を撫でる主。

「大丈夫。私は……何処にもいかへん。家族を置いて、死んでしまえる訳も無い。

そのためにも今は、この子を止めなきゃあかなあ」

スツと取り出したのは、壊れてしまった夜天の書。

「協力、してくれへんか？

我が騎士、ヴォルケンリッター……」

「……仰せのままに、我が主よ……」「」「」

<Side三人称>

クロノ・ユーノ・アルフが合流し、大体の説明をかい摘まんでルチアが説明。

はやてのお陰でヴォルケンリッター達も手を出すことなく、そもそもなのは達は敵対するつもりもない。

ルチアを中心に、全員が肩を並べた。

「さて、作戦を説明する前に知識の交換といこうか。

まず、アースラ組は何処まで夜天の書の知識があるの？

ユーノ、よろしく」

「ええ、何で僕！？いや、確かに無限書庫で夜天の書について調べたのは僕だけど…」

「だからだよ、又聞きしていたなのはちゃん達より、直接見て読んだユーノの方が詳しいでしょ？」

「う、うん…」

とりあえず僕達がわかっているのは…」

・闇の書の元は「夜天の魔導書」という名称の、きわめて強力、そして決して害の無い一つのデバイスだった。

・何者かの悪意ある改変を受けて、いくつかの機能が暴走している。
・666ページを蒐集し終えた後、防衛プログラムが暴走。主が耐え切れずに死亡するなり、強制停止させられると、転生機能が発動。また新たな主を求めて旅立つ。

「他にも色々あるけど、多分機能自体は皆大体わかっているだろうから、多分役に立つのはこれくらいかな…」

「ん、十分だよ。」

で、夜天の書代表としては……私がある程度教えたとはいえ、はやてちゃんは何も知らない訳だし、シグナムかな？」

「わかった。」

役に立ちそうな情報といえば…」

・夜天の書には、官制人格と呼ばれる上位プログラムが存在する。
・主の承認無しには使えないが、夜天の書のプログラム全てを統括するプログラムのため、発動させれば全プログラムの制御も可能か

もしれない。

「無理だね。官制人格も一部が書き換えられちゃって、防衛プログラムとかを直接干渉は出来なくなってるはず」

「そうか……」

難しい顔になるルチアとリリアー又以外の全員。

「…あれ？でもその官制プログラムって、プログラムではなく夜天の書自体に干渉することは可能なんやよね？」

「だねー。」

流石はやてちゃん、いいところに気づくね。

…今から話す作戦は、全部が上手く行けば全て円満解決。七割上手く行けば大体はOKって感じのもの。いい？良く聞いていて欲しいんだけど……」

そして、ルチアは話す。

自分の思い描く未来を。シナリオ

誰もが幸せになるための、そのための作戦を。

「…と。」

正直言つて前半ははやてちゃん頼み、後半は個々の能力頼りのかなり不安定な作戦。

でも私は、絶対に来れると思っている。

どうかな？」

「…あたし、やります」

真っ先に声をあげたのは、八神はやて。

「夜天の魔導書は、私が主なんや。

私が主である以上、絶対に逃げたらあかん。

私は、闇の書の罪からは逃げない……！」

「はやてがやるのなら、私もやる！

犯した罪は、私達自身で償う！」

そしてヴィータ。

「一度は騎士の誇りを捨てたが…今改めて誓おう」

「私達は騎士。主の剣となり盾となる」

「この身は常に、主と共に……」

ベルカ側は、全員が承諾。

「なのはちゃん達はどうする？」

「私も…やります。

そんなに大それた事は言えないけど……でも、私の力で誰かを助けられるなら、助けたい！」

「私も…なのはと同じ。

力になれる人がいるのに、それを見過ごすことなんて出来ない！」

なのはとフェイトの意志も、すぐに固まった。

「アルフとユーノは？」

「当然！」

「僕にも協力出来るなら…僕はやるよ」

「クロノとリンディさんは？」

「…正直、不確定事項が多すぎる。

成功するという保障は何処にも無い…

でも、これが1番周囲への影響が出ない上に、成功した時のリターンはとても大きい。

何より、これより安全な案は出そうにない。

僕も賛成票を投じさせてもらう」

『私としても、被害が出るよりは出ない方がいいに決まってるわ。そしてどこかで駄目だった場合の代わりの案があるならね』

「そこら辺は大丈夫。ある程度なら修正は可能です」

『なら、私からは反対意見は無いわ。』

アルカンシエルの用意だけはしておくわね』

「ありがとうございます」

全員の意見が出揃い、全員の決意も固まった。

「じゃあ、やるうか。」

夜天の書の悲しい輪廻を断つ為に。
そして、はやてちゃんを救うために！」

「「「おうー！」「」「」「うん！」「」「ああ！」「」

「これで、665ページ…」と

ルチアが集めた魔力を闇の書に入れていき、次でようやく最後となった。

今全員がいるのは海上。

町に被害が行かないようにとの配慮だ。

「じゃあいよいよラストのページ。

はやてちゃん、覚悟は良い？」

「平気や、ルチアさんも一緒についてきてくれるんやろ？
せやったら、怖いもんなんて何一つあらへん！」

笑顔を見せつつ、しかし若干体を震わせて、手を握り込む。

無理も無い。これからやろうとしてるのは、自分頼みの一発勝負。

緊張しない方がどうかしている。

「…わかった。

大丈夫だよ、ずっと傍にいるから…！」

ファーンライル、準備は良いね？」

『万事完了しております。』

合図さえあれば、いつでも』

自身のデバイスへと語りかける。

返ってきたのは頼もしい返事。

それを聞いて、ルチアははやての手を取り、痛くない程度に握り締めた。

「あっ……」

「夜天の書への蒐集、開始！」

『同時に内部干渉を開始します。』

…行けますね。はやてさん、主、目を閉じてください。』

二人が言われた通りに目を閉じた瞬間、爆発的な光と魔力の奔流が溢れ出す。

その中で二人は、自身が深く落ちていくのを感じていた……

<Side 三人称・外側>

「あの、リリアーナさん……」

「…ああ、どうした高町にテスタロッサ？」

ルチアが闇の書に魔力を入れている間に、他のメンバーは戦闘体制を整えていた。

その最中ヴォルケンリッターとも話して和解した、二人の少女がリリアーナに話し掛けた。

「あの……私達魔法については、ルチアさんの事しか知らないんですが……」

リリアーナさんも、魔導師だったんですか？」

その疑問は当然だろう。

ルチアとはよく話していても、リリアーナとはあまり関わりがある訳でもない。

なのはは何度か偶然会って話したりはしたが、世間話のようものだった。

話した回数ならば、まだはやて達の方が多いのでは無いだろうか。

なので当然、魔導師であったことなど知るはずも無い。

「ここにいることを見ればわかる通り、私は魔導師だ。管理局の検査を受けたことなんて無いから、ランクは知らんがな」

(…なのは、気づいてるよね)

(うん…もしかしたら、ルチアさんと同じくらい強いかも…)

二人は話しながら、リリアーナの魔力を密かに探っていた。

妹のルチアと同レベル、管理局でのランクならまず間違いなくSS相当かそれ以上。

戦闘力こそ未知数だが、能力は凄いのだらうと推測する。

まあ次の会話でその推測は外れる事となるのだが。

「リリアーナ」

「ああ、シグナムか。

何か用か？」

話し掛けてきたのはシグナムだった。

「シグナムって、リリアーナさんと知り合いだったんですか？」

「そうだな。初めてあったのは蒐集を開始する前に買い物に行った時で、その時は主達と一緒に会った訳では無いから……最初に会ったのは半年以上は前になるな。」

そのあと偶然会うことも多かつたし……恐らくこの中で1番リリアーナと関係が深いのは私だろう。」

私達の中でもリリアーナと戦ったのは私だけだった訳だしな」

「ええっ!？」

「シグナム、リリアーナさんと戦った事があったんですか!？」

「ああ、全く手酷い負けをくらったものだ……。殆ど何も出来ずに負けたようなものだからな」

それを聞いて、フェイト達は更に驚く。

シグナムの強さは身を以って知っている。

そのシグナムをしてそこまで言わしめる強さ……

なのはとフェイトの中の戦闘癖が芽生えはじめた瞬間であった。バトルジャンキー

「……さて、お喋りはまた後で、だ」

聞いた瞬間、全員が気を引き締める。

いよいよ、闇の書の最後の1ページを蒐集させ終える所だった。

「一応言っておくが、目的は出てくるのを倒すことじゃない。

八神はやてが正式にプログラムを制御し、バグを本体から切り離す為の時間稼ぎだ。

私は戦闘に参加しないが、まあ精々頑張れ」

それを聞いて、当然ずっこけるのは達。

「……えー……?」「……」

「戦力差を考えろ、これだけ高ランク魔導師がいて、釣り合わない訳無いだろう。」

それとも、自信が無いから私にも参加してほしいのか?」

プチンッ、とナニカが切れる音がした。

「そこまで言うならやっつけてやるの!」

「あたし達にかかれば楽勝だ!」

声をあげたなのはとヴィータのみならず、クロノ・ユーノ・ザフィーラを除いた全員の目に炎が宿る。

(馬鹿ばかりで助かるな、全く)

(なのは達、どうしてこう好戦的なんだろ…)

(はぁ…もういい、諦めた…)

(シグナムやヴィータまでならまだわかるが、シャマル、何故お前まで…)

頑張れ男共、苦勞人だっていつかは報われるさ。

そうこうドヤドヤしている間に最後のページが埋まり、はやてとルチアが巨大な光の柱に飲み込まれていく。

光が収まった所には。

「あれが、官制人格…!」

銀髪と黒い翼を持つ女性が、光の無い目でなのは達を睨みつけていた。

「…まさか、意識が無い、のか? いや、考えても答えは出ない! 行

くぞっ！

「「「「「「「「「おっ！(はいっ！)(うんっ！)「「「「「

多少godgodな空気を払拭し、戦いはここに幕を開けたのであった。

ルチアの策、闇との戦闘。(後書き)

裏話

・何でリンディさんはそんなにあっさり作戦の許可出したの？

K：総督とグラム提督との話し合いの時に、「この件については自分の判断での作戦で動くこと」と言われています。

今回の件では、ルチアの作戦の成功を直感で感じ取りました。

本当はそんなことしたら提督失格なのでしょうが…。

・デュランダルは？

K：リンディ達の話し合いの時にグラムからリンディに譲渡、グラムの頼みによりクロノに渡されています。

引き続き、番外編について募集しています。

活動報告の方にも書いてますので、是非ご一読を。

折られた剣、その頃の…。(前書き)

K：多対一って難しいな。
全然書けない。

あ：今回は一人ログアウト。新技が出現します。

折られた剣、その頃の…。

<Sideなのは>

闇の書さん……いや、夜天の書の官制人格さんは、目も虚ろで口も半開き。

真っ白な……白過ぎるほどの肌もあって、生きているっていう感じがしなかった。

同じプログラムである筈のヴィータちゃん達と比べても、明らかにおかしかった。

というか呼びにくい！

「…デアボリック・エミッション」

おもむろにスツと手を挙げた…もう官制人格さんでいいや。

官制人格さんが手を掲げると、その先から一気に膨らんでいく謎の球体。

黒い雷を纏った、中身がうねうね動いている…うう、どういいう魔力の使い方をしたらあんなになるの？

「くそつ、あいつ…最初からあれを使う気か!？」

「あれ？」

シグナムさんが叫び、フェイトちゃんが聞き返す。

「あれは超広範囲の空間攻撃、この位置から避けるのはまず無理だ！全員、シールドを目一杯の固さで張れ！さもなければ一撃で落とされるぞ！」

ええ！？空間攻撃って、そんなのあり！？

「闇に…沈め」

広がっていった球体が一気に収縮する。

そしてその一瞬で悟った。あれはまずい。

あんなの食らったら、バリアジャケットがあったって一撃だ！特に今フェイトちゃんはソニックフォーム。

「フェイトちゃん！」

咄嗟にフェイトちゃんの前に出てシールドを展開。

展開した瞬間、体を揺さぶるような衝撃が突き抜けた。

「ぐ…ううっ！」

シグナムさん達はザフィーラさんが前に出て、それを中心にシールドで守っている。

ユーノ君達も、どうにか大丈夫そう。

やがて衝撃も途絶え、シールドを解除する。

「前に見たより、攻撃の威力が上がっていやがる……。くっ、暴走して何も考えられねえのか？」

見た感じ、その通りだと思う。

私達の方を見てはいるものの、見開かれた目は虚ろ。

とてもまともな意識があるとは思えなかった。

「封鎖領域」

『ゲフエングニス・デア・マギー』

それは初めてヴィータちゃんとおった時に使った結界魔法。

その固さは、私達が身を以って知っている。

私のスターライトブレイカーでどうにか壊せるほどの固さ。

「まあ、元々結界を張る予定だったし、結果オーライって事で……。補助は僕とシヤマルさん、アルフで担当します」

「僕は全体の援護を。」

フェイトとシグナムヴィータは接近戦、なのはは砲撃支援。ザフィーラは補助三人の防御を頼む」

「「おう！」」

「「うん！」」

「心得た！」

「相手は単体だが油断しない事、何が出てきても慌てるな！
エイミィ！」

『はいはい！夜天の書に反応があったら、すぐに知らせるよー！』

「そういうことだ、皆行くぞ！」

最初に官制人格に切り込んで行ったのは、シグナムさんとヴィータちゃんだった。

自分を持つ相棒を手に、一気に接近していく。

「せえええええつ！」

同時に振り下ろされた二人の武器は、官制人格さんの細腕から出たバリアによつていとも簡単に止められた。

「はあああああつ！」

背後に一気に飛び出し、鎌を振るフェイトちゃん。

死角からの高速の攻撃ももう片方の手で止められる。

でも、これで両腕は封じた！

「なのはっ、今！」

「うんっ！ディバイーン…」

両の手を押さえる内に魔力をチャージする。

そして更に。

「ストラグルバインド！」

「チェーンバインド！」

クロノ君とユーノ君、アルフさんとシャマルさんがそれぞれバインドをかける。

かかった際にシグナムさん達三人が離脱。

「バスターーッツ！」

この中の誰よりも高い威力を誇る直射砲撃が、官制人格さんに向かっていく。

しかし、

「碎け」

「なっ！？」

その一声だけで、官制人格さんを縛っていたバインドが全て碎かれる。

ユーノ君達のバインドだって、そんなに脆い訳じゃない。

というか、むしろ固い方だと思っただけど、なんでそんなに簡単に破れるの！？私だって少なくとも十秒近くかかるのに！

でもそれはそれ、既に私の砲撃は発射されて当たる寸前。

この距離なら避けられないはず！

……そう思ったんだけど。

「盾」

そう言ってさっきと同じように突き出されたシールドにいと簡単に止められた。

一応A+ランクの砲撃なんだけど！

「プラズマスマッシュアーツ！」

「盾」

フェイトちゃんの放った砲撃も止められる。

シグナムさんとヴィータちゃんが切りかかるけど…。

「スレイプニール、羽ばたいて」

いきなり官制人格さんと防壁が消え、私とフェイトちゃんの砲撃が
お互いを打ち消し合う。

「くっ!」「このおっ!」「

そこから出る爆風、シグナムさんとヴィータちゃんも動きを止める。すぐさま煙を振り払うものの、そこには誰もいない。

『皆、上だよ!隠蔽術式で隠されてる!』

エイミイさんの声に慌てて上を見ると、遙か上、それも官制人格さんが小さく見えるほどの高空。

真っ赤な球体を真っ白な球体が覆い、またもバチバチと電気を放っている。

……あんなの、一目見ればわかる。

食らったら、死ぬ!!

「全員、思いっきり離れろっつ!」

「…ジエネシス」

全速力でその場を離れる。

一瞬前まで私達がいた所を、極大な魔力砲が打ち抜いた。

<Sideシグナム>

「ハア、ハア…っ！『全員、無事か！？』」

『は、はい！こっちは大丈夫です！』

『こっちも大丈夫だ！ギリギリだけど避けた！』

避けてすぐ念話を飛ばし、全員が答えた。どうにか、全員被害は無いようだ。

しかし……

「まさか、こんな早くからジェネシスまで撃って来るとは……
本当に何も考えられないのか？
くそ、どうにか……」

『あ、あの、ジェネシスって……？』

ああ、テストロッサ達は知るわけが無いか……

「単純に言えば、巨大な魔力砲撃だ。
実際はもつとたちが悪いが……」

魔力で作った球体の中に別種の魔力球を作りだし放出、一カ所に作られた別種の魔力はお互い反発しあうエネルギーで加速。

致命的なまでの威力と速度と同時に、当たった魔導師の魔力暴走を引き起こす。

他人の魔力を流し込まれただけでも暴走するだけなのに、二種類の膨大な魔力を一瞬で叩き込まれる……

あとはわかるな？」

『……………』

ミッドの魔導師達が息を呑む気配。

当然だろう。

そんな残虐な砲撃魔法、魔法を統治に使う管理局は考えもしないだろうからな。

「いつまでも呆けているな、来るぞ！」

『『『つ！』『』』』

ジエネシスでは無いが、攻撃を撃って来る。

色は赤色で炎混じり、あの時に蒐集した赤龍のものか！（漫画版A
's 参照）

しかし、こんなものは避けるのは簡単。

本当に怖いのは……

「アポカリプス」

その右手に隠した、遅延魔法を駆使した巨大砲撃！

「巨大砲撃来るぞ！かわしたら一気に突っ込めっ！」

「了解だ！」

「私も行きます！」

「来るぞっ！」

言って大きくその場から離れる。

今度は、紺色に白を纏った直射型砲撃。

だが、当たらなければどうということはない！

最低限の動きでかわし、一気に近づいて切り掛かる。

「あああああっっ！」

「拳」

振り下ろしたレヴァンティンを、魔力強化した拳で受け止める官制人格。

ヴィータとテストアロッサも合流し、高速戦闘に。

1対3で何故こうも余裕をもって捌かれる！

「くそっ、止まれ官制人格！」

言葉通りに動きを止める官制人格。…正直、素直に止まってくれるとは思っていなかったのだが……

何にせよ、これはチャンスかもしれないが……いや、迷うな！戦わずにすむのなら、それが1番良いんだ！

「官制人格、お前も主はやてを救いたいと考えているのだろう!? 何故同じ志を持つ私達と争う!」

「烈……火の…将…」

「っ、ぐうっ!」

死角に回られて打ち込まれた拳を、どうにかシールドで受け止める。

ギリギリで防いだが…くそっ、効いたぞ!

だが、こちらの言葉に反応は返した!

「シグナム!」

「止めるなテストロッサ! はあああああっ!」

官制人格の繰り出す拳と私の振るう剣が、断続的に金属音を響かせる。

「いい加減目を覚ましたらどうだ、官制人格!」

『シユランゲフォルム! エクスプロージョン!』

「飛龍……回閃!」

「っ!?!」

魔力を長い刃全体に張り巡らせた蛇腹剣が官制人格を一気に取り囲む。

「はあっ！」

思いつ切り剣を引く。直後、巨大な魔力爆発、煙と光が官制人格を包み込んだ。

「ぐ…はあっ、はあっ…！」

一気に魔力を消費したためか、呼吸が覚束ない。

「シグナム…！」

「シャマルか…！」

真っ先に飛んできたのはシャマルだった。

「勝手に一人で無理はしないの！」

「何でいつもこう…！」

テストロッサ達も飛んでくる。

「シグナム…！」

「すまない、だがどうしてもな…っ！」

あれはっ、くそっ!？

「きゃあっ!」

「あっ!？」

魔力放出で全員を吹き飛ばす。

直後、いまだおさまらない煙の中から飛び出る一筋の光。

「っが……っ！」

それは文字通り光速をもって、私の心の臓を打ち貫いた。

『吸収』

「私は、何も救えない。

私は、何も出来ない。

私が出来ることがただひとつ。

ただ主の滅びの運命を、その目に焼き付けるだけ……
お前も、私の中に還るといい……」

官制人格のその声と、

「……シグナム……！」

仲間達の悲鳴を受け、

私の思考は、

闇へと、

閉ざされた。

<Side三人称>

「シグナムが消えたか…」

闇の書の闇となのは達の戦闘する場所よりもかなり離れた、海鳴市内のとあるビル。

海に隣接するそのビルの屋上、背中のパイプに体を預けながら足を組んで座る女性が一人。

名前を、リリアーナ・L・クラリーベルといった。

「まあ、別に問題は無いだろうな。どうせ出て来るんだし…くあ」

本来なら危険過ぎるその場所も、彼女にとっては何も問題無い。

なぜなら、彼女は魔導師だから。

「…予想以上に、暇だな。やることなんて何も無いし」

白いズボンと青い上着で構成されるバリアジャケットが風に揺れる。

乱れた髪を気にすることも無く、彼女は時折光る海を眺めていた。

「…ん？あれは…月村とバニングスの娘か、何でこんな所にいるのか…」

「…関係ないか」

一瞬その視線が左にそれ、臨海公園を見た。

そこにいたのはオレンジの髪色をした少女と、紫の髪色をした同じく少女。

が、それも興味なさそうにふたたび海を見遣る。

「はあ……暇だな」

リリアーヌ・L・クラリーベルは、暇を持て余していた。

<Side 三人称、???側>

「あちらの……リリアーヌの調子はどうかね？」

「一週間前は何も無くて暇だ、とか零していたと思うけど。今は知らないわ。」

確か予定日は今日だったはずだし、あつちの妹とかその友達とかが夜天の書にでも取り掛かっているんじゃないかしら？」

そこは、ある種異様な場所だった。

決して暗すぎはしない程度の照明、幾何学模様が描かれた壁と床。

そんな中に置かれた数多くの機械類。

大きな物から小さな物まで、数え切れないほどに置かれていた。

そしてその部屋の中央、一組の男女が向かい合って座り、テーブルの上の電子パネルと空中の画面に何かを打ち込んでいる。

「ふむ。まあこちらにも進展は特には無いし、あっちと連絡を取り合うのは闇の書が修復されてからだろうね。
おっと、ここはこっちの方がいいのではないか？」

「どうかしら、案外すぐに連絡を取るような自体になるかも知れないわ？」

でもここを変えるとこっちが……」

その時、ピピピッ、という音と共に空中に通信画面が映し出された。

「どうかしたかね？」

画面に映し出されたのは、白い服を纏った女性だった。

『どうやら、この世界に管理局の艦船が降り立ったようです。』

狙いはどうやらこの研究所、戦力は……ストライカー及びエースクラスが三人、それにA A～Bクラスの魔導師が中隊一つ規模です』

「……」

「……（クスクス）」

「……何か？」

「いいえ、何でも？（ニヤニヤ）」

「……まあ、戦力的には何とかなるだろう。
全員出られるかい？」

『はい。全員の出撃準備は整っております。』

命令があれば、いつでも』

「ふむ、ではこの前開発した自動機械の性能のテストも兼ねようか。」「……」「……」「……」の三人でストライカー級の三人を他の隊員と分断、更にエース二人とストライカー一人で分断して叩いてくれ。

「……」と「……」の二人は無人機械を操って中隊の相手を。

苦戦するようならすぐさまリリアーナに知らせるから、無理はしないこと。良いね?」

『了解です。』

では行ってまいります』

その声と同時に、通信画面が切れる。

「……一応、リリアーナを呼ぼうか。

何かあってからでは遅いしね」

「あなたも大概親馬鹿ね……」

「君には言われたくないさ」

そして男は手元のコンソールを叩き、通信画面を開いた。

通信画面の向こう側には、海を見据えるリリアーナ。

「やありリアーナ。

早速で悪いが割と緊急だね。

実は……」

折られた剣、その頃の…。(後書き)

K：誰得の新技説明！。

・飛龍回閃

威力 S -

射程 A +

攻撃範囲 C

飛天 剣流ではない。

蛇腹剣に魔力を流し込んで相手の周囲に展開、剣を引くことによつて蛇腹剣が間隔を狭めると同時に魔力を爆発させる荒業。別に切る訳じゃない。

カートリッジ2発を消費して繰り出す上に本人の魔力消費も多いが、威力はかなりのもの。

・ジエネシス

威力 S S S +

射程 S

攻撃範囲 A ～ A A

詳しくは本編中で説明したとおり。

直撃すれば非殺傷設定でも魔力暴走で最低でも意識不明と後遺症、最悪死亡。

・アポカリプス

威力 A A A +

射程 S S

攻撃範囲 A -

威力を捨てて最大射程の特化を目指した砲撃…なのだが、闇の書の膨大な魔力によつて射程の長さはそのままに高威力を実現した。

K：さて、次は誰が消えるでしょうか？
まずいな、やりたいことが思い浮かびすぎて十話くらいかかりそう。
いくつか話を消すか…うーん。
ついでに最後に出てきた人物は普通にわかると思いますが、まあスルーしてください。

消える守護騎士、撃ち抜く閃光。(前書き)

K:という訳で投稿です。

頭の中では色々妄想できるんですが、いざ文にすると難しい…。

頭の中ではアニメみたいに動かせるんですけどね。

ではごっぞ。

消える守護騎士、撃ち抜く閃光。

<Sideフェイト>

…信じられなかった。

あんなに強かったシグナムが、たったの一回の攻撃で。

光になって、消えてしまった。

「シグナム……！」

「…お前達にも、永遠の眠りを。」

我が主とともに、眠りにつくといい……」

そう言っつて、管制人格の手が光りだす。

「……っ！」「」

「デスレイン・リヴォルタ」

消えたシグナムの心配をする間もなく、次の攻撃が飛んでくる。

白銀の色をした膨大な魔法弾が、私達に向かって飛んでくる。

それはまるで、魔法弾による津波だった。

そして一目見てわかった。

全ては…避けられない！

「バルディツシュ！」

『ライトニングフォーム』

すぐさまバリアジャケットを戻す。

いくら高速機動が出来たとしても、避けきれないんじゃない意味が無い。決して瞬間移動や転移ではないのだから、移動する道に物体があれば当然ぶつかるのだ。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

飛んできたなのはと一緒に直撃するものだけをシールドで弾き、それ以外は反らす。

でも…圧倒的に数が多い！

「ノワールシュート……」

「つまり！あの黒い弾には絶対に触れちゃ駄目！

何を使ってもいいから、当たりそうなものは撃ち落として！」

白い弾幕の中に、更に増やされ混ぜられる黒い弾。

シヤマルさんの言うには、撃ち落とさないと駄目らしい…まずい、数発こっちに向かって来る！

「アクセルシューター！」

「フォトンランサー！」

「スナイプショット！」

「畜生あいつ、あれも使うのかよ！シュワルベフリーゲン！」

「「シュート！」」

「ファイア！」

「ぶち抜けっ！」

クロノと私の直射弾、なのはの誘導弾、ヴィータの鉄球が、白い弾を撃ち落としつつ黒い弾を落としに向かう。

そして、黒い弾に当たった瞬間……

「「「……は？」」」

思わず、ミッド組全員が絶句した。

黒い弾はこちらの弾に当たった瞬間に、周囲にあった数発の弾を取り込んだ。

そして、魔力爆発。……意味がわからない。

「あれは何かに当たった瞬間に周囲の魔力を取り込んで爆発するの。だからシールドであれを防いだら、そのシールドもバリアジャケッ

トの魔力も吸い取られて落とされる!」

「『『ええ!?!』』」

「なんだいその出鱈目な攻撃!」

「まずい、次が来る!」

見ると白い弾幕も黒い射撃も、更に数を増やして撃ってきた。

というかこの魔法の性能もそうだけど、二種類の違う射撃魔法を同時にこの量を操るってどれだけ出鱈目なの!?

『くっ、これじゃあじり貧だ!』

なのはは砲撃準備、ザフィーラはその援護!

補助組三人は全体の補助と、タイミングを合わせて管制人格にバインドを!

なのはの砲撃で一瞬でも攻撃が止まれば御の字だ!』

「『『『了解!』』』」

クロノから、念話での指示が飛ぶ。

確かにこのままだと、集中力が落ちた所に白か黒かのどちらかを喰らって落とされて終わりだろう。

砲撃で一瞬でも気を逸らせれば、その間にこちらが攻勢に出ることも出来る!

すぐさまこの判断が出来るクロノはやっぱりすごい、私も今出来る

ことを頑張らなきゃ！

『なのは、撃つまで何秒かかる？』

『15秒！それだけあれば、撃つてみせる！』

フェイトちゃん！』

『大丈夫。なのはは、私が守るから！』

「プラズマランサー、マルチショット！ファイア！」

<Sideなのは>

フェイトちゃんからの励ましも貰った。

期待に応えないと、ね！

「レイジングハート！」

『カートリッジロード』

2発のカートリッジが消費され、一気に魔力が高まる。

「魔力圧縮……！」

『デイベインカノン、スタンバイ』

この技は私の中でも、足を止めながら時間もかかる……でも、威力は

折り紙つき！

「やらせない、ブラッディダガー」

『マスター！』

突然響いたレイジングハートの声。

声に反応した時にはもう、血みたいに赤い短剣がすぐそこまで迫ってきていた。

まずい、やられる！

そう思って目をつぶる。

「ておあああああ！」

爆発音：あれ？でも、痛くない…？

「…何をしている高町？

早くチャージを始めたらどうだ？」

「ザフィーラさん！」

目の前に立っていたのは青いシールドを張った、浅黒い肌をした青い服の男の人。

「安心しろ、この盾の守護獣ザフィーラ！護る事こそ我が使命！」

パツと見た感じだけど、AAAクラスの射撃魔法をあんなに簡単に

防くなんて…！

これなら！

「レイジングハート、カウント行くよ！」

『カウント、7、6…』

「ノワールシュート…！」

私の込めた魔力量に警戒心を抱いたのか、あの黒い弾をこっちに向かって撃って来る。

でもその分白い弾が減ったから…

「プラズマランサー！」

「スナイプショット！」

「シュワルベフリーゲン！」

こうやって、フェイトちゃん達も迎撃に回ることが出来る！

…皆が私に期待してくれてる、その為にも！

『3、2、1…』

「今だ！ストラグルバインド！」

「リングバインド！」

「チェーンバインド！」

「フープバインド！」

クロノ君達四人のバインドが管制人格さんを拘束する。

これなら…行ける！

『カウント、ゼロ』

「デイバインカノン、ブラストシュート！」

私の周囲に魔力を込めて浮いていた3つの魔法弾が、私の目の前に収縮する。

「撃ち抜いて！」

『ブレイク』

収縮して一回り大きくなった魔法弾。

打ち出されたのは、今までのバスターよりは少し小さく、しかし超高速の魔力砲撃。

「っ盾！」

管制人格さんがシールドを張る。

しかし私の砲撃は、そのシールドを容易に貫いた。

管制人格さんの目が驚きで見開かれ、直後爆発。

やった、これなら！

「いやまだだ！ヴィータ！フェイト！」

「つしゃあ！行くぞアイゼン！」

「バルディッシュ！カートリッジロード！」

『了解』

クロノ君の声に一声返して、ヴィータちゃんとフェイトちゃんがカートリッジをロードする。

私も追撃をかけたんだけど、この技を使ったらレイジングハートの熱を逃がさなきゃいけない。

『スピアフォーム、ソニックフォーム』

『ラケーテンフォーム』

「貫け、雷光！」

「打ち碎け、鉄槌！」

フェイトちゃんのバルディッシュは、刃部分が180度回転して槍のような形状に。

ヴィータちゃんのグラーフアイゼンはハンマーにロケットとドリルがついた、私のバリアを破ったモードにそれぞれ変わる。

「ソニックスパイク！」

「ラケーテンハンマー！」

バルディッシュの黒い刃が雷を帯びて光り、グラーファイゼンからジェットが噴射され、超高速で煙の中へと突っ込んでいく。

魔力による視力強化で、管制人格さんの姿は確認出来る。

この距離からの高速攻撃なら、いくら何でも！

<Side三人称>

「あっ!？」

「嘘っ!？」

煙の中から突如伸ばされた二本の腕。

その細腕は己の身に迫った二つの凶器を、いとも簡単に掴みあげた。

「幾百の年を重ねた決して解かれぬ呪い。

それが…闇の書。

私は決して変えられぬ同じ結末を、ただただ見続けるだけ。

何も…変えることなど、出来ない」

それならばと一旦引いて態勢を立て直そうとするフェイトだが、管制人格が掴んだ手は固く、抜け出す事が出来ない。

そしてヴィータは。

「ふざ…けんなよ、てめえ！
変えられない結末…？」

それを変えるために！お前の中ではやてが頑張ってるんだろ！？

はやての命を…努力を…そして何より思いを！

誰よりもてめえが馬鹿にしてどうすんだ！

てめえはもう…黙ってる！

アイゼン！」

『カートリッジロード！』

アイゼンの後ろのジェットが、更に大きく火を噴く。

それと同時にヴィータが、管制人格がフェイトの槍を持つ手を蹴りあげる。

「あつ！？」

「っ！」

管制人格の手からバルディッシュが弾かれ、その反動でフェイトが離れる。

「ラケーテン、バンカート！」

一瞬管制人格の意識が逸れる。それを見逃さず、ヴィータは一気に自らの得物を叩き込む。

超零距离の一撃。誰もが、管制人格に一撃を加えたと思った。

…しかし、それでも、管制人格の方が一枚上手であった。

「霧よ」

ヴィータの鎚がその柔肌に食い込んだ瞬間、管制人格の身体が霧と
なって消滅した。

「はあっ!?!」

『ミストバインド』

どこからか聞こえる管制人格の声。

同時に、霧に包まれたヴィータの身体が硬直する。

『…ボム』

「つくそおっ!」

突如として、ヴィータの動きを拘束していた霧が一斉に爆発する。

爆発自体は小規模なため、フェイトは爆風で飛ばされるだけです
ん
だ
が
…。

「ヴィータちゃん!」

直後に煙が晴れ、煙の中が明らかになる。

騎士服も身体もボロボロで意識の無いのヴィータと、その腕を持ってヴィータをぶら下げる管制人格。

「…すまないな。」

お前も、私の中で眠れ…永遠に、な」

その声とともに、足の先から徐々に消滅していくヴィータの身体。

「せえあああっ!」

「…蒼き狼。」

お前も、もう眠れ…私が、全ての咎を背負おう…」

背後から振るわれたザフィーラの拳も、何事も無かったかのように素手で受け止める。

「全ての咎を背負う…か。」

お前がこうして戦っている間に主は、それを行おうとしている。

お前は…」

「それ以上言うな、蒼き狼」

強い口調で、管制人格が言い放った。

「いくらやろうと、この滅びの運命…簡単には変えられないさ。」

過去何人の主がこの闇の書のシステムを改善しようとしたか。

大した苦勞もせず四人のAAAクラスの騎士に闇の書の圧倒的な力、それを手にするために闇の書を元に戻そうと考えたことが、一度たりとも無いとでも言うのか？

…結局、闇の書は変えられない。

だから、お前も。我が内で眠れ…」

『アルマゲスト』

「っしまった!？」

ザフィーラの身体を真つ黒な球体が包み込む。

ドンツ!という爆音。

「ザフィーラ!」

球体が収縮して消えていく。

しかし、その中からついぞザフィーラが現れる事は無かった。

ほぼ同時に、ヴィータも消え去る。更に、

「グリーンブウッド」

ユーノ達支援組とクロノの足元の海面から、漆黒の巨大な樹が生えてくる。

「あれは…くっ、間に合っつて!」

質量とまるで噛み合わない高速で、あっという間にクロノ・アルフ・ユーノ・シャマルをその樹の中へと閉じ込めた。

直後、シャマル以外の三人が樹の外へと転移されてくる。

「ユーノ君、クロノ君、アルフさん！」

「シャマルさんは!?!」

「分からない、こちらとしても何が起こったのか…」

なのはとフェイトが念話を飛ばすも、帰ってこない。

念話等の通信妨害だろうか、通信担当のエイミイもシャマルに通信が取れなくなっていた。

「…咎人達に、滅びの光を」

しかし、そのことを気にする余裕は持たせてくれない。

管制人格の足元と伸ばした手の先に展開される、見覚えのある色のミッド式魔法陣。

そして、周囲の魔力を集束させていく。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「ま、まさか…」

「あれは…!!」

「スター、ライト…ブレイカー…?」

「クロノ、アルフ、ユーノ」

「ああ、わかっている!」

そう言っつて、高速で今いる場所から離脱する三人。

「なのはの魔法を使うなんて…」

「なのはは一度蒐集されてる…」

「おそらく、コピーされたんだろう。」

全く、なんて厄介な!」

なのは達も速度で勝るフェイトがなのはを抱え、その場から一気に離脱を始める。

「フェ、フェイトちゃん。

こんなに離れなくても…」

「至近で喰らったら、防御の上からでも落とされる! 回避距離を取らなきゃ…!」

俗に言う、経験者は語るといふ奴である。

そして、管制人格のいる周辺からそこそこの距離を取った所で。

『…正面方向500ヤード、一般市民が二人います』

「え!?!」

一方、こちらは海鳴臨海公園。

「どうしよう…誘拐されかけたけど助かったのはいいとして、人が誰もいない…」

「うん…辺りは真っ暗だし、遠くの海で光ってるし…
アリサちゃん、どうしよう…」

説明台詞を言われてしまったが、一応の説明を。

簡単に纏めれば、
塾帰り、道が混んでいるらしく迎えの車が遅れそう。

じゃあ車の少ない道まで歩いてそこで待とう。

ある意味お約束、薬を嗅がされ車の中に。

何故か起きたら臨海公園。 今ここ。
である。

「とりあえず、逃げようすずか！
なんか嫌な予感する…」

「え、でも、下手に動くとかえって危ないんじゃない…」

「少なくとも土地勘はあるんだし、何もしないであるかわからない
状況の好転を待つより、とりあえず自分の家まで行ってみる方がま
だ安心出来る！」

と私は思っただけど…すずかは？」

「え、と…」

何が起るかわからないし、とりあえずジツとしていた方がいい…
と思うんだけど…」

「でも…」

何度も言うが、ここは海鳴臨海公園。

闇の書との戦闘場所よりそれなりに離れているとはいえ、魔法で飛べばすぐである。

「っ、誰か来た、隠れよう！」

「え？アリサちゃん！？」

思わず木の影に隠れる。

聞こえてきたのは二人分の足音。

思わず体が縮こまるすずかと、冷や汗をかくすずか。

しかし…

「すみません、誰かいませんか！？」

「下手に動く危険です、じっとして下さい！エイミィさん、
転送の準備をお願いします」

聞こえてきた声は、友人の声。

「今の声…」

「なのはに、フェイト!?!」

思わず物陰から飛び出してしまつ。

「ア、アリサちゃん!?!」

「すずかも…どうして!?!」

しかし、やはり考える余裕はない。

後ろの桃色の魔力が、一際大きく輝く。

「つまずい!」

「スターライト…ブレイカー」

闇の書によつて強化された、推定SSランクの広域攻撃型直射砲撃。

発射されたそれは海面へと突き刺さり、爆風が一気に広がっていく。

非現実的な光景に、アリサとすずかは動けない。

それはつまり…。

『フェイトちゃん、アリサちゃん達を!』

「『うん!』二人とも、そこでじっとして!」

『ディフェンサープラス』

金色のドームが二人を包み込む。

フェイトはそのドームの前でシールドを。

「レイジングハート、」

『ワイドエリアプロテクション』

なのはは更に前で広域防御型シールドを張った。

動けないということとはつまり。

その場でこの莫大な魔力攻撃を、耐え切る以外に方法はない。

今まで受けたことの無い程の衝撃が、二人を一瞬で包み込んだ。

消える守護騎士、撃ち抜く閃光。(後書き)

K：技説明なのだー！

・デスレイン・リヴォルタ

威力A

射程A A -

攻撃範囲A A A + S

超広範囲制圧型魔力弾幕。

「一応規則性はあるものの、「パターン？何それおいしいの(笑)」
とでも言いたげな程に圧倒的な物量をばらまいてくる。

一発一発はなのはのアクセルシューターと同じくらいで誘導などもないが如何せん数が多すぎて、一発でも食らってしまったら立て続けに打たれることとなり、墜ちる。

弾は拡散していくため、至近で見るとただの壁。

イメージ的には怒首領蜂の火蜂のふぐ刺し弾を全て前面に集めた感じか。

・ノワールシュート

威力不明

射程A +

攻撃範囲B

衝撃炸裂型魔力吸収弾。

本文中で説明した通り。

勿論吸い取れる魔力には制限があるが、一発当たればBランクなら即魔力が無くなる。

因みにバリアジャケットの魔力が無くなると、同時に変身が解除されて変身前の状態に戻る。

：バリアジャケットが消え去るって聞いて怪しい妄想した奴表出る。

・デイベインカノン

威力A A A -

射程A A -

攻撃範囲C +

魔力収縮狙撃型砲撃。

訳がわかりませんが簡単に言えば、「デイベインバスターを一つの魔力弾にして撃ち出したらどうなるんだろう」ということ。

範囲は狭いしチャージの時間も取られるが、撃てさえすれば一撃必殺。

限界まで収縮された魔法弾を撃ち出す。射程も威力も折り紙つき。最早レーザー撃てばいいんじゃないかとも思えるが。

・ソニックスパイク

威力A +

射程B + S -

攻撃範囲C

防御貫通機能付与高速突撃。

槍型のデバイスに魔力刃を纏わせ、高速突撃によって相手の防御を貫きつつ手傷を負わせる。

逆に言うと、相手の防御を貫通する事に特化させたため、相手自身には手傷を負わせるくらいしか出来ないのだが。

しかしフェイトはそれを逆手に取り、雷の魔法資質を使って相手の身体を麻痺させ、戦闘続行を不能にさせる事を目的とした。

なのはが当たった場合、シールドを貫かれてバリアジャケット損傷

+5秒くらい動けなくなる、ぶつちやけ詰み。
しかし直線移動くらいしか出来ないなので、避けてしまえば無問題。
管制人格は手に魔力を纏わせて掴んだけど。

・ラケーテンバンカー

威力A A +

射程C

攻撃範囲C

隙の多いラケーテンフォームの突撃を接近戦用に使いやすくしたものの。
主に罅ぜり合い時などの奇襲に使う。

・ミスト

威力 - - -

射程C +

攻撃範囲B

自身の周囲を霧で包む。

管制人格はこれに加えて透明化と幻影を行使し、あたかも霧になったかのように見せ掛けた。

・ミストバインド

威力 - - -

射程C ~ A A A

攻撃範囲C ~ A A A

霧を媒介に相手を縛る。

普通のバインドより媒介がある分魔力運用効率がいい。
勿論霧が無ければ使えないので、割と天候任せ。

・アルマゲスト

威力S S S +

射程 C

攻撃範囲 C

空間密閉型空間攻撃 + 空間爆撃型吸収魔法。

小さな空間を作りだし、相手をそこに閉じ込める。

後はお察し下さい。

・グリーブウッド

威力 - - -

射程 B +

攻撃範囲 A

地面から黒く巨大な樹を生やし、内部に閉じ込める。物質召喚魔法の一種。

樹には内部の魔力を食う性質があり、魔法生命体であるシャマルは全身を喰われて闇の書の内部に還った。

さて、守護騎士がログアウトしました。

そして撃たれる桃色の閃光。

なのは達の運命や如何に！

それではまた次回。

また、番外編もまだまだ募集中です。

このあと活動報告を書きますので、そちらか感想の方に案を出していただければ。

**お知らせ。
(前書き)**

次話投稿時、このお知らせは削除されます。

お知らせ。

あ：Kが引越しをすることとなりました。
とはいってもそんな遠くに引っ越すわけではなく、近場での引越しですが。

K：という訳でその引越しのための片付けその他諸々を行わないといけないため、数日の間一切の執筆が出来ません。

まあ、長くても一週間程度となりますが。

この作品を楽しみにしていらっしゃる方々には申し訳ありません。

あ：短文ですが、これにて失礼します。

私もKの家に行き、出来る限り早くKの引越しを終わらせるために尽力します。

暴走開始、姉の行方。（前書き）

K：えーと、待っていて下さる方がいるかはわかりませんが、こんなにもお待たせしてしまつて本当に申し訳ない！

あ：本当だよ、既に一ヶ月過ぎてるよ？お知らせで一週間がどうか言つたのは何だつたのか…

K：うう、言い訳にしかりませんが、学校の課題とか新生活とかに慣れず…

あ：まあいいけど、いやよくないけどさ。
今回の内容は？

K：VS 夜天の書の第三幕になりますね。
圧倒的な力で守護騎士達を叩き潰した夜天の書、なのはとフェイトはどうなるのか。

まあ繋ぎの話なので、内容は薄いですが。
そんなのでよければどうぞ！

暴走開始、姉の行方。

<Side三人称>

「…なのは、なのは大丈夫!?!」

「フエイト!」

海鳴市中心部、スターライトブレイカーの爆風からかなり離れた場所ので、ユーノとアルフが念話を飛ばす。

「大丈夫では、あるんだけど…!」

「アリサとすずかが、結界内に取り残されてるんだ…!」

「なんだと!?!エイミー!」

「転送準備は出来てるけど、膨大な魔力の余波で安定しないのクロノ君!」

「収まり次第、最速で転移させる!」

距離にして約5Km。

それだけの距離を離れても、肌で感じるほどの膨大な魔力。

手を出そうにも出せず、遠くで見守る事しか出来なかった。

「く、うっうっ…!」「」

魔力爆発が収まり、自然とシールドが解除される。

後ろにいるアリサとすずかは、恐怖からか固く抱き合って目を閉じていた。

「…もう、大丈夫」

「すぐ安全な場所に運んで貰うから、もう少しじっとしててね!」

なのはとフェイトが声をかけて、ようやく立ち上がる二人。

「なのはちゃん、フェイトちゃん…」

「ねえ、ちよつと…え!?!な、何!?!」

いきなり足元に現れる、白いミッド式魔法陣。

アリサが声をあげた瞬間、二人の姿が消え去った。

戦場からは遠い安全な場所へと転移させられたのだろう。

「…見られ、ちゃったね」

「うん…」

『ユーノ君、ごめん。二人の方を守ってあげてくれるかな』

『アルフも、お願い』

『でも、フェイト…』

念話で身を案じるアルフだが。

『…行こう、アルフ。気掛かりがあると、二人が思い切り戦えないから』

『僕はそちらへ飛ぶ。ルチアとはやてが出て来るまで耐えなければ
ならないんだからな』

クロノは戦線に参加するようだ。

当然だろう、この作戦の肝は前半。

前半中外両方が成功したなら、後半は殆ど何も問題無いのだ。

念話を切る。

「うっ…！」

「っなのは…！」

突然なのはが膝をつく。

デバイスを持つ手が震える。

「へ、平気…これくらい、大丈夫！」

やはり正面からスターライトブレイカーの爆風を受けたのはきつかったのである。

しかし、泣き言も言っていられない。

海上から管制人格が、かなりのスピードで接近してきていた。

「…二重封鎖領域」

「…なっ!？」

一方街の中を飛んでいたクロノは、唐突に足を止めた。

いきなり結界が張られ、なのは達の元へと行けなくなってしまったのだ。

「まさか、二重結界だって!？」

くっ、どうにかして解かなければ無理か!デュランダル!

『YES、BOSS』

海鳴臨海公園。

公園に立つのは二人の少女。

その先に浮かぶのは一人の女性。

奇しくもそこは半年以上前に、二人の少女が最後にぶつかった場所

と同じ場所だった。

「管制人格さん…もう、終わりにしませんか？」

「貴女の中で、はやてとルチアさんが戦っているんです。だからお願い、私達を信じて攻撃を解いて！」

その言葉を聞いて、スツと目を伏せる管制人格。

「…今の管制人格に、何が出来るというのだ」

「え？」

手を固く握りしめる管制人格。

…いや、なのは達は疑問を持った。

この人は今、何と言った？

「今の管制人格に」何が出来るか、と言ったのだ。

「管制人格には、って…じゃあ、貴女は管制人格じゃないんですか！？」

「…この身体は、管制人格のものだな。…む」

突如地面が割れ、次々と火柱が立つ。

海の中からは、茶色の触手が次々と現れた。

戸惑うなのは達を余所に、管制人格…いや、その女性は口を開く。

「…崩壊が始まったか。」

もった方か…それもあと数分で、意味を為さなくなるだろう…」

茶色の触手は一気になのはとフェイトを縛り上げる。

「全ては永劫の闇の中へ消え、そしてまた新たな絶望が生まれ…
これまでも、そしてこれからもそれを繰り返す…」

喉を絞められ、もがくのは達。

手足も縛られているため脱出は難しいだろう…フェイトは別として
だが。

「私も限界が近いか。」

…崩壊が始まった以上、主も、一緒に中に入り込んできた女も、直
に私の中で消えるだろう…」

「…え？」

女性の言葉を聞いた瞬間、なのはとフェイトの目が見開く。

「なればこそ、主を孤独にさせぬために…」

お前達も、私の中で眠るといい…」

『ブラッディダガー』

さっきも使われた、血のように染まった短剣。

宙に浮かぶは24本。

「バリアジャケット、パージ…！」

『ソニックフォーム』

二人を捕らえた触手ごと、巨大な爆風に包まれる。

「駄目、か」

煙が晴れる。そこにいたのは無傷のなのはとフェイト。

「貴女が本当は誰なのか、そんな事は良い。

シグナム達をどうしたのか、それも今は置いておく…。

…一つだけ。私が聞きたいのは一つだけです。

そんな全てを諦めているかのような言い方をして、ならなぜ貴女は泣いてるんですか…！」

フェイトの問い掛けを聞いて、ハッと顔に手を当てる。

その手には、確かに濡れた感触。

「悲しいからでしょう？」

ずっと同じ悲しい結末を繰り返していくのが、嫌なんでしょう!？」

「…我は、魔導書。ただの、道具だ。

悲しみなど、無い」

目を伏せる女性に向けて二人が叫ぶ。

「…悲しみなど無い…？
そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって、誰が信じるもんか…
！」

「貴女にも心があるんだよ…。」

「そうでなきゃおかしいよ…！」

「本当に心が無いのなら、泣いたりなんか、しないよっ！」

「悲しいって言うって良いんだよ…？助けてって言うって良いんだよ…？
貴女のマスターは、はやくちゃんは、それに答えてくれる優しい子
だよ…？」

「ルチアさんは、それに応えてくれる強い人だよ…？」

「だから、はやてとルチアさんを解放して。武装を解いて！お願い
…！」

目を伏せたまま動かない女性。

「…確かに、そうかもしれないな。」

「主はとても強い子だ。」

「ルチアという女も、主を支える光となるだろう…！」

「なのは達の顔に喜色が浮かんだ。」

「…しかし。」

「…それでも、私には何も出来ぬのだ。」

「ルチアのように主を助ける事も、管制人格のように主を補助する事
も、お前達のように主を信じる事も…すまないな」

「…そんな事、無いよ！」

「絶対に、貴女にも出来る事が…」

言いかけた瞬間、なのはの頭に何か走った。

…ここにいたら、死ぬ（……………）！

そしてそれは、フェイトにも。

「っ!」

「ア…アアアアアアッツツツ!?!?」

突如として、さっきまでの美声は嘘だったかのような咆哮をあげた夜天の書。

美しい肌には青筋が至る所に走り、両の瞳から流れ出る雫は真っ赤に染まり。

天を睨み、大地を押さえ付け、そこにいたニンゲンを震えさせる。

「な、何…?何なの?あれ…!」

「わからない…少なくとも、良いものでは絶対に無い…!」

なのはとフェイトは、身体の震えが出て止まらなかった。

大丈夫。怖くない。平気。負けない。

そんな声が脳内を駆け巡るが、身体の震えは止まらない。

「っあれは!?!」

「闇が…吹き出して来る…?」

夜天の書から、吹き出る闇。黒く、暗く、深い、深淵の闇。

夜天の書が右手を上げる。

無秩序に吹き出した闇が、夜天の書に集まっていく。

全ての闇が集まり、雪のように白かった肌がうつすらと灰色がかつた。

夜天の書がなのは達に目を向け、それを見て戦慄する。

両の瞳から流れる涙だけではない。

その瞳すらも、真っ赤に染まっていた。

白目だとか黒目だとか、そういう問題では無い。

全てが赤なのだ。

「魔導書……さん……」

管制人格さんじゃないから、どう呼んだらいいのかな?

とりあえず、呼びやすい魔導書さんでいいかな?

そんなどうでもいい事が頭を過ぎる。

現実逃避とわかっていても、どうにか「アレ」の事を考えたく無かったのだ。

「ア…アアアッ!」

「っ、レイジングハートッ!」

「バルディッシュ！」

『Protection powered』

闇を纏った腕を引き、拳を握り締め、振り抜く。

それだけでなのは砲撃に勝るとも劣らない、漆黒の砲撃が放たれる。

その速度は直線速度において、フェイトのフラッシュムーブをも凌ぐ速度。

放たれたが最後、かわすのは容易ではない。

直感でそれを感じとった二人は、直ぐさま自分の張れる最高硬度のシールドを張り、食い止めた。

幸いにも砲撃はすぐに途切れ、二人にそこまでの損傷は無い。

「ウグオオオオオオツツツ！！」

「く…っ！」

高速で殴り掛かってきたのを何とかシールドで受け止め、距離を取る。

「レイジングハート、バインドいくよー！」

『自分も相手も高速機動中では難しいと思いますが』

「大丈夫！」

『All light, My master』

フェイトが前衛、なのはが後衛で連続攻撃を何とか凌いでいく。

因みにフェイトはソニックフォーム。

元のバリアジャケットでも一撃モロに喰らえば墜ちるのを感じたため、全てかわすか逸らしている。

「っ今！」

『Holding net』

「ショートバスターっ！」

「プラズマストライク！」

大振りの一撃をかわした所にバインドをかける。

今回使ったのは魔力で強固になる網型のバインド。

かかった所で直ぐさま発生早い近距離砲撃をお見舞いし、一気に離れる。

「魔導書さん…どうしちゃったんだろう…」

「暴走しているのはわかるんだけど…」

『もしもし、なのはちゃんフェイトちゃん!?!』

「っエイミーさん!?!」

不意にエイミーからの通信が入る。

その内容は驚くべきものだった。

『よく聞いて、あそこにいるのは本人が言った通り、管制人格じゃない!』

あれは防衛プログラム、正確には「闇の書となった原因となるバグによって、変質してしまった」防衛プログラム! 外からの止め方は…無いの!』

「「ええっ!?!」」

止め方がわからないものと、どう戦えばいいのか。ふたりは　めのまえが　まっくらになった!

『二人ともふざけてないでちゃんと聞いて!』

外から止める方法は無いけど、ルチアさんからこういつ時の指示を預かってる!』

「本当!?!」

「ルチアさん、凄い…」

エイミーの言葉に顔が明るくなる。

きっと、ルチアさんならなんとかしてくれる!

『…「3分、時間を稼いで欲しい。そうすれば、99%どうにか出

来る」…だつて』

「3分、かあ…」

「頑張つて、時間を稼ぐしか無いかな？」

「そう…だね。私達じゃあどうしようも無いなら、ルチアさんとはやてちゃんに賭けるしか無いもんね…」

微妙に苦笑を浮かべながら話し合う二人。

「それじゃ、頑張ろうなのは」

「うう、何だか貧乏くじな気がするよう…」

軽口を叩き合うが、目は笑っていない。

さっきの攻防で、あの防衛プログラムの強さが身に染みただからだ。

…しかし。

「時間稼ぐだけなら、いくらでもやり方はあるよね。行こっか、フ
イトちゃん！」

「うん！」

煙が晴れ姿を現したのは、傷どころか汚れ一つ無い防衛プログラム。

たかが3分されど3分。

戦闘経験の浅い彼女達にとって、最も絶望的な3分間が始まった。

<Side三人称、リリアー又側>

「…来たのはいいが、殆ど終わりそうだな」

「あくまでも保険だったからね。私だって、そこまでやわに育てている訳じゃ無いさ」

モニターを見る三人の目に映るのは、各々の戦況。

「でもストライカー級の男は、一対一とはいえ随分善戦してるわね？」

「あの子には厳しいか？ランク的には問題無いが…ふむ、やはり実線経験が少ないのも一つの問題だね」

簡単に戦える高ランク者が君くらいしかないからね」

「まあその辺りは調整していくしかないだろうな」

…ふむ、まあ相手くらいは用意出来るが…」

話し合いを続ける中で、モニターの一つが決着を見せる。

『ドクター、終わりましたわよお。』

とりあえず殺してないですけど、どうします？』

「ああ、お疲れ様。とりあえずバインドで縛って、待合室に待たせておいてくれるかな？」

デバイスとかは取り上げなくていいよ」

『了解、じゃあ今から戻るわ。ナイフが少し変な感じなの、見てもらってもいい?』

「ああ、それくらい構わないさ」

そう言っつて、通信が途切れる。

「さて、問題は残りの2グループなんだが…エース級二人は優勢だけど、ストライカーはやはり強いね。」

増援出した方が良いかな?でも良く考えてみればリリアーナが今出るのはまずいし、他の子達は出れないし…」

そういつて考える男。

「…仕方ない、増援はこっちから出す。そのかわり、例の件頼むぞ?」

「すまないねリリアーナ、それくらいはお安いご用さ」

簡単な交渉を済ませ、何処かに連絡を取るリリアーナ。

「さてそろそろ行くところかリリアーナ、彼等をあんまり待たせるのも悪いだろう?」

椅子から立ち上がり、待合室を指差す。

そこにはバインドで縛られ運ばれ終えた、管理局の魔導師45人。

「…だな、夜天の書の終わりまであまり時間が無い。」

行くか、ジェイル？」

リリアーナが口に出した名前であり、目の前にいる男。

それはこの時代において既に広域指名手配されている、天才科学者の名前であった。

暴走開始、姉の行方。（後書き）

K：なんと、皆が管制人格だと思っていた彼女は、人格を持った防衛プログラムだったのだ！（ババーン！）

あ：ずっと疑問に思ってたんだよね。管制人格は中ではやてといえるのに、誰が外で闘ってるんだ？と。

K：なのでこの小説では、外で闘っているのは制御不能の防衛プログラムにしました。

あ：管制人格なら一緒に夜天の書を修復することも出来たかもしれないけど、防衛プログラムは自分で命を奪ってきた分絶望も深かったということ。

K：さて次回は、ようやく夜天の書内のルチアとはやてになります！展開の都合上主人公出るのが遅れまして、真に申し訳ない。

あ：ではでは、更新はまた少し遅れるかもしれませんが、今後ともよろしく願います。

夜天の中心、負の遺産。（前書き）

K：あうー…。

あ：そんなにへばってどうしたの。

K：中間テスト嫌い…。

あ：いいじゃん、学年52位でしょ？

K：良いんだか悪いんだか：結構勉強したのにこれはちょっとあれかなーと…んー、30位くらいには入りたかつたんだけどねー。

あ：次頑張れ。はい、それでは今回は夜天の書内部でのルチアとはやてです。

K：戦闘シーンは4話使ったけど、内部は今話だけ。気絶したはやてが悪いんです。

そのかわり今回、文章量がちょっとだけ多めです。

あ：ではどうぞー。

夜天の中心、負の遺産。

<Sideはやて>

…眠い。

「そのまま、お眠りください。我が主」

…とても、眠い。

「守護騎士達も私の中へと入りました。もう、苦しむことは無いのです」

急さと眠気が取れへん。それどころか、どんどん大きくなってく。

…でも、本当に寝てしまったらあかん。

「ルチア…でしたか。あの女性がここへ侵食して来る闇を抑えてはいますが…それも時間の問題」

ルチア…さん？

「じきにここも飲み込まれ、闇に食われてしまつてでしょう。そうなる前に、お休みください。愛しき主よ…」

…それは、あかん。

「貴女の望みは、全て私が叶えます。

目を閉じて、心静かに夢を見てください…」

それは…あか…ん…よ…。

<Sidelerチア>

「……………あ」

いやあ…ちよつと失敗、って訳じゃ無いんだけどなあ…

「……………つく」

見通しが甘かった、のかなあ？

一応、ここに入るまではよかったんだけどな？

「……………か、」

一応、解説をしておこう、かな。

そんな余裕、あんまり無いけど、さ。

お兄ちゃんが手伝ったお陰で、ファーネライルを介してはやてちゃんと一緒に夜天の書の内部に入り込むのは成功した。

そこまではよかったんだけどね…

はやてちゃんと魔力パスを繋いで夜天の書の中核に入り込むつもりだったんだけど、それが途中で切れた…というよりは、切られた、というのが正しいかな。

で、だ。
魔力パスを切られたと言っても魔力感知は出来るから、一応はやってちゃんの居場所と周囲の把握は出来る。

周囲が魔力に満ち溢れてるから、くつきりとはわからないけどね。

「……あぐ」

はやてちゃんの近くに、「人っぽい」の一人。

まあこれがリインフォース…管制人格だろう。

残念ながら外は感知できないから、外がどういう状況なのかはわからない。

ヴォルケンスとなのはちゃん達が上手くやってれば良いんだけど…
フェイトちゃんはこの中に取り込まれてるかな？

私からは感知出来ないけど。

…さて、いい加減ちよつと逃避するのもやめよう。

「……が、く、うあ」

はやてちゃんと切り離された私が今どこにいるか。

正確に「私は夜天の書の中の　にいる」とは言えないけど…

私は、闇の中にいる。

恐らくは、ここが『闇の書』たる所以なのだろう。

あたりは視界ゼロ。

そして…私は体をまるで動かせない。

元々はやてちゃんと切り離されたのは、超高密度の魔力の波が私達を襲ったのが原因。

高い魔力密度に慣れてなかったはやてちゃんはそれで気絶、魔力パスも引きちぎられた。

必死で手を伸ばしたんだけど…第二波が来てね。

抗えずに流されちゃったんだよ。

はやてちゃんと離されちゃったから合流しようと思ったんだけど、身体がその場から一歩たりとも動かせなくなるという謎の事態が発生。

で。

「……………」

元々この中は紫色だったり赤色だったりで混沌としていたんだけど、いつの間にか私の視界は光の全く無い黒一色に。

そう、私は完全に闇の中に飲み込まれてしまった訳ですよ。

「オオオオオオオオ！！」

「っ！」

で、もうひとつ私を悩ませるのがコレ。。。。。

・・・ノロウゾ、デキソコナイノマドウシヨメガアアアアアアツツツ！

「っく、力に惹かれてこれに手を出したのはそっちでしょうが…っ」

過去の夜天…いや、闇の書の主達の怨念とか何やかんやを取り込んで肥大化した、闇の書の闇。

手当たり次第に周囲のものを飲み込もうとするからたちが悪い。

尤も人であつただろう時と違って単純な思考しか出来ないというのもあって、とりあえず近くのを飲み込んでから別の場所に行くという事しか出来ない。

…ここまで言えば、多少わかってくれると思うんだ。

そう、こいつが向かおうとしているのは現夜天の書の主である八神はやてのいる所。

で、それを遮る私を飲み込もうと、今こいつはここで頑張っている訳である。

私ができるのは全身に魔力を張り巡らせて闇の侵入を防ぐことくらい。

闇といっても魔力の塊、全身の魔力を活性化させつづければ侵入を防ぐ事が出来る。

ただ…これちょっと問題があつてね。

…オオオオオ…

「う……ふっ、ぐう……」

無理矢理身体中の魔力を活性化させているからか、肉体的な痛みが酷い。

身体強化の魔法を度を越えて掛け続けるようなものだからね、どうしたって身体に影響は出る。それも悪い方の。

それにまだ問題はある。

自身の魔力は活性化、周囲には高濃度の魔力塊……
所謂魔力酔いというやつが酷い。

いきなり魔力が高濃度の場所に来ると、環境の違いからか車酔いに似たような症状を引き起こす事がある。これが軽度の魔力酔い。

これが重度になると……今私が体験しているみたいに、脳や五感に物凄い狂いが生じる。

冗談抜きで物凄い気持ち悪い。

「……かふっ」

あ、血吐いた。

「ファー……ネ……ライ、ル……あと、どれくらい……？」

『……全プロセス完了予想残時間、あと3分と52秒……。主……』

「だい、じよぶ…だから…」

いやあマルチタスクって便利ね。

脳のリソースの片方を全て魔力の活性化に費やせば、こつやって残り半分で考え事が出来る。

…その分頭の痛みがやばいことになってるけどね。
リアルに割れるんじゃないかってくらいに。

因みに私がここに入ったのは理由というか作戦みたいなものがある。

まず最初の作戦。

まあこれははやてちゃんの希望だったんだけど。

単純明快に私とはやてちゃんが夜天の書の中心部へ行つて、管制人格とお話する。

…OHANASHIじゃないよ？本当だよ？

それはともかく…原作に加えて私がいる分、話を円滑に進める自信はあった。

まあ、それも失敗した訳で…。

で、次善策。

今回みたいにはやてちゃんと離されちゃって、私が合流できない場合。

管制人格の事を考えたら、はやてちゃんを自身のところへ連れて来

「夜天の魔導書の、主なんや…」

だからこそ。

「現実から目を離すのは駄目や。

夢の中へ閉じこもっても、何も変わらないんや…っ！」

重い瞼を必死で開き、動かすのも億劫な身体を無理矢理動かす。

ようやく目を開く。

涙を流す銀髪の女性。

そうや、この人は…

「…お久しぶりや、夜天の魔導書…」

「っ！…まさか…私の事を覚えて…！？」

…正確には、思い出したっていうのが正しいけどなあ。

「…全部、思い出したよ。

…辛かったやろ？」

「っ！」

息を呑む気配。

「寂しかったんやろ？悲しかったんやろ…？」

「…私は、主のための、道具です。
悲しみなど…」

「そんな言葉は、その涙を止めてからじゃないと説得力無いよー…
？」

慌てたふうに関自分の顔を触る管制人格さん。

…名前、決めてあげなあかなあ。

それが何だかおかしくて、私はつい吹き出してしまった。

どうにか車椅子を動かして、すぐ傍まで寄る。

「…私は、夢の中で生きる事なんて望んでない、貴女も同じはずや
！違うか!？」

「…私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています。

だから騎士達と同じように、私も貴女を愛おしく思います。

…だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身を許せない」

独白は続く。

「自分ではどうにもならない力の暴走、貴女を侵食することも、暴
走して貴女を食らいつくしてしまう事も、止められ」

パァン、と乾いた音が響いた。

目の前には、とても驚いた顔の管制人格と、振り抜いた自分の手。

…あかなあ、人に簡単に手を上げたらだめやる自分…て、違う違

う。

「さつきから聞いてれば……
なあ、なんで諦めるん……？
まだ何も試していない。
抗ってもいない。助けも求めない。
それなのに、なんで全てを諦めるん？」

「それ、は……」

「まさか今までもそうだったから、今回もまた駄目だろう……なんて
考えなんか？」

……それこそ、筋違いや。
私を信用してないって事やろう？」

「……………」

何も言わない管制人格。俯いて顔は見えないけど、どんな顔をして
いるかは何となくわかる。

「運命を変えることは出来ないかもしれない。しかし、運命を選ぶ
ことは出来る……」

ルチアさんが言った言葉や。

……一緒に歩もう。これから、二人で一緒に。
いやまあ、シグナム達もルチアさん達もおるけどなあ」

「あ……」

顔を上げた管制人格の顔は、涙で濡れてくしゃくしゃだった。

…本当に、辛かったんやな。

「大丈夫。私が、いるから。皆、貴女の傍にいるから。もう、救われてええんや…」

「あ…うあああああ…っっ！」

手を広げると私の胸に飛び込み、大泣きする管制人格。

何と言うか、見た目自分の倍くらいの年齢の人が自分の胸に縋り付いて泣いてる…あかん、なんかおかしな気分になりそうやわ…

「名前をあげる。

もう闇の書とか、呪いの魔導書だなんて呼ばせへん。

私が呼ばせへん。

…私は管理者や、私にはそれが出来る！」

「無理です…自動防御プログラムの暴走が止まりません…！御友人方も闘っておられますが…」

その時、待ち望んだ声が聞こえた。

『もしもし…はやてちゃん…聞こえる…？』

「ルチアさん…！？よかった、無事やったんや！」

本当に良かった…！ここへの侵食を食い止めてるって聞いたから、物凄く心配したんよ…！

『あー…あまり大丈夫って訳じゃ無いけど、まあいいや。』

そつちにさ、管制人格っているかな？
ちよつと話をしたいんだけど…』

「私が…何か…」

『あ、貴女が管制人格ね…ん、了解。

ええとはやてちゃんと管制人格さん、今そつちはどんな状況？
名前とかつけて真のマスターとしての認証を終えている状況なら、
呼びやすいし簡単だしで助かるんだけど…』

「あう、そこまで行ってへん…マスター認証とかってどうするん？」

『いやまあ、その辺は管制人格の方が詳しいと思うな…
とりあえずプログラム関連はどうにかなるから、そちらはそちらで
やるべき事を…あっ』

…なんか、唐突に言葉が途切れたんやけど。

え、ちよ、何！？

…あ、でも、どちらにしてもルチアさんもこの中にいるんやよね。

…せやったら、何とかなる…というか、何とかする！

私は、この夜天の書の主なんや！

<Side三人称>

「…とりあえずルチアさんの言ってた通り、あんまり猶予がある訳でも無い。」

外に出て防衛プログラムを止めなあかなあ」

「しかし防衛プログラムは、既に管制プログラムの命令系統に属しません…」

私ではどうにも…」

「んー…まあ、何とかしよ」

管制人格の手を取るはやて。

その瞬間、頭の中に流れ込んで来るものがあった。

「これって…」

「夜天の書の、管理に置ける知識です。」

話している時間すら惜しいのであれば、これが最良かと…
勝手な事をして申し訳ありません…」

「…そか。嬉しいよ、ありがとう」

はやては目を閉じた。

頭の中に流れ込んで来る知識に身を任せる。

知らず知らずのうちにははやては、車椅子から立ち上がっていた)…
……………。

「止まって」

自然と口から零れ出た言葉。

足元に、純白のベルカ式魔法陣が展開する。

「名前を、あげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書なんて呼ばせへん」

「現マスターによる管理権限の行使を確認。

同時に夜天の魔導書における全権限を、現マスター八神はやてに移行」

「夜天の主の名において、汝に新たな名を与えん。

強く支える者、幸運の追い風。祝福のイール。

…リイン、フォース」

はやてと管制人格：リインフォースが、光に包まれていく。

<Sideルチア>

…どうやら、上手く行ったみたいだ。

「…ファーネライル。はやてちゃんは？」

『夜天の魔導書の管理者の覚醒を確認。同時に管制人格による管理権限の行使、それによる全権限の移行を確認。管理者による管理権限の行使を確認。』

こちらのプログラムの介入に成功。介入による防衛及び自己修復プ

プログラムの一時無力化に成功。

両プログラムの切り離しに成功。後は外にいるのを吹き飛ばせば、自然と塊となって溢れ出てきます』

「レイジングハートと…バルディッシュに信号を…」

『了解しました。合図の信号を送ります』

…ふう。想定とは違ったけど、前半部分は概ね完了、と。

後は外に引きずり出して、あれを吹き飛ばすだけ。

そうすれば終わらせる事が出来る。闇の書の、救えぬ輪廻を…。

…お兄ちゃんが、リインフォースの修復をちゃんとやってくれれば良いんだけどな…。

…それにしても、さっきから闇がやけに大人しい。

私を取り込むのを諦めたって訳じゃ無いだろうし…

一応魔力防壁は解除しないけどさ。

はあ…頭が痛いし身体も痛い。それに…ちょっと精神的に擦り減ってる。

あと1時間中にいたら確実に死んでるな…。

…あれ？

「フアーネライル？」

『…あつ、はい、何でしょうか、主？』

…んー？なんか…

「どうしたの？」

『…プログラムの介入を終えた後、何か違和感が残ったのですが…私の中を調査しても何もバグは出なかったので、恐らく気のせいだと思います』

「…どうでもいいけど、あれだね。

デバイスが違和感とか気のせいとか言つと…」

『言わないで下さい。自分でも変だとは自覚しています』

「いやいや、良い事だよー…っつて、お？」

身体に感じる浮遊感。

「そっか、ようやっと抜け出せる訳だ。

ああきつかったきつかった…」

『今後、こういう突撃思考はやめてくださいね。私の心臓に悪いんです』

「無いでしょうがっ！」

等と雑談をしつつ、浮遊感に身を任せる。

さてさて、外の様子はどくなってる事やら…

…私の身体、大丈夫かなあ？

夜天の中心、負の遺産。(後書き)

K：駄目だ…眠い…やっぱり深夜まで勉強頑張るのはきつい…

あ…お疲れー。明日休みでしょ？ベッドで寝てきなー。

K：そーする…ふみゃう…

限界突破、各々の帰還。(前書き)

ルチア「あの駄作者どこ行ったあつ！
絞める！確実に絞める！」

リリア「……手紙だな」

『後書きにて待つ』

Kより
『

ルチア「うっしやあ待ってるこの野郎！」

限界突破、各々の帰還。

<Side 三人称・外部>

「ハアツ、ハアツ、ハアツ…！」

限界であった。

暴走したプログラムとの戦闘が始まってから、既に2分と半分が経過している。

逆に言えば、それしか経過していない。

にも関わらず、なのはとフェイトは限界を感じはじめていた。

「フェイトちゃん…大、丈夫…？」

「大丈夫…って言いたいけど、厳しいかな…」。

魔力も体力も、使いすぎた…！」

たった3分、と嘲笑われてしまいかもしれないが、一部の人が見ればこの結果は妥当だ等と言われるであろう。

彼女達はまだ幼い。

幼少期にリニスから魔法を教わったフェイトはまだいいとしても（焼石に水以下だが）、魔法に触れてからまだ一年も経たないものには、この生死ギリギリの戦闘はキツすぎた。

そのフェイトにしたって今まで戦った相手は模擬戦のリニスと、魔法練習時のアルフ。ジュエルシードの思念体や傀儡兵という名の巨大な的。

唯一まともな戦闘となったのは勘とセンスと保有魔力に頼ったなの

はと、魔力蒐集の為に手を抜いたシグナムといった、互角かそれ以下の相手ばかり。

そもそもスペックの性能が違いすぎる上に、殺気となって全身に叩きつけられる重圧。プレッシャー

悠久の時に裏打ちされた戦闘経験の差。

そして、何より生死を賭けた闘い。

焦り、怯え、必要以上に魔力を使う。

戦闘開始から2分もたたず、既に二人は極限状態へと陥っていた。

「あと…一分くらい…?」

「わからない…でも、絶対にもたせる…!」

とは言っても、杖を持つ手にも既に殆ど力が入らない。しかし、ここで朗報が届いた。

『マスター、ファーンライルより信号が届きました！
合図です！砲撃の準備を!』

「…っっ!」

見れば、苛烈な攻撃を仕掛けてきていた防衛プログラムが動きを止め、顔を苦悶の色に染めて痙攣している。

「…行こう、フェイトちゃん！ルチアさんとはやてちゃんを助けよう!」

「なのは…うん!」

そこからの行動は早かった。

動きを止めた防衛プログラムから距離を取り、カートリッジを四発ロードする。

「すまない、待たせた！」

「遅れてごめん、なのは！」

「しつかりサポートするからね、フェイト！」

「クロノ君、ユーノ君、アルフさん！」

ちょうど、二重結界を破った三人が合流する。

痙攣を続ける防衛プログラムを守るように、海面から触手が飛び出て来る。

「エクセリオンバスターバレル展開っ！中距離砲撃モード！」

『all light.』

「プラズマブラスターバレル展開、中距離砲撃モード！」

『yes, ser』

二人がデバイスを構えると、足元に半径2mを越える巨大なミッド式魔法陣が出現する。エクセリオンモードのレイジングハートとスピアフォームのバルディッシュの柄が伸び、大きく広がるように桃色と黄色の翼が生える。

それは二人が、もしもまた会うことが出来て「一緒にこんな事が出来たら良いね」と考えた、必殺の一撃。

「ストラグルバインド！」
「チエーンバインド！」
「レストリクトロック！」

ユーノとアルフが周囲の触手を縛り、クロノが闇の書自体の動きを止める。

「っっっ！！！」

打ち出されたのは、圧縮された空気の弾丸。

魔力を己の出来る極限まで編み込んだ弾丸は、闇の書の動きを完全に制止させる。

「エクセリオンバスター、フォースバーストっ！」
「プラスマブラスター、ストライクフレイムっ！」

デバイスに浮かぶ環状魔法陣。

その先端に現れる魔法球。

「っブレイク、シューーーーーーっっっ！！！」

そして打ち出される光の奔流。

一筋の黄金の巨大な砲撃を桃色の四条の砲撃が包み込み、障害を粉碎しようと突き進む。

推定ランクSS+。

魔力を数値に換算して凡そ3億を超える莫大な魔力が、防衛プログラムを外殻を抵抗も許さず吹き飛ばした。

巨大な爆風に包まれた闇の書の闇が吹き飛んでいく。それはさながら、罪の浄化のようであった。残念ながらも達には見えていないが。

「はあっ…ぐっう……」

やはり魔力消費は大きい。地面があれば即座に膝を着いてしまうような、圧倒的な疲労。

もしこれを闇の書が耐えきっていたとしたら、彼女達は心の底から絶望しきっていただろう。

その甲斐あってか、耐え切られる事は無かったのであるが。しかし。

『皆気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！』

「！！！！」

光が収束していく。代わりに海から、黒と紫の混じったような球体が膨れ上がって行く。

最終的に、直径にして約70mを越える巨大な球体となった。

『解析したけど、あれは闇の書の中にあつた超高密度の魔力みたい！はやてちゃんとルチアさんが出てくるまで、近づいちゃ駄目だよ！』

「……了解！！！！」

と言われた所で、なのはとフェイトの魔力は殆ど空。

近づこうにも近づけないのであるので、逆にありがたい言葉であったが。

「…あれ？」

「フェイトちゃん…？」

とりあえず一息ついた所で、フェイトが何かにきづく。

「この、魔力…私が知らない…そして、凄く大きい魔力…」

「あ…これってもしかして…うわぁっ！」

突如生まれた純白の光球が、闇に対抗するかのように爆発した。

『新名称、《リインフォース》認識。

管理者権限における全権限を移譲完了。

…ですが、防衛プログラムの暴走は止まりません。

管理から切り離された膨大な力が、じき暴れだします』

「うん…まあ、なんとでもなるよ。

…行こか、リインフォース…」

『はい。我が主…！』

闇から解放された夜天の書の内部、具現化した書を抱えたはやてが顔をあげる。

「管理者権限を発動、同時にルチアさんが潜り込ませたウィルスプ

プログラムを発動」

『防衛プログラムの侵攻に割り込みをかけました。数分の暴走開始の遅延、及びプログラムの完全分離を行います。余り多くの時間は取れませんが…』

「いや…十分や。

リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復。…おいで、私の騎士達！」

八神はやての周囲に、4色の光が浮かび上がる。

外で見守るなのは達は、突如起きた光に目を閉じていた。

「い、一体、何が…？あ！」

改めて白い光を見遣ると、それを守るように4人の人物が立っていた。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム…！」

「ザフィーラ…シャマルさんも…良かった…！」

安堵するのは達を見た守護騎士達は笑顔を返す。

そして目を閉じ、騎士の宣誓を始める。

「我等、夜天の主の元に集いし騎士」

それは、真なる騎士の姿であった。

「主有る限り、我等の魂尽きる事無し」

愛する主に仇為す者からその身を護り、常に傍らに在る忠節の騎士。

「この身に命有る限り、我等は御身の元に有り」

主と共に歩み続け、生死の全てを共にする永遠の騎士。

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の元に！」

「リインフォース、私の杖と、甲冑を！」

『はいっ……！』

何も身につけていなかったはやての身に、黒と白を基調とした魔導服が装着される。

何処か四人の守護騎士を思わせる半袖の騎士服。

そして、目の前に現れる黄金の十字杖。

はやてが自身の「力」として、夜天の主としての杖。

目を開けて杖を手に取れば、そこには愛しき四人の騎士がいた。

四人の守護騎士に護られた、光の球が割れる。
中から出てきたのは、騎士服を纏い杖を握る夜天の主である少女。

「はやてちゃん！」

呼び掛けてくれた「友人」に笑顔を返し、自信に満ちた声音で叫ぶ。

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風、リインフォース！セー
ト、アップ！」

簡素な防護服が、姿を変えていく。

剣の騎士を模したスカート。

鉄槌の騎士を模したジャケット。

湖の騎士を模した帽子。

盾の守護獣を模したブーツ。

そして、祝福の風を模した漆黒の六翼。

今ここに、「最後の夜天の主」が完成した。

「はやてえっ！良かった……良かったよお……」

まず真っ先にヴィータがはやてに飛びついた。
続いてなのは達も集まってくる。

「はやてちゃん！」

「はやて…良かった…」

皆で作戦前半の成功を喜び合う。
しかし、その事態はすぐに気づいた。

「…ルチアさんは？」

誰もが、はっとした顔つきになる。

誤解の無いようにここで言うておくが、全員ルチアの事を忘れていた訳ではない。
所謂逃避の一種である。

目の前の嬉しい事を喜び、その裏の深刻な事態から目を背ける。
人間、誰しも辛いことから目を背けたいものである。

「そん、な……私は出てこれたし、私の騎士達も再構成出来たのに…」

「エイミイさんっ!!」

『……リンクが途切れてる。生体反応、感知できず。ルチア・L・クラリーベルの魔力反応、無し……!!』

「…そんな……」

さっきまで喜びに満ちていた顔が、一気に苦渋と悲嘆に変わっていき。

「管制人格、いやリインフォース……ルチアは主とともに闇の書の中に入ったんだらう？」

「中で何があったか…教えてくれないか？」

『その声は烈火の将か…久しいな。』

確かに彼女は主と一緒に入って来たが：闇の書の闇に取り込まれ、離れ離れになった」

「……！！！！！！！！！！」

『防衛プログラムは私の管理下から外れているから、私では止められないし中で何が起きているかを確かめる術も無い。彼女は抵抗し、主の覚醒と同時に分離プログラムを流して防衛プログラムと夜天の書を切り離れたが……それ以上は私にもわからない。すまない……』

沈黙が辺りを支配した。

彼女達にとって、ルチアは一種の「特別な存在」であったことは確かなのだ。

それがいきなり事実上の死亡宣告を聞いて、誰が平静でいられようか。

そこに、一つの人影が降りた。

「辛気臭い顔をしているが、どうした？個人的にはさっさとあれを吹き飛ばす用意をしておいた方が良くと思うんだがな？」

「……っ、リリアーヌ、さん……！！！！」

けだるげな表情で近くに飛んできたリリアーヌが、なのは達に尋ねる。

「……ルチアさん、なんですけど……」

覚悟を決めて話し出す。
しかし。

「あの馬鹿妹か？あと5分くらいでこちらに合流するとか言ってた

が…それがどうかしたのか？」

「……えっ？」「」

悲嘆に暮れていた空気が一瞬で晴れる。

「…そういえばそっちには連絡出来ないんだっとな。

なぜかは知らんがああの馬鹿妹、こっちは全然別の世界に飛ばされたとさつき連絡が来たぞ？」

「……ええーっ！？」「」

「だ、だったら何でルチアさんは連絡してくれなかったんですか！？」

「どうもあつちは磁気嵐に襲われているらしくてな。そもそも念話や魔力パスは繋がる距離ではないし、デバイスによる通信もかなり難しい。

私とは裏技を使って十数秒連絡が取れたぞ。最も、時間が無いから一方的なものだったかな」

「……はあ……！」「」

全員が安堵の溜息をついた。

何人かがガチの涙目だが、まあ御愛敬だろう。

よかった、と口々に漏らすなのは達。

そして。

「真打ち登場！心配かけてごめ……っわっとお！？」

突如空間に魔法陣が出現し、その中から飛び出してきたルチア。

飛び出した瞬間に三人娘に抱き着かれた。

「うう〜…!」

「ルチアさんっ…!」

「心配、したんやよ…っ!」

「ああー……うん、ごめんねー。色々ごめんねー。」

これ終わったら全部引つくるめて謝るから、時間も無いし、とりあえずアレをやっちゃうとしようじゃないか!」

努めて明るい声を出すルチア。

だが、一部がルチアの状態に気づいた。

リインフォースとシグナム、ザフィーラ。そしてリンディ・ハラオウン。

そして何かを言おうとしたシグナムを目で制すリインフォースと、肩を掴んで止めるザフィーラ。

リンディは呆れ半分哀しみ半分、隠し味に感服を混ぜたような溜息をついた。

リリアーヌ? あれは別枠だよ。

そうこうしている内に、ズモモモモ……という音とともに海が揺れ、闇の球体に輝が入りはじめた。
いよいよかと全員が戦闘体制を取る。

漆黒の球体に輝が入り、高濃度の魔力が漏れだして来る。
そしてガラスの割れたような音とともに、黒い壁が崩れ去った。

「—————ツツツ！」

この世の生物と思えないほどに、負の感情を圧縮したかのような咆哮。

しかしそれを受けても、ここに立つ者達の決意は揺らがない。

少女達は友人を救うために。

少女は永劫の呪いを断つために。

騎士達は主を救うために。

少年達は己が使命のために。

そして、妹は愛するもののために。

姉はある程度の打算を胸の内に秘めて。

「行くよ皆！」

「「「「了解っ！！」「」「」」

決戦の火蓋が切って落とされた。

限界突破、各々の帰還。(後書き)

K「はい、駄作者のKです。もう本当に遅れてしまって申し訳ないです。

こつちを投稿したのは……五ヶ月前になりますかね。
本当どうしてこうなっ

ルチア「うりゃあっ！」

K「ごふう」(バタツ)

ルチア「このやろう私がただけ待たされたかわかってるのかあ！
もういつの間にか一周年過ぎてるけど、まさか祝うとか言わないよ
なあ！

祝う訳無いだろこのスカポンタン！
今まで何やってたんだよっ！」(ブンブン)

K「ちょ、首が、絞まる、気持ち、悪い、おうふ、死ぬ、理由、話
すから、離し、げふう」

ルチア「で、理由は？」

K「げほげほ……まあ率直に言うと受験とその他の試験勉強、英検
とか漢検とかが1番主な理由かな。

後は杏とイチヤイチャしたりとか？」

ルチア「はいそこおかしいつ！なんで私がまだイチヤイチャのイの
字も行かないのにそつちはイチヤイチャしてるのよ！」

K「恋人だし」

ルチア「そういう事じゃ無いだろうがーっ!!
良いなあ良いなあ妬ましいなあ。ぱるぱるぱるぱる。！」

K「でもまあとりあえずA判維持してるので、どうにか執筆にもある程度時間割けるようにはなっただと思えます。
遅筆には変わりないですが、まあどうにか書くようになります」

ルチア「それで本文の方。なんか終わるところおかしくない?」

K「本当ならなのはとフェイトの三分間の死闘書いて、闇の書の闇吹き飛ばすところまで書くつもりでした。

ですがそうなると文字数が現在の倍くらいになってしまい、更に執筆時間が伸びてしまいそうでした。

よってなのはとフェイトの死闘は泣く泣くカット、フルボッコタイムは次回に持ち越しとなります。

ただ、完全に一方的な戦いにはならないかも。ある程度戦闘になるようにします」

ルチア「じゃあ最後に何か言い残すことは?」

K「雷狼竜の碧玉が欲しいです。でも上位ジンオウガめんどくさいです。

逆鱗5個と碧玉1個で交換は無理ですか?」

ルチア「死にさせえっ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609n/>

兄、妹、テンプレ転生。

2011年11月16日11時13分発行